

SD

9903 | space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第414号 1999年3月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

木の 空間：

木素材による快適建築

Spaces of Wood: The Elements of
Comfortable Architecture



Monthly Journal of Art and Architecture



大切なのは、 何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

 **関電工**

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT03(5476)2111 TTN03(4431)2111



快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、 豊かな経験。



●技術と伝統の…

内線工事 ■ 外線工事

東光電気工事株式会社

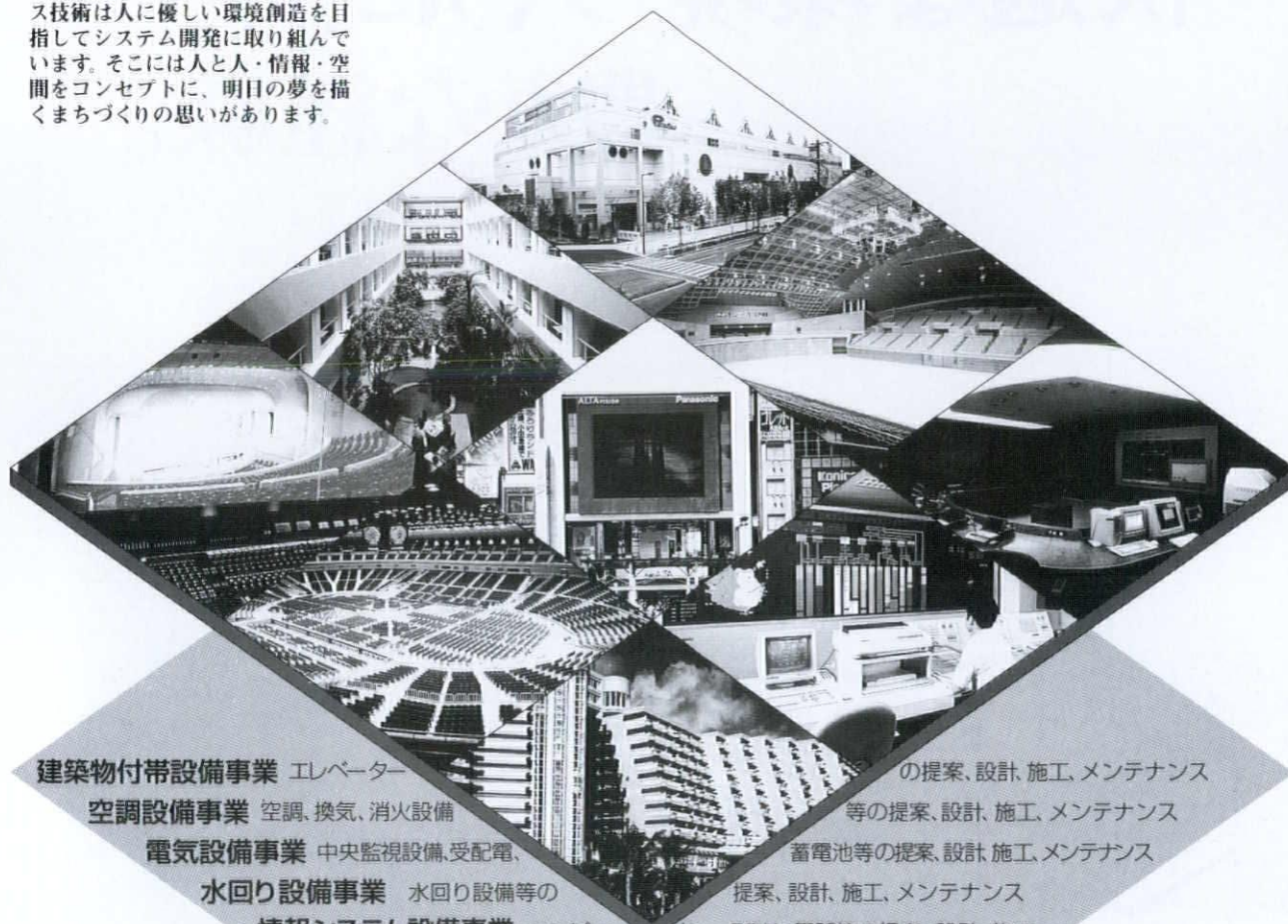
本社 〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5 TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター

空調設備事業 空調、換気、消火設備

電気設備事業 中央監視設備、受配電、

水回り設備事業 水回り設備等の

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

の提案、設計、施工、メンテナンス

等の提案、設計、施工、メンテナンス

蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めています。



松下電器産業株式会社

建設システム営業本部 ☎03-5460-2931
北海道支店 ☎011-207-7722
東北支店 ☎022-711-3551
新潟支店 ☎025-246-1031
関東支店 ☎0286-37-2241
神奈川支店 ☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010
長野支店 ☎0262-26-3990
北陸支店 ☎0762-23-1121
静岡支店 ☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店 ☎06-6949-2111
中国支店 ☎082-247-5272
四国支店 ☎0878-26-1711
九州支店 ☎092-431-1100
沖縄支店 ☎098-869-2926

AV & CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

繊細な色柄とソフトな質感で 空間をやさしく彩る、 ビニル床シートです。

学校や病院、公共施設などのパブリックスペースでは、よりソフトで温もりの感じられる空間づくりが求められています。こうしたトレンドにお応えし、ロンシールでは幅広い用途で活躍する汎用性の高いビニル床材として、ロンリウムナチュラルを開発。雲柄をベースに数種のチップを散りばめたソフトなデザインが、空間にやさしい表情を与えます。また重歩行にも耐える耐久性も備えながら、価格を抑えることによってコストパフォーマンスも追求したビニル床シートです。



ビニル床シート

ロンリウム ナチュラル

用途

学校・幼稚園等文教施設、病院・養護老人ホーム等 医療福祉施設、庁舎等公共施設の一般室・廊下・通路・階段、レストラン・喫茶店・デパート・ショッピングセンター・オフィスなどのロビー・エレベーターホール・湯沸室など。

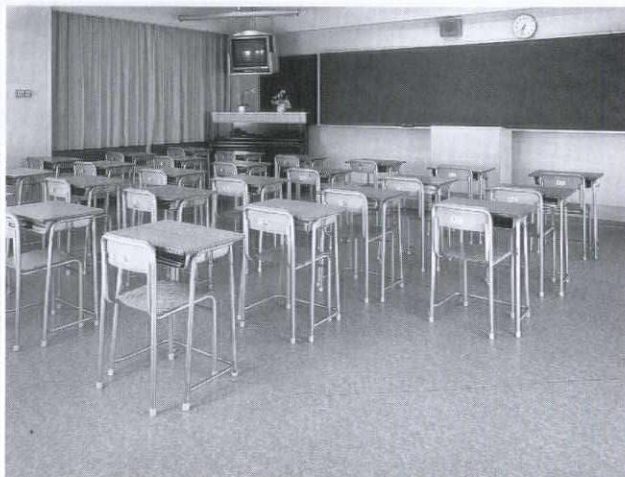
規格

- 12色
 - 2.0mm(2.5mm)厚さ×1820mm幅×9m長さ
- ※受注生産品



特長

- 雲柄に加え、微細な繊維状・粒状など数種のチップが深みのあるデザインと温もりを醸しだしています。また、ピーチを思わせるソフトでやさしい質感を備えています。カラーは12色。さまざまな空間イメージにお応えできる多彩なラインアップです。
- 歩行時のショックをやわらげる適度な柔軟性・弾力性、さらには適度な防滑性を備えているため、快適な歩行感が得られます。
- 継ぎ目はスーパーシームシーラーによる液溶着です。接合部が目立たず、一枚フロアのような美しい仕上がりで、かつ十分な強度を実現しています。また、下地によくなじむうえにカッティングも軽く、細部の施工が容易です。
- 重歩行に耐える、すぐれた耐久性を備えていますから、仕上がり時の美しさを保ちます。
- 酸、アルカリ、アルコール類、塩類などへの耐薬品性にすぐれています。
- 一体化した床面をつくることのできるため、汚れが取れやすく日常のメンテナンスが容易です。



ときめきの生活空間をサイエンスする
ロンシール工業株式会社

●本社 建築部/〒130-8570 東京都墨田区緑4-15-3 ☎03(5600)1821
●大阪支店/〒532-0011 大阪府淀川区西中島3-9-13大北ビル ☎06(6304)2700

インターネットホームページアドレス <http://www.lonseal.co.jp/>

●営業所

札幌 ☎011(271)0411 大宮 ☎048(664)1511 静岡 ☎054(251)3712 広島 ☎082(211)2700
盛岡 ☎019(624)6925 土浦 ☎0298(32)8813 名古屋 ☎052(935)7063 高松 ☎087(831)4177
仙台 ☎022(265)4771 千葉 ☎043(246)5851 金沢 ☎076(292)1161 福岡 ☎092(472)5857
新潟 ☎025(243)3791 横浜 ☎045(662)7370 岡山 ☎086(231)6011 鹿児島 ☎099(258)6571

自由の女神さま、
グラリときたら、ユラリと踊ってください。



東京湾の海風がほのかに香るお台場海浜公園に、今年、フランスから、どえらいVIPがやってきました。「自由の女神像」です。

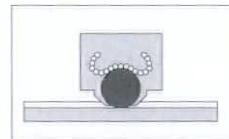
ちなみに、アメリカ合衆国建国100年を記念してフランスが寄贈したのが「ニューヨークの自由の女神」。その返礼にアメリカがフランス革命100年を記念して贈ったのが、この「パリの自由の女神」です。もし日本で地震に遭って“パリッ”なんてことでもあったら、それこそシャレではすみません。

地震対策には知恵が必要です。大切な預かりもの、ということに加え、女神は年齢100歳をはるかに超えるご老体なのですから。(失礼!)もちろん地震のことなど考えてつくってあるはずありません。そしてわたしたちは、こんな課題に挑戦しました。「女神の本体には一切補強を加えないで、震度7の揺れに耐えること。」

この難問を解決したのが、「台座の下に入れた8基の免震装置」です。台座の下
のボールがコロコロころがり、地震の揺れを吸収。像に加わる力を1/5以下に減ら
します。これで、もしほんとうに大地震が来たとしても、女神さまは台座ごとユラユラ
踊っているように見えるんじゃないかな。もちろん、地震なんて来ない方がいいこと
は、言うまでもありませんが...

以上、わたしたち鹿島の仕事の一部を、ここにご報告いたします。

※免震装置の仕組み



ボールベアリングが転がる動きで地震の揺れを吸収します。オイルダンパーが動きすぎを制御するので心配ありません。なお、免震装置の下には、マットスラブによる直接基礎を撤し、地下12mまでの地盤改良工事も行っています。

※自由の女神像



1999年1月までお台場海浜公園に展示されています

自由の女神像移築
主催 「日本におけるフランス年」実行委員会
株式会社フジテレビジョン
共催 東京都



in 鹿島

東京都港区元赤坂 1-2-7 〒107-8388
<http://www.kajima.co.jp/>

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢

ホテル鹿島/森

ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:

ホテル鹿島/森予約係

☎03(3478)6220

現地☎0267(42)3535(代)

FAX:0267(42)5335



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル



地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683代 FAX 03(5683)5775



大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興藤科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社 鹿島グループ 大興物産株式会社

本 社 〒107-8307 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

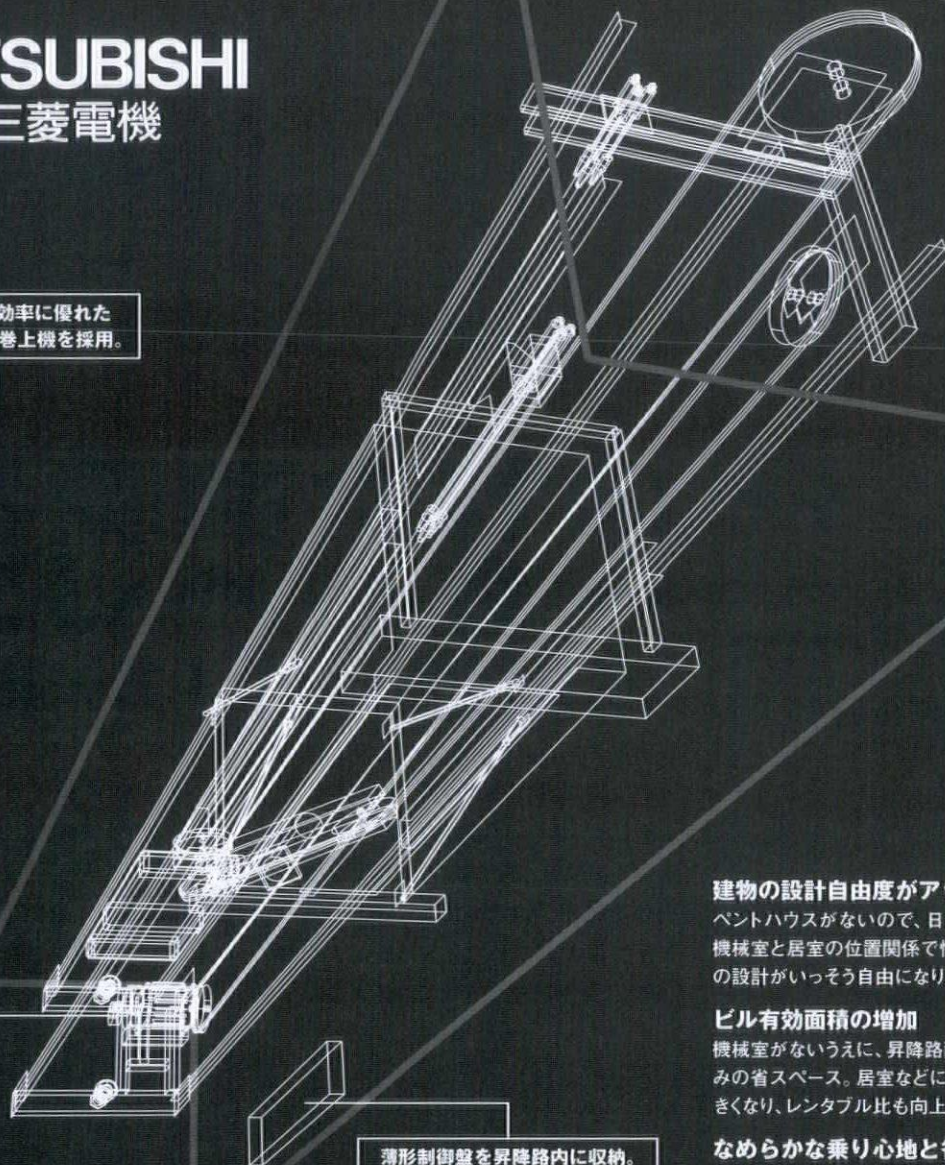
本 社 ☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06)6762-5661 FAX(06)6762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

mitsubishi
三菱電機

エネルギー効率に優れた
PMギヤレス巻上機を採用。



薄形制御盤を昇降路内に収納。
全階で多様な乗場意匠を実現。

昇降路だけの エレベーター 三菱〈エレパック〉誕生。

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制

新登場

エレパック

ELEPAQ

三菱エレベーター／機械室レスタイプ

御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

建物の設計自由度がアップ

ベントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レントラブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく (Efficient)

信頼性に優れ (Reliable)

快適な移動空間の創造 (Comfortable)

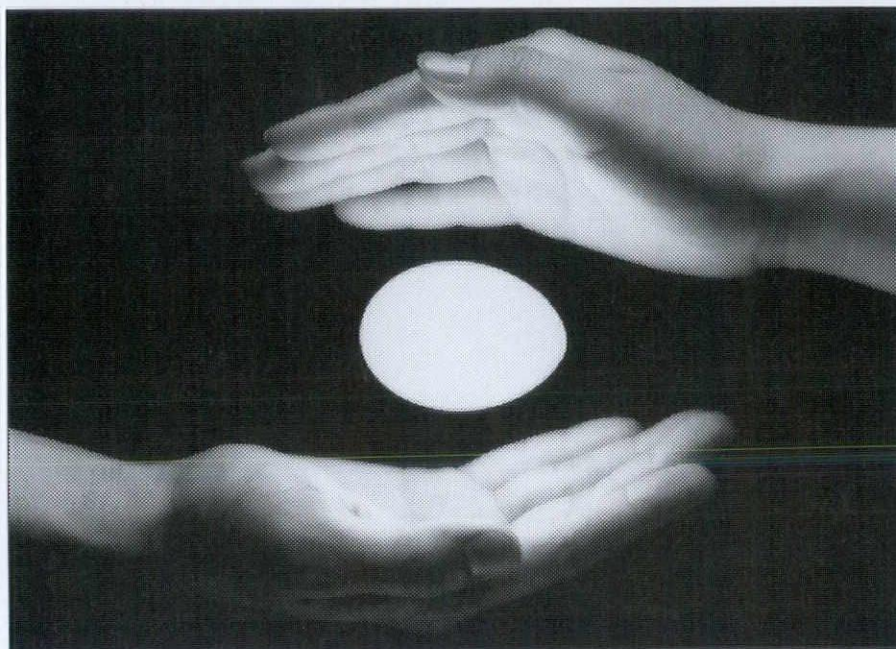
エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……三菱電機株式会社 〒107-6150 東京都港区赤坂5-2-20 (赤坂パークビルディング)

本社ビル事業部 TEL.(03)5573-3793

設備は手にとって選べません。
だから……



大切なのは、技術の信頼性。
豊富な実績と、
そのなかで培われた
確かなノウハウです。
私たち三建設備工業は、
求められる環境を
信頼の技術で創りだします。

望まれる環境を、信頼の技術で。

三建設備工業株式会社

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-35-8 TEL.03-3667-3431

信頼と確かな技術で
未来を築く



大栄電気株式会社

代表取締役社長 伊藤 赳

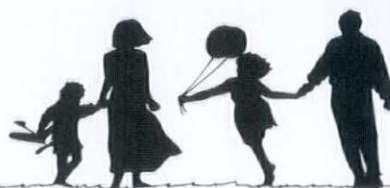
本社 東京都中央区銀座3-7-10 TEL.03(3562)0311(大代表) FAX.03(3562)0300
支店営業所 大阪、名古屋、北海道、東北、北関東、東関東、神奈川、浜松、神戸、四国、中国、九州、沖縄

夢×技=無限大

YUME TRONICS

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が会合う時
私たちのワールドは
無限大です。

何時もあなたの街で
お会いしている
クリハラ。
私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。



創業1919 あなたの街でお会いしています
K 栗原工業株式会社

本社/〒530-0017 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル) TEL.06(313)1101
東京本店/〒105-0012 東京都港区芝大門1-4-8(浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.

ダイダン
— 光と空気と水を生かす —



スタンダードへ。



緑化を中心に、
潤いある都市空間づくりを。

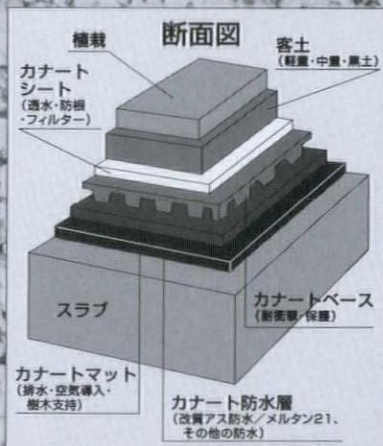
快適な都市空間に、
自然の持つ潤いをプラスすることで、
私たちの空間はさらに豊かになります。
だから、緑化防水工法「カナート」。
インテリジェントと緑化を
高次元で融合させ、新しいスタイルの
空間演出を可能にしています。
そして、働く、暮らす全ての人々に、
生き生きとしたコミュニケーションを
提供していきます。

高度な建築技術でさらに拡がる空間に、
緑を。未来の快適な都市空間づくりの
指針を「カナート」は示していきます。

カナート

緑化防水工法

- 信頼性を高めた防根・排水性。
- 快適性を向上した断熱・遮音効果。
- 従来の保護コンクリート施工は不要。
- あらゆる施工現場に対応する優れた防水力。
- 計画に合わせて選べる3種類の客土設定。
- 荷重の低減、工期の短縮、低予算等、
優れたコストパフォーマンスを実現。



日新工業株式会社



営業本部 ■〒103-0005/東京都中央区日本橋久松町9-2 TEL03 (5644) 7211 (大代)

<http://www.nissinkogyo.co.jp>

横 浜 ■TEL045 (316) 7885 (代表)
千 葉 ■TEL043 (227) 9971 (代表)
香 島 ■TEL048 (761) 1201 (代表)

大 阪 ■TEL06 (6533) 3191 (代表)
名 古 屋 ■TEL052 (933) 4761 (代表)
福 岡 ■TEL092 (451) 1095 (代表)

札 幌 ■TEL011 (281) 6328 (代表)
仙 台 ■TEL022 (263) 0315 (代表)
広 島 ■TEL082 (294) 6006 (代表)

高 松 ■TEL087 (834) 0336 (代表)
金 沢 ■TEL076 (222) 3321 (代表)
本 社 ■TEL03 (3882) 2424 (大代)

SD

バックナンバー

鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円(特別定価号十消費税、送料込み)

SDバックナンバー常備店
[東京]
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
[大阪]
旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167
[札幌]
旭屋書店 011-241-3007
[横浜]
有隣堂本店 045-261-1231
[京都]
大福堂書店 075-231-3036
[大学生協内書店]
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学理
工学部 関東学院大学

9703 ミニマル・スペース・アーキテクチャ 1988円
ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ポッツ、小川晋一、岸和郎、石田敏明。文＝丸山洋志、他
[東京国際フォーラム] 写真＝堀内広治

9704 拡張するデジタル・デザイン 3059円
コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を切り出すプロジェクトを紹介。文＝田島則行、山口重之、桂 英史、マイケル・ベネディクト、藤嶋正樹、久保田晃弘、坂村 健、奥出直人、両角光男、他

9705 アフラ+トピア・スカルパと「ベネトン」 2000円
アフラ+トピア・スカルパによるベネトンのオフィス社屋、ショップなどを紹介。文＝インタビュート写真＝豊田博之「都市ピサとカルマッシの仕事」カーサ・ムーティ、ヴェルディ劇場修復計画など

9706 柳澤孝彦：劇場の空間構成 2000円
新国立劇場、東京オペラシティビル、三浦市芸術文化センター、他。文＝長友宗重、本杉省三 対談＝川向正人×柳澤孝彦「装飾を排したフォルムデザイン——スウェーデンのグッドデザイン展より」

9707 加速都市・香港1997 2000円
「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家＝アラン・チャン、タイクワングラフィックス、浅川敏、江頭慎、他 監修＝村松伸、小嶋一浩、木下光 文＝松田直則

9708 R.ヴェンチュリ+D.スコット・ブラウン 2447円
日本での処女作「メルバルク日光露降」を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宜之、他「岐阜県宮北方住宅プロジェクト」談＝磯崎新

9709 駅空間の新曲面 2000円
コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして衆目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。監修＝宮林敬幸、要田孝男、他。対談＝横尾忠則×原広司 写真＝大野繁

9710 ガラス建築 3000円
光学的、構造的特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×難波和彦×今川直英、他

9711 隈研吾 2800円
ポストモダン以降の建築における言説を続ける隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。野宮公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン、対談＝横文彦×隈研吾

9712 SDレビュー1997 2000円
第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重・事務所・佐久間達也・橋爪宏直・重富博之、川人洋志、藤本壮介、松澤穂、他。[光と色が彩る空間——チェコのガラスアーティストたち] 写真＝鈴木豊

9801 SDレビューの15年 2800円
これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出版者、建築界での意義などを再確認し、今後の方向性を探る。文＝横文彦、原広司、飯島洋一、中舘修、他。座談会＝元倉真琴×鈴木二×栗生明×小嶋一浩

9802 都市へ向かう透明性：スイス・ドイツ語圏の建築 2200円
スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文＝貝島桃代、ハンス・フライ、他。往復書簡＝篠原一男×ヘルツォーク&ド・ムロン



9803 表層革命再考：チェコ・キュビズム・ロンドキュビズム建築
現存するブラハのキュビズム建築を掘り下し写真により紹介する。撮影＝鈴木豊。[香山壽夫のトローイングと空間] 文＝香山壽夫、八木幸二、鈴木博、青木淳
2000円



9804 次世代のマルチ・アーキテクトたち
30歳代の若手建築家たちの作品と創作活動を紹介し、時代性を浮かび上がらせる。インテンショナル・ミカ、みかんぐみ、他。[デスクトップ・コミュニティ]
2000円



9805 空間演出の最前線
建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションの具体例を紹介。藤江和子、中村純平、新宮晋、他。[カーロとリベラの家] ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン
2000円



9806 風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦
「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されている事例を紹介。佐々木重二、ブレイスメディア、三谷 徹、登坂 誠、他。
3000円



9807 シーラカンス
彼等の12年間の建築活動の軌跡を、作品紹介を中心に振り返る。作品＝吉備高原小学校、大阪市水上消防署、(仮称)外ヶ岡交流拠点施設、他。論文＝原広司、土居義岳、インタビュー＝山本理顕
2600円



9808 光のデザイン・ヴォキブラリー：LPAの仕事1990-1998
LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。文＝磯崎新、面出 薫
2500円



9809 ディテールが創る風景：細部に宿る美と技巧
建築作品のディテールを写真と図面で紹介する。宮崎浩／Plants Associates、渡辺明設計事務所、竹中工務店、谷口建築研究所、KAJIMA DESIGN、他。
2300円



9810 オフィス環境の近未来
最新のオフィス環境を、事例を中心に紹介する。作品＝電通インタラクティブ・ソリューション・センター、他。文＝仲隆介、他。
[京町屋再生の手法——時を超えて生きる空間を求めて]
2000円



9811 「白」と「透明」の詩
モダンデザインの考作135
白い陶磁器と透明ガラスで出来た日常生活の中の小モノたち135点を紹介する。カシミール・マレービッチ、ゲートルード・ヴェースガルト、柳宗理、他。
3000円



9812 SDレビュー1998
第17回SDレビュー誌上発表
小特集4題：[シャルロット・ベリアン]「ハブニング展」[アールの空間構成][メタルシート・ストラクチャーによる遠藤秀平の近作]
2000円



9901 環境共生の現在
プロジェクトを紹介しながら近年の動向を俯瞰し、次世代のヴィジョンを示唆する。
エムシャーパーク、東京ガス「アースポート」、世田谷区環境共生住宅、2005年国際博覧会構想案、他。
2700円



9902 タッチ・モデル
建築・都市・ランドスケープ
オランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって探る。OMA、MVRDV、West8、クーン・ファン・フェルゼン、メカノ、ケース・クリスティアーニス、他。
2000円



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



高松 伸

高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、紙ぎ澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。経緯I、III、他。

3800円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館(TEPIA)というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタポリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円

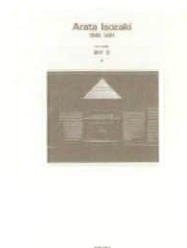


Kunihiko Hayakawa

早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



Arata Isozaki

磯崎新 ① 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジヨルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井 展一

白井 展一

孤高の建築家・白井展一の珠玉の作品集。懐賢館、ノアビル、聖アキラ館、昨宵軒、夙別山寮、虚白庵、他。論文=磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井登磨。座談=大江宏+藤井正一郎+宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円

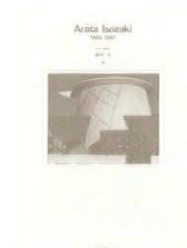


Doitsu Hien Shugi no Tensei

ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



Arata Isozaki

磯崎新 ② 1985-1991 part 2

part1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム・ディズニービルディング、北九州国際会議場、シエッタビル、現代美術館、バラディウム、[蝶々夫人]舞台美術、他。

4500円

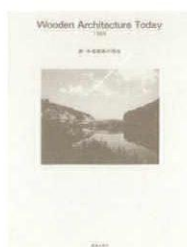


象設計集団

象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協町民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文=荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円

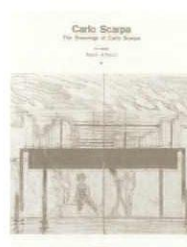


Wooden Architecture Today

続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲夫×安村基。

3708円



Carlo Scarpa

カルロ・スカルパ図面集

プリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。プリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円

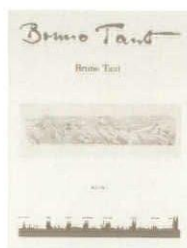


横文彦

横文彦 ②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円

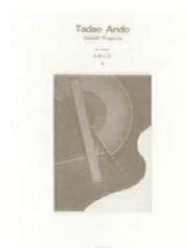


Bruno Taut

ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品=熱海の家、ボスボラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



Tadon Ando

安藤忠雄 ① アンビル・プロジェクト

70年代からの見過せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトII、Iギヤラリー、大庭の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で貫かれた作品群。その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ボンタクリオンショールーム、他。

3914円

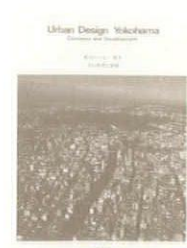


Gazal

ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高橋秀爾、ボザールその歴史と思想：三宅理一編。ボザールの成立とネオ・グレコ形成、折衷主義の世界、近代の憂愁、戦後のボザール、バリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



Urban Design Yokohama

都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦×義原敬×小澤恵一、他。

5000円

5 特集

木の空間：

木素材による快適建築

編集長：相川幸二
副編集長：高木伸哉
編集スタッフ：
寺田真理子 大野由美
飯塚りえ 高森和志
制作協力：久世健
(有) シンクス発行人：平田翰那
編集人：長谷川愛子発行所：鹿島出版会
〒107-8345 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
Home Page：
http://www.kajima.co.jp/
group/publish/index.htm印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174-0056 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内取次店：トーハン・日販・
大坂屋・大洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社定価：2,000円
[本体1,905円]年間直接購読料：26,000円
特別定価号・送料込み表紙：スタジオ・バンガード/
ディーター・ティール
表紙写真：
クラウド・フラム
表紙デザイン：小泉均

6 趙 海光 台形集成材の家5	14 インテンショナリーズ トイズファクトリー・オフィスインテリア CWC Office & Gallery 花見季	22 河西立雄 静かな家
28 葛西 潔 木箱210	36 みかんぐみ 大町の家	42 H. DESIGN ASSOCIATES pas de calais I & S FAVORITE H
48 ハンス・ペーター・ヴォーンドル グックルフツプ	52 ディーター・ティール スタジオ・バンガード	57 マチアス・クロズ ウガルテの家
61 SELL HOUSE： SE工法による次世代木造住宅の可能性と 7人の建築家による木骨住宅展 文＝播 繁	建築家＝ 押野見邦英 城戸崎和佐 内藤 廣 難波和彦 平倉直子 古谷誠章 横河 健	
69 木の家具あれこれ	70 現代に蘇るマエストロの技 家具職人・相田貞夫の椅子づくり	72 ウッドユウライクカンパニーの木製家具
	74 無印良品が提案するライフスタイル	77 いすコレ リビングデザインチェアコレクション '99 鈴木恵三
93 森ビル・都市デザインコンペ '98	105 座談会： ツールが創造力を活性化する 隈研吾×浜野保樹×廣瀬通孝	
86	展覧会レポート： アートの力——川俣正の東京プロジェクトNew housing plan	
89	連載：エントロピーの森 都市のインフラストラクチャ 3	写真＝ハイナード・シリグ 文＝山形浩生
111	新刊紹介	
111	お知らせ	
112	書評	
115	海外レポート： [ニューヨーク] Pier 40をめぐる	小野暁彦
116	海外レポート： [チューリッヒ] 山の建築	山口由美子

5 Special Feature:

Spaces of Wood: The Elements of Comfortable Architecture

Chief Editor: Koji Aikawa
Editor: Shinya Takagi
Associate Editors:
Mariko Terada
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Digital Studio SINKS

Publisher: Kanna Hirata
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107-8345,
Japan
TEL:
03.5561.2551 (Management)
03.5561.2555 (Editing)
FAX:
03.5561.2561 (Management)
03.5561.2565 (Editing)
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
[http://www.kajima.co.jp/
group/publish/index.htm](http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm)

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page124

Cover:
Studio Bangert/Dieter Thiel
Cover Photo: Klaus Frahm
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

6 Cho Umihiko House of Trapezoid Laminated Timber No. 5	14 Intentionallies Toy's Factory Office Interior Project CWC Office & Gallery Salon HANA-MI-ZUKI	22 Tatsuo Kawanishi The Quiet House
28 Kiyoshi Kasai Wooden Box 210	36 MIKAN Omachi House	42 H. DESIGN ASSOCIATES pas de calais I&S FAVORITE H
48 Hans Peter Wöndl GucklHupf	52 Dieter Thiel Studio Bangert	57 Mathias Klotz Ugarte House
61 SELL House: The Possibilities of Next-generation Wooden Residences by the SE Construction Method and an Exhibition of Wood Framework Houses by Seven Architects Text: Shigeru Ban	Architect: Kunihide Oshinomi Nagisa Kidosaki Hiroshi Naito Kazuhiko Nanba Naoko Hirakura Masaaki Furuya Ken Yokokawa	
69 A Collection of Furniture in Wood	70 Master Craftsmanship for the Contemporary Age: The Chairs of Furniture-maker Sadao Aida	72 Wooden Furniture by Wood You Like Company
	74 The MUJI-style Lifestyle	77 Chairs: Living Design Chair Collection 1999 Keizo Suzuki
93 Mori Building Urban Design Competition '98	105 Roundtable Discussion: Tools Activate Creativity Kengo Kuma, Yasuki Hamano, Michitaka Hirose	
86	From the Exhibition: The Power of Art: Tadashi Kawamata's Tokyo Project: New Housing Plan	
89	The Entropic Forest: Urban Infrastructure 3	Photo=Heiner Schilling Text=Hiroo Yamagata
111	Book Information	
111	Announcements	
112	Book Review	
115	Topics Abroad: [New York] Stories about "Pier 40"	Akihiko Ono
116	Topics Abroad: [Zurich] Swiss Mountain Architecture	Yumiko Yamaguchi

木の空間

木素材による快適建築

近年、木材をさりげなく使った建築をよく見かける。「木＝木造建築」という従来の概念を越えた新たな表現を可能にする素材として、様々な建築家たちがそれぞれのシチュエーションに合った使用方法を模索し始めているようだ。そこでは作家性の追求ということに重点が置かれるのではなく、「何気ないけどスタンダードで良い空間」を創るという最近の空間表現の動向を見いだすことが出来る。こうした物質指向・ローテク指向は時代の加速度的なデジタル化への反動か、経済活動の停滞という社会的な制約によるものが、はたまた来るべき次世紀へと向かう緩やかなトレンドか。イデオロギーを強烈に主張するのではなく、五感で良いと感じられるバランス感覚のあるものづくり。これからの空間はこうあるべきだとでも言いたくなるほど、それらは当たり前のように自然体で、そして何よりも心地良い。本特集ではこうした次世代スタンダードを示唆するイマドキの木の使われ方を、具体事例を中心に紹介する。各デザイナー秘伝のレシピによる木の調理法を、是非御賞味あれ。







古紙を再生したダンボールと同じように、素気なく。

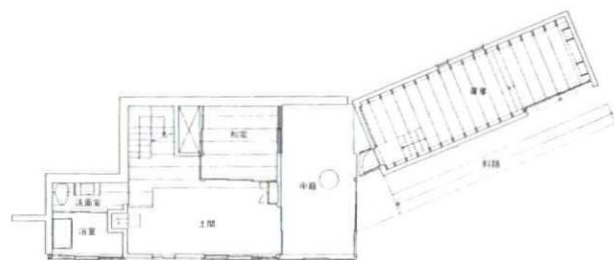


台形集成材というのは巨大な木のかたまりである。初めてその木のかたまりを目撃した時にはブツ飛んだ。うす暗い工場の片隅に、モノリスの如き木塊が佇立しているではないか。いったいこれは何！

実のところ、それはたんに間伐材を裁断して貼り合わせただけのものなのだけれど、その貼り合わせた木の圧倒的ヴォリューム感は、ぼくの抱いていた集成材のイメージをはるかに飛びこえていた。木のくせに石塊のようでもあり、工業製品のくせに節だらけで、そしてなんとも粗々しいのだ。聞けばそのかたまりをスライスしてお望みのサイズでパーツ化してくれるという。そうか、これなら厚くてデッキ板がラクラクとつくれるなあとぼくはウナツた。

それから10年間、ぼくはその木を使い続け、やがて奇妙な地平に立ち至った。その木は中途半端なデザイナーたるぼくを散々に振り回したのだ。小手先のデザインはぜんぶダメだった。そっけなくドライに使わないと、その木はまるで生気を失ってしまう。逆に、なんの変哲もないフラットな床や壁をつくるとき、その木は不思議なほど輝いて見えるのだった。その木にアザ笑われて、ぼくのつくる家はどんどんそっけなくなり、なにやら、箱が筒みたいなモノに近づいていった。

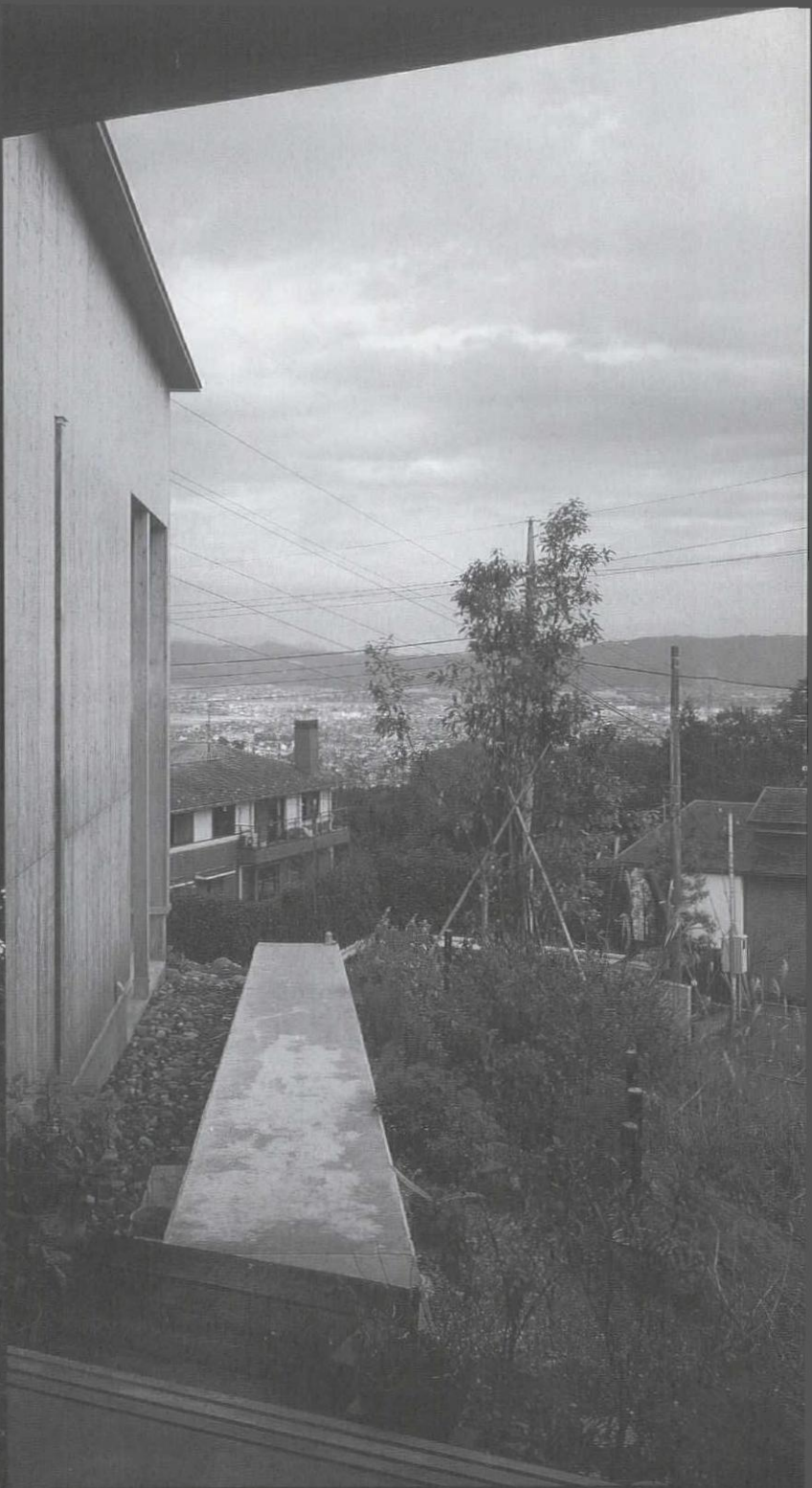
今、もう一度この粗い木の匂いを考えてみる。大事なことはこの木が再生木材だということだ。それは、古紙を再生したダンボールと同じように、工業化社会の生んだ現代のヴァナキュラー素材なのだ。あるいはまた、こうも言えるだろうか。この木は工業化社会と森林という相反するふたつの血をもつ混血的素材なのだと。雑種と混血。それはまた、ぼくのつくる木の家たちが持っている基本的性格でもある。その強さと弱さを測るすべを、残念ながらぼくは持たない。(趙 海光)



1階平面図 S=1:300



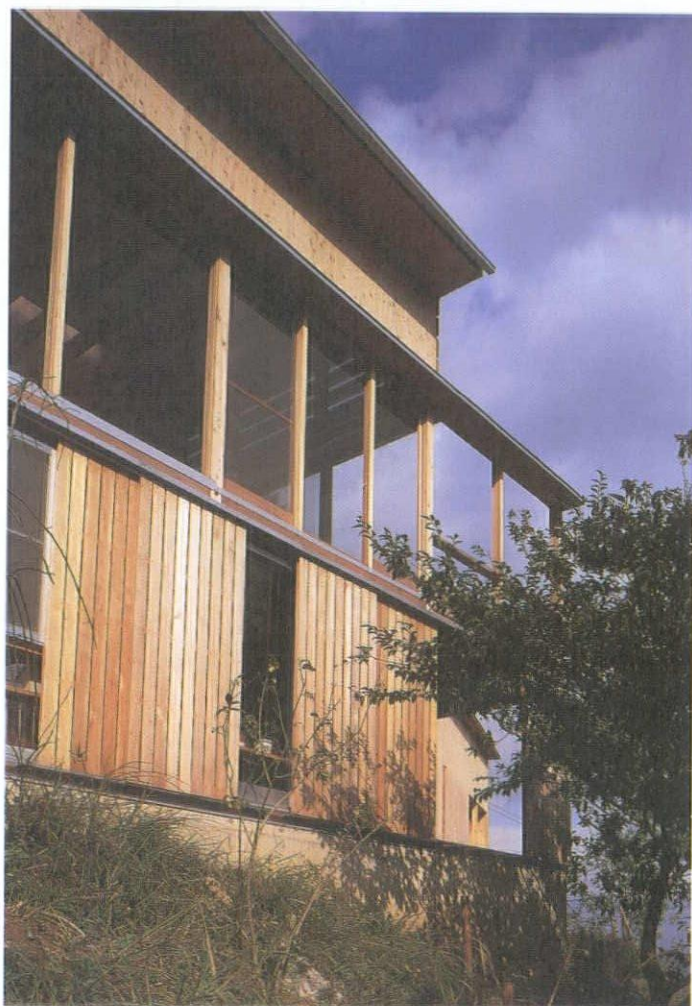
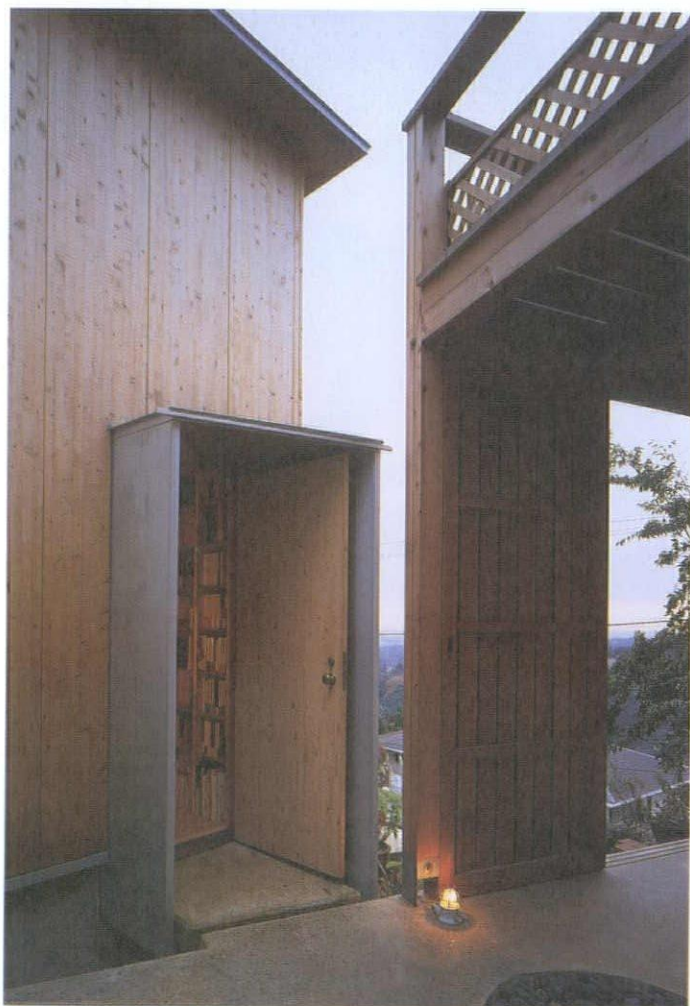
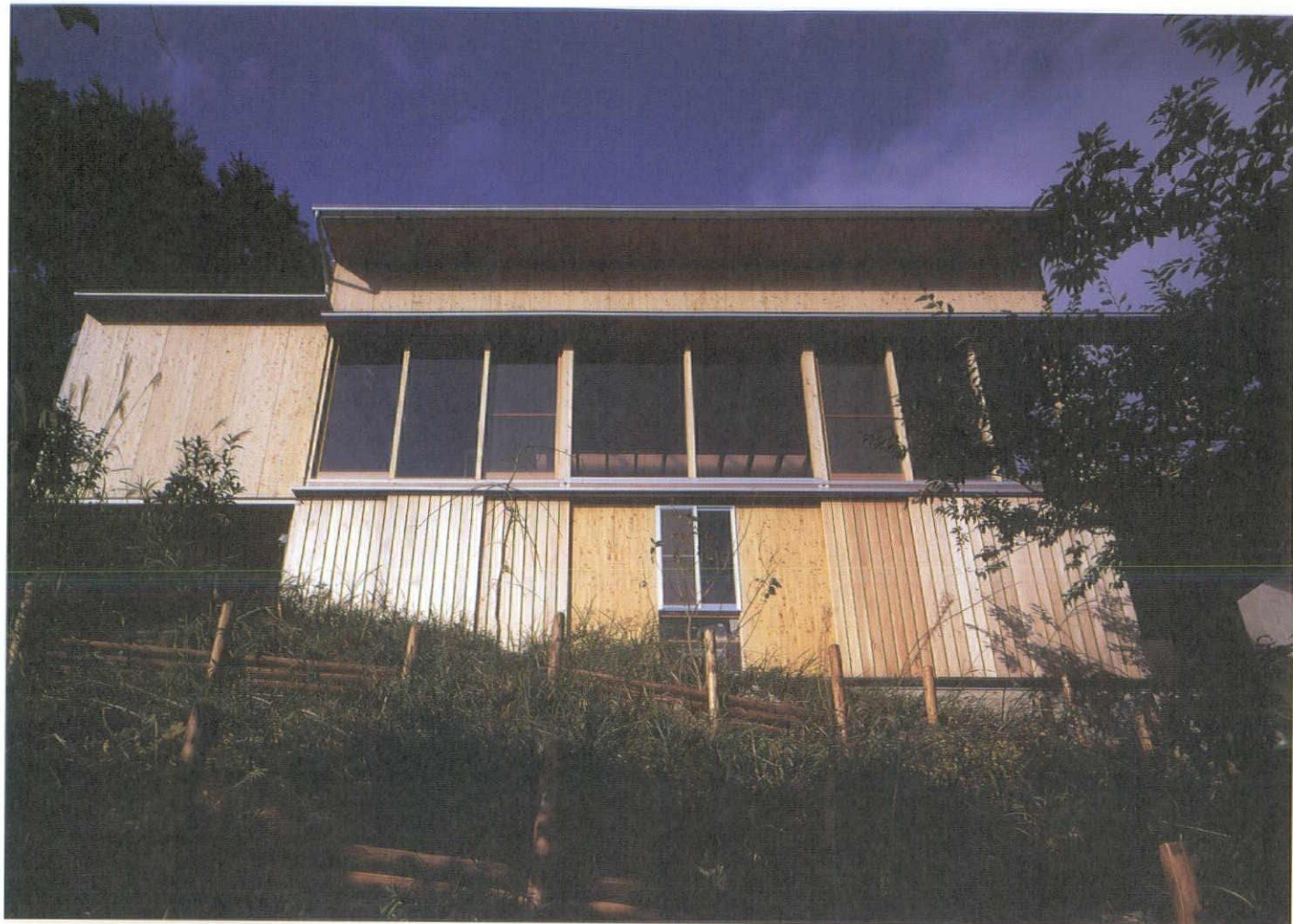
2階平面図

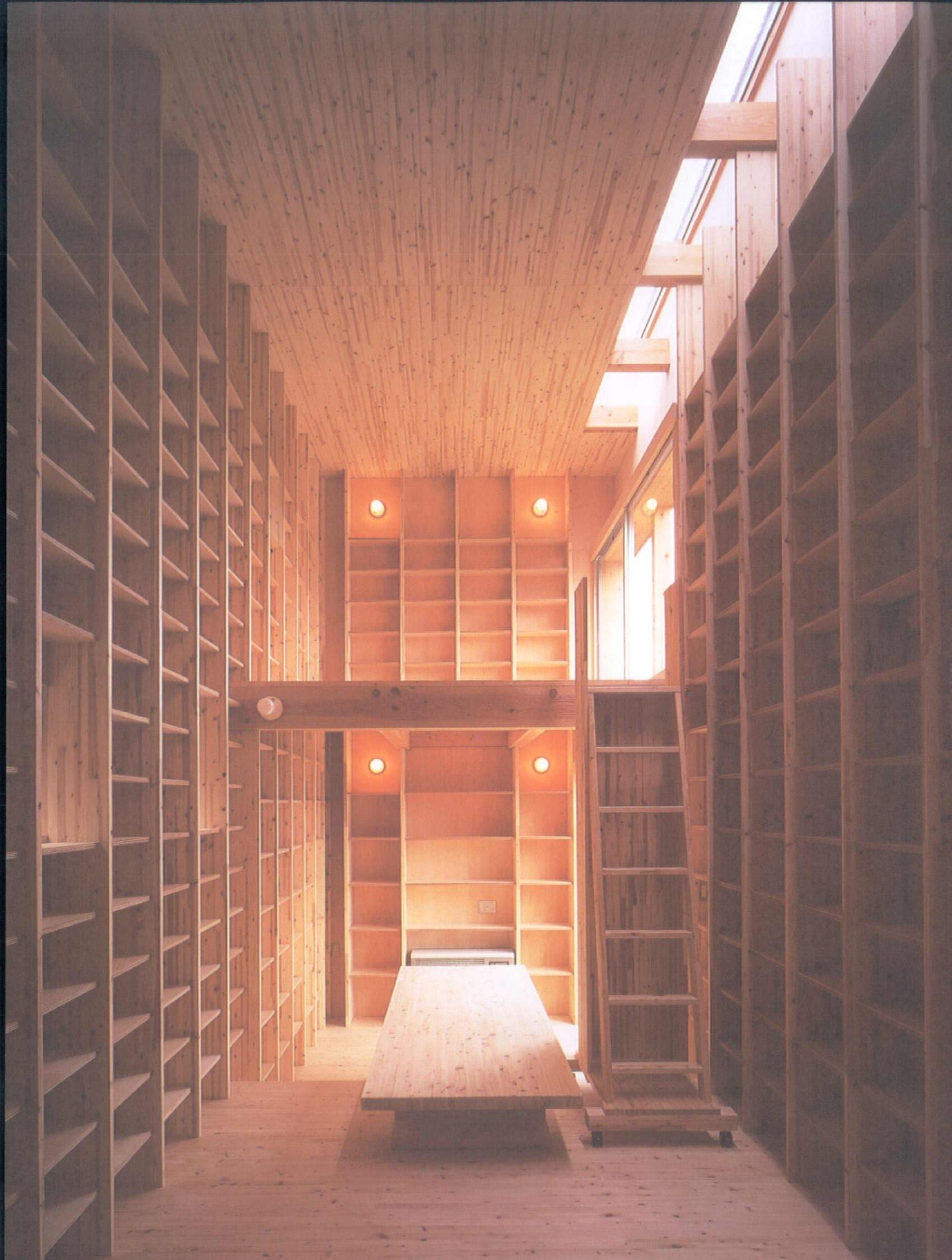


データ

作品名：台形集成材の家 5
 設計者名：趙 海光
 共同設計者名：片岡ゆかり
 所在地：神奈川県南足柄市塚原
 竣工年：1998年
 主用途：専用住宅
 構造：木造
 階数：地上2階
 敷地面積：1,032.32m²
 建築面積：98.63m²
 延床面積：152.00m²
 外部仕上：台形集成材（ヒノキ）厚27タテ貼り 撥水剤塗布
 内部仕上
 床：台形集成材（ヒノキ）厚32 本実貼り オイルぶき
 壁：台形集成材（ヒノキ）厚20本実貼り素地
 天井：台形集成材（スギ）厚31 本実貼り素地

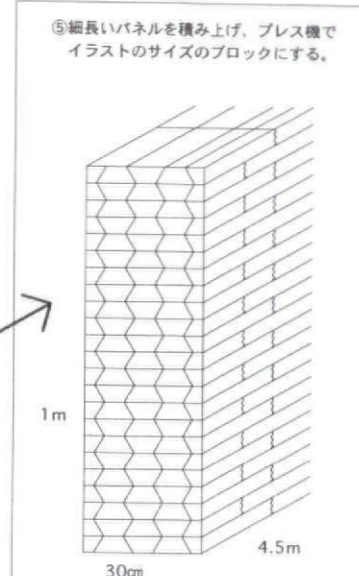
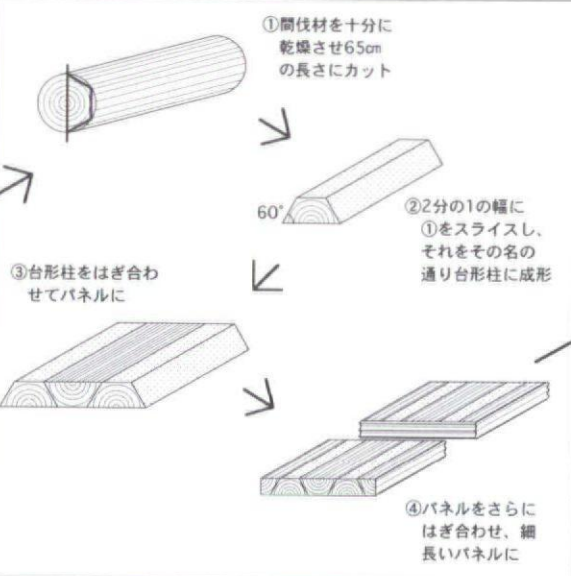
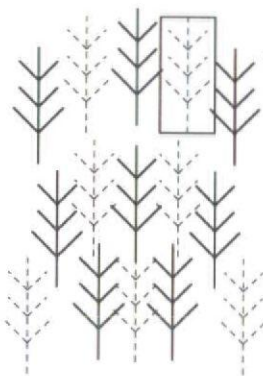




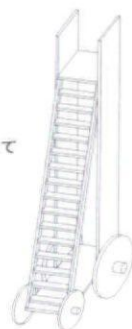


台形集成材とは

台形集成材は、径12cm以下の間伐材を
裁断し貼り合わせてつくられる。
裁断の過程で、間伐材を半割にし台形
に削ってラミナとするためにこの名前
がついた。



移動ハシゴ：
台形集成材の残材だけで組立て
られている。



書架：
高さ4500mmの書架を構成する
ルーバー状の側板。台形集成材
の厚さは30mm。

床：
台形集成材32×500×3000mm

階段：
32mm厚の台形集成材だけで
組立てられている。

中2階床板：
書庫最深部には台形集成材を
目透して張った。
32×500×3000mm

壁：
台形集成材
27×500×3000mm

台形集成材：
この家の基本的な構成部材。
床、壁、天井とあらゆる部位
に使われている。

台形集成材原形ブロック：
300×1000×4500mm

部品組立図

図解・台形集成材の家

天井部分
スギ台形集成材
27×500×1500
軒裏を兼ねた天井材をハリの
上にのせて片持ちで跳ね出してい
る。すこし、コワイけどね。

外壁部分
ヒノキ台形集成材
27×500×1230
接着剤はレゾルノシールを使用
しているの、黒いラインがは
っきり見える

内壁部分
ヒノキ台形集成材
20×500×1310

固定用長ビス
ステンレス刃付き造作用ビス
L=75^{mm}
思いきって、メリこむほど、
打つのがコツ。

小庇部分
ヒノキ台形集成材
30×420×3000
見上げると木が飛んでいる。
上部はガルバリウム鋼板をか
ぶせている。
デッキまで続く連続感に注意！

床部分
ヒノキ台形集成材
32×500×3000
床だけは長ビスを打ち込んだ上に
木栓をし、オイルぶきをした。
塗ったのは、設計者とその仲間たち。

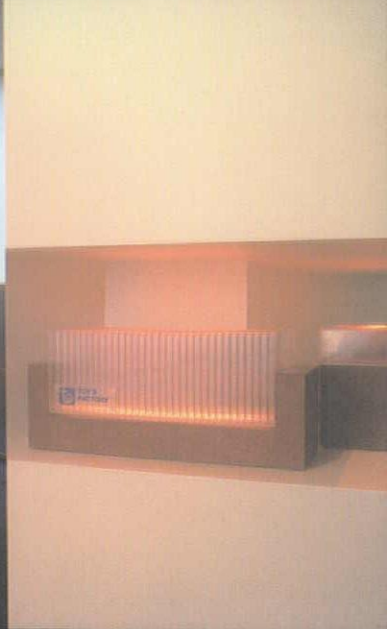
巾木部分
ヒノキ台形集成材
32×240×3000
設計当初は無かったもの。
現場で残材を利用して、
つくった。

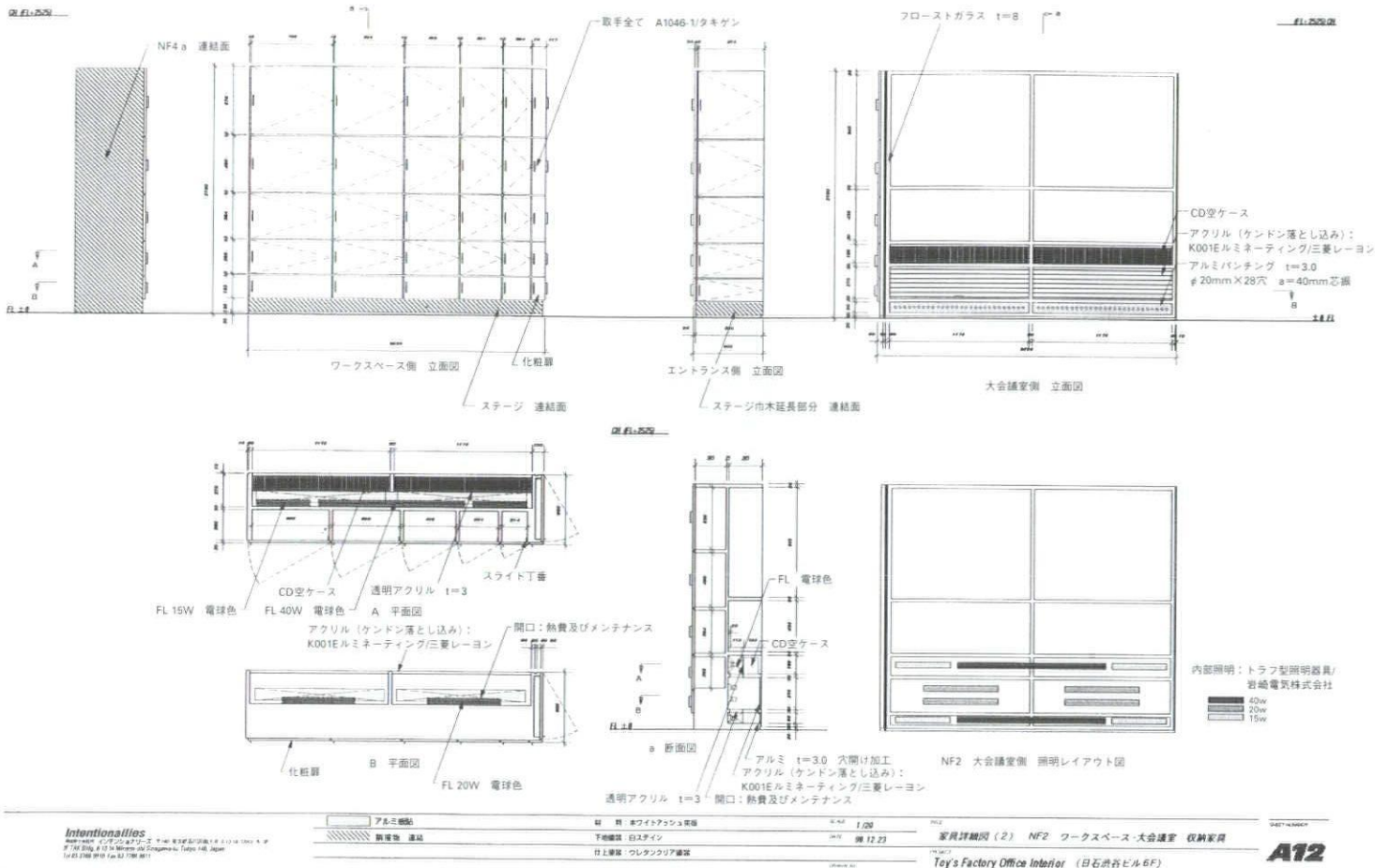
台形集成材部分
いろいろな厚さにスライスして、パーツ化する。

台形集成材原形ブロック
巨大な木の固まりを工場で目撃するとブツ飛ぶ。

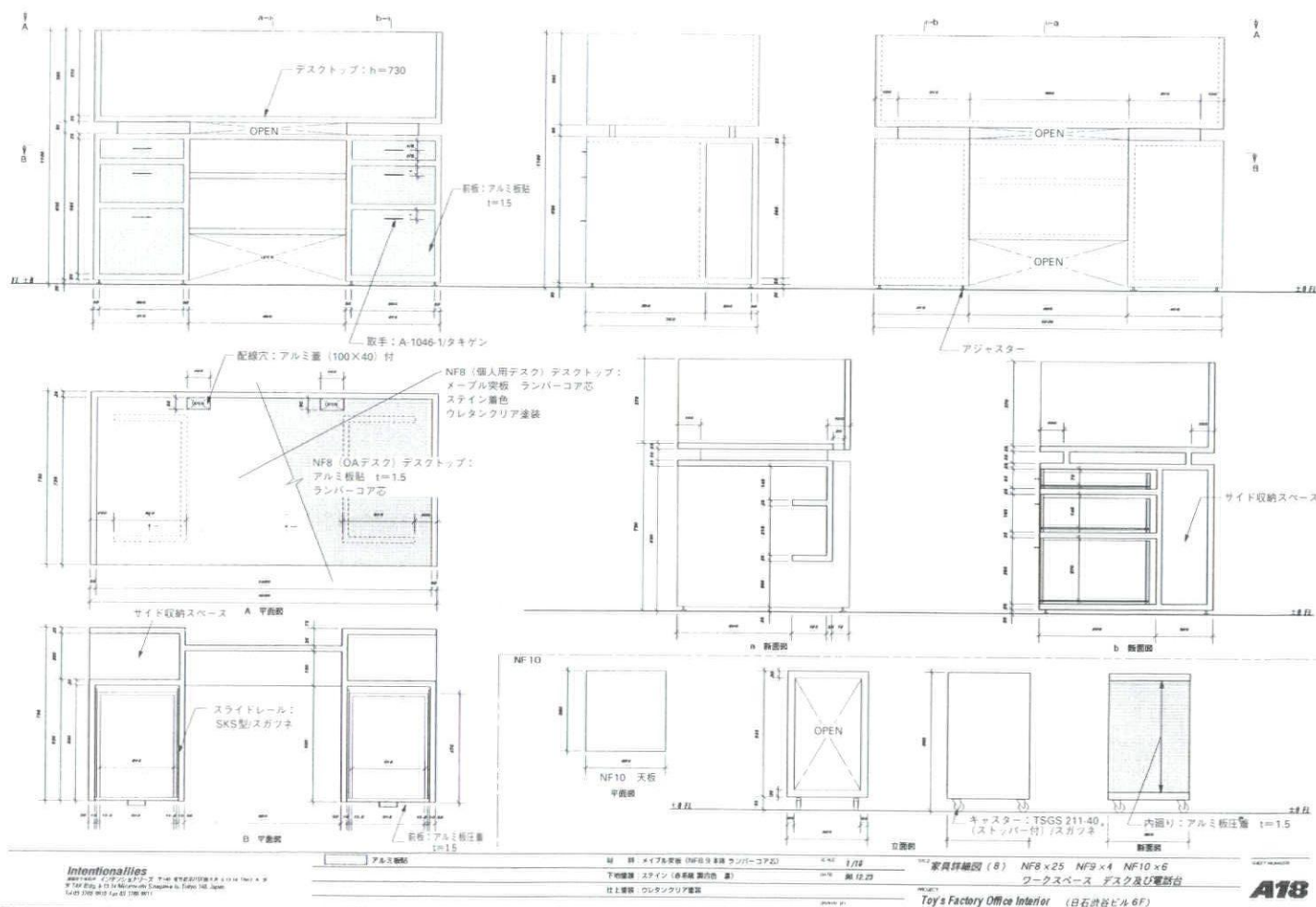
トイズファクトリー・オフィスインテリア インテンショナルリーズ



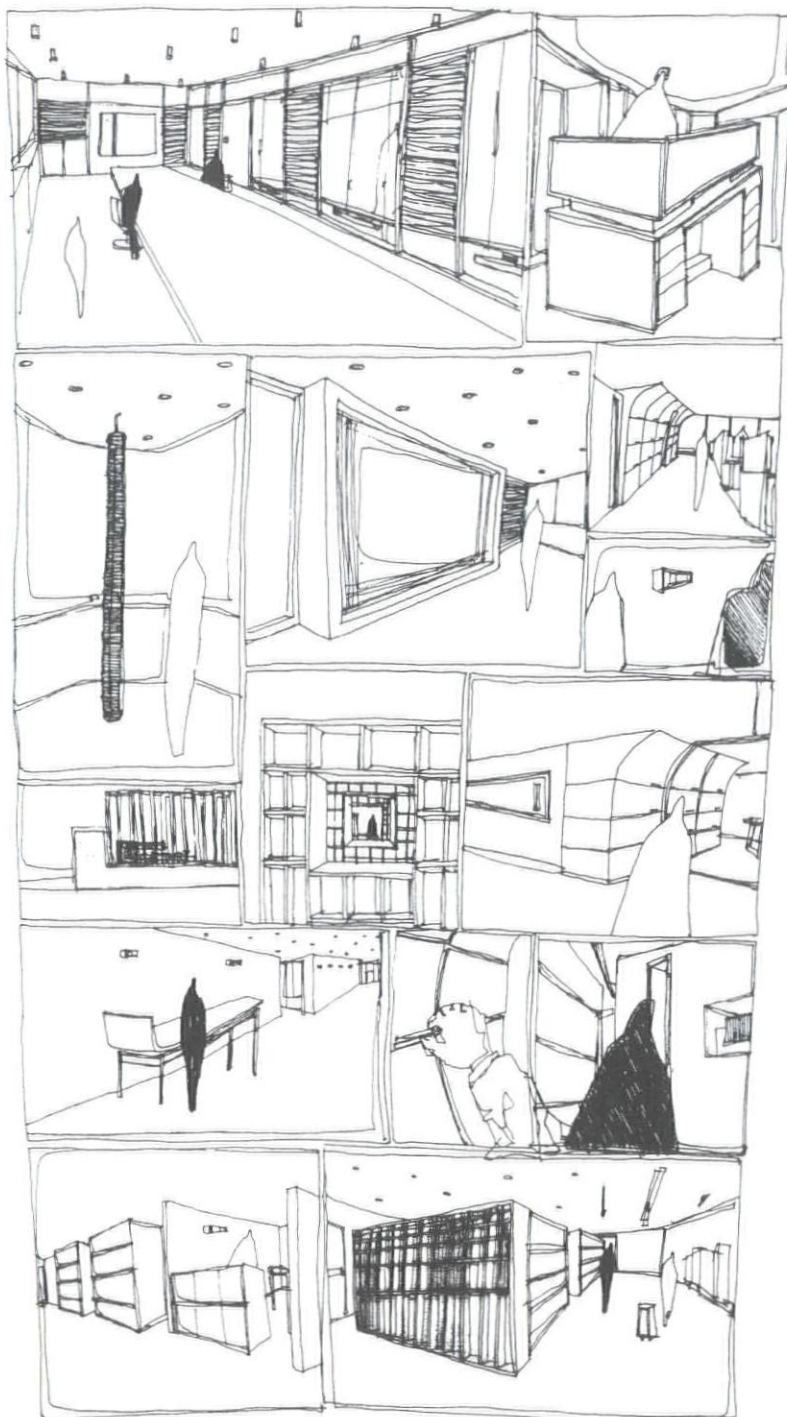




造作家具詳細: 収納家具



造作家具詳細: デスクおよび電話台



Toy's Factory Office Interior Project I

このプロジェクトの始まりは96年11月12日の打ち合わせより開始しました。条件は12月24日までの引き渡しと出来る限りオフィスの業務を中断することなく、新しいかたちを創造して欲しいとのことでした。現場での工事と引き渡し時の現状復帰工事を減らすために、我々が提案した回答は、すべての空間構成要素を機能を持たせた「箱」つまり「家具」で満たすことでした。そして照度の確保というオフィスの条件に対して、発光する箱を空間に対して配置してゆくことや、空間を間仕切る家具を一部可動させることで、太陽光が反射し部屋に投影するよう試み、工事の工程を増やすことなく天井蛍光灯空間とは別の物語を創りました。

Toy's Factory Office Interior Project II

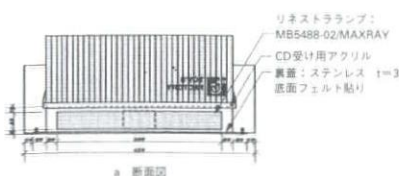
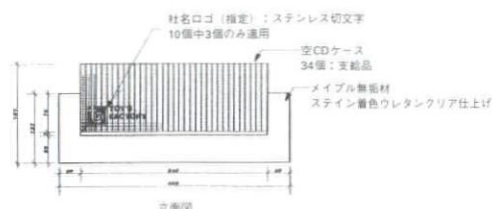
このプロジェクトはIの工事で未完であったこと、つまり分散していた部署の統合と、音を出して打ち合わせできる部屋の確保の必要性から始まっています。それに対する適切な解答が数種の機能の机と90m2の倉庫を確保するための回廊の空間と、前回工程で不可能であった天井までの工事を発生させ、このオフィスの空間を決定づけています。特に机の制作方法は、Iが木製の箱にスチールが貼られる意匠であったのに対して、スチールのフレームに木の板が貼られるという、反転したものになっており、部署ごとに機能も変えてつくられています。このことは数年後、別々のフロアにある場所がさらに統合された時の風景を想定して「今」を設計したことによるものです。

Toy's Factory Office Interior Project III

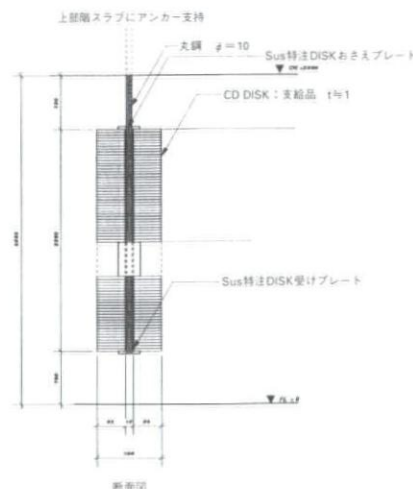
このプロジェクトはIをリニューアルするものであり、より機密性の高い部屋と気軽に打ち合わせできるブースの必要性和、オフィスをよりリラックスできる空間にしたいというクライアントの要求がデザインを決定しています。そしてオフィス空間に照明計画で昼と夜の特性を創ろうと試み、照明器具とその照明と関係する各種素材とフォルムを吟味し、デザインしました。

オフィスであること、レコード会社であるということに対して……

我々はそのことに対してこの会社がCD制作によって成り立っているということを提示すべきであると考えました。そして6F、9Fのエントランスに幾層にも重なったCDのクリアケース8000枚による発光体と音のでないCD盤2400枚による無限柱を建てています。これらは同時には見ることは出来ませんが、同時に異なるフロアに存在することで、両方の機能が初めて、会社として成立していることを示しています。(インテンシオナリーズ)



CDクリアケースによる発光体



CD盤による無限柱

データ

作品名: トイズファクトリー・オフィスインテリア
設計者名: インテンシオナリーズ
共同設計者名: Factory ITL
所在地: 東京都渋谷区
竣工年: 1998年6月
主用途: オフィス
床面積 (設計部分): 910m² (351m²+559m²)
主要仕上
家具: ハードメイプル無垢材ステンカラーウレタンクリア
並びにホワイトアッシュステンカラーウレタンクリア
サイン: CDクリアケース並びにCDサンプル



CWC Office & The Gallery インテンショナルリース

海外のイラストレーターやデザイナーのクリエイティブ・エージェントCWC (Cross World Connections) のオフィス+ギャラリーのプロジェクト。ここで考えたことは、70m²程度のスペースにふたつの機能を持たせるための空間の分節の方法と、CWCのテイストにそった材料のセレクトとその構成、簡便でフリー・メンテナンスなギャラリー壁面の方法等。使用したのはナチュラルなテイストとしての木ではなく、工業製品の木材である無塗装のOSB、ステンレス板、そして躯体に塗られた白いペンキ。シンプルではあるが、真っ白ではないギャラリーはそこで作品を発表するアーティストに新鮮さと、このギャラリーならではの新しいアイデアをわかせるようだ。(大堀伸/ジェネラルデザイン、インテンショナルリース)

(^o^)壁に使っている木材は皆さん珍しがられます。釘のあとが目立たないとか、メリットを説明するととても興味深げな大きいリアクションを得られます。

(^o^) ギャラリースペースから感じるナチュラルな雰囲気と、居心地のよさ。それは仕事をしないで、一日ギャラリーでぼーっとしたくなるほど(それは、ちょっと問題)です。



(^o^) 印はCWCスタッフのコメント



(^o^) 個人の机の上部にある棚はたくさん物が置けるので好きです。

(^o^) ひとつの場所の中に、全く違うふたつの世界があるんです。ひとつは誰にでもオープンで、もうひとつは、秘密のオフィスです。

(^o^) 変化に飛んだ展示内容でも、それぞれに見事にはまる壁面の素材感。

(^o^) 個性的でありながら、展示物をひきたてる壁面、形、照明。

(^o^) オフィス部分について言えば、もので雑然としていてもサマになっているあたたかみと共に機能性のある設計が好きです。

作品名：CWC Office & The Gallery
 設計者名：大塚伸/インテンショナルリーズ
 竣工年：1998年
 所在地：東京都渋谷区代官山町
 展示会名：James & Kacchi展
 建築用途：ギャラリー、オフィス
 床面積（設計部分）：70.50m²
 内部仕上
 床：エポキシ樹脂系導床
 壁：スケルトンAEP、OSB
 天井：スケルトンAEP



所在地：東京都渋谷区代官山町1-6広田代官山ビル3F、Tel：03-3496-0745／0746、URL：<http://www.cwctokyo.com>



花見季

はなみつき

この空間において重要なことは、日本にある素晴らしいこと。一見簡素に見えるが、本当は豊かなことを、凜とした気品のなかで表現してゆくことです。

そして、日本には四季があるように、「しつらえ」によって空間が変化する様を浄明清直に空間に展開しており、むしろ完成した姿を限定した竣工時に求めるのではなく、変わり続けてゆく姿こそがこのサロンであると捉えています。

各自の椅子とテーブルの配置と特性は全て「借景」を基準に構成されており、庭と月見の縁台、壁のしつらえ、水盤のしつらえ、そしてお茶の作法という美しい人の動きを感じさせる設計となっています。

そして、「白」であることを具現化する為に、什器と屋外の月見の縁台にはデュボンコーリアン。椅子の張地には本皮に特殊加工し汚れをはじくレザーヴァを使用し、「機能性」に裏付けされた「美学」を求めました。

そしてこの空間には特筆すべき照明があります。それはインテンシオナリーズで特許を取得している、うつろいゆく光を創る照明に、伝統的技術を現代にも継承されている竹細工の職人さんに制作してもらったシェードをつけた「竹デリア」という3つの照明機具で、空間を水中や竹林の中にあるかのように感じさせる、世界でも稀な光を創る照明です。

そしてこれらのことが、新しくありながら心地よく、どこか懐かしい感覚を想起させながら、見たことのない雰囲気を感じ、調和のとれた姿として感じてもらえるよう設計しました。

(インテンシオナリーズ)

所在地：東京都渋谷区神宮前2-31-7 ビラグリオーK1号
Tel：03-5474-8782

データ

作品名：花見季

設計者名：インテンシオナリーズ

共同設計者名：香取慶子、Factory ITL

所在地：東京都渋谷区

竣工年：1998年11月

主用途：サロン

床面積（設計部分）：76.38㎡

（うちサンクンガーデン22.2㎡）

主要仕上

テーブル・スツール並びに什器：ポピンガステイン製

色ウレタンクリア

テーブル脚：スチール古美色塗装ウレタンクリア

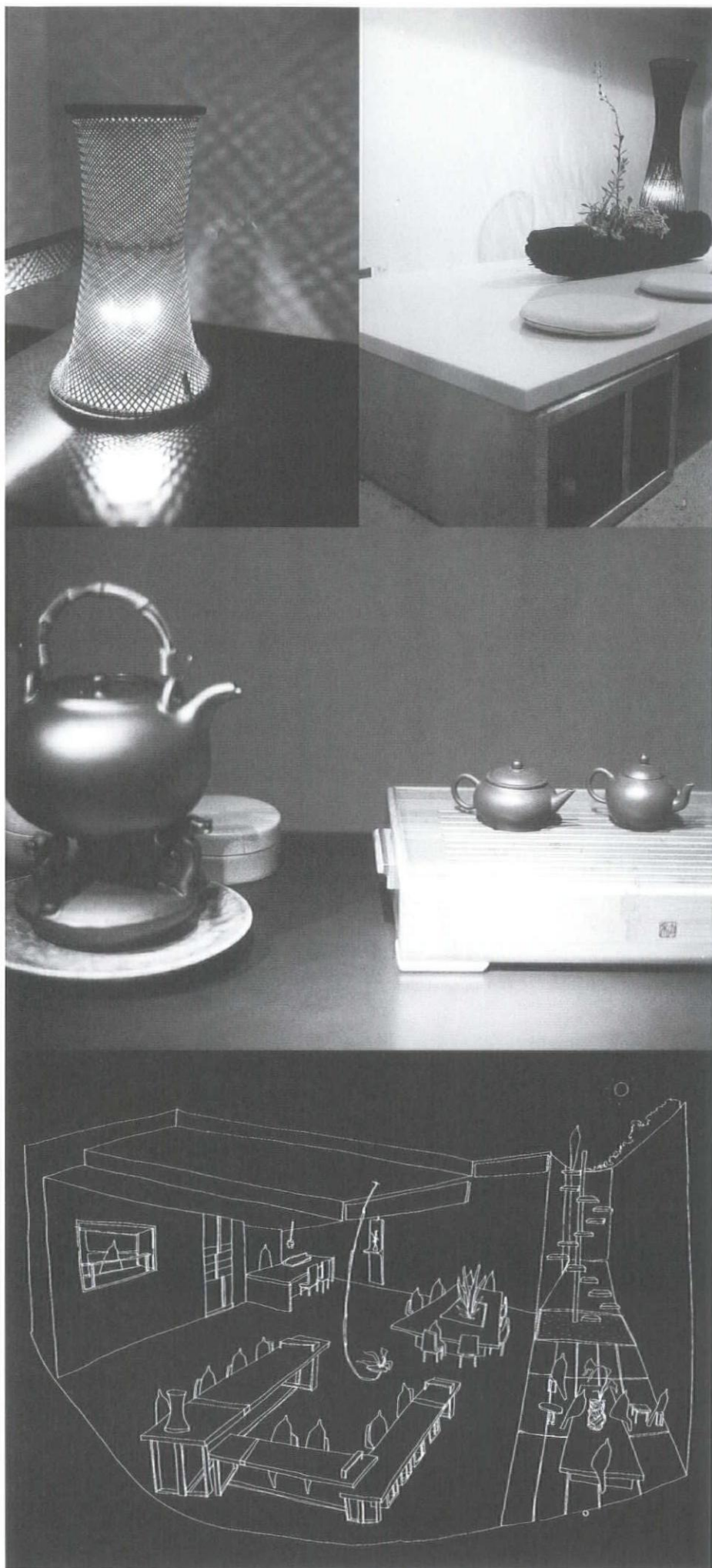
床：珪藻土タタキ

壁：珪藻土コテ仕上げ

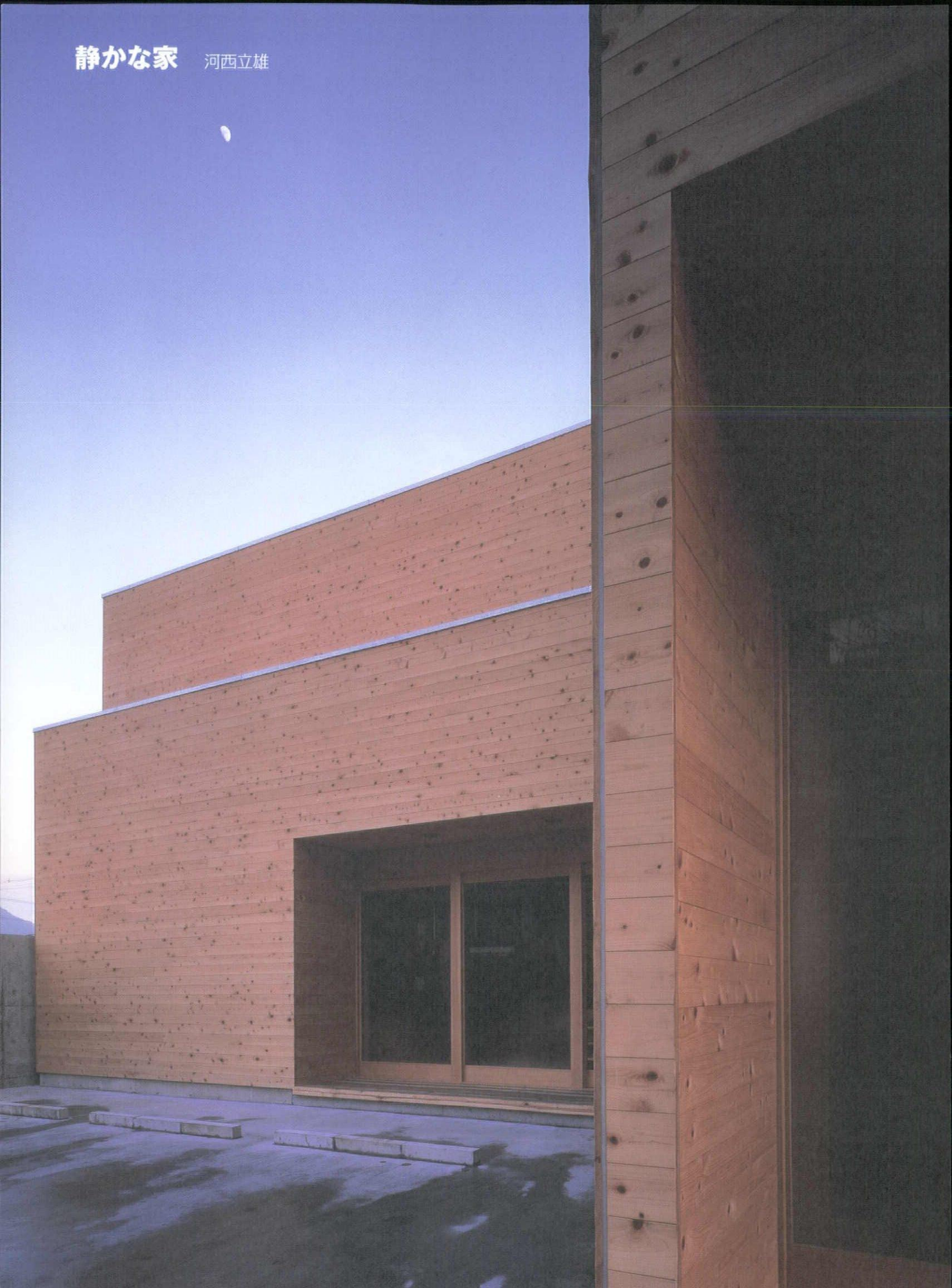
特殊照明：竹デリア

取手並びに月見の縁台：デュボンコーリアン

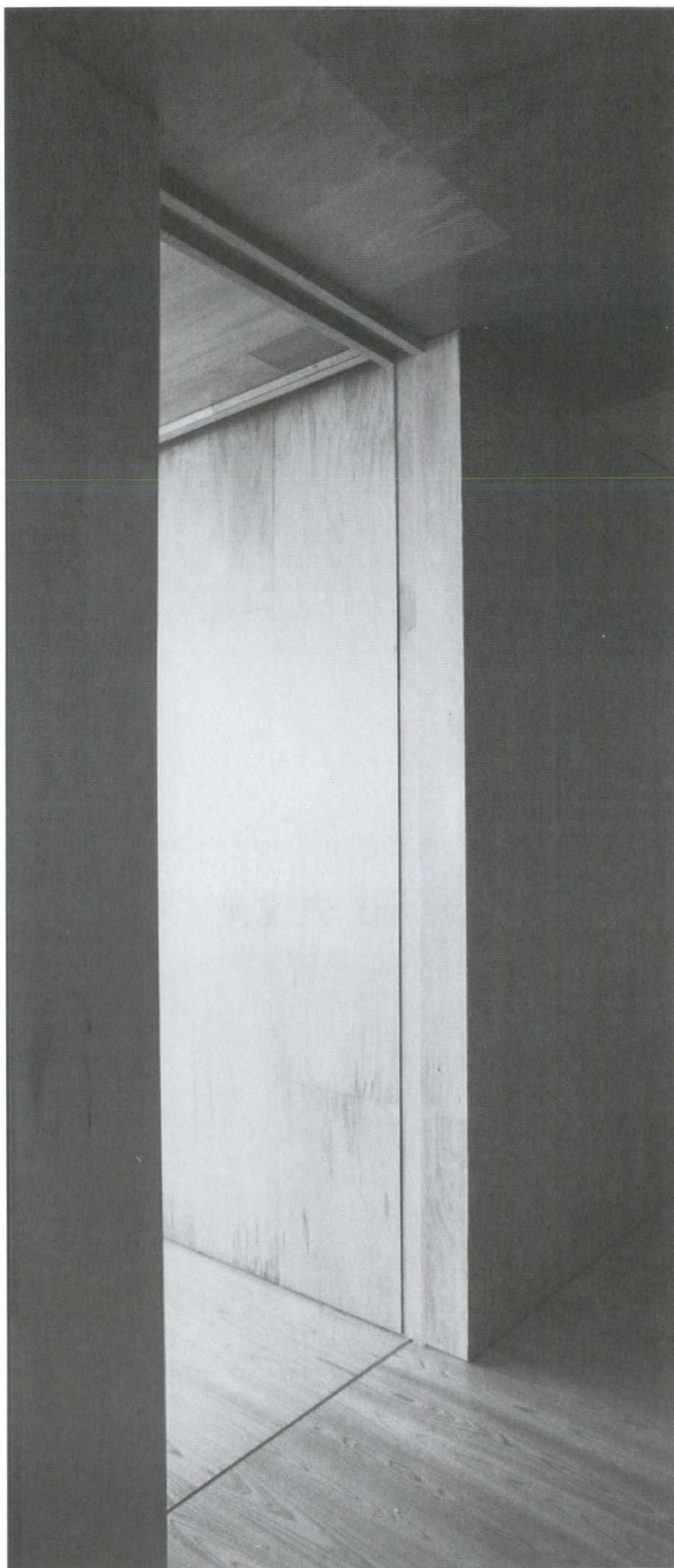
スツールレザー：レザーヴァ



静かな家 河西立雄







何と静かなことだろう。

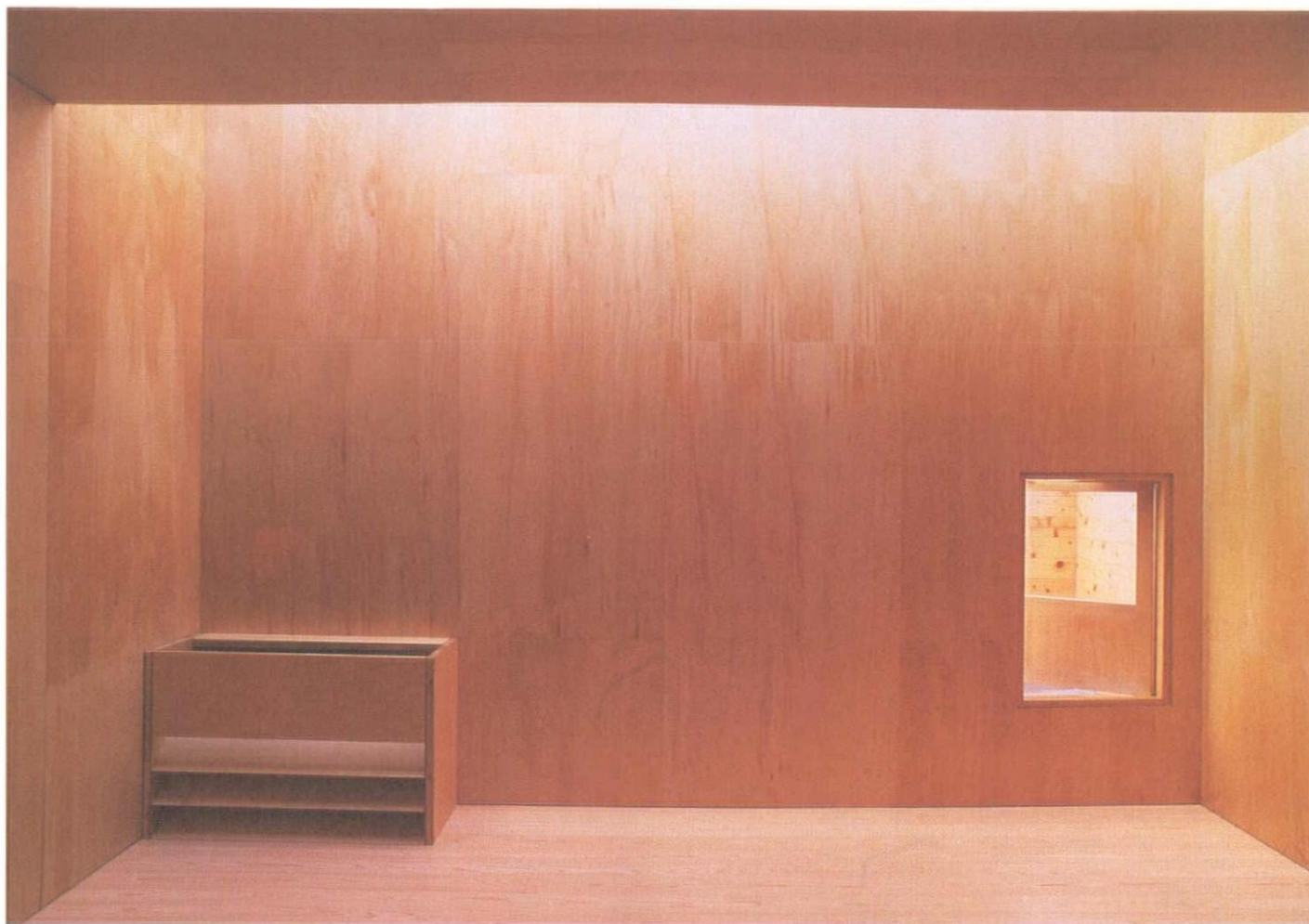
ふたつの家から成る、併用住宅。大きな家の1層部分は診療のために、小さな家の1層部分は投薬のために使用される。それぞれの2層部分では簡素な生活が送れるようになっている。あるいは簡素とは、如何なるものにも寛容ということである。よって家族が世帯として住むこともできるが、ここでは複数の個人が各々の生活に則して住むことを想定している。それぞれの家が、道路側に玄関をもつ。

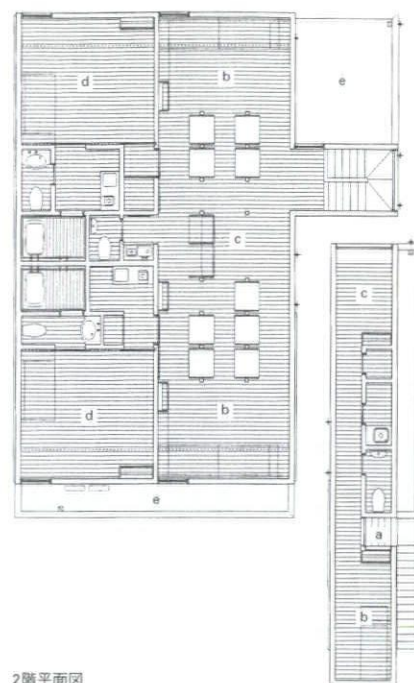
大きな家は、敷地の周縁に沿って雁行する。小さな家は、細長く立ち尽くす。どちらかが先行するでもなく、追従するでもないのだろう。大きな家を山とすれば、小さな家は陸であり、一方を船とすれば、他方は汽笛である。いずれも同じ高さを持ち、空に連なる。

大きな家の内部は、いくつかの部屋に分かれるが、ひとつの部屋でもある。こういった部屋の展開は、引戸によって組み立てられる。閉じられるときも開かれるときも、またいずれの途中でも、その形式は端的だ。緩やかに閉じて開く壁。小さな家の内部は、必要とされる最小の寸法によって部屋の短辺を形成する。窓が限定されるため、取り込まれる光は端部で弱まる。直線で並ぶ明るさと暗さ。このような家、そのような調子。つまりこう言えるのではないか。

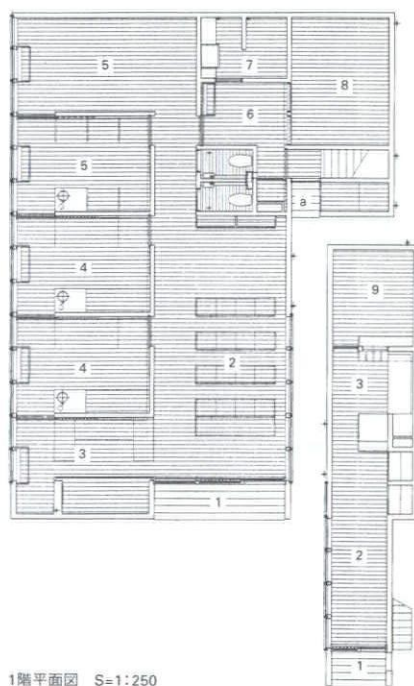
ふたつの家のあいだは、歩くのによい場所である。この家がいくらかの考えによってつくられていたとしても、その隙間は積極的な思考から縁遠い場所である。というのも、大きな家と小さな家はそれぞれの必要に応じてつくられたのであり、両者のあいだは、おおむね気づかないうちに呼び寄せられていたからだ。いずれにせよ、ただ率直に言って、私はここを歩いてみたいと思う。このような家、そのような調子。つまりこう言えるのではないか。

周辺にはまだ田畑が残っている。遠くからこの家を見ると製材所のような。ありふれて従順に、この家は数的な比例をもつが、それは弛緩する比例である。なぜなら、近づいてくる比例ではなく、遠のく比例であるからだ。遠のけばこの家はより大きく、さらに遠のけばよりはっきりとその姿は出現する。快く投げ出された物量、この家はこれから建てられるもののようにも思える。このような家、そのような調子。つまりこう言えるのではないか。(河西立雄)





2階平面図



1階平面図 S=1:250

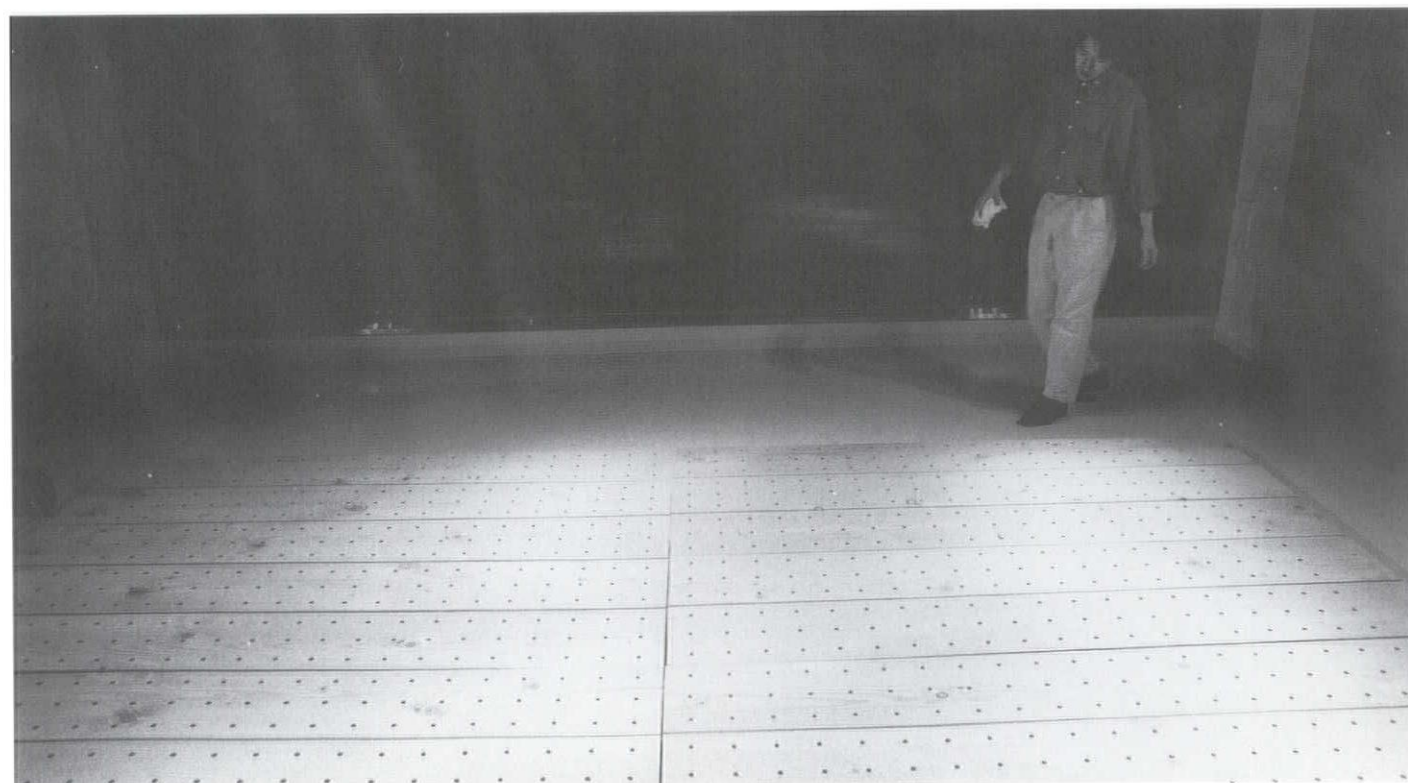
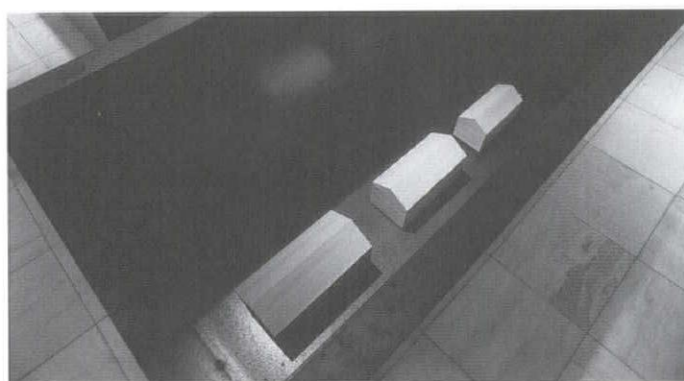
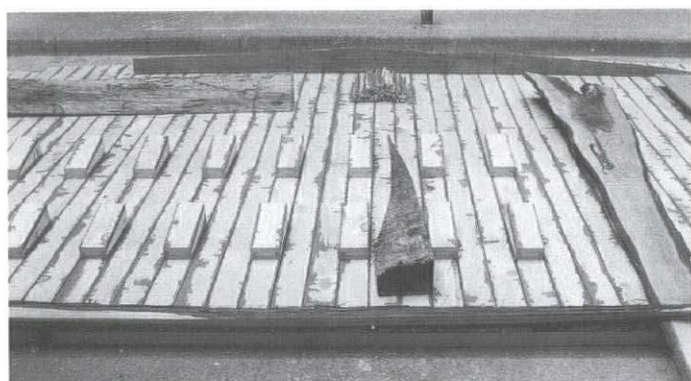
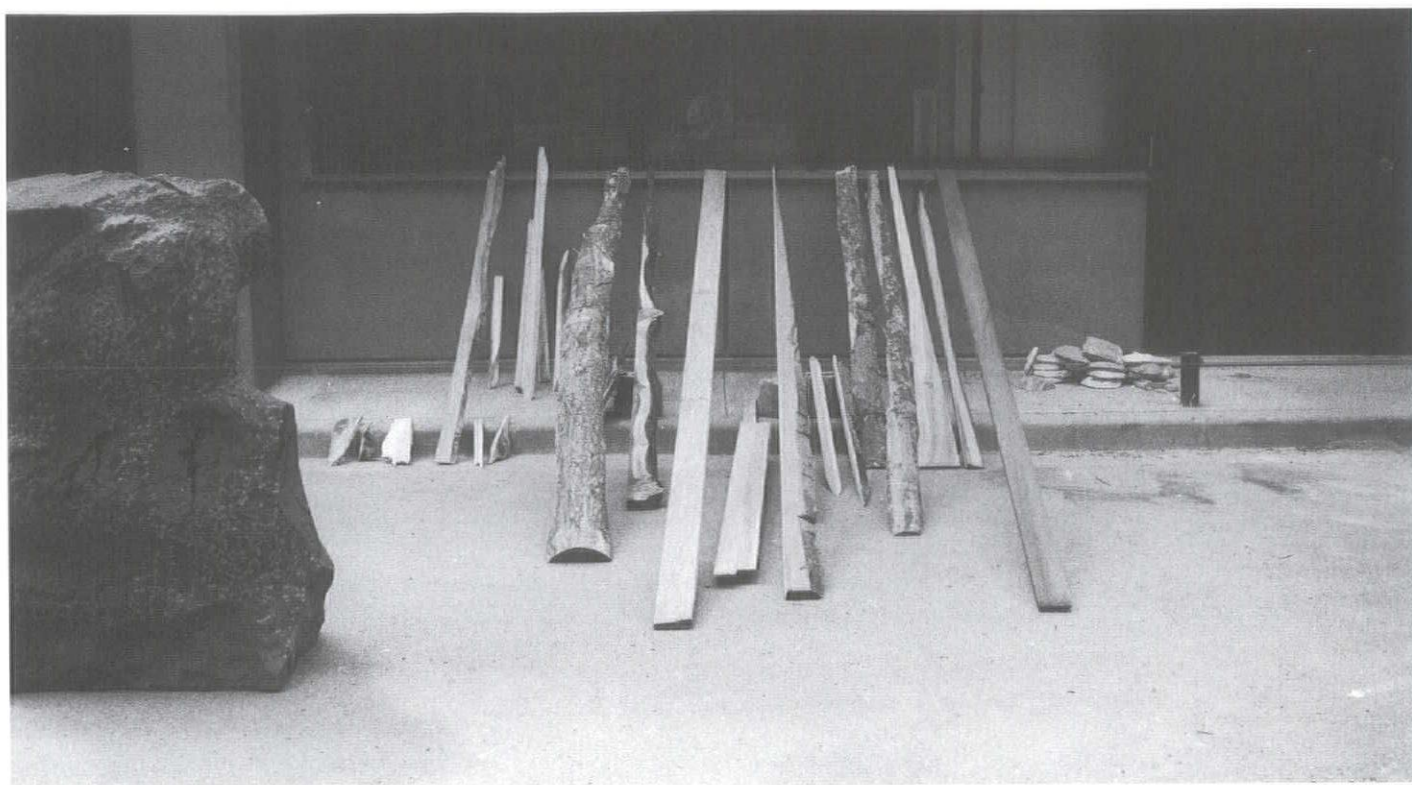
- 1: 玄関
- 2: 待合室
- 3: 事務室
- 4: 診察室
- 5: 処置室
- 6: 操作室
- 7: 検査室・暗室
- 8: X線室
- 9: 調剤室

- a: 玄関
- b: 書斎
- c: 居間・食堂
- d: 個室
- e: テラス



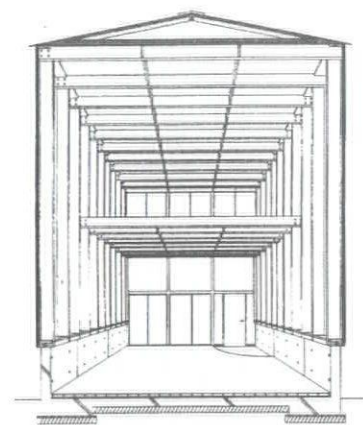
データ

作品名: 静かな家
 設計者名: 河西立雄
 所在地: 京都市北区
 竣工年: 1996年
 主用途: 併用住宅 (診療所および薬局)
 構造: 木造
 階数: 地上2階
 敷地面積: 318.27m²
 建築面積: 173.56m²
 延床面積: 312.38m²
 外部仕上
 外壁: ヒノキ下見板張り厚15mm 浸透性撥水剤塗布
 開口部: 木製 浸透性撥水剤塗布
 内部仕上 (主要各室)
 床: ヒノキ複層板 厚12.5mm
 壁・天井: シナ合板 厚5.5mmCL

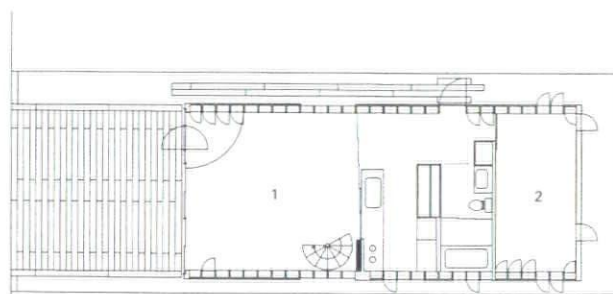
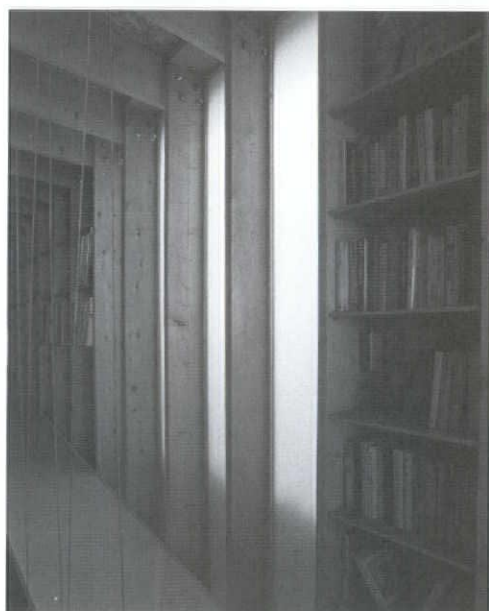


木のエスキース：河西立雄の創作風景



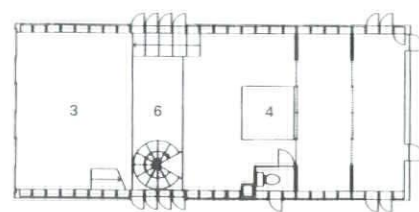


生活の変化を受容する「ただそれだけの箱」。

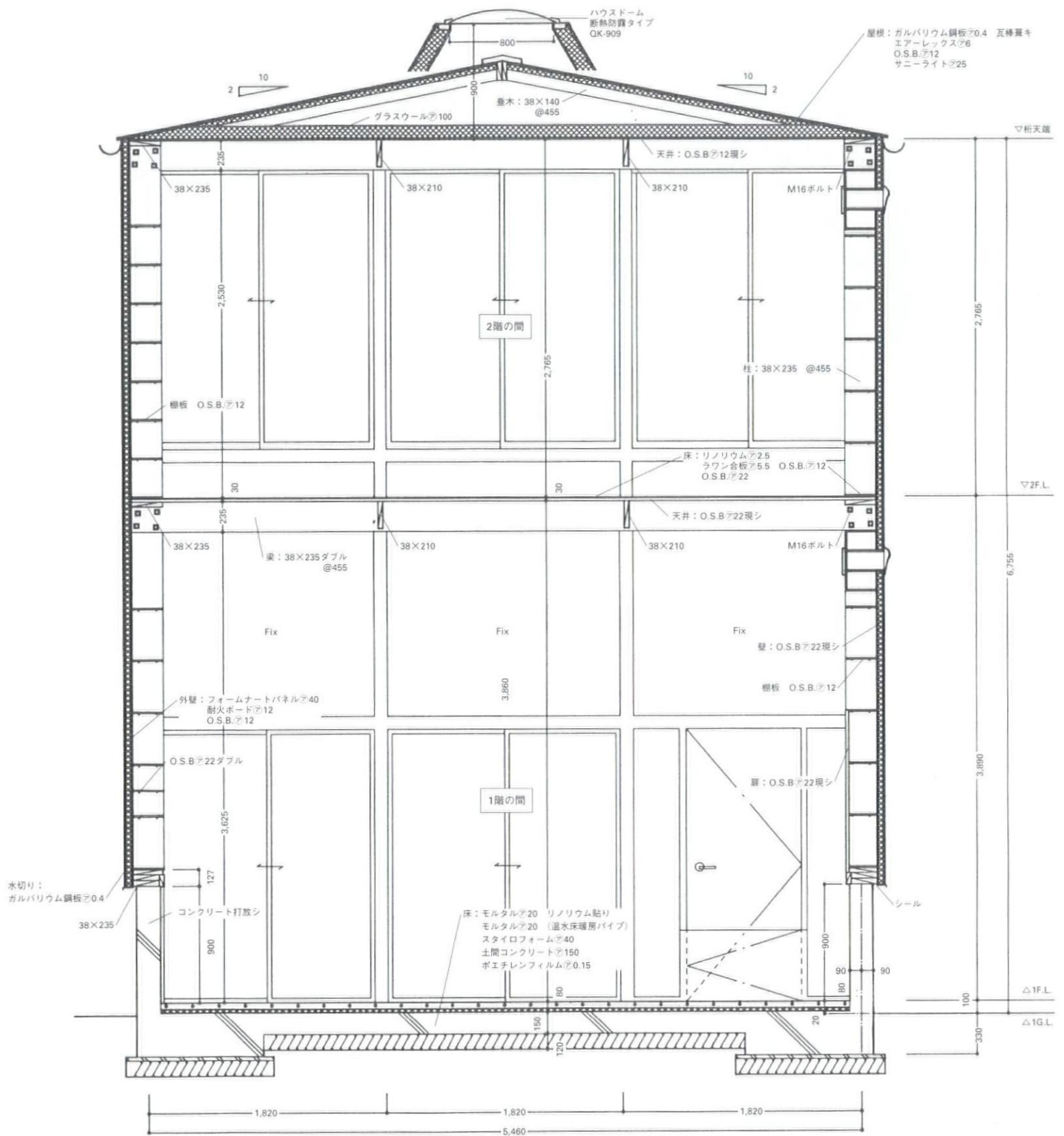


1階平面図 S=1:250

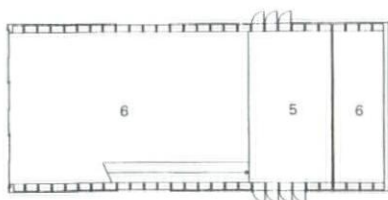
- 1: 1層の間1
- 2: 1層の間2
- 3: 2層の間1
- 4: 2層の間2
- 5: 上の間
- 6: 吹抜



2階平面図



矩計図 S=1:40



屋階平面図

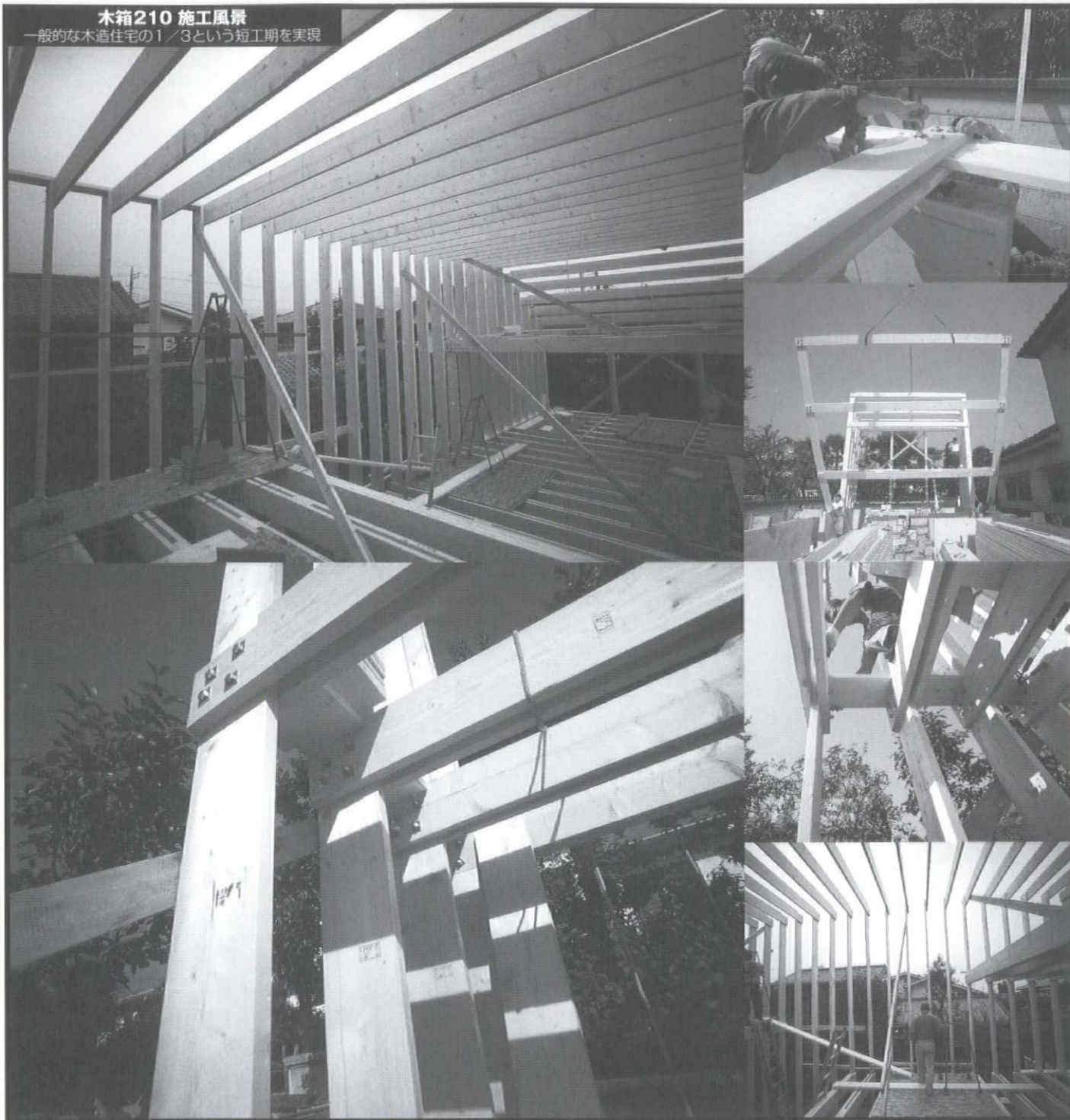


断面図



木箱210 施工風景

一般的な木造住宅の1/3という短工期を実現



とし、斜材のない全面開口を構造家の協力を得て求めた。東西方向を枠組壁工法の部材である2×10（ツーバイテン）で構成する鳥居型のフレームとした。1フレームの応力を小さくするために全体を軽量化するとともに構面を多くした。29構面を持つ一方向木造ラーメン構造である。木材は強度が弱いのでひとつの材に応力が集中することを避けるために、構成部材を多くすることにより応力を分散させた。柱はすべて通し柱で58本。床梁は2枚の合わせ梁で31本。小屋梁は29本である。南北方向は構造用合板で軸組を固めている。床に厚さ22ミリの構造用合板を張ることにより水平の剛性を得ている。

短工期・ローコスト

柱と梁との接合部を単純化して、仕口は4本のボルトと接着剤とした。土台、梁、柱などの構造材はすべて2×10材を用いた。単一部材で出来た骨組みで

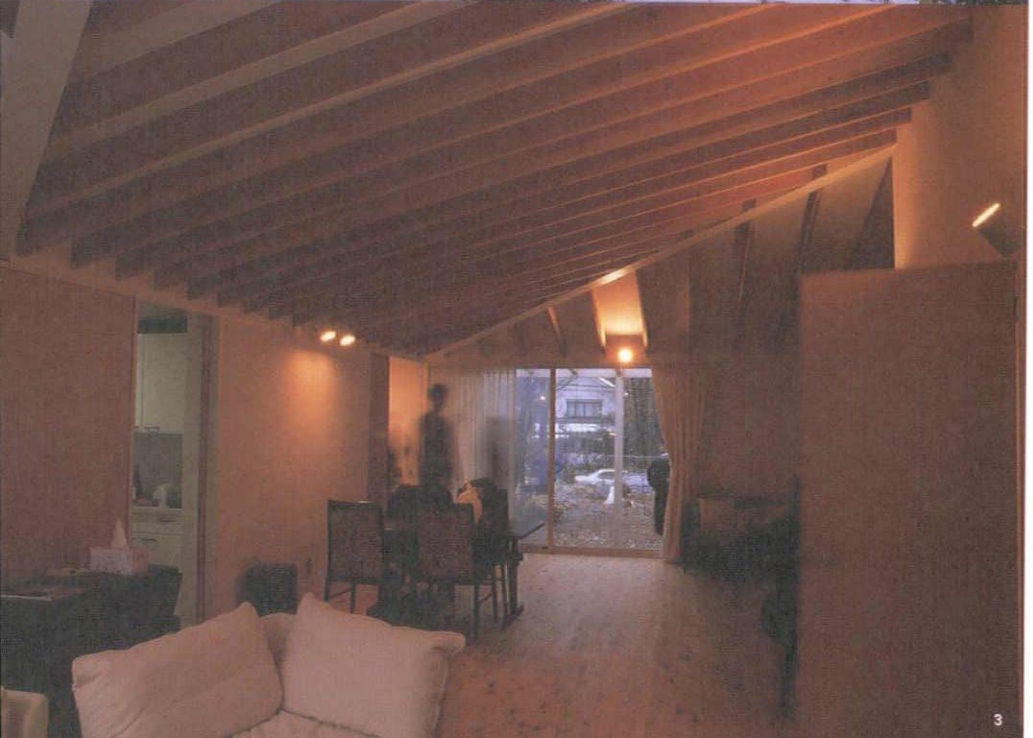
ある。梁の長さはすべて同じ、柱の長さも北側斜線の影響を受ける10本以外は同じである。接合部の加工もすべて同じなので、加工部材の種類は極めて少ない。墨付けと加工が簡易となり、構造部材の加工は5人工で済んだ。構造材が仕上げを兼ねるので仕上げ材はほとんどない。大工手間は60人工であり、一般的な住宅の約1/3で済んだ。材木が搬入されてから引越しまで25日であった。

基礎は1階の床を兼ねたベタ基礎として土工事を少なくした。90cm立ち上がった腰壁が逆梁となる腰高フローティング基礎である。基礎の底版が兼ねる1階床の上には気積の大きい空間に有効な灯油熱源温水床暖房を用いた。外壁は断熱パネル（硬質ウレタン厚40つきガルバリウム鋼板）で覆い、断熱工事と外壁工事を一緒にした。このように構成を単純にしたため全工期は2ヶ月、コストも当然低く抑えることができた。（葛西潔）

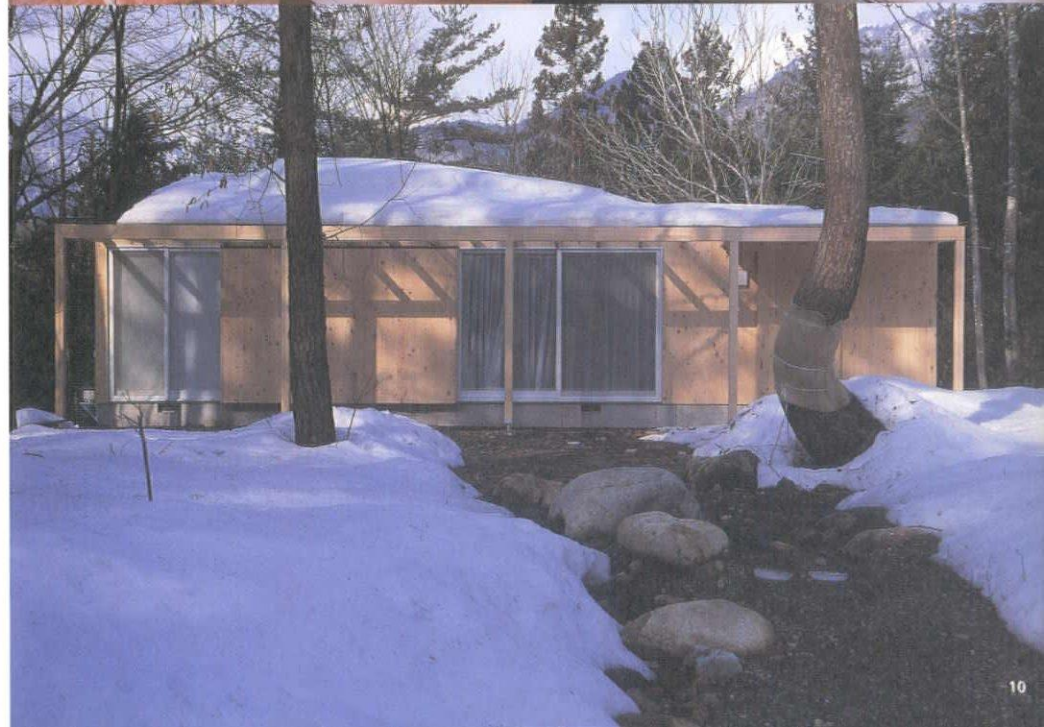
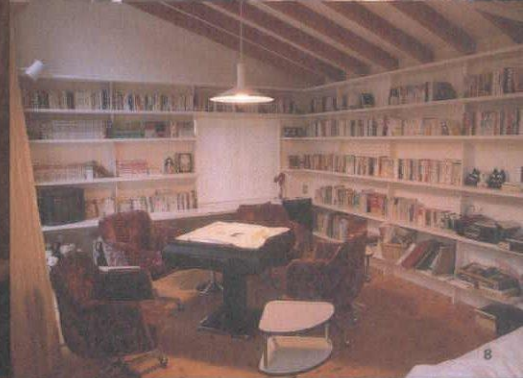
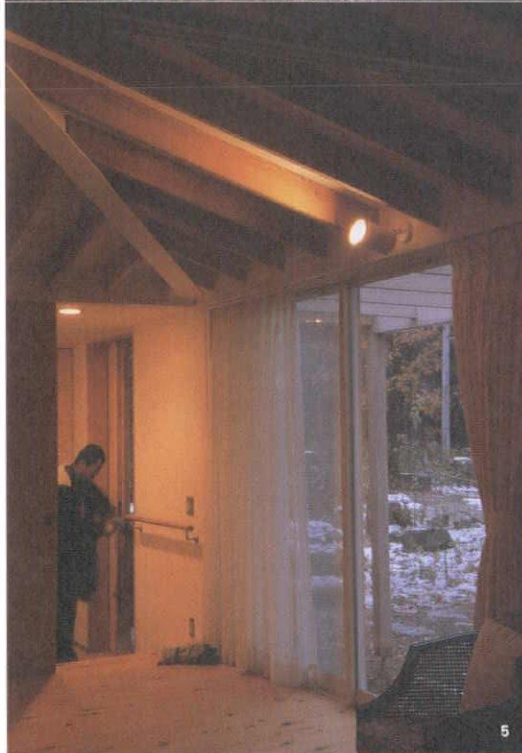
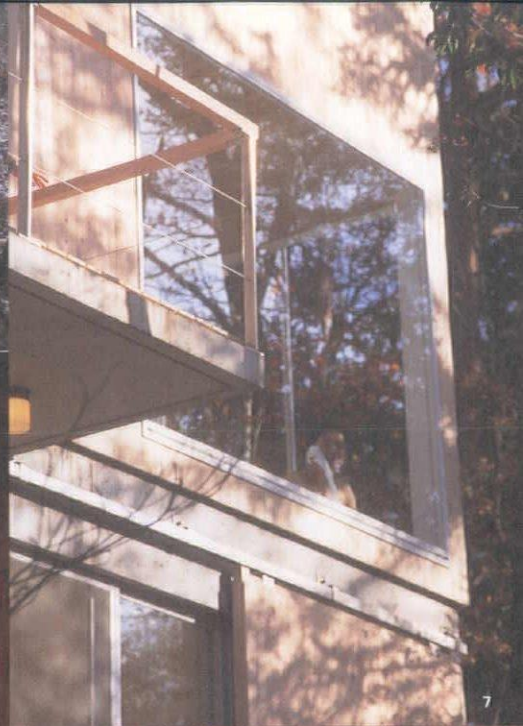
データ

作品名：木箱 210
設計者名：葛西潔建築設計事務所
担当：葛西潔、水上尚子
所在地：東京都練馬区
竣工年：1996年
主用途：専用住宅
構造：木造
階数：地上2階
敷地面積：144.19㎡
建築面積：69.41㎡
延床面積：138.82㎡
外部仕上
屋根：ガルバリウム鋼板瓦棒葺
外壁：フォームナートパネル丸波40mm
開口部：アルミサッシュ（ペアガラス）
外構：枕木敷き
内部仕上（居室）
床：天然リノリューム2.5mm
壁・天井：OSB表し

大町の家 みかんぐみ



- 1: 東側立面窓
- 2: 地階西側
- 3: 1階内部
- 4: せせらぎ
- 5: 玄関付近
- 6: 1階内部
- 7: 浴室窓
- 8: 麻雀室
- 9: 地階客室
- 10: 東側立面



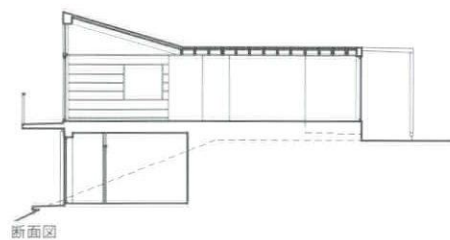
90始める。例へて、1436年(享和)の写本に「1436年(享和)」とある。この頃、**『源氏物語』**を始める。なかなか燃えない。燃えてもすぐ消える→1500相当強引に燃やし続け、焼き辛完了→1545できたと思ったけどまだ



145 温泉 湯船が広くて時間ががかる→0745 暖炉の掃除をする。慣れで、そのので簡単で、15分ほどで済んだ。明日が、

温泉 明日が、

温泉 夜だと外には暗闇が見える→2250 布団を敷く→2315 横になり、あっという間に眠りにつく→0630 雨戸が閉まっ



構造システムを考えると、線材で構成するか、面材で構成するかという認識によって大きな違いがある。トラス、アーチ、ラーメンと呼ばれているものは線材の構造であるし、スラブ、壁などは面材の構造である。鉄骨や木はもともと線材のシステムに適している素材であり、コンクリートは面材としての活用自由度が大きい素材である。しかし、木でも面材的な構造は可能であり、構造用合板と枠材の組み合わせにより面的な構造を作ることができる。これはもともとツーバイフォー工法における材料の使い方であるが、軸組工法の建物においてもこの構造を取り入れることは可能であり、ツーバイフォーの建物では形態や構造に関する規定が詳細にわたるため軸組工法に比べて自由度が少なく、むしろ軸組工法の中でより自由な応用が可能な構造でもある。

この構造の特徴として、先ず断面が細いためピッチを細かくして「ジョイストスラブ」として利用し、梁せいの小さくできるということが挙げられる。また、流通材であるため乾燥剤が比較的手に入りやすく、ねじれや狂いが少ないということもある。以上の点から、意匠上の表現としても、木の細い部材の繰り返しのリズムが得られるということもある。

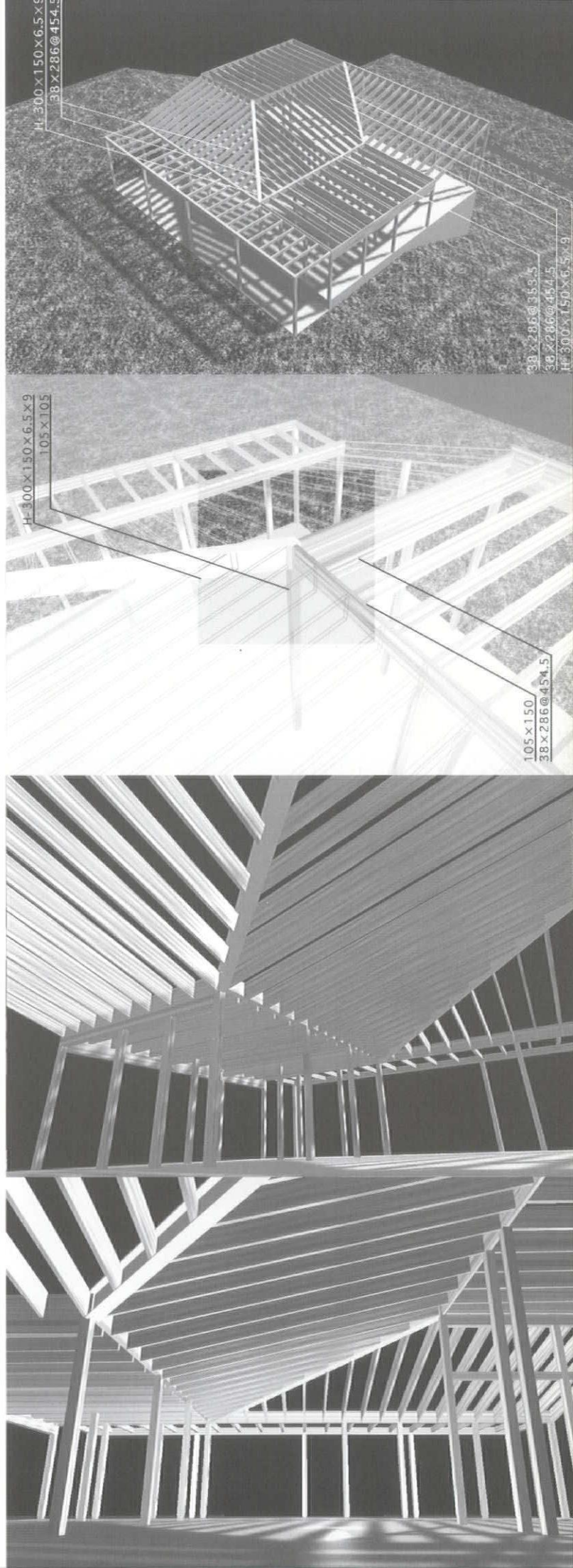
この建物は傾斜地に建っており、崖側はRC造の地下室が設けられ2層となっているが、敷地入り口側から見ると平屋建ての建物である。木造の基本構成は軸組工法であり、平面的なバランスを考えて耐力壁を設け、木造構造としては比較的シンプルな構造とした。建築デザインのポイントとしては、L形をふたつ組み合わせた平面形状の部分の空間の作り方であった。これらは本来三つの部屋であるが、仕切壁を開け放つと連続した一体の空間となる。この空間の天井に一体感のある木造小屋組を表現するというのが、建築と構造のデザインの最大の接点であった。

小屋組を連続した木のリズムで表現するため、枠組み材と合板によるジョイストスラブ構造を用い、屋根勾配の方向に沿って枠材を配置した。積雪2.5mという厳しい条件であったが、幅38mm、成286mmの枠材を用い、スパン3.63mの部分は454.5mmピッチで、スパン4.54mの部分は中央で353.5mmピッチ、両端の三角の部分では、454.5mmピッチにそれぞれ配置した。このピッチの調整は、スパンの大小による応力の違いを調整するためとともに、枠材の方向が途中で切り替わる部分で、2方向から延びた枠材の位置を合わせたことによる。この部分の受け梁は、グリッドに対して対角線方向となるためスパンが5.76mと大きくなり、かつ負担する荷重も大きい。この部分もあくまで木造部材で作るとなると、集成材やLVLなどの強度の大きな材料でしかも大きな断面の部材を使う必要がある（以前に、青木淳と設計したS（エス）の木造平屋建ての建物ではPSLを使ってこの手法を用いたことがある）。しかし、今回の建物では室内空間の連続性を大切にする意味から、梁せいの300の鉄骨梁を用い、部材せいを同じにするような工法を試みた。結果としてハイブリッド的な構造となった。

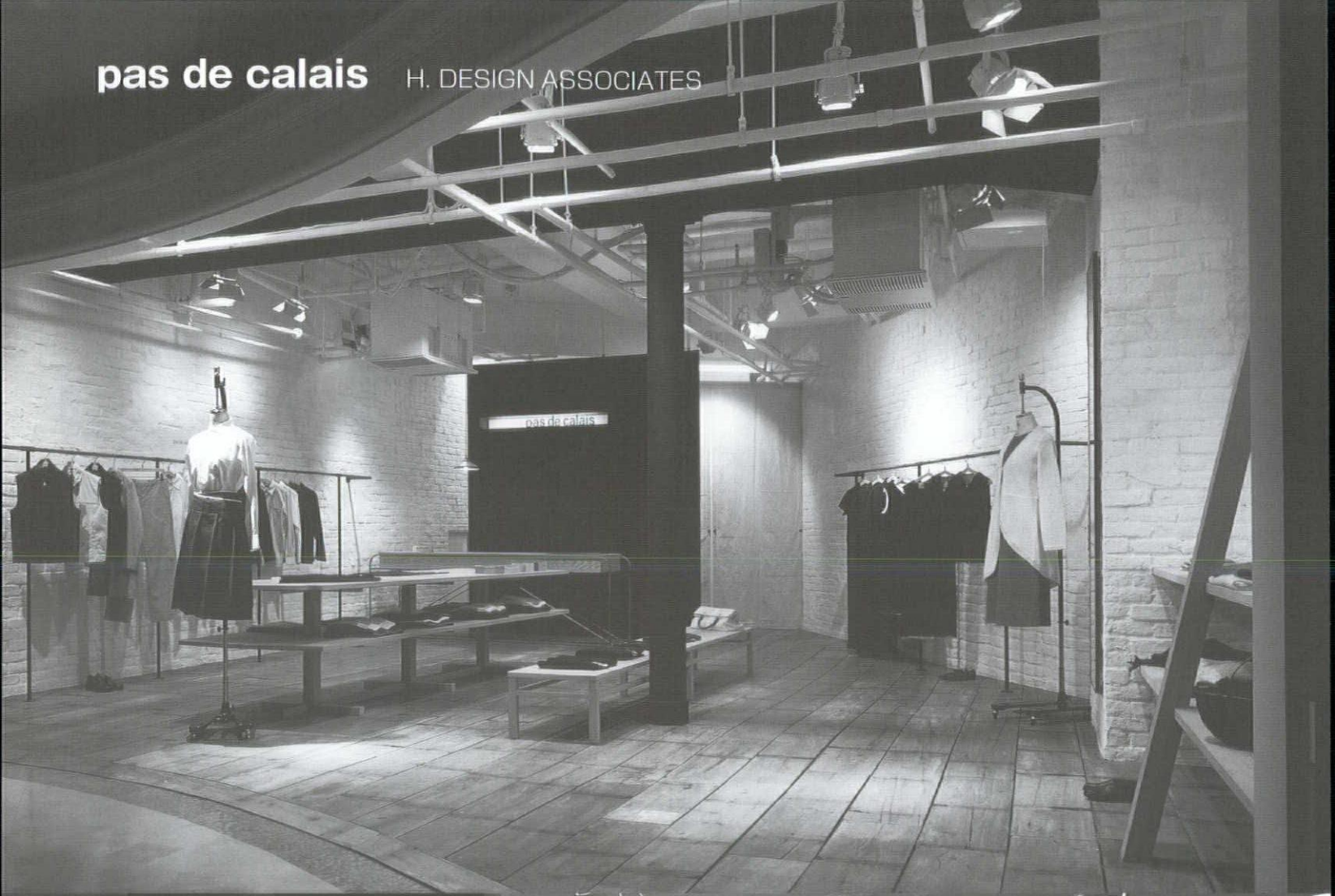
枠組み材を用いた場合のもうひとつのメリットとして、専用の金物が比較的廉価で手に入るということである。しかも金物の取付は基本的にはくぎ接合であり、特殊加工が少ないことも特徴である。鉄骨梁との取り合いに関しても下フランジに載せ架ける方法を取り、単純化している。鉄骨梁と柱との取り合い部分のみ特注金物を作り、梁が柱に乗りかかるディーテールとした。

（金箱温春／構道家）

データ
 作品名：大町の家
 設計者名：みかんぐみ
 共同設計者名：金箱構造設計事務所（担当：金箱温春）
 所在地：長野県大町市
 竣工年：1997年
 主用途：別荘
 構造：鉄筋コンクリート造+木造
 階数：地下1階 地上1階
 敷地面積：779.6㎡
 建築面積：115.7㎡
 延床面積：162.2㎡
 外部仕上
 屋根：改質41アスファルトシート防水
 外壁：ヒノキ緑甲板張+ステンプルーフ2回塗 コンクリート打放し
 開口部：アルミサッシュ 木製建具
 内部仕上（諸室）
 床：ヒノキ
 壁：PB 9+9 2枚張り AEP



pas de calais H. DESIGN ASSOCIATES



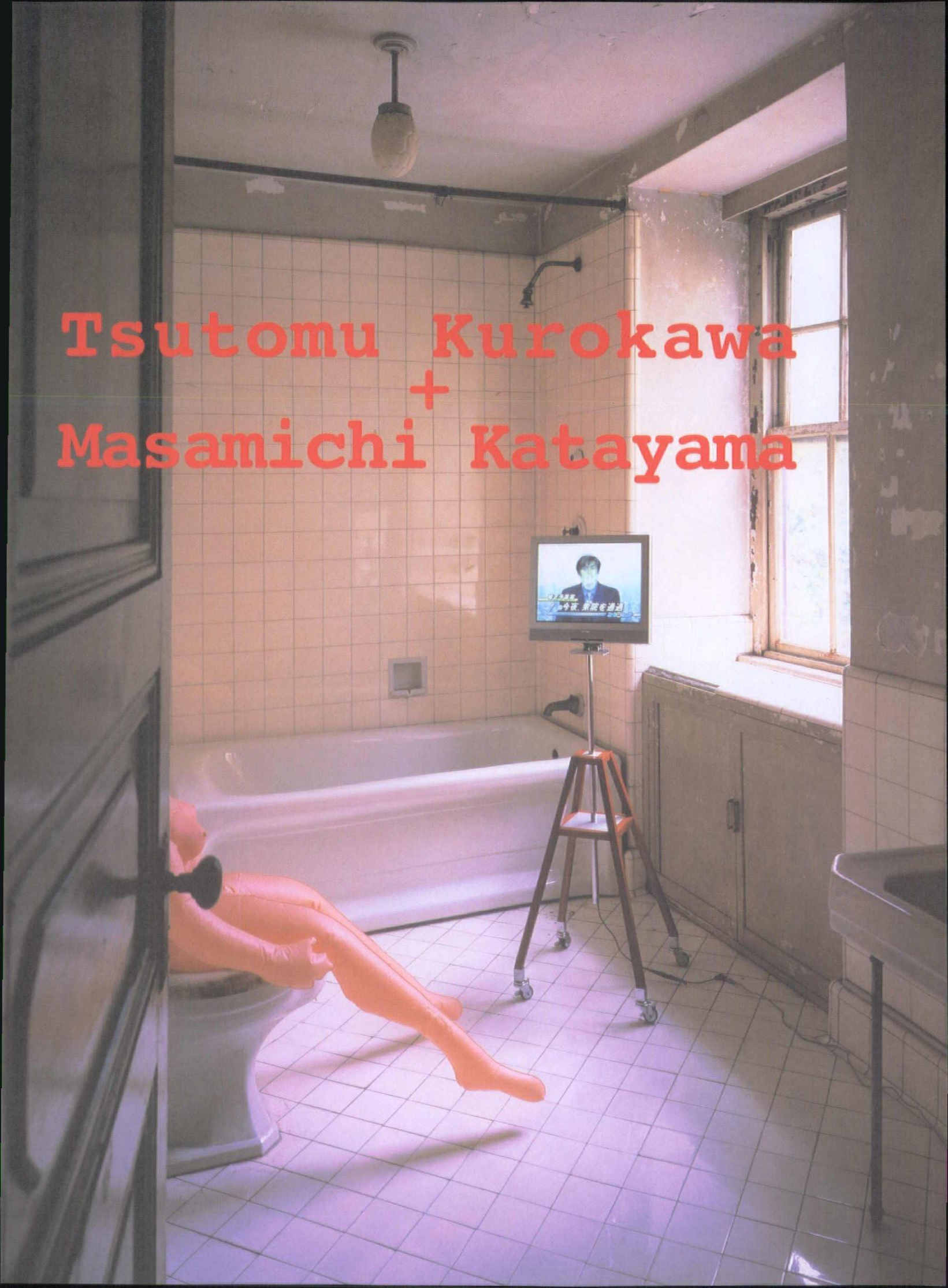
作品名：pas de calais、設計者名：黒川勉/H.DESIGN ASSOCIATES、所在地：PARCO part1 東京都渋谷区宇田川町、竣工年：1998年、主用途：ブティック、主要仕上：床 ベンキ付古木材 什器 オーク無垢材

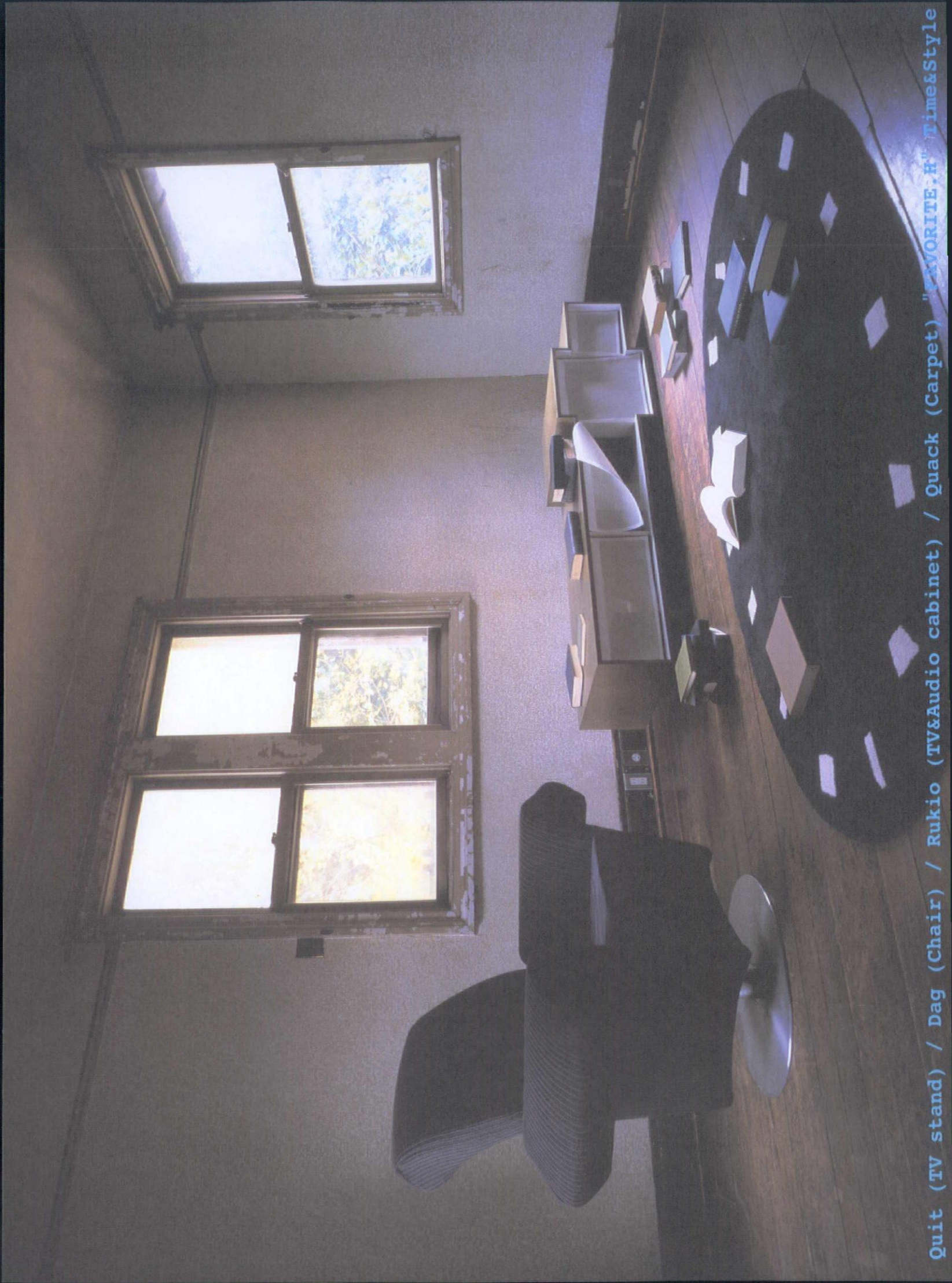
IS H. DESIGN ASSOCIATES



作品名：IS。設計者名：片山正通／H. DESIGN ASSOCIATES、所在地：PARCO part1 東京都渋谷区宇田川町、竣工年：1998年、主用途：ブティック、主要仕上：床 バイナリ塗装

Tsutomu Kurokawa
+
Masamichi Katayama





Quit (TV stand) / Dag (Chair) / Rukio (TV&Audio cabinet) / Quack (Carpet) "FAVORITE.H" Time&Style

Vanity (CD Shelf)/ Frank (Chair)/ Flow (Floor Light)/ Photography : Nacasa&Partners Kozo Takayama
Furnitures: "FAVORITE.H" Time&Style 03-5731-7023 3-23-20 Yakumo Meguroku Tokyo 152-0023

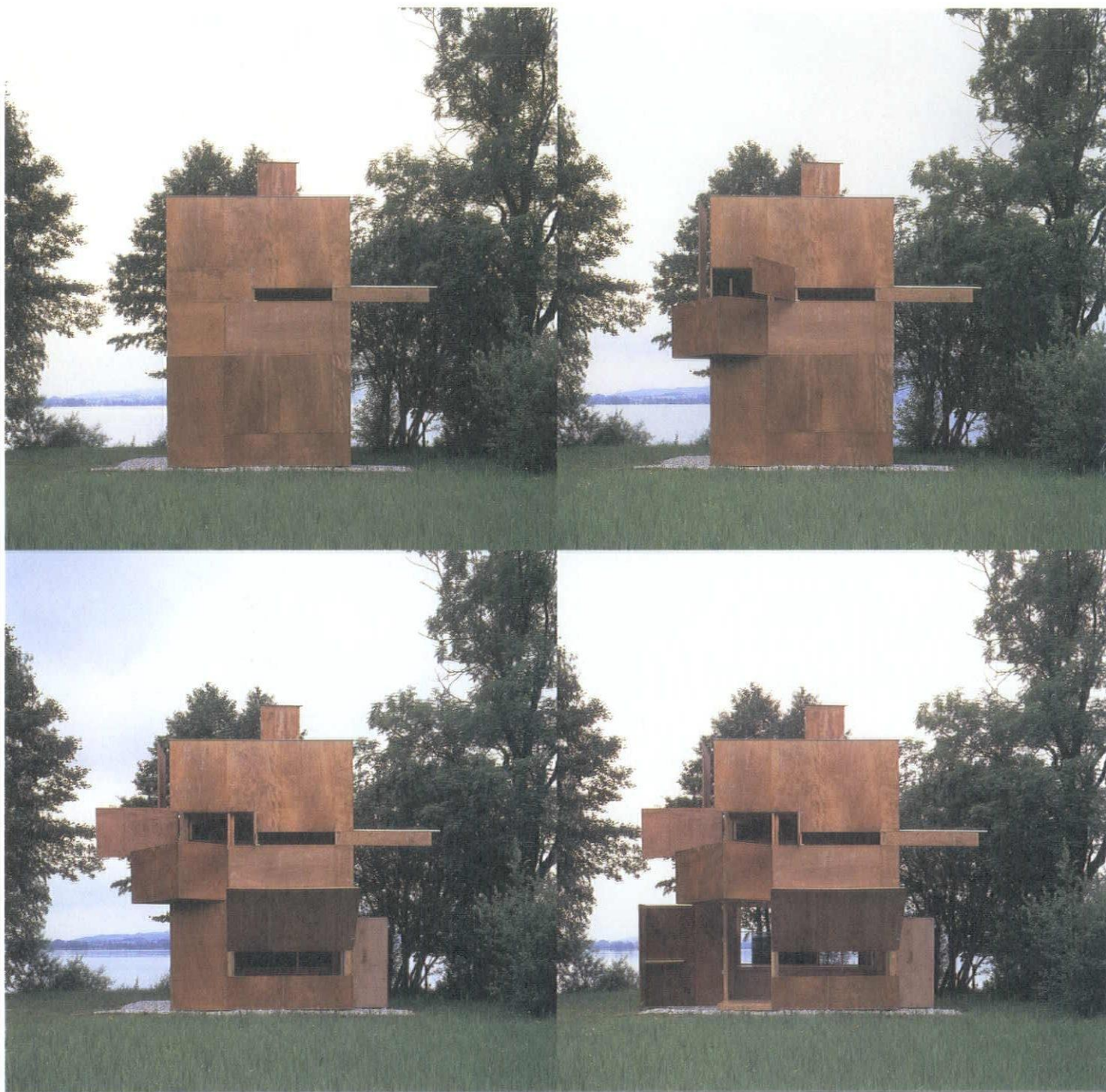


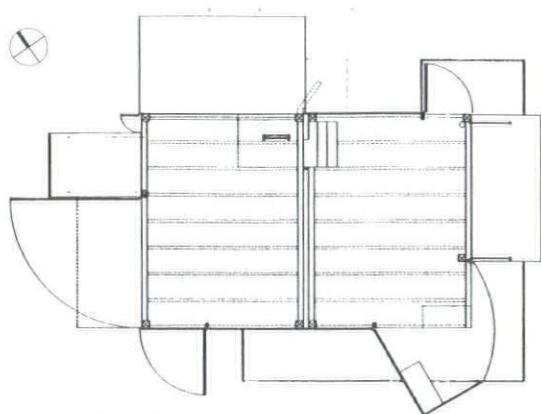
<http://www.h-design.com>



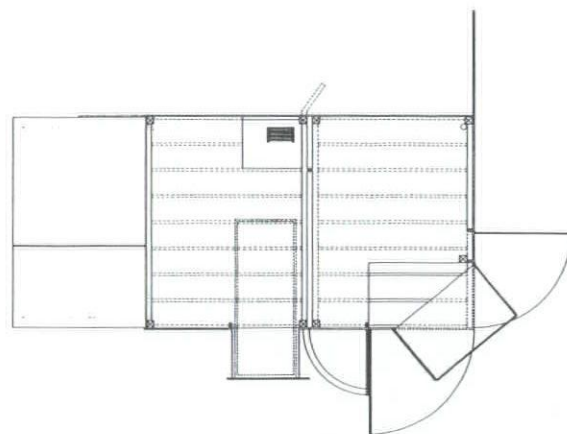
グックルフツプ ハンス・ペーター・ヴォーンドル
GucklHupf Hans Peter Wörndl



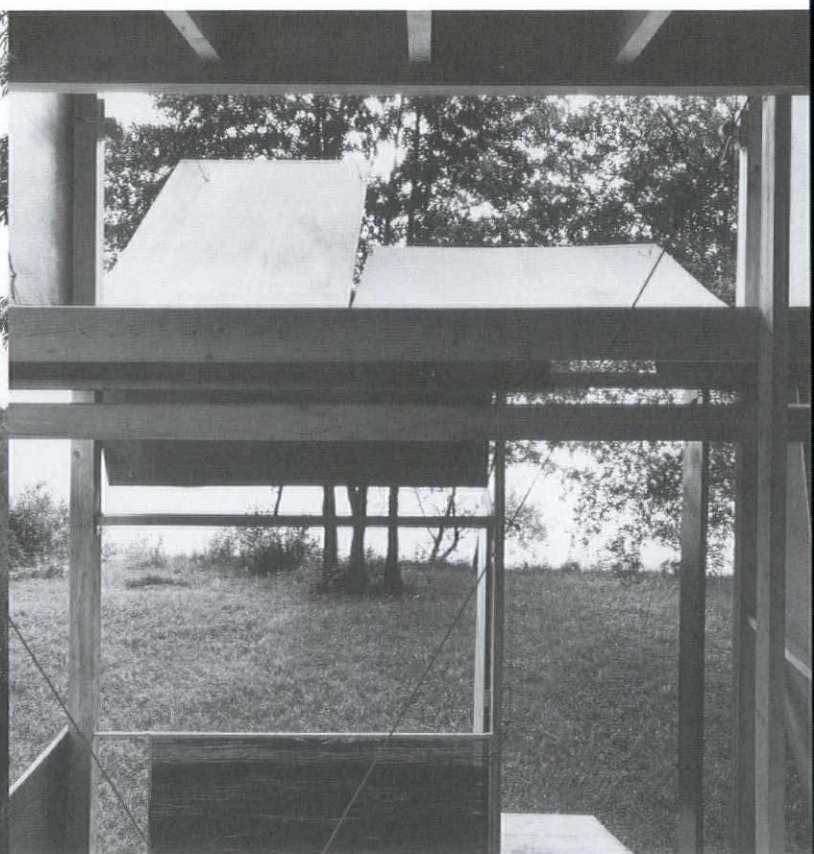




1階平面図



2階平面図



空間は不確定である：私はその限界を常に引き出して、その限界を定めなければならない；それは決して私に属さず、また決してたやすいものではない。私はそれを克服しなければならない——Georges Perec

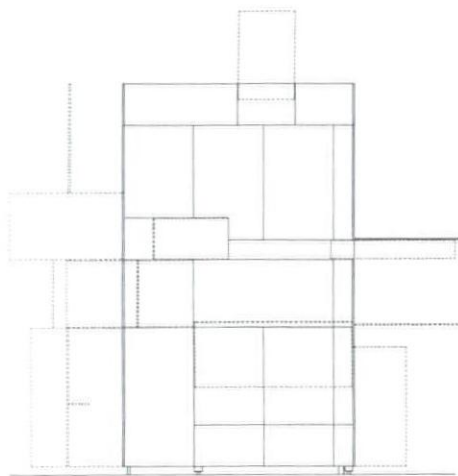
未知のものに対して我々が最初にすることが名前をつけることであるならば、この囲われたオブザベーションスペースをもつ箱に付けられた奇妙な名前の起源を説明しなくてはならない。その名前〈GucklHupf〉は敷地の近くにある丘の名前からこじつけたものか（Guglhupf）、または日曜日に焼かれるオーストリアの代表的なケーキの名前か（Gucklhupf）、いずれにしてもその語源は、guckenとhüpfenという、「見る行動・意識的に視点を探して見ること」そして「飛び上がった、飛び降りたりしてより良いポジションを探す試み」というふたつの動詞からきている。

1993年にオーストリア北部のさまざまな文化、芸術、建築などの主張の場と

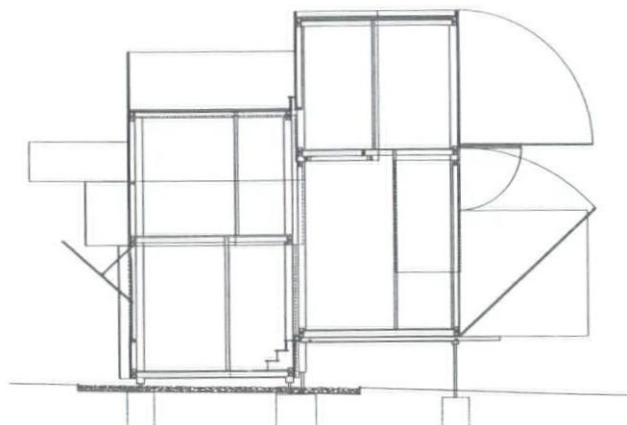
して開催されたフェスティバルにおいて、〈GucklHupf〉はそのフレームワークのひとつとして出現した。夏の間、「Strangeness（未知なること）」ということ全体をテーマとして、さまざまな展覧会、ワークショップ、催し物、演奏会などが行われた。このコンセプトに基づきWörndlは、Mondsee湖のほとりの彼のいとこが所有する土地を使い、このフェスティバルの中心構想として隠喩的オブジェをつくることを決めたのである。生来の対極——「未知のものと慣れ親しんだもの」「静と動」「居住と旅」「家の避難の安全性と家の距離」などが空間の中につくられたオブジェという手段によって表現されている。

そのパビリオンは、Wörndl自身とふたりのコラボレーターにより建てられた。プランは常に変更され、ディテールも制作課程により変更されていった。目的は最終的狀態に向かうのではなく、完成後も常に変化していく状態であるということであった。

地方行政当局は、Wörndlに彫刻的エレメントと展示スペースとして仮の認可



立面図



断面図



をし、フェスティバル終了後もその場に残すことを保証したが、地域住民の圧力によりその決定が撤回されてしまった。〈GucklHupf〉は建築物として再分類されることで、現行法規上違法建築となってしまったため、維持をするのが不可能になってしまったのである。専門家による論議・討論が続いたが、最終的にはこの件に関して結局認可をしないという行政の判断に終結した。

近隣自治体はこのオブジェに別の敷地を提供した。作者は〈GucklHupf〉がヘリコプターで運搬される事を望んだが、結局解体することになった。時間とお金の事を考えると、彼はこれ以上論争を続ける気にはなれなかった。彼の同意により、〈GucklHupf〉は材料の供給と輸送をした建築者の手を離れ、建設業者のトラック運転手の手に委ねることとなった。今現在〈GucklHupf〉は、再び組み立てられダイアログを始められる別の風景を、解体されたまま待っている。

(Arno Ritter)

データ

作品名: GucklHupf

設計者名: Hans Peter Wörndl

共同設計者: Claudia Dias, Christian Eppensteiner, Michael Karassowitsch, Antje Lehn, Richard Mlynek, Elisabeth Semmler

所在地: Beim Guglhupfberg, Mondsee, Austria

竣工年: 1992年

主用途: 風呂小屋

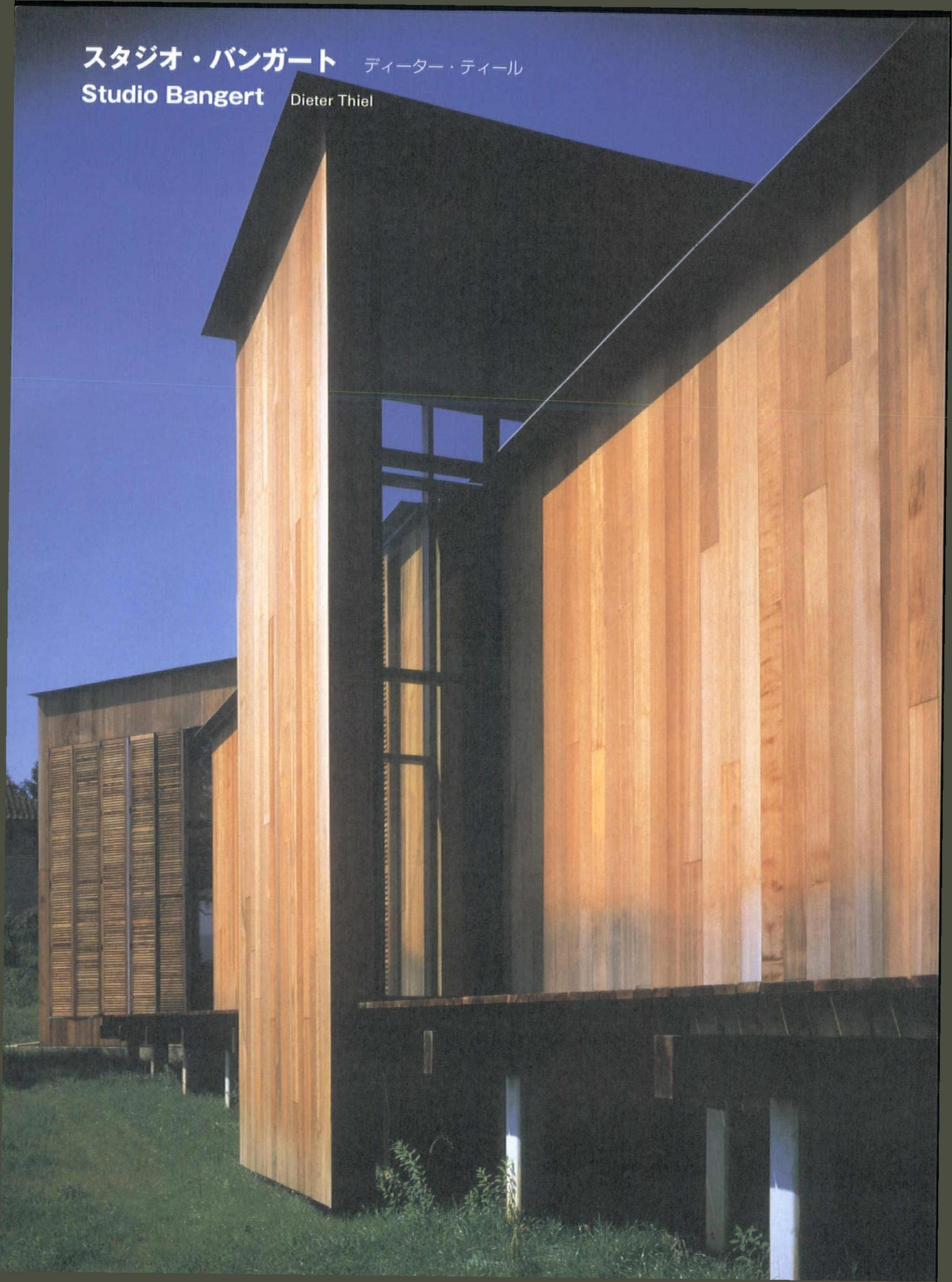
構造: 木造

階数: 地上2階

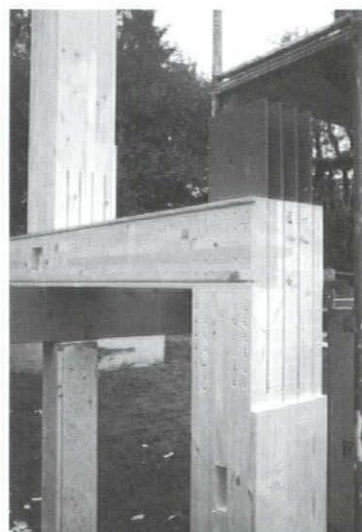
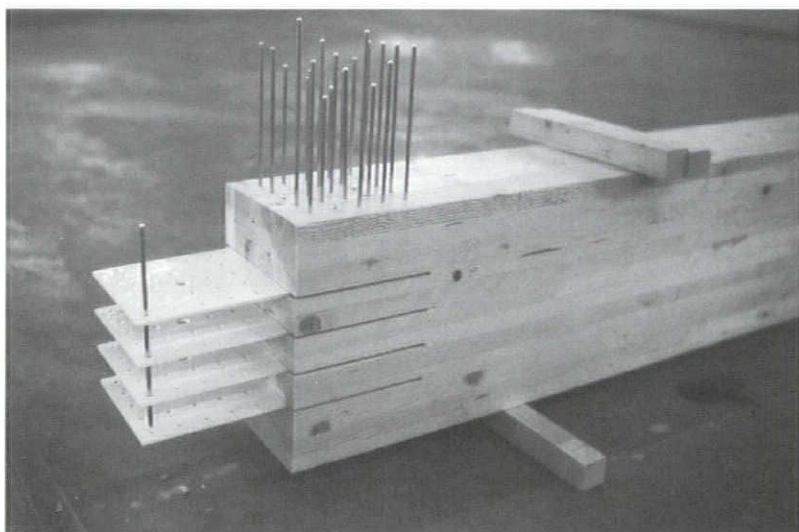
敷地面積: 1500m²

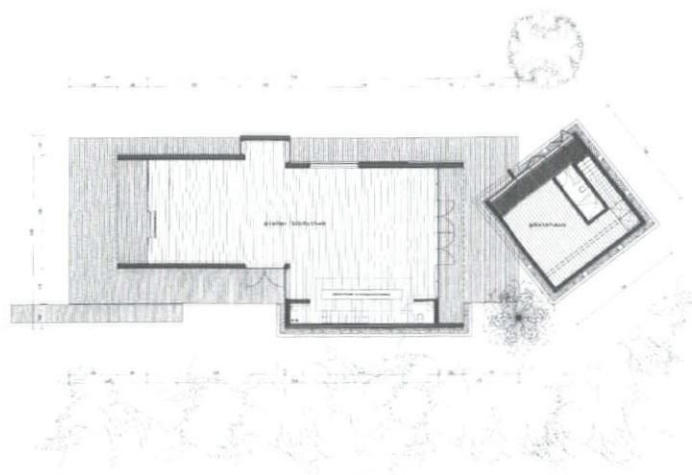
延床面積: 48m²

スタジオ・バンガート ディーター・ティール
Studio Bangert Dieter Thiel

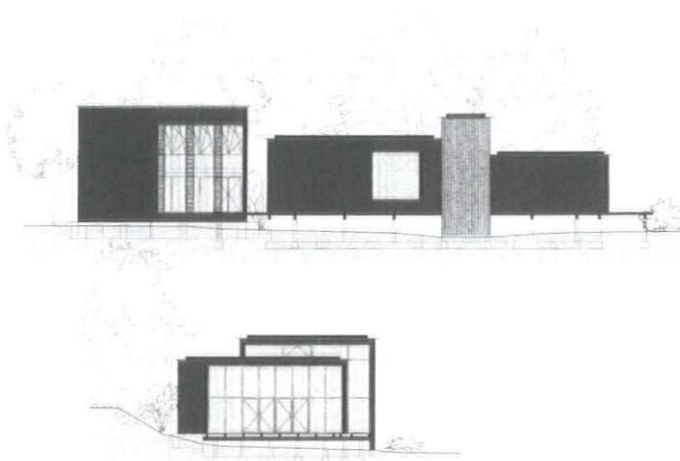




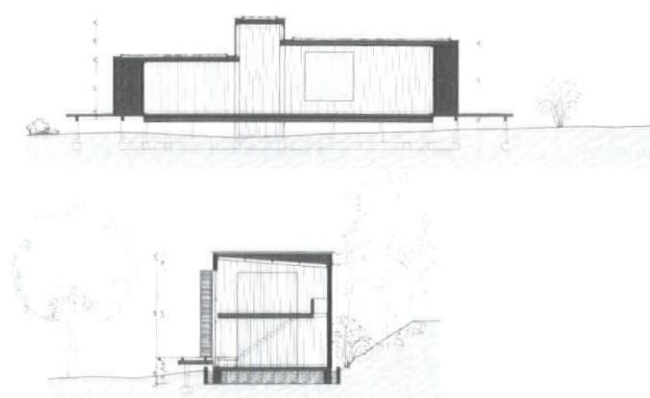




平面図



立面図



断面図

この建物は、同じ敷地に1950年代に建てられた建物とは完全な別棟として建設され、細い幹の古い木々を考慮して適切に配置されている。

それらふたつの建物は明瞭なキューブでつくられ、環境的にも構造的にも未来に目をむけたデザインとしての輝かしい一例となっている。一方「さまざまな照明、採光条件、卓越した室内環境、完璧な音響をもつわかりやすい木造の建築を」という施主の要望に対しても、十分に配慮し、適切に処理している。

このふたつの建物の母屋（スタジオと書斎）のほうは、3つの寸法の違う「木の箱」によって構成され、まったく間仕切りが存在しない開かれた17.6mの空間が、すばらしい視覚的緊張感を与えている。母屋に対して少し距離を置いて斜めに配置された離れは、7.2m×7.2mの2階建てのゲストハウスである。この家と一般木造の家の大きな違いは、その妥協なく実現された外壁にある。これには勿論、注意深い計画と全体にわたる高度な職人の技術力が要求された（特に耐力壁の詳細の考え方について）。そのような建物の個々の「構成要素」が、視覚的に特大の家具のようになる。それに加え、広いスパンにもかかわらず耐力間仕切壁がないこと、ガラス張りの両妻壁面、個々のキューブの屋根・壁・床を相互に結び付けるための非常に強固で静的なフレームなどが特徴として挙げられる。諸機能をもつフレームの厚さはすべて30cmで、壁や天井には配管、配線が入っていない。外壁は同じ種類の天然木から加工され、保護するための化学物質はまったく使われていない。それは保護材の塗られていないレットウッドを、通気性のあるカーテンウォールとして使用するというように帰着する。また屋根を大きく突き出すことで、一層木材を保護できるようになっている。これは「どのような天候時にもドアや窓を開放しておきたい」という施主の要望にもつながるものだ。全体の構造デザインの原理は、「Lignatur」と呼ばれる木繊維の断熱材が入った箱状のエレメントで構成されている。この20×30cmの中空の梁は最長10mのスパンを渡し、ログハウスを構成する丸太のように厳密に相並んでいる。梁と梁の間は、ウールを編み上げた素材によりシールされ、熱貫流を均一化している。

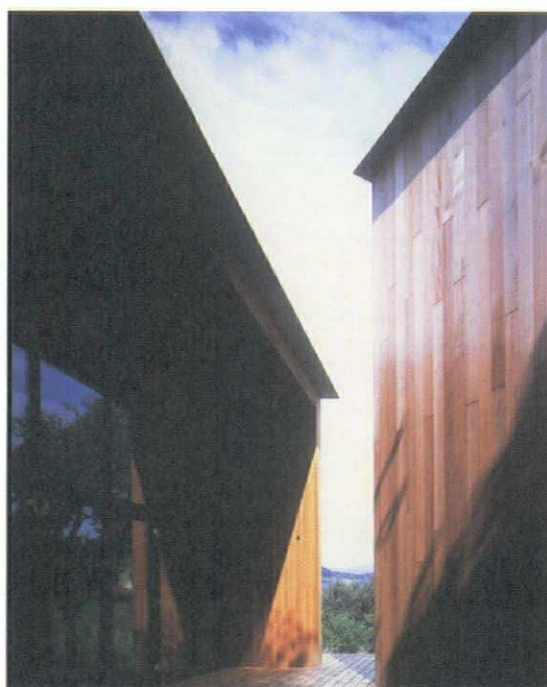
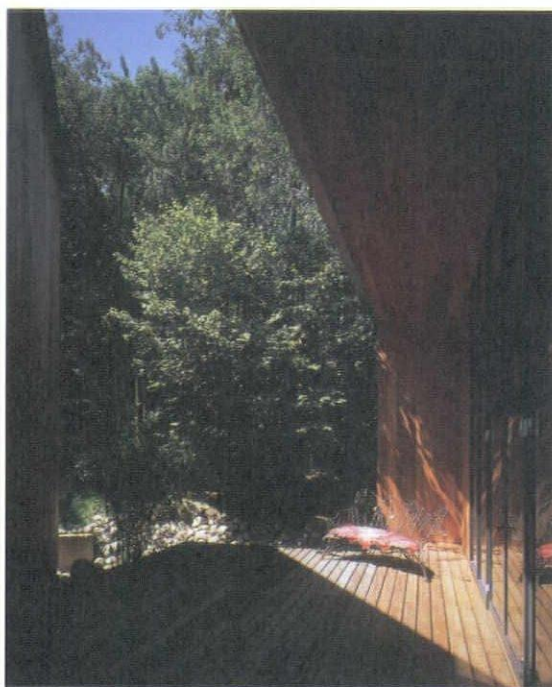
そのシステムは、施工技術を最高水準にして現場での施工を短期間にするという施主の要望により、なるべく大きなプレファブ部材を使用し組み立てている。

計画と施工を行ったすべての人が妥協を許さず遂行することで、この真に高い審美性を持った木造建築を作り上げるという偉業を成し遂げたのである。

(Dieter Thiel)

データ

作品名: Studio Bangert
 設計者名: Dieter Thiel
 所在地: Blumer AG St. Gallen, Switzerland
 竣工年: 1996年
 主用途: スタジオ兼ゲストハウス
 構造: 木造
 階数: 地上2階
 敷地面積: 5000m²
 延床面積: 280m²

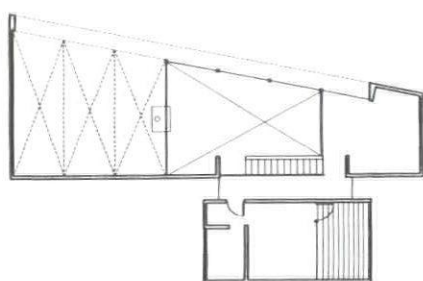
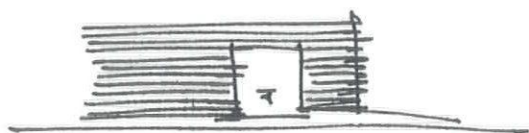


ウガルテの家 マチアス クロズ

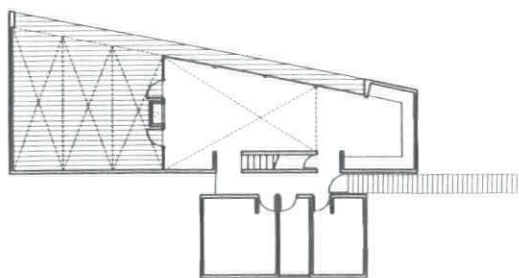
Ugarte House Mathias Klotz



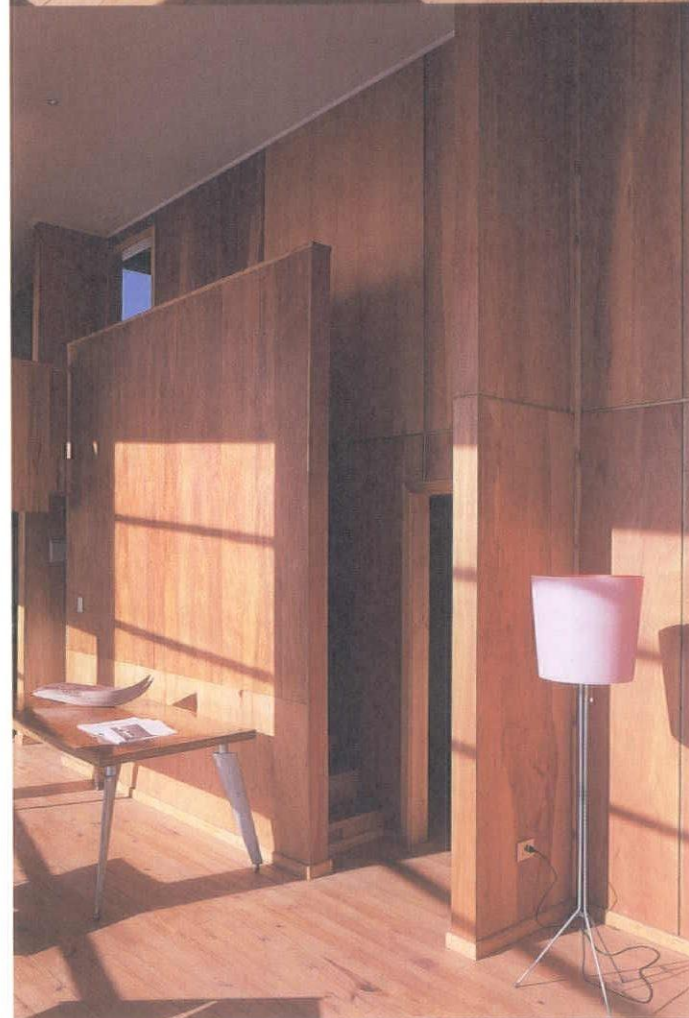


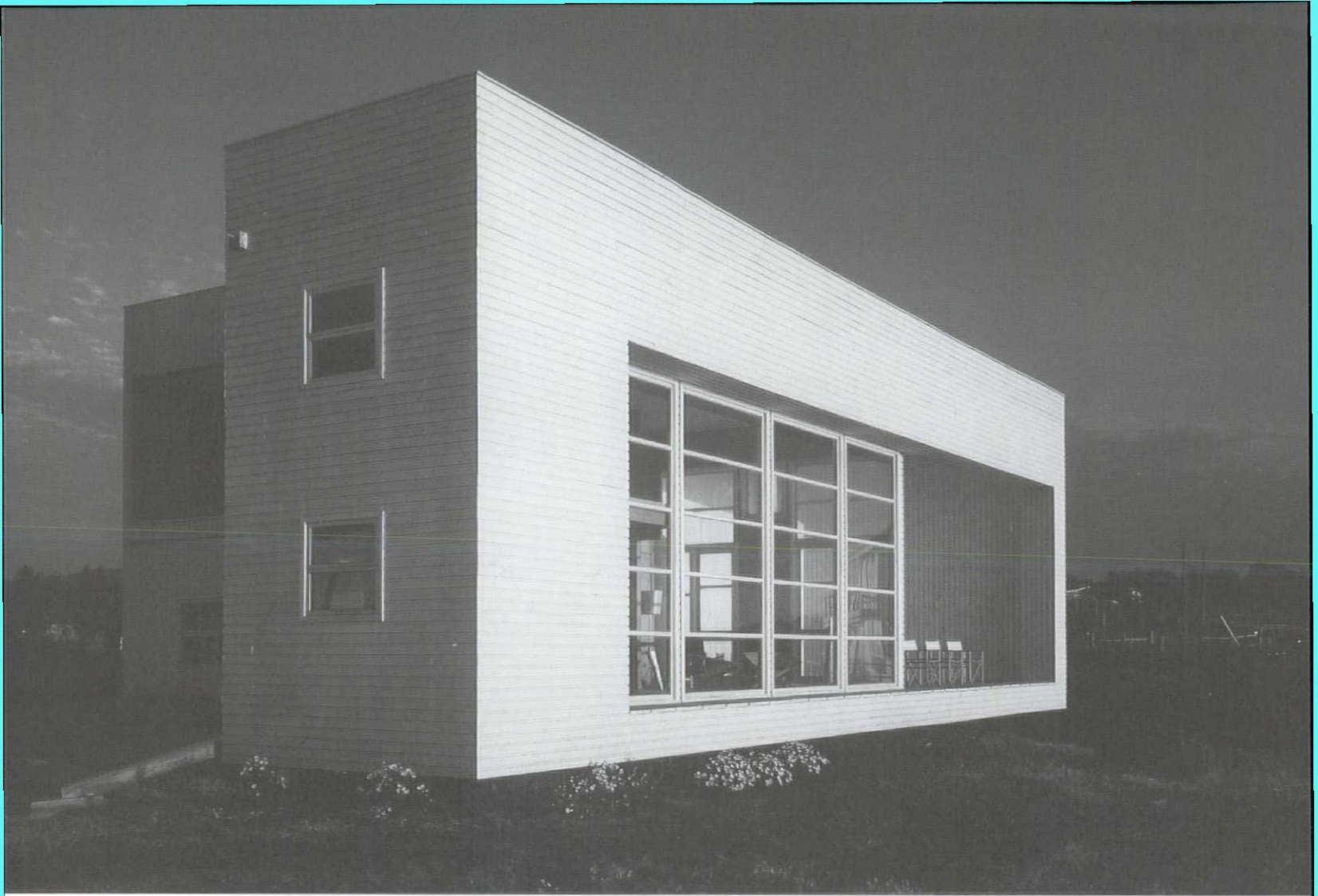


2階平面図



1階平面図 S=1:300





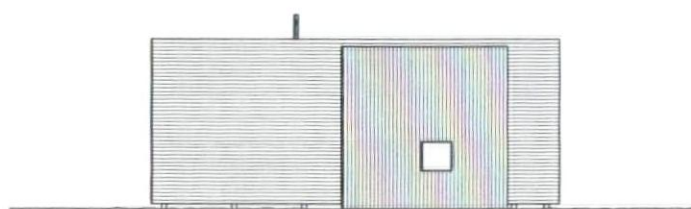
〈Ugarte House〉は、サンティアゴから北に140kmほど行ったSurciff(絶壁)の上に建つ小さな週末住宅である。

この家は玄関を介してインテリアに通じる通路によって、ふたつの木造のボリュームに分けられている。ベッドルームとバスルームが小さな部分に、パブリックエリア、キッチン、ダイニングルームそしてリビングルームが1階、書斎が2階の大きいボリュームの部分に配置されているのである。

半屋内空間的なテラスは、ふたつのボリュームの狭間に位置することにより強い南風から守られている。大きなボリュームの部分の南端部にテラスの吹き抜け空間を設け、それに隣接させてリビングルームを配置することにより、内部空間を広く見せている。

〈Ugarte House〉はすべて木造で、外壁は羽目板張り、内装は木パネルを使用している。

お互いのボリュームを強調するために、小さなボリュームは縦張りにし、大きなボリュームは横張りにしている。(Mathias Klotz)



東立面図 S=1:300

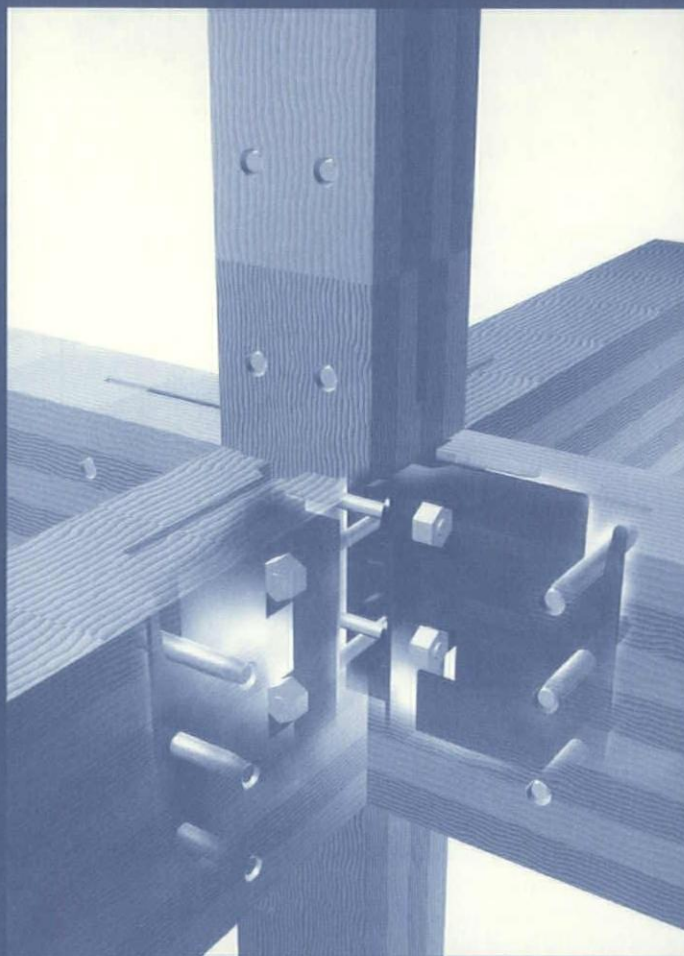


西立面図

データ
 作品名: Ugarte House
 設計者名: Mathias Klotz
 所在地: Maitencillo Sur, Chile
 竣工年: 1995年
 主用途: 週末住宅
 構造: 木造
 階数: 地上2階
 敷地面積: 1000m²
 延床面積: 110m²

SELL HOUSE

SE工法による次世代木造住宅の可能性と
7人の建築家による木骨住宅展



日本の伝統建築が持つ美しい木架構のイメージを生かしつつ、鉄骨造並みの精度と信頼性を確保する——そんな明確なビジョンをもって颯爽と現れた新たな構造フォーマット、それがSE工法だ。わが国の伝統的工法である在来工法に、海外からやってきた2×4工法がそれを追従する形で加わり、さらにもうひとつの選択肢としてSE工法が参入してきたことになるわけである。「木骨」という表現は「鉄骨」に対する敬意であり、また精度や強度という点でも同じ土俵上にあることを意味している。

SE工法が画期的な理由は数多く存在する。集成材を構造部材として使用するので材が均質で強度面にも優れていること、接合部にSE金物とドリフトピンを使用して半剛接合の強度を確保するのでブレースや耐震壁がほとんど不要、つまり間口全面開口という具合に思い切った大開口が採れ、かつ平面計画が容易になること、施工が簡単で熟練工を必要とせず短工期・ローコストで済むこと、また構造計算・材のプレカット・施工という一連の流れがひとつのアプリケーション上で確立されていること、さらに準防火地域においても柱・梁を燃え代分ふかすことで、構造体あらわしの木架構表現できること等々、その利点を挙げると枚挙に暇がない。しかしこの斬新な木構造システムはまだ動き始めたばかりである。はたしてそれは木造建築の次世代標準になりうるのだろうか。その可能性は十分に秘めている。しかしそれを本当にネクスト・エイジのスタンダードたらしめるのは、SE工法の魅力に建築家がいち早く気が付き、それを生かすデザインが出来るかどうか、そしてエンドユーザーがそうしたデザインマインド、つまりSE工法がもたらす木の空間を他の工法と差別化して受け入れるだけの感覚を日常的に持ち合わせているかどうかという点にかかっている。少なくとも豊かな木の文化を培ってきた国民としては、SE工法が生み出すその力強くも繊細で、そして美しい建築を歓迎すべきであろう。来るべき21世紀への希望として、そして日本の伝統建築への敬意として……。

ここではSE工法の生みの親である構造家・播磨氏に、SE工法の理念や特徴をわかりやすく解説して頂くと共に、東京・代官山のヒルサイドギャラリーで行われた7人の建築家による木骨住宅展を紹介する。彼らが提案する次世代の住宅が、やがてニッポンの住宅街の家並みを変えてゆく日も、そう遠くないかもしれない。



図1 清水寺：日本の伝統工法が持つ木の力強さが表れている

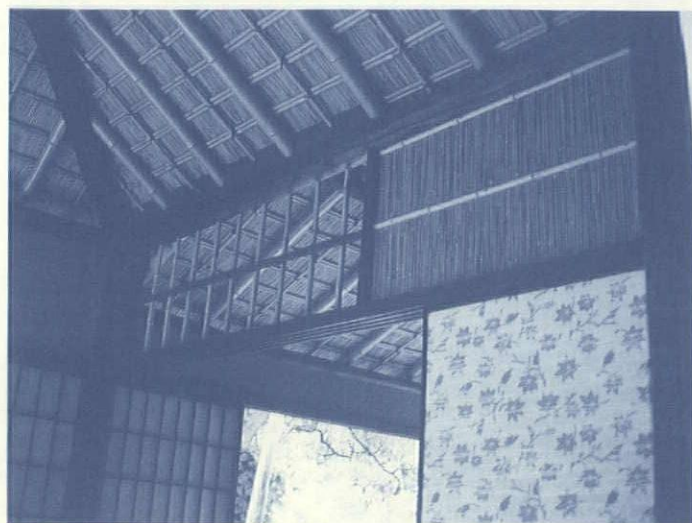


図2 桂離宮 月波楼 天井・垂木・檼の取り合い

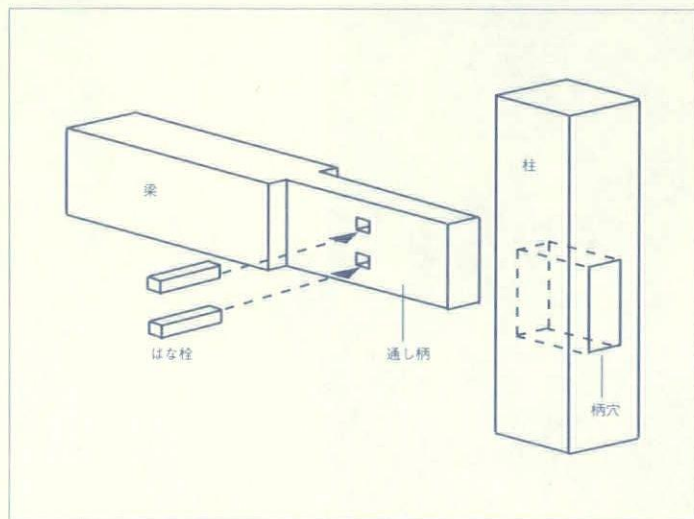


図3 通り柱とはな栓による仕口。SE工法発想のヒントになった

木造から木質構造、そしてSE工法へ 播 繁

プロローグ

数寄屋は日本建築の代表であり、日本文化そのもののよう受け止められている。華奢な造りや伝統的な仕口、継ぎ手、小舞壁、欄間、障子、襖間、そしてぬれ縁といったしつらえが、いかにも瀟洒な風情である（図2）。だから、日本建築といえば数寄屋となるが、細い柱に四方から差鴨居を納める芸術的な継手で柱はほとんど無くなってしまうので、耐震性はまことによくない。一方、神社仏閣そして大型の農家は太い柱を用い、貫や通り柄で構成されたいかにも豪放な造りである（図1）。農家では大黒柱と大きな差鴨居と貫による架構がある程度の耐震性を保っている。

在来工法は、そのどちらにも属していない。というのは、わが国の木造建築には筋かいという斜め材はなく、江戸時代までの耐震手段は柱の間に沢山の貫を通すことであった。在来工法との決定的な違いはそこにある。在来工法は西洋風に金物が使われ、筋かいも金物で止められているが、何故か断面欠損の大きい継手や仕口だけが残し、西洋風でも和風でもない曖昧な軸組構造のまま発展し、現在に至っている。

本格的に筋かいが用いられるようになったのは、関東大地震（1923年）以降である。そして1948年、

福井地震の後、1950年に設定された建築基準法で、筋かいの具体的な量が定められた。いわゆる「壁量の計算」で、 m^2 当りの筋かいの量を規定したものである。俗に簡便法と呼ばれ、別に構造の専門家でなくとも簡易に出来るのが、「簡便法」と言われるゆえんである。確かに、この規定によって戦後の木造住宅の耐震性は向上し、在来工法（筋かい工法）は普及していった。

それなのになぜ、阪神大震災で戦後に建てられた木造家屋にそれだけの被害が出てしまったのか。建物の老朽化は別にして、「壁量計算」で確保されたはずの耐震要素が効力を発揮していないところに問題がありそうだ。大地震の度に言われていることだが、筋かいの配置や軸組との接合状態、土台と基礎の締結など肝心な内容がどうなっているのか、またそれがきちんと施工されているのかも定かでない。木造住宅については、誰でもできる「簡便法」ゆえに、ほとんどの場合構造設計者は不在である。建て主は工務店や大工さんを専門家と思っているが、実はそうではなくて、間取（南面の大きな開口）やコスト（細い柱と梁）を優先するあまり、耐震のことなどはなおざりにされてしまうことが多い。地震は保険による補填のきかない災害なので、どうしても自分自身で生命や財産を守るほかに手だてがないのだが……。特にこういった点が顕著なのが建売り

住宅で、購入する側にとってはすべてがブラックボックスだと言っても過言ではなからう。阪神大震災での教訓を糧に、私たち構造設計者は今後建てられる木造住宅の耐震性能どうあるべきかを、人命保護だけでなく、資産保護の観点からも考え直さなければならぬと思う。それが構造設計者の社会的な責務であろう。

少なくとも、阪神大震災のような烈震に遭遇しても「補修すれば使用に耐える耐震性を確保する」のが適切なクライテリアだと思う。

木造から木質構造へ

2×4工法に代表される木質壁構造は、筋かいを耐震要素とする在来工法とはまったく異なるシステムである。今度の大震災で優れた耐震性を発揮したのは、こういった構造用合板を耐力要素とした木質壁構造である。在来工法が線の構成であるのに対して、このシステムは床を含めて面的な構成であり、地震力は面全体に分散するので、法的な耐力係数では表わせない耐震性を有している。

一方木材そのものも、集成材やLVLといった強度と剛性が保証されたエンジニアリングウッドに移行している。

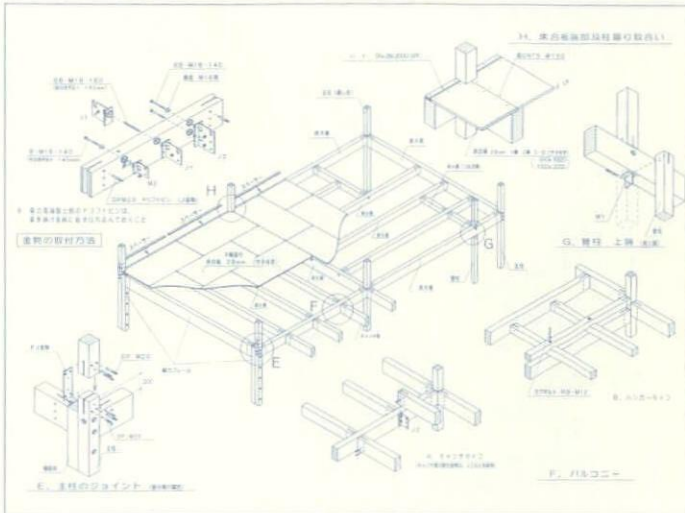


図4 SE工法 2～3階の施工

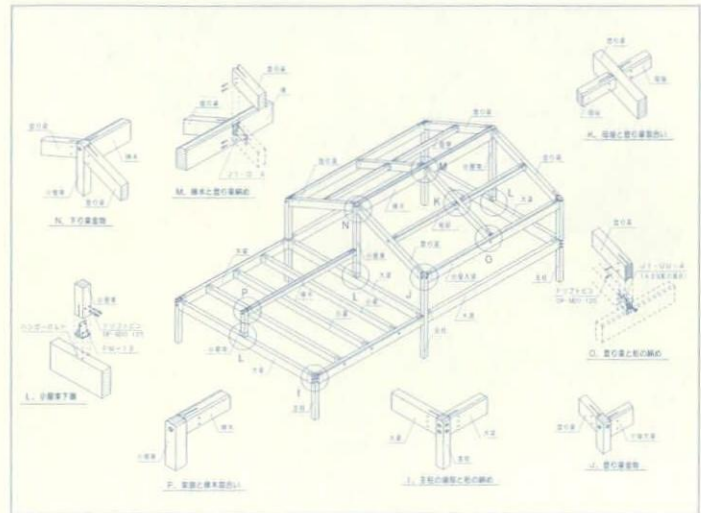


図6 SE工法 小屋・母屋の施工

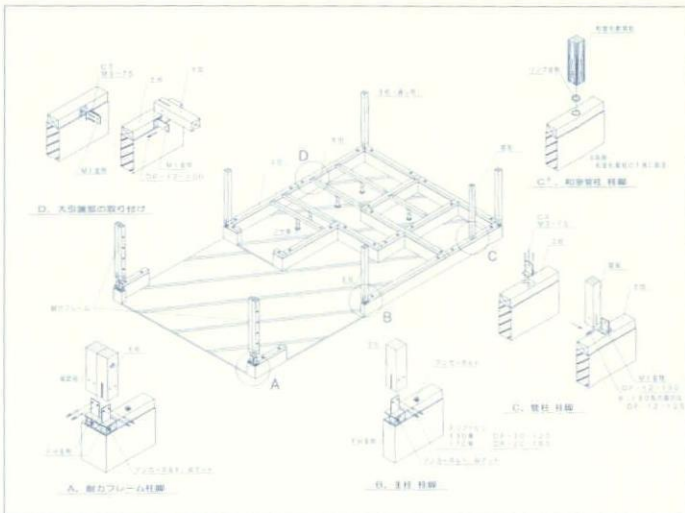


図5 SE工法 基礎まわりの施工

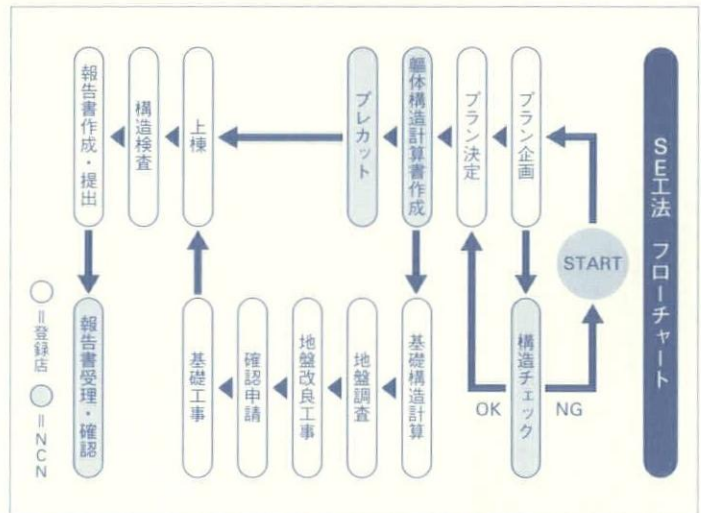


図7 SE工法フローチャート。すべての工程がコンピュータ上で統合されている

これから施行される建築基準法改正の内容を一言でいえば「性能規定化」である。木造でも、性能を明確化した「性能設計」を取り入れた新しい木造が望まれている。

しかし、いかに耐震性に優れているからといって、日本の住宅街が欧米風住宅やプレハブ住宅の展示場になってしまったら寂しい限りだ。日本人は木を見ないと何となく落ち着かない。柱、梁、鴨居、障子といった昔から愛着のある「木」という素材の中で生活したい人が多いことは確かであろう。

「壁量計算」による在来工法では、南面を大きく開けた開放的な「住まい」も望み薄である。「何とか木の良さを生かした開放的で、耐震的な空間ができないか」と考えたのがSE工法（Safety Engineering System）の開発の契機となった。

SE工法の特徴

SE工法とは、接合部にある程度の剛性をもつ軸組（準ラーメン構造と呼んでいる）と構造用合板による高性能耐力壁、そして構造用合板による床組を組み合わせたシステムである。そして軸部材には品質保証された集成材を用いて、軸組と耐力壁、床組はそれぞれの性能を評価し、構造計算体系にのせた総

合システムである。

SE工法の集成材の軸組は、在来工法のような頼りなさはまったく無く、どちらかと言えば、太い通し柱と大きな断面の梁をもった強い構造体をあらわにした日本の古い民家や社寺建築の系譜にあって（図1）、SE工法はその現代版とも言えよう。私たちはそれを「木骨構造」と呼んでいる。

SE工法の最大の特徴は、半剛接の柱梁接合部と柱脚部にある。柱脚は鉄筋コンクリートの基礎に直接柱脚全物を設置して、地震時の強い引抜き力に対応している。

もうひとつの特徴である柱梁接合のヒントはやはり日本の古い民家や社寺建築に見られる通しホゾとハナ栓（図3）である。この接合部は十分な剛性ではないが、楔状のハナ栓を打ち込むことで梁が柱に密着してある程度の剛性と耐力が得られる。

SE工法は接合金物と柱を貫通するボルトがセットとなっており、ボルトを十分に締めることにより、金物は柱に密着する。ハナ栓に当るのが、梁に正確にあけた孔とドリフトピンである。ドリフトピンは先端が少し削っており、それを打ち込むことで楔効果が生じ、梁は柱に密着する。これで半剛接の接合部ができ、一分の隙間もないきれいな収まりが可能となる。数寄屋の差し鴨居もこの原理を用いて寸分の隙間もない美しい仕口をつくっているが、柱の断

面欠損が多く耐震上の弱点となる。SE工法の接合は柱の断面欠損が極端に少ないのもその特徴である。

こうしたディテールが可能となった背景には、狂いの少ない品質保証された集成材の供給とコンピューター制御のプレカットの精度が近年大いに向上したことが挙げられる。

「SE工法」は、構造計算を含む全体のシステムとして1997年に建築基準法38条に基づく一般認定（大臣認定）を取得した。

「SE工法」は現在、(株)エヌ・シー・エヌ（日商岩井と集成材メーカーのセブン工業の合併会社）を通して構造体そのものを販売ルートにのせるという方法を取っている。しかし、大臣認定という都合上、施工に関する指導が必要なので、工法使用に関して施工店登録が必要である。そして、建築設計者がこの工法を使いたいときには、(株)エヌ・シー・エヌが構造計算から構造体の供給までを行ってくれるシステム（図7）となっている。

SELL HOUSE展への展開

SE工法はこうした販売ルートを通じてある程度軌道にのった。そのことで耐震性能が保証された住宅が少しでも増えれば、ちょっとだけ社会的な貢献がで

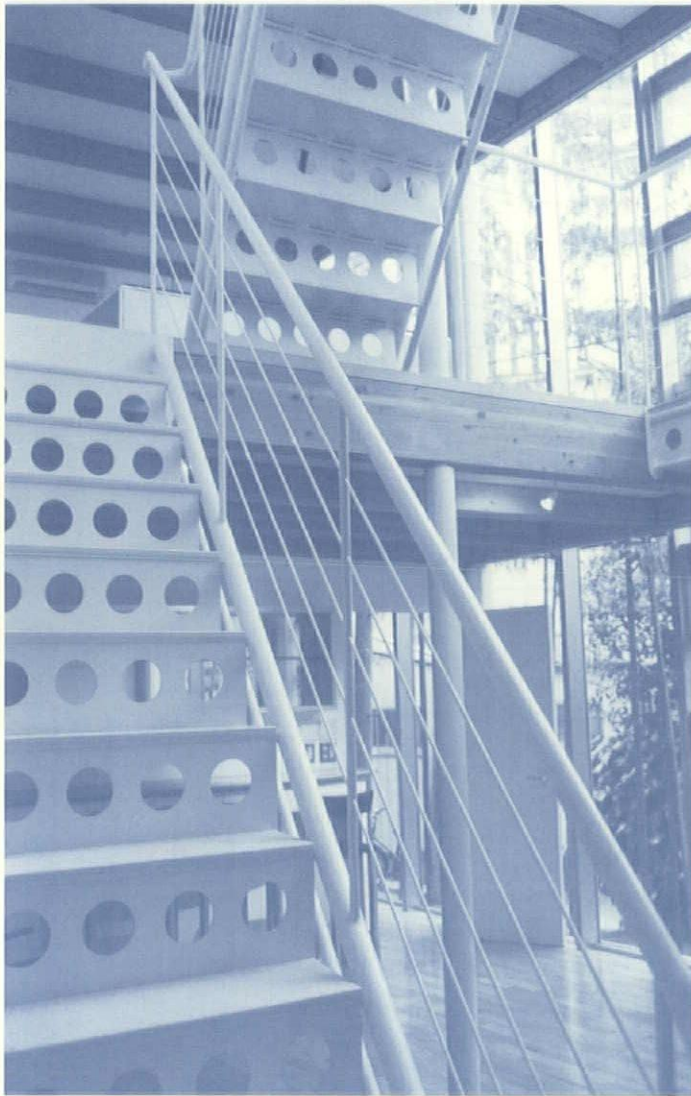


図8 〈木とカーテンウォールの家〉設計：押野見邦英十仙波武士

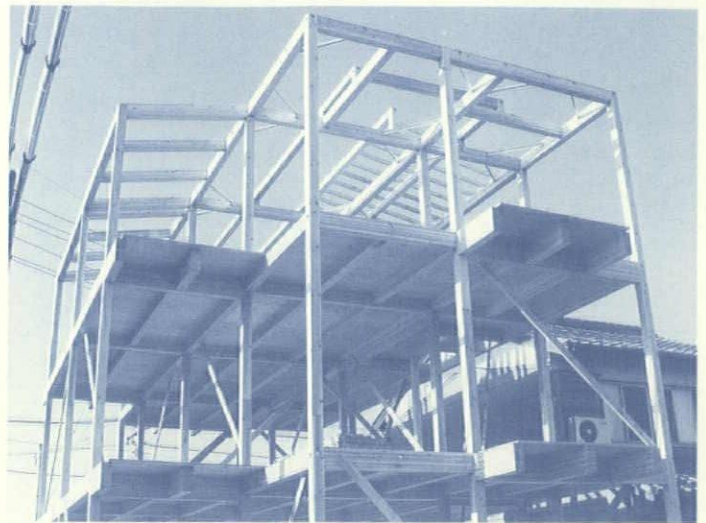


図9 木骨住宅施工中の写真。次世代の標準工法になるのだろうか。



図10 東京・代官山ヒルサイドフォーラムで行われたSELL HOUSE会場風景

きたと……。

だが、工務店の手でつくられた住宅は今ひとつ建築としての魅力がない。その状況を変えたい。それにはこの工法を十分に理解してくれる建築家が必要だ。この工法の原点となった〈木とカーテンウォールの家〉(図8)でコラボレートした押野見邦英氏も同意見であった。そして在来木造が2×4に代表されるプレハブ住宅という従来の図式をブレイクスルーした「住まい」を提案して、「もうひとつの選択肢を」と考えた。

しかしこれから住宅をつくろうと考えている人たちにとって建築家はあまりにも遠い存在だ。だが、良質な住まいをリーズナブルなコストで社会に提供したいと考えている建築家たちも多いはずである。そこで、「木骨構造」を使った快適な「住まい」をテーマに展覧会を企画しようということになった。

幸い、この企画に賛同してくれた仲のよい7人の建築家と組んでSELL HOUSE展(図10)を開催することができた。

SELL HOUSEとは、木骨構造の開放的で、自由度の高い特徴を生かした快適な「住まい」のプロトタイプのことを指している。それにこれから住宅を建てる人たちに手の届く範囲のコスト(恐らく50~60万/坪程度)を目標に考えられた家で、SEは工法そのもの、SELLは売る(即ち商品化)、そして

LLは頑丈な骨組をもった昔の民家のように親子何代にも渡って住むこと、ロングライフ持続性を意味した造語である。

7人の建築家による木骨住宅展は、5日間という短期間ながら、延べ2000名を超える人たちが訪れた。

これまでの建築展とは違ったのは、建築設計界の人々の他に、これから家を建てようとしている個人やディベロッパー、そして工務店の人たちが多数見てくれたことだと思う。代官山という場所としたことも幸いして、街に遊びに訪れた人がものめずらしさもあって訪れてくれたのも収穫であった。ともあれ、この住宅展が住宅展示場とは違う思想の住まいを展示していたことを理解してくれば、それだけでも展覧会を催した意義があったように思う。

エピソード

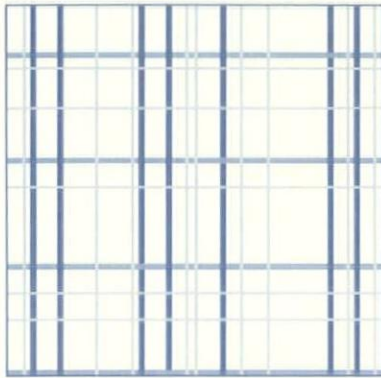
お祭りのあとはいつも何か忙しさが残る。7人の建築家、それにそれを支えてくれたスタッフの人たちに感謝しながら、これからどのようにこの運動を続けていくのか。戸惑いながら新しい年を向えようとしている。幸いにして良い話が7人の建築家のひとりである古谷誠章氏からもたらされた。四国の徳島で、この展覧会を開催することだった。

この展覧会は新しい年の3月初旬に実現する。地方にもこの運動を手助けしてくれる人がいる。何と心強いことであろう。ぜひ、阪神大震災で大きな被害をこうむった神戸でも開催したいというのが、皆の願いである。●ばん・しげる／構道家

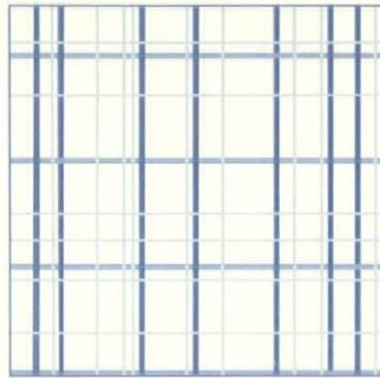
押野見邦英 ニューヨーク・シティ・ハウス

SE工法を使った拙作の「木とカーテンウォールの家」の建て方が現場で始まったとき、格子状に組上げられていく集成材の柱と梁を見ながら、次は絶対モンドリアンの十字形をテーマにした家にする決めていた。今更なゼモンドリアンなのかと言え、1927年の有名なアウトとの論争のなかで、建築を「対立的な直線の構成」によって新しい美を表現する芸術であると主張し、さらに晩年ニューヨークに移り住んでから環境的なスケールまで彼のアートを拡大したいという要求をもっていたながら、建築スケールでトレースされたことがなかったことが、今回の実験につながった。建築のファサードが映像化する今日、そのアイコンとしてモンドリアンの作品群の重要性は増すばかりだ。

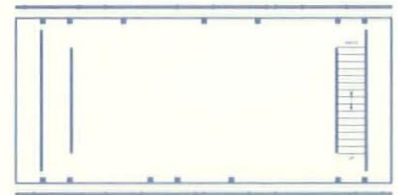
今回は画面の黒の分割線が消え、初めて奥行きの問題に立ち入り始めたニューヨーク・シティ（1941-42）を、住宅のファサードの2面に翻案した。SE工法による集成材の柱と梁が面一で取り合い、2面のみが彩色されることにより構造部材は抽象化し、さらに彩色されたサッシュと重ねられることにより、全体の構成的性格は高められよう。建築につきものの垂直と水平の格子的雰囲気を嫌い十字のモチーフを強調するために平面的な柱の位置が故意にずれて配置されているが、これもこの構法の利点を生かしたつもりである。1階にギャラリーをもつ併用住宅として考えたら、面白いのではないかと考えている。



FRONT ELEVATION



REAR ELEVATION

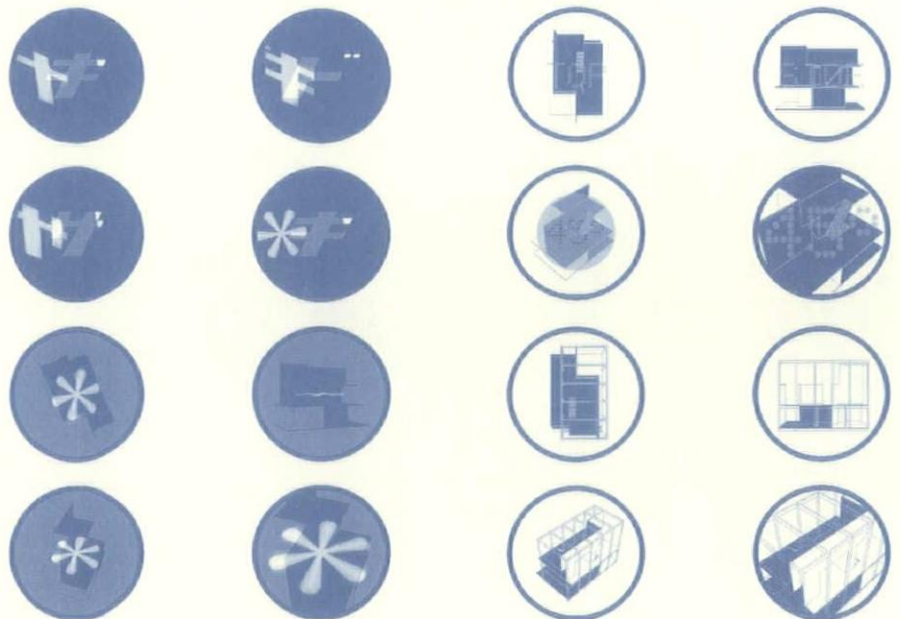


TYPICAL PLAN

城戸崎和佐 ②□①

- 1) これは、60代の姉妹（白）と40代の夫婦（黒）のための住宅である。
- 2) これは、40代の男性（白）と20代の男性（黒）のための住宅である。
- 3) これは、30代の男性（白）と30代の女性（黒）のための住宅である。
- 4) これは、ある生活単位（白）と別の生活単位（黒）のための住宅である。

我々がつくる住宅は、そのクライアント固有の問題と、住宅一般の問題にそれぞれどの程度応えているのだろうか。同じ住宅が10戸、あるいは100戸存在することは望まれないのだろうか。住宅商品化研究会の席上で私が興味を持ったのは、同じプランで10軒（または100軒）の住宅が建てられるかという話だった。私はこれを、10組（または100組）のクライアントに共通する生活空間への欲望を想定するのではなく、あるタイムスパンの中でそれぞれの必要に応じてスペースが拡大したり縮小したりすればよいと考える。そこでSE工法の大きな構造フレームで得られるヴォリュームを立体的に分割して、ふたつの生活単位（家族または個人）のためのひとつの住宅にしようと思った。1枚の凸凹に折れ曲がる境界面が、ふたつの居住空間を成立させる。フレームの中なるべく遠い場所を複雑に所有することで、互いに上下左右に隣り合う状況が生み出される。このふたつの住戸のスペースは交換可能であり、また互いの吹抜け部分への拡張も可能である。時間軸に沿って変化する生活に対応して拡張と縮小が可能なこのシステムは、集合住宅にも展開可能できると考えている。

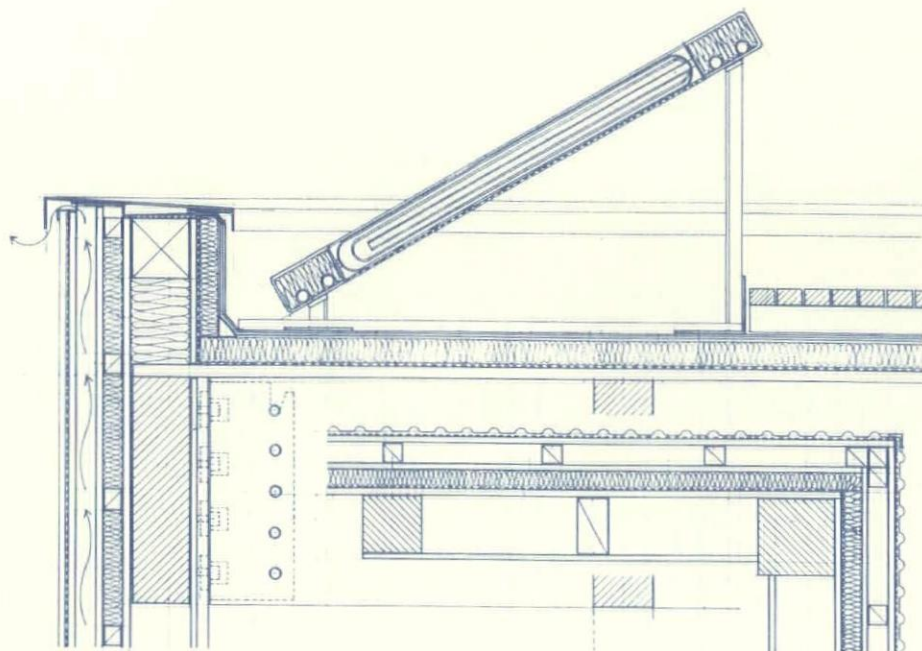


(黒) 1階: 46.8m² 2階: 30.5m² 3階: 23.7m² 計: 101.0m²
 (白) 1階: 32.4m² 2階: 28.9m² 計: 61.3m²
 CG: 吉村靖幸

内藤 廣 3階建ての木造シェルター

住宅を設計する場合、敷地に与えられた様々な法規的条件を明快にすることが最初の仕事となります。この条件により、建築可能な最大限のサイズの住宅を建てることを提案します。構造（軸組）に採用されるSE工法は建設大臣の認定により性能を保証されたシステムです。次に性能を期待されるのは、直接、自然環境に晒される外壁・屋根・開口部等の外部廻りです。外部材に高耐久性材料を用い、住宅を強固なシェルターとすることを提案します。

刻々と変化する生活環境を考えた時、LDKで固定された平面に疑問を持ちます。この住宅は、室内の壁面を極力減らし将来的に使い易いように造り込んでゆけるシステムとします。設備システムは、竣工時に最新式でも、僅か1～2年ですぐに旧型になってしまいます。また、建築本体の耐用年数に比べ、設備のそれは著しく短期であるのも事実です。竣工時には必要最低限の設備のみで、交換やメンテナンスが行い易い方が、使い勝手が良いと考えます。設備については、天然エネルギーの利用を提案したいと思います。パッシブソーラーシステムによる温水等の利用や、室内・室外の空気を自然対流させることによる、換気・断熱等の機能を建築の中に組み込んでゆくサステナブルなシステムを考えています。



難波和彦 箱の家 集成材造シリーズ

SE工法を使うと、木造でありながら3階建ての開放的な空間をつくることができる。この特性を生かして、高密度の都心や郊外住宅地に建つ3階建て住宅のプロトタイプを提案する。基本的な考え方は、これまで展開してきた「箱の家シリーズ」と同じ一室空間的な住居である。敷地の広さは30坪以下を想定し、密集地においても、プライバシーを守りながら、自然に触れることのできる住居を目標とした。

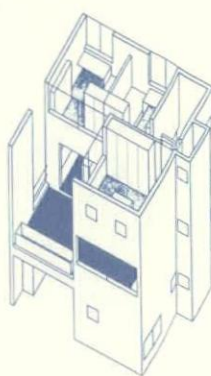
そのための解決法は、以下の3点にまとめられる。

- 1) 1階に駐車場と水まわりを置き、2、3階を主な生活空間とする。
- 2) 2階に2層吹抜の屋外室をつくり、共用空間と一体化させる。
- 3) この屋外室によって、住居を内外に開放し、日射や通風を制御する。

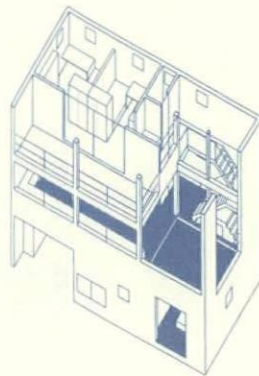
プロトタイプは3種類用意している。これを展開させることによって様々な家族構成、敷地条件、予算に対応することができる。構造、内外装、開口、設備、電気の様子は、箱の家シリーズと同様すべて標準化し、徹底したローコストをめざしている。

ル・コルビュジェのエスプリヌーボー館とイムール・ピラにヒントを得たプロトタイプであり、集合化・立体化も想定されている。

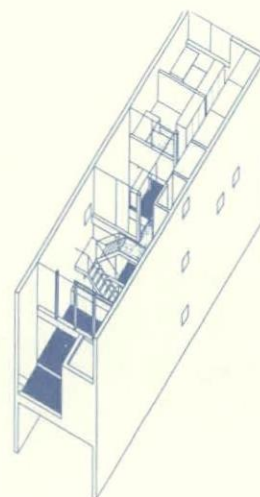
加古川プロジェクトは、実際に宅地開発された敷地に、このプロトタイプを適用した計画である。敷地条件から、タイプ1とタイプ2を展開させている。敷地の広さに余裕がある場合は、駐車場を外に出し、2世帯住宅としたタイプも試みている。



プロトタイプ1



プロトタイプ2



プロトタイプ3

平倉直子 ウチとソトのうち

日本の風土に生まれた民家・田の字型のプランを思い出し、そこでの大らかな空間のイメージを大切にしながら、現在の都市環境や人々の暮らし方に合わせて・住まい・を提案します。

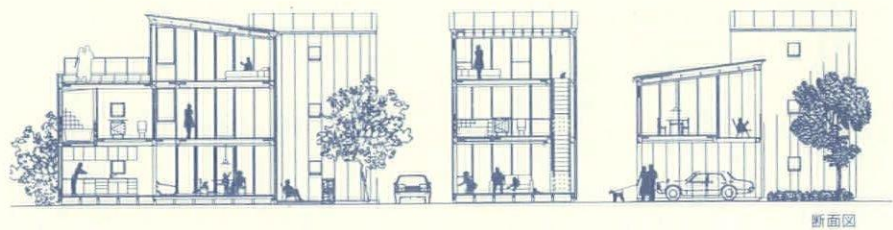
「九の間（このま）」——人が集うのによい広さ
「九の間」とは、3間×3間、18畳を一住戸の単位とします。一般的な木造の場合、この広さを無柱空間とすることはなかなか至難の業ですが、SE工法ではむしろ経済的です。

「九の間」を続けたり（案）、ずらしたり（案）、仕切ったり。又、2層を吹き抜けがせがらんとにししたり、後から1層加えたり、暮らし方に添って空間を変えることができるようにしておこうと思います。そんな空間を作りながら、3階建て、しかも外装材によっては準耐火を標準仕様として確立しているSE工法を使って、集合住宅を提案します。

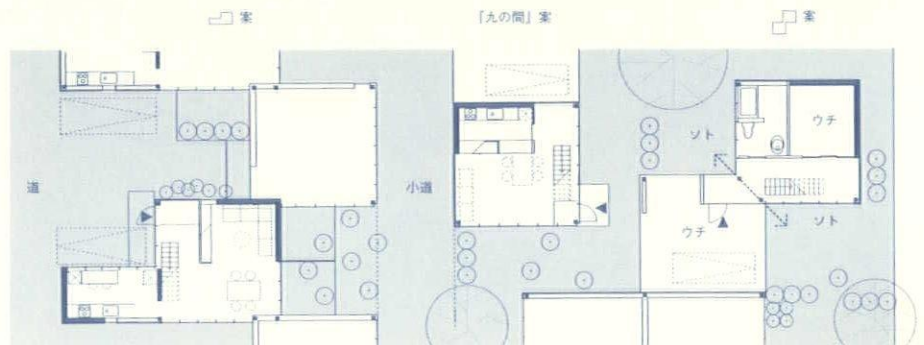
インテリア——建築——街並みへ

——豊かなウチはソトとの関係で作られる

「空間」とは「あいている間」つまり何かを包容する可能性を意味すると考えます。ソトの空間から得るものを意識して…お日様・そよ風・植栽・テラス・プール・車・いつかはエレベーター等等、増築のスペースにもなります。そうして敷地いっぱい視野に入れながら住みこなしたいものです。ソトが隣家との関係の中で生きてくるような一住戸の構成は、既存の街並みに風を通す、きっかけとなるかもしれません。



断面図



平面図 S=1:350



古谷誠章 プロセス・ハウジング／Process Housing

家を買うといえば、コソコソと頭金を貯めて、ある時にエイッと最大限のローンを組んで、一生に一度、すべて揃った家を作るのが一般的です。家の買い方の仕組みがなんとなく、そうなってしまっているのです。でも本当にそれが最良なのでしょうか。

自分で建てた家には子供が小さいときからこそ住みたいし、後は資金や必要に応じて少しずつ拡大すればいいのです。家の改築にはいろんな動機が考えられます。子供部屋がほしい、親と住みたい、家で仕事を始める、土地を相続する、道路が広がる、将来は気のあう友達と暮らしたい……。

100人の人がいれば、100通りの人生があります。人生のスタイルに合わせて、段々に姿を変えていく、そんな住宅が必要です。

古くからの良好な環境の住宅地が、世代が代わっていくうちに、いつしか細切れになって、街並みの品格が失われてしまう、これもとても残念なことです。大きくなったり小さくなったり、家そのものが変幻自在なら、何もすべて更地にして売りに出さなくてもいいかも知れません。

そんな十人十色のいろんな要求に応えられる「プロセス・ハウジング」を提案したいと思います。「木骨」住宅だからこそ、最初に家の外側の殻を大きく建てて後から中身をつくることも、土地の半分を使って残りを駐車場に貸しておくことも、あるいは屋根材の更新時に思い切って3階建てに増築することだってできるのではないかと考えました。

家を拡げたい



二世帯住宅にしたい



三世帯で住もう



子供文庫を開きたい



吹抜をつくらう



子供と同居する



バリアフリー化したい



友人と暮らそう



間取りをかえたい



喫茶店を開こう



兄弟で分ける



相続する



アパートをつくらう



道路が広がる



土地を半分売りたい



子供部屋をつくらう



親を呼びたい



妹夫婦と暮らす



仕事部屋をつくらう



陶芸教室を始めよう



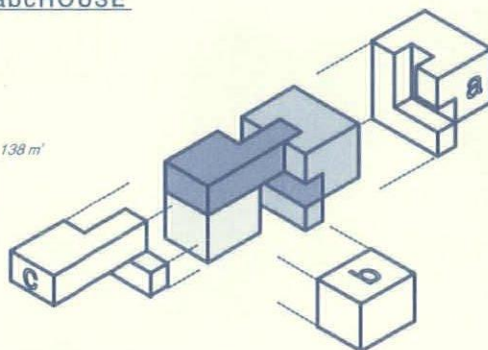
横河 健 abcHOUSE

東京、大阪などの都市部では、極小の土地に小さな戸建ての軒先が触れ合わんばかりに詰め込まれた「ミニ開発」と呼ばれるものが見られる。ただでさえ小さな土地をさらにいくつか分割し、一戸建ての小さな家を並べるヤツである。しかし、そんなにまでして固執する戸建ての住宅も、戸建てとしての良さであるはずの「独立性」や「庭の活用」など屋外とのふれあいなどが得られないとすれば、本末転倒と言わねばなるまい。

ここでは、それぞれに建ぺい率、容積率、斜線制限等の建築制限がかかる、戸建てのミニ開発より、複数の独立した住居を立体的に組み合わせることによって、吹抜を持つ住居や、屋外とのつながりを持つなど、それぞれが、戸建て感覚のあるのびやかな生活、つまり、都市生活者に適した新しいライフスタイルの住居が、適切な価格で生まれる「abc-HOUSE」の提案をしたい。

abcHOUSE

C HOUSE
メゾネット / 55 m²・138 m³
ONE Room
売値 約4,300万
(建築・約1,900万)



a HOUSE
地下1階 地上3階 / 120 m²・300 m³
3Priv.Rooms, Living, Dining, Kitchen
駐車場 2台
売値 約1億2,000万
(建築・約3,900万円)

b HOUSE
メゾネット / 50 m²・155 m³
Bed Room, Living, Dining, Kitchen, 吹抜
駐車場 1台
売値 約6,200万
(建築・約2,600万)



SELL HOUSE 展 展覧会風景



CGによる軸組イメージ

主催：住宅商品化研究会
企画：播磨
会期：1998年11月4日（水）～11月8日（日）
会場：ヒルサイドフォーラム 東京都渋谷区猿楽町18-8ヒルサイドテラスF棟
主催：住宅商品化研究会
協賛：エヌ・シー・エヌ、ABC商会、カスタムハウジング、三建、テスコ、東急不動産、日商岩井、ロイヤルハウス、YKKアーキテクチャルプロダクト、キゲタハイム
協力：IDÉE、インター・オフィス、セブン工業、田村、千代田看板、ヤマギワ、早稲田大学古谷研究室
会場構成：城戸崎和佐
展覧会コーディネート・編集協力：伊藤留美子、川上典子
会場撮影：浅川敏
本件についての問い合わせ：住宅商品化研究室 東京都港区赤坂1-3-15（株）エヌ・シー・エヌ内
Tel：03-5545-7177



木の家具あれこれ

ちまたで見つけたイマドキの木製家具たち

木の家具といえども、用途、材質、デザイナー、製作された年代や様式、価格など、その基準は多種多様に存在する。ここではそれらの無数に存在する家具の中から、今日のニュアンスがどこかに表れている4つの事例をセレクトし、誌面で紹介することとした。昔ながらの職人技をさりげなく現代的に味付けをして蘇らせる「家具蔵」、社内デザインコンペで顧客のニーズを発掘するという独自のスタンスが面白い「ウッドユウライクカンパニー」、部材の標準化で次世代スタンダード的な収納家具を世に送り出す「無印良品」、日本人の若い女性をターゲットにすることで新しいフォルムとマーケットの可能性を示唆する「いすコレ」。

これらの家具は基本的にいわゆる「有名デザイナーモノ」の類ではない。しかしその形態や表現手法は個々に異なるものの、いずれの家具からも穏やかな次世代デザインのビジョンを感じずにはいられない。シンプルだけど使いやすかったり、何気ない中にも細部が良く考えられていたり、見れば見るほど奥が深い。決して強い主張やデザインポリシーがあるわけではないが、このわたしたちのライフスタイルにピッタリとはまる「ジャストフィット」感と、プラスαの今日的テイスト、それと天然素材を用いたネオ・スタンダードデザイン。そう、これからの家具はこうあって欲しいものだ。

現代に蘇るマエストロの技

存在感のある椅子——家具職人・相田貞夫の椅子づくり

日本における家具制作の第一人者であり、多くのデザイナーとのコラボレーションで数多くのすばらしい家具を世に送り続けている相田貞夫氏。小さいころから木工が好きで、それが自然に今の仕事につながっているという、まさに天職としての家具職人である。また近年は茨城県の工房で家具を制作をしつつ、南青山のショールーム「家具蔵」でオリジナルデザインの家具を販売している。「ショールームはお客さんとのコミュニケーションの場になります。試作品を置いてみて意見を伺ったり、どんな家具があったらいいかを伺ったり、とても勉強になるんですよ」相田さんはご自身のショールームをそう語る。そして出来上がる家具には見事に職人技が宿りつつも、それが極めてさりげなく現代的なテイストが施され、結果的に非常に使い易いものに仕上がっているのだ。「自分がこの世を去ってからも、家具が自分の分身として、何百年も生き続けてくれれば……」と語る「現代の家具マエストロ」相田氏さんに、家具の見極め方や制作の過程について伺った。座った人が立ち上がりたくなくなるという、椅子づくりの極意とは……。

作品名：チェア DAN（版）——存在感のある椅子
デザイン：相田貞夫
製作：小口次夫
素材：ブラックウォールナット（オイル＋ウレタン塗装）
他にみずならウレタン塗装もあり
寸法：W470×D630×H800、SH435

家具づくりの「ここがポイント」

1:一枚板の座面

一枚板にこだわるのは、一本の丸太からとっているということをお客さんにも伝えたいという思いからだという。使用する材は樹齢200〜300年。丸太の中から一番大きな面積がとれる部分を使う。原木を丸太の状態で仕入れ、使える部分を見極めてから無駄が出ないように製材することが、結果的に省資源化にもつながる。機械でプレカットした材を何度も座って確かめてみて鉋で削ることを繰り返し、だんだん体のラインにフィットするように手作業で仕上げていく。座ると体に吸い付くようで心地よい。

2:背板の曲がり

自然の木の反りをそのまま生かすデザイン。現代の曲面デザイン家具のほとんどは、まっすぐに製材した板を熱で曲げている。人工的に曲げた材料は自然の姿ではないので月日が経つと元に戻ってしまうが、自然の木の曲がりをそのまま生かすことで形が変わることはない。現代の製材方法は曲がった木もまっすぐに製材してしまうので無駄が多いのだそうだ。相田さんは「曲がった部分があればそれが使える部位を見つけて決して無駄にしないことも、広い意味ではデザインです」という。

3:ジョイント

日本古来の組子の考え方を利用。釘などの金物は一切使わない。はしが榫の形状をしているので一度組むと抜けることはない。また二重はそになっているので強度が非常に強い。昔の職人はこうした苦労を意図的に見せることを嫌ったが、相田さんは逆に意識してこうした職人技を見せている。それは職人に対する敬意の現れと、お客さんにもこれだけこだわっているんだということを見せたいからだという。それがデザインにさりげなく現れている。

4:さすり仕上げ

部材どうしの取り付け部分に段差をまったくつけない仕上げ。部材を組み立てたあとに職人が一カ所一カ所手作業で仕上げる。使う道具も、小鉋、小刀、南京鉋、サンドペーパーを使い分ける。最近の家具は量産を前提としているので、こうしたさすり仕上げのものはほとんど見られず、機械で切り出した部材を組み立てていくだけのものが多い。

5:設計図

ベニヤ板に座寸で設計図を描く。ベニヤは材に方向性がなく狂いが極めて少ないからで、紙に描くと温度や湿度などの気候条件で図面に狂いが出てしまう。コンマ数mm単位の誤差も妥協はしない。また木の素材に図面を描くことで、木の家具をつくるイメージも膨らむ。

6:見分け

切り出した板がどの部分に使えるかを見極める。経験者と若手がペアを組むことで、教えながら仕事をする。このふたり組のペアはすべての工程で見られる。この工房からひとりでも多くの職人が巣立ってこればという相田さんの想いの表れでもある。

7:墨付け(木取り)

各パーツごとの型板を用いて、少しの無駄も出さないように木取りをする。木目が曲がっているところは曲がっているパーツに、細い材しかとれないところは細いパーツにしようする「適材適所」という考え方。

8:乾燥

1年以上かけて自然乾燥をして含水率を12%まで落とした後、さらに人工乾燥を2〜3週間かけて7%ぐらいまで落とす。昔はここまで徹底的に乾燥する必要はなかったが、近年の暖房器具の普及により、人工乾燥をして水分を十分に取り除くことが必要になった。

9:組立て

部材どうしのジョイント部分に髪の毛一本も入らないぐらい高い精度で組み立てる。仮組みしては鉋や小刀で調節しながら、精度をあげていく。

10:仕上げ

組み立てたあとに、小鉋、小刀、南京鉋、サンドペーパーを使ってあげてゆく。経験と勘が勝負の職人の世界。できあがった家具は一品一品微妙に表情が違う。そこに手作業の味がある。

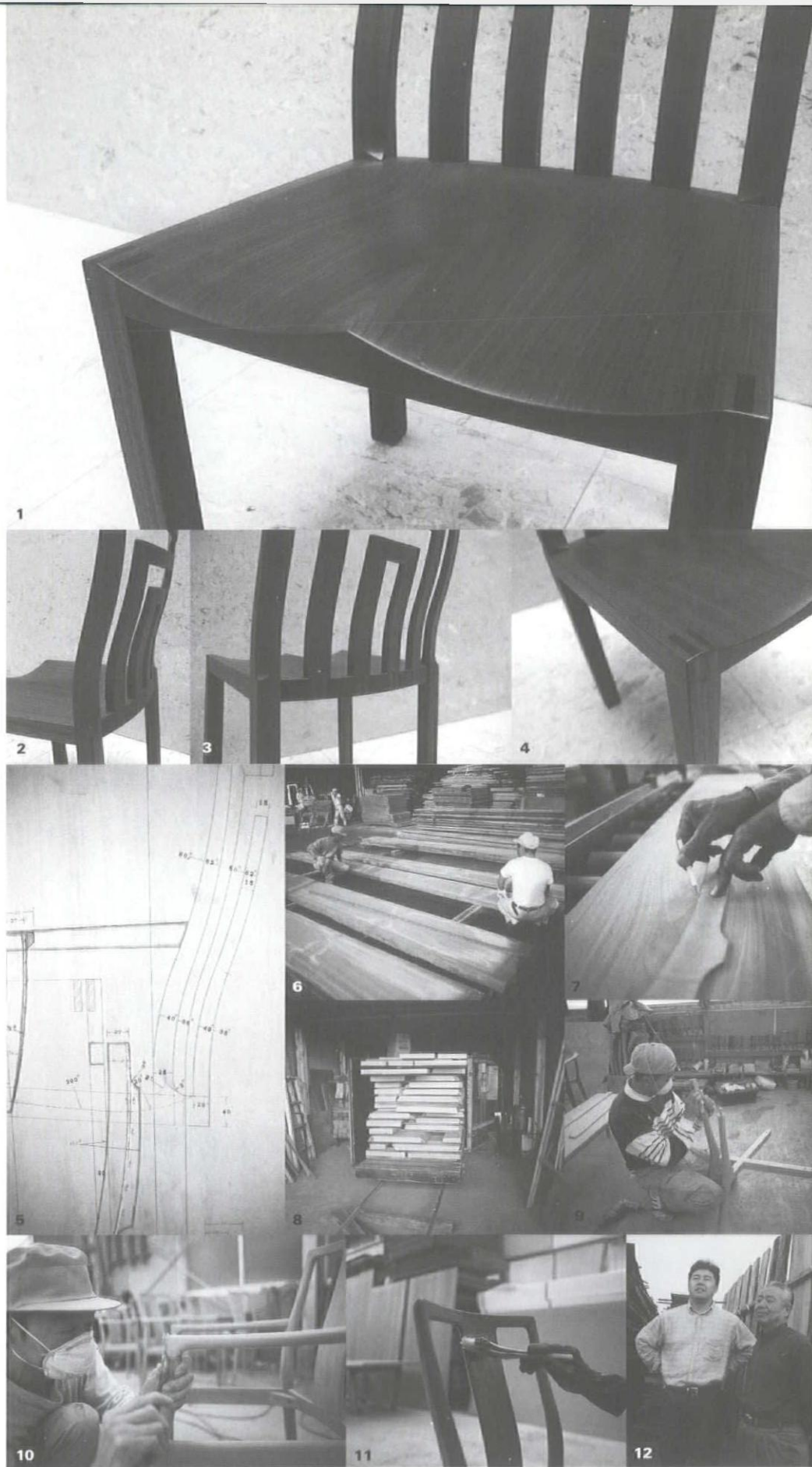
11:塗装

刷毛で塗料を塗り、柔らかい布でふき取るオイルフィニッシュのあと、ウレタン塗装の皮膜を吹き付けて仕上げる。この塗装の組み合わせが、木の素材感を損なわずに日常生活の使用に耐えうる耐久性を確保する。

12:相田貞夫さん(右)と息子の相田敬介さん(左)

父親の貞夫さんはデザインと製作を、息子の敬介さんは全社的なマネジメントや広報を担当する。親子二人三脚の家具づくり。

(注) 製作工程を表す写真は説明のためのもので、必ずしも同一の家具ではありません



相田貞夫(あいだ・さたお) 略歴

1934年 水戸に生まれる。
1953年〜 東京・本郷の石井木工所で修行
1963年 東京・練馬にて独立
1972年 工場を郷里の茨城県に移す
1980年 (株) アイダを設立
1995年 東京・南青山にギャラリー「家具蔵」を開設
茨城デザイン振興協議会理事、ブライト茨城デザイン展実行委員
全国家具工業連合会監事、昭和天皇御使用書架製作

相田さんの家具に実際に触れて見るには、青山のショールーム「家具蔵」を訪ねて見るとよい。お店のスタッフが木のことや家具づくりの流れについて丁寧に教えてくれる。

●家具蔵(ショールーム)
東京都港区南青山5-9-5
Tel: 03-3797-1700

●(株)アイダ(工房)
茨城県那珂郡大宮町泉1180
Tel: 02955-2-3071

ウッドユウライクカンパニー オリジナル定番家具



作品名：ビショップチェア
素材：ウォールナット
寸法：W435×D550×H1040、SH420
背のカーブが体にフィットする



左 作品名：アイチェア 右 作品名：アイキッドチェア
素材：チェリー 素材：チェリー
寸法：W550×D490×H670 寸法：W400×D350×H470
SH415 SH290
コンパクトなアームチェア。座面は手ガナで削り込まれて
いる



作品名：フォーデルテーブル（ひきだし付）
素材：チェリー
寸法：W1200×D700×H700
脚を天板のコーナーに出すことで、脚と脚の間が広く使える



作品名：クローバーテーブル
素材：チェリー
寸法：W1500×D840×H700
ネーミングは四葉のクローバーから



作品名：スーパーエッグテーブル
素材：ハードメープル
寸法：W2000×D1050×H700
どの位置に座っても開放感が味わえるつくり



作品名：板チョココンソール
素材：ウォールナット
寸法：W1000×D390×H800
CD260枚を収納可能



作品名：風琴キャビネット
素材：オーク
寸法：W1400×D450×H600
扉ははね上げスライド式



作品名：ピラミッドチェスト
素材：ウォールナット
寸法：W720×D720×H1180
各段が独立した箱で、状況に応じて自由なセッティングが可能



作品名：トモキャビネット
素材：オーク（一部チェリー）
寸法：W1500×D420×H800
どんな用途にも対応できるスグレモノ

「使う人に長く愛される木の家具を」というテーマにこだわり続ける。それがウッドユウライクの家具づくり。毎年違ったテーマのもと、全員参加のデザインコンペを行うデザイン・スタンスも非常に興味深い家具屋さんだ。ショールームに来店した客の投票や反応で上位作品を商品化するという、とても風通しの良いモノづくりを続けているのである。中には毎年審査を楽しみにして来店する客もいるという。こうしたユーザーと作り手の距離の近さがウッドユウライクカンパニーの魅力であり、それが会社名にそのまま表れていると言えよう。コンペ作品以

外にも定番商品がいくつもあり、すべての作品が無垢材で、仕上げは植物性のオイルフィニッシュにこだわっている。オイルフィニッシュは手入れが楽であり、乾拭きをすればするほど艶が出てきて愛着がわく。またこれら定番商品はサイズの変更が可能で、使い手のライフスタイルによって自由にカスタム化が可能。素材もチェリー、ウォールナット、オーク、メープルの中から選ぶことができ、フルオーダーにも対応している。現代的ユーモアと自然素材の出会いから生まれるチャームな家具たちから、今後も目が離せない。

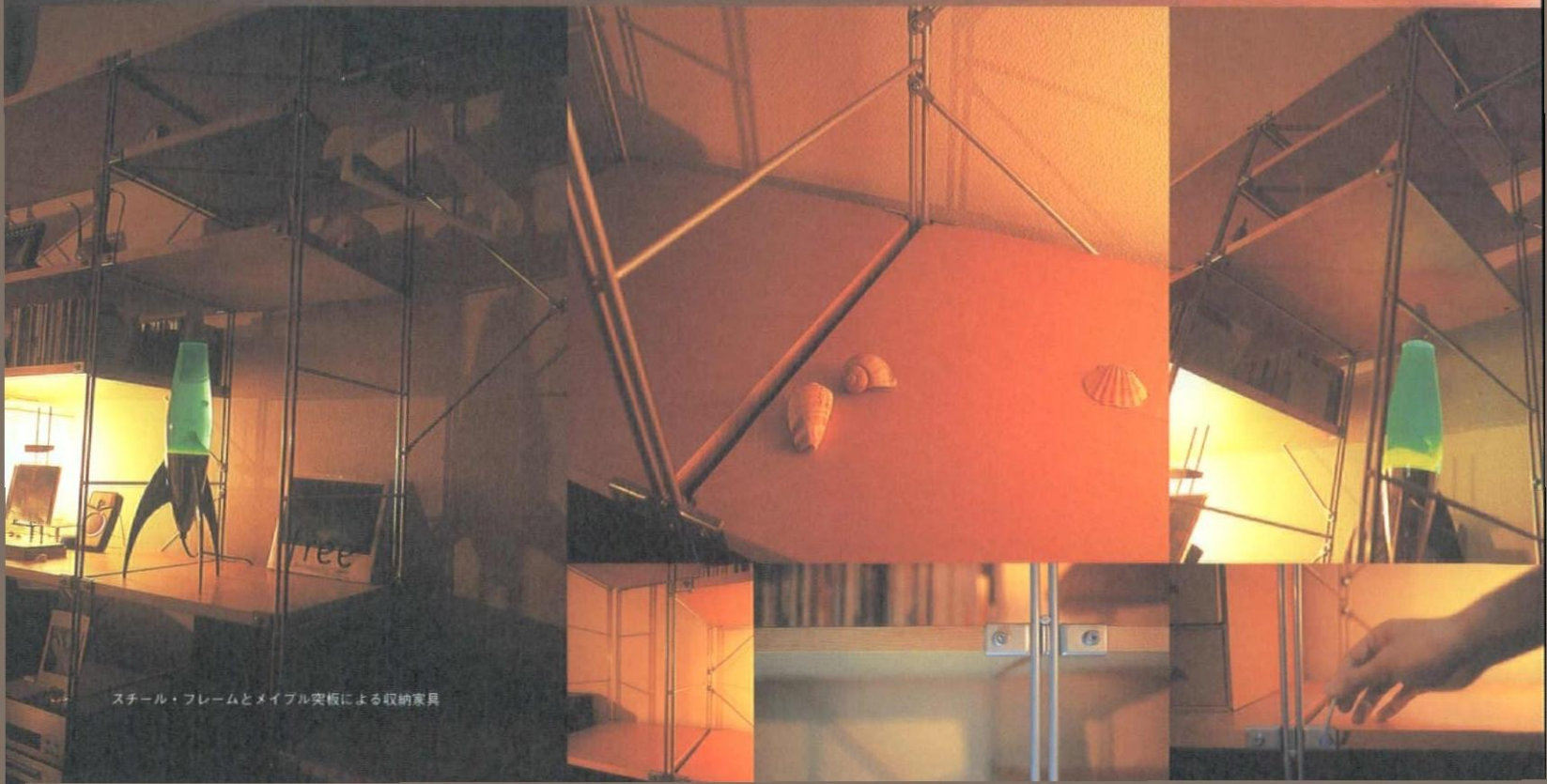
ウッドユウライクカンパニー 東京都港区南青山5-11-25 Tel：03-3797-1027

無印良品が提案するライフスタイル

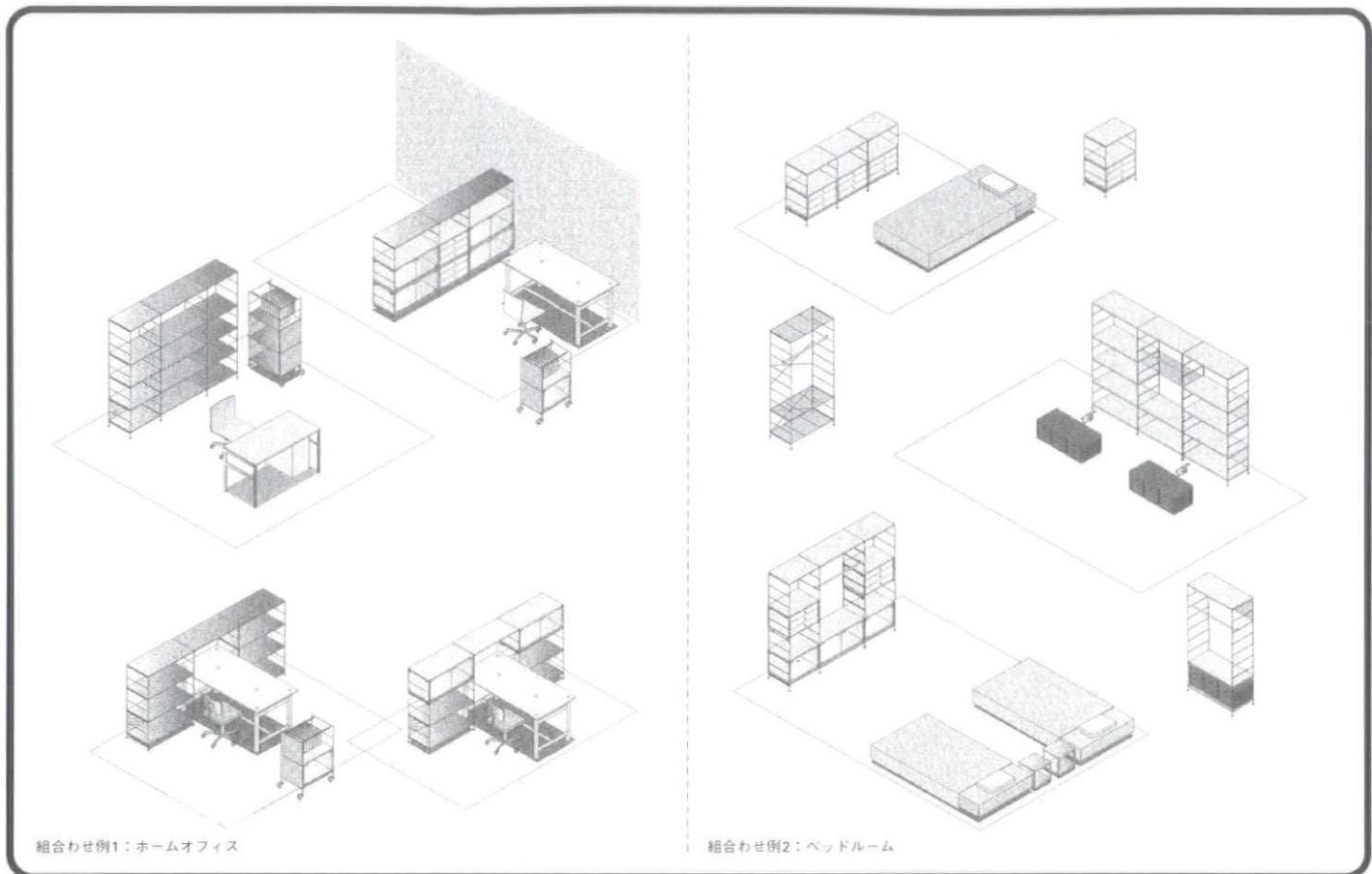
浸透するコーポレート・アイデンティティと
確約されたクオリティ

世の中の価値観がどんどん極地化・細分化し、結果的に総体としては均質化してゆくように見受けられる世紀末にあって、明確なヴィジョンをもってきら星のごとく現れた商品イメージ「無印良品」。卓越したコーポレート・アイデンティティの確立とその流布、ユニセックス的ルックス、巧みなマーケット設定、確かなクオリティと優しい素材感……。それらは今、若者たちの間で静かな、しかし爆発的増加を伴った支持を獲得しつつある。そう、我々が求めているのは生活臭の漂う「商品」ではなく、リアリティのある「イメージ」なのかも知れない。「ノンエイジ・ノンセックス」という企業カラーにも表れているように、それはあらゆる人の価値観を許容する。はたして無印良品の商品は「次世代標準」になってゆくのだろうか。

ここでは無印良品のラインナップとして開発されている収納家具シリーズを、イマドキの木の使われ方のニュアンスとして、また現代の空間にマッチする家具のフィージングとしてフィーチャーした。現代のカリスマブランドに潜むその魅力とは……。



スチール・フレームとメイプル突板による収納家具



組合せ例1: ホームオフィス

組合せ例2: ベッドルーム

モジュール化と互換性

無印良品の家具は部材の互換性が非常に優れている。ある収納棚を買ったとして、それに食器棚やシャツのホルダー、追加の棚板など、様々なオプションを付加してゆくことでバージョンアップを図ることができる。また一見そうした家具とは無関係に売られていると思えるようなバスケット類や段ボール箱、CDラックに至るまで、あらゆるサイズが規格化され、相互にアレンジ・組み替えが出来るようになっている。例えばある無印良品の家具を買うとする。しばらくするとそれに付随する家具が欲しくなる。テイストもそろえたいし、互換性のある無印良品の家具をまた買う、すると別の家具が欲しくなる、また無印良品の家具を買う。これをユーザーが繰り返し行う……。つまり生活に必要な家具類をすべて無印良品で統一することも可能だし、ユーザーは無意識のうちにそれを行っている。例えて言うならそれはコンピュータ業界やオーディオ機器の業界では当たり前におこなわれている「単一規格化」に他ならない。コンピュータ・ユーザーがあるOS上で走るアプリケーションを買い、他のものは買わずに最初に買ったそのアプリケーションをバージョンアップしながら使い続ける構図に、それは非常に良く似ている。

素材感

素材には「適材適所」というセオリーが貫かれている。机の天板などの堅さが必要な部分にはブナ材を、収納棚のフレームなど優しい質感が必要なところにはパイン材といった具合に。それらの素材を忠実に生かすことで、洗いざらしの木綿のシャツのようなシンプルでニュートラルな素材感を生み出している。またスチールフレームと木板といった異素材同士の対比も試みられ、現代的でシャープなイメージの創出に成功している。柱脚やジョイントといった金具などの細かいディテールにも強度的な面のみならず、さりげないデザイン処理が施されている。

セルフビルド

無印良品の収納家具は、基本的にはセルフビルドである。ただしそれは決して苦勞を伴う作業ではない。ユーザーが自分のライフスタイルのビジョンをイメージし、それに合うように様々なパーツのバリエーションの中から自分に合ったものをセレクトして、これから始まる生活に想いを馳せながら組み立てるという、非常にポジティブなものである。そこにあるのは「自分で組み立てなめればいけない、面倒だ」といったネガティブな感覚ではなく、「自分でライフスタイルをコーディネート出来る」という喜びだ。また施工性も極めて良く、例えばスチール帆立の収納棚では、付属パーツの六角レンチ一本ですべての組立作業が出来るように考慮されている。

	スチール棚 幅 540 mmタイプ 棚板: パイン材/天板: シルバー/脚部: 鋼管	スチール棚ワイヤー 幅 540 mmタイプ 棚板: パイン材/天板: シルバー/脚部: 鋼管	スチール棚ワイヤー 幅 910 mmタイプ 棚板: パイン材/天板: シルバー/脚部: 鋼管	ワイヤー棚ワイヤー 幅 540 mmタイプ 棚板: スチール/天板: シルバー/脚部: 鋼管
高さ 320 mm (300 mmタイプ)	 スチール棚 サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm
高さ 1200 mm (1200 mmタイプ)	 スチール棚 サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm
高さ 1750 mm (1800 mmタイプ)	 スチール棚 サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm
幅 540 mm	 スチール棚 サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm
幅 910 mm	 スチール棚 サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm
高さ 320 mm	 スチール棚 サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm
高さ 1200 mm	 スチール棚 サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm
高さ 1750 mm	 スチール棚 サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm
幅 540 mm	 スチール棚 サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm
幅 910 mm	 スチール棚 サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm
高さ 320 mm	 スチール棚 サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 320 mm
高さ 1200 mm	 スチール棚 サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1200 mm
高さ 1750 mm	 スチール棚 サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm	 スチール棚ワイヤー サイズ: 幅 910 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm	 ワイヤー棚ワイヤー サイズ: 幅 540 mm x 奥行 410 mm x 高さ 1750 mm

基本ユニットと追加パーツ



次世代標準。

あらゆる商品が溢れ、様々な価値基準が乱立する世の中であって、それは実に寡黙で無表情だ。逆に主張しないがゆえの存在感と、あらゆる人の価値観を受容する懐の広さ。そう、わたしたちが本当に必要とするものは、豪華なイメージやステータスシンボルといったものではなく、あらゆるシーンにフィットするフレキシビリティと、できる範囲内で自分たちのライフスタイルを演出できる楽しさかもしれない。いくらデザイン的に格好良くても、いかに高級素材を使用している、手が届く値段でなければ買わないし、自分の生活にシンクロするものでなければ意味がない。一見シンプルで素気ないんだけど、長く使い込めるデザインと、バリエーションの豊かさ、タフで丈夫なクオリティ、そしてちょっと手を伸ばせば買える価格。それを当たり前で説明すると、「オーソドックス」ということであり、「スタンダード」ということである。家具の「次世代標準」はこうあるべきかもしれない。少なくとも今世紀末の予見としては……。

URL : <http://www4.mediagalaxy.co.jp/muji/>



木の家具あれこれ

ちまたで見つけたイマドキの木製家具たち

NO. 4

いすコレ

リビングデザインチェアコレクション '99

新しい、美しい、小さい。椅子A to Z 26点新作誌上発表

日本の若い女性のスタイルが変わってきた。

脚が長くなった。細くなった。ヒザ下が長い。

オシリも小さくて可愛らしくなった。

欧米人のスタイルに負けなくなったような気がする。

椅子も、こうした若い女性に似合ったサイズにするとときが来たようだ。

2000年のニッポンの椅子は、こうあるだろう。

1998年10月29日～11月3日の6日間にわたって、東京・新宿にあるリビングデザインセンターOZONEにて開催された木製椅子の展覧会。老若男女を問わない26人のデザイナーによる次世代の椅子が一堂に会した。日本人女性の体型の変化を現代的なエッセンスとして巧みにコンセプトに取り入れた設定の見事なこと、また展覧会名のキャッチコピーを「いすコレ」と結めるあたりの心ニクイ演出もあって、会場には実に多くの人々が訪れた。それは決して最近のちょっとしたインテリアブームによるものだと簡単にくれるものではない。従来の業界内向けの新作商品発表会ではなく、また海外有名デザイナーの高嶺の花的コレクションでもない、座って楽しめる等身大の展覧会である。一日あたりの入場者数がギャラリーの新記録であったこと、訪れた人の7割が女性であったこと、また7割が10代および20代のヤングジェネレーションであったことなどが本展覧会のインパクトを雄弁に物語る。ここで重要なのは、企画内容の是非やデザインの意義といった堅苦しいことではなく、主催者とオーディエンスの距離の近さであり、また彼女／彼らがこの展覧会で実際に椅子を体験して何を感じたかである。実際に椅子を手に取り、座り、肌で感じた彼女／彼らはこれを咀嚼し、自分たちで考え、やがて自分たちの価値観で自分たちの形をつくりはじめる。そしてこのようなムーブメントが確実に、ネクスト・エイジのデザイン文化を育ててゆくことであろう。またそうしたことが、本当の意味で日本発のデザインになってゆくに違いない。





A 長 大作

この所普通の角脚に斜めに大きな面をとることで、脚先を細く見せるというシリーズの展開に力を入れているところで、この肘付き椅子もその流れの一つです。後脚と前脚を共通部材の方向を変えて使っていることが特徴です。肘の処理に一寸苦労しました。



B 蛸名紀之

少しずつ脚の削り方の表情が変わって来るんじゃないか？ 僕が描いた図面のラインなんて、多少違えたって良い。むしろ、それを生かした味のある、人間味のある椅子を作りたいかった。



C 榎本文夫

モードやイージーアートとしてのデザインではなく、日本における「家具」の歴史のささやかな石塊になれればと……



D 萩田裕之

女性。私は女性ではないので、この企画は難しいと思われたが女性がこんな椅子に座ってくれたらなあ、と想像した結果がコレです。全体に縦のラインを強調させることで座る人がより細く見えるのではないかと思います。ボーダー（横しま）のシャツを着ると太って見えるとよくいわれるから。どうぞ座ってください。本当ですか？



E 五十嵐久枝

小椅子と同時に曲木のテーマも頂いて、工場を見学に行った時、子供のころに見たブーメランの様な、くの字に曲った機材がいくつも、ぶら下がっていた。その形をストレートに見せることから始めたいと思い、華奢というよりは、丈夫そうで滑らかな椅子になりました。スタッキング・カバーリングは、最初から考えていた訳ではないのですが、できます。



F 石垣慎治

チークの木に感じた、イメージでつくった椅子です。太陽の下で、風の中で、木陰で、気持ちいい部屋で、静かに、強く、少し冷たい感じが、優しく、暖かく受け止めてくれる椅子です。座ってみてください。



G 川村 伸

現代の都会っぽさ、スタイルなどを気にして、普通のイスの形を起こしました。小さく、気軽に、ノーマルに。部屋の真ん中にポツリとあるイメージ、服のように着られるような感覚。楕円のムク材と曲木で作ることで、新たな魅力も出てきました。色々と気にしている所もありますが、然有らぬイスを感じていただければと思います。



J 松本 研一

【椅子からの一言】わたしはチークで出来ています。貴女の身体に合わせて、わたしもほっそり！ さて、わたしの腕（ひじ掛け）と横座枠（腰骨？）に触れて下さいな。その時、貴女は感じるでしょう。これまでと違った手の感触を。ほら、親しみがわいてきたでしょう。これが、わたしから貴女へのイメージのプレゼント。



H 川崎 文男

私達が使う椅子にも色々な物が有りますが、今回の椅子は小さくても軽くて丈夫な椅子を作りたいと考えた物です。全体に少しタイトなデザインですが、置いてカッコ良く、使って便利な物にしたかったのです。

ダイニングで使うというより、チョット腰掛けて書き物でもするのに最適な物、そんな感じの椅子です。



K 村澤 一晃

日本人の体型は変わってきた！ のかもしれないけれど、私の体型は昔のまま。

だからといって、いつも大きめのサイズばかりではちょっとしゃくです。

こんなスリムなアームチェアでも、ほら私にぴったり。と、共感してくれる人もきっといるでしょう。



I 小泉 誠

以前から、まんまるい座の椅子をつくってみたいと思っていました。そして今回は、ちっちゃな丸座の椅子に挑戦をしてみました。単純な構成の脚と、ちっちゃな丸座が組み合わさったこの形は、まだ椅子になりきれない様な不思議な可能性を感じます。



L 南雲 勝志

椅子といえば学童椅子程度しか縁のなかった自分にとって、直感的に思い浮かぶ形は素朴で椅子らしい形である。直材はその基本のような気がする。四角くて直材で単純な椅子を作りたいかった。



M 中村守夫

椅子に腰掛ける時左足を組み左肘を背板の上に置く悪い癖の自分が使う椅子をと考えていて、昨年暮大晦日に毎日の晩酌の3倍位酒を飲みながら杯の型の様な背板をと考えたものです。

BC工房でチューリップイスと名付けて戴き、とても良い製品名になったと感謝しています。



P 岡村 孝

いつものことですが、新しい椅子についてのコメントを書くことは、とてもむずかしいです。

今回のテーマは「小さな椅子」ということでしたので、イマドキの日本の若い女の子達をイメージして、元気でノビノビハツラツとした女の子が、ちょっとすました感じを表わせたらと考えてデザインしました。



N 西 文和

「木工作品」のイメージにはどこか、男っぽさや少年っぽさがつきまとう。私は、それを離れていつも自分のもの作りを女性的に傾けてきた。



Q 大澤克己

生活空間の中で、それだけ見てもオシャレでありながら、そこに住む人以上にでしゃばらず、人が座った時にきれいに見えるイス、そんな良いと思います。曲線的な人の体の線と対比的な直線的な構成で、ベーシックなスタイルに、少しだけちがう味つけをしました。



O 岡部求邦

“CHOTTO” 鈴木さんと本当に久し振りに仕事をしました。楽しい仕事でした。(中略) すこし大きなイスになってしまいました。きっと“CHOTTOお尻の大きな娘”用かなって思っています。No.2 CHOTTOを期待して下さい。



R 大滝正明

今、小枝にハマっている。この小枝で「自然木自然流」式に生活用品をいろいろ制作している。楽しいウッドワークになり、我々の生活を彩ってくれるので大変重宝している。今回のチャレンジは、椅子の背もたれのモチーフとして小枝を描くことであつたが、木もちよく小枝に寄りかかるイメージに近づいていきたいと夢みている。



S 佐久間礼奈

Picco Rena (ピッコレーナ) の第一印象!!
座っても大丈夫?……小錦はだめです。
こわれない?……日常生活には産し支えありません。
きゃしゃね……そーですね。
でも、スリムでかわいいでしょ。



V 田淵智也

小柄な女性がちょこんと腰をおろすのが似合うような、小ぶりでかわいらしい椅子をめざしました。



T 柴田 歩

昨年12月、BC工房+デザイナー+星亀木工所でスタートした企画、「亀さんのワークショップ」から生まれた作品。あーだ、こーだ、言われながら8ヶ月を費やし完成。ちょっと変わった構造の肘をおける小椅子。後姿が森を跳ねまわるバンビのような椅子です。



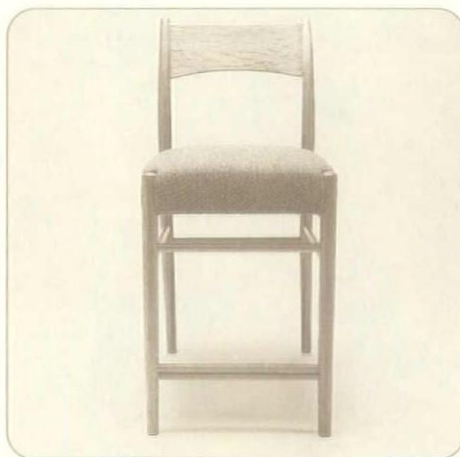
W 上田麻朝

キュっとしたオシリにすらっとした足。そんな女性が座る姿を思い浮かべながら考えた。が、できたイスは少しぼちゃり型。本人に似るのだろうか…。



U 紫富田啓一

玄関脇で、ちょっと荷物を置いたり、お客様に、どうぞと座って頂いたり、時には、四季の草花を飾ってみたり、台所では、料理の合間に腰掛けたり、あるいは、踏み台として使ったり…気軽に、インテリアとしても使える小椅子です。



X 山極博史

全体に細身で軽く、できるだけシンプルにまとめ、女性でも扱いやすいようにとデザインしました。また椅子に座った女性の長い脚は、時には伸ばされ、時には椅子の足かけが支えてくれます。



Y 山元博基

いすっておしりとかポコちゃんのがつかればOK! それに背をつけられればもう完璧!! 小さな椅子を考えるスタートはこんなものでした。より小さくするために3本脚から始まり「よくひっくりかえる!」という家族のクレームで四本脚へ。その分、少し大きくなりましたが人の好みもと入れたコケない椅子になりました。



Z 葭原 基

狭いスペースで使用でき、背当たりもよく、座にスプリングを入れた掛け心地のよい椅子です。以前、背もたれに「角のたてざん」を入れた椅子をデザインしました。それがGマーク選定となり、ロングセラーとなってロングライフデザイン特別賞もいただきました。この商品は、前記商品と同じ趣旨でデザインしたものです。



会場風景

入場者が実際に手にとって、座って、自分の目で確かめる。そしてお気に入りの椅子に一票を投じる。

「何かこの椅子良くない? (アクセントは話尾に)」
「かなりイケてるよね」

西 文和
みずき工房主宰。木製生活家具の企画制作販売を中心に活動中。

岡部求邦
現在 ZIRKUS代表

岡村 孝
奈良デザイン研究所、デンマーク王立美術工芸大学卒。コペンハーゲンに在住し、O&Mデザインスタジオ設立。1988年スカンジナビア家具展で金賞。多くのメーカーのデザインを手がける。

大澤 克己
1951年東京生まれ。武蔵野美術大学短大部専攻科卒業。(株)コスガ入社後、デザイン部・コスガUSA・コスガハワイ・外資部に勤務。97年「デザイン工房・おささ」として独立。住宅用家具デザインを中心に活動。

大瀧 正明
静岡県清水市生まれ。武蔵野美術大学卒業。静岡県工業試験場に10年間勤務後、84年にデザインHAUSを設立。現在、「木もちのよい生活」をコンセプトにライフスタイルワークショップを実践し、提案している。

佐久間 礼奈
1975年 東京生まれ
1998年 明星大学生活芸術学科プロダクトデザイン/木工専攻卒業
現在、家具の要素(デザイン、制作、見方、感じ方、etc)を勉強中である。
ICSカレッジオブアーツIAD科在学中。

柴田 歩
1970年8月27日生まれ、28歳。
1991年、専門学校インテリアセンタースクール(現・ICSカレッジオブアーツ)、インテリアデザイン科卒業。
1993年3月、埼玉県大宮市にある、(有)星亀木工所に入社。
現在、椅子職人修業中。

紫富田 啓一
1953年 大阪生まれ
1976年 東京造形大学室内建築専攻卒業
山下和正建築研究所勤務(〜81年迄)
1987年 リニアデザイン建築事務所設立
住宅設計を中心に、家具・プロダクト・グラフィックデザインを手がける。

田淵 智也
奈良デザイン研究所
家具デザイナー

上田 麻朝
1973年 神奈川県生まれ
1996年 女子美術大学デザイン科卒業。
1996年 BC工場のスタッフに加わる。

山極 博史
1970年 大阪生まれ
1994年 宝塚造形芸術大学産業デザイン科卒業。
1997年 カリモカ家具開発課退社後、松本技術専門学校入校。
また、木工所、家具工房にて製造を学ぶ。
今後フリーでの活動開始予定。

山元 博基
1950年 北海道生まれ
1977年 多摩美術大学立休デザイン科卒業
1977〜79年 (株)山本工業にて工場実習
1979〜83年 (株)高木見デザイン事務所勤務
1983年〜 (有)ゲンデザイン事務所(現在)設立

藤原 基
飛騨産業(株)商品企画部長、技術アドバイザー、岐阜県商工会連合会エキスパートを経て、現在ヨシハラ開発研究所代表。1966年第1回ジャパンファニチャーショー内閣総理大臣賞。グッドデザイン選定商品など多数。

鮎名 紀之
1982年北海道東海大学デザイン学科卒業。刺繍デザイン研究所、スタジオ・コムテック勤務後、北海道に帰郷。旭川市内家具メーカー勤務後、1992年PRIME DESIGN OFFICE設立。現在に至る。

榎本文夫
1957年 東京生まれ。
1979年 東京造形大学造形学部デザイン学科卒業。
1980〜86年 クラマタデザイン事務所勤務。
1986年〜 榎本文夫アトリエ設立。現在に至る。

萩田 裕之
1973年 名古屋、豊田秀吉の生誕地のすぐ近くで生まれる。
1987年 女性を知る。
1991年 建築家を目指し大学へ入学したが、卒業後挫折。
1995年 上京し専門学校へ入学。
1997年 家具関係の会社へ入社。
2007年 とんでもないことをする予定。

五十嵐 久枝
東京生まれ。奈良デザイン研究所研究科を卒業後、クラマタデザイン事務所勤務。1993年イガラシデザインスタジオ設立。RYU, GAN, SOU, [集合住宅] TSUMORICHISATO [店舗] 静岡県産地振興ダイナミクス事業 [家具静岡]

石塚 慎治
1963年 神奈川県生まれ デザイナー
1984年 中央工学校建築設計科卒業住宅・ショップインテリア・家具・照明のデザイン

川村 伸
1972年 東京生まれ。
1994年 奈良デザイン研究所研究科卒業。
1995年 (有)リニアデザイン一級建築士事務所勤務。
1996年 (有)パロン設立。現在イガラシデザインスタジオ勤務。
代表作 三好運送社屋・倉庫 [建築]

川崎 文男
1972年奈良デザイン研究所卒業後アルフレックスジャパン開発課勤務を経て、フリーランスとなる。現在はメーカーのデザインコンサルティング業務を中心に幅広くデザイン活動をしている。

小泉 誠
1960年東京生まれ。デザイナーの原亮英、原成光、岡氏に師事した後、1990年コイズミスタジオを設立。生活雑貨から、家具、照明、空間に至るまで生活に関わるすべてのデザインを手掛ける。

松本 研一
多摩美術大学卒業。相模女子大学助手。同短期大学部非常勤講師兼務。本と漆のクラフト大賞展、暮らしの中の木の椅子展などに椅子を発表。日本インテリアデザイナー協会所属。

村澤 一男
1965年生まれ。ICSカレッジオブアーツ卒業。垂見デザイン事務所を経て、89年よりセルジオ・カラトニデザイン建築事務所勤務。インテリア・家具、展示会場等のデザインを担当。93年帰国。ムラサワデザイン開設。

南雲 勝志
1956 新潟県六日町生まれ
1979 東京造形大学室内建築学科卒業
1987 ナグモデザイン事務所設立
1995 通産省グッドデザイン家具インテリア部門金賞・おもに環境デザイン、プロダクトデザインなどを手掛ける。

中村 守夫
1934年 岐阜県加茂郡白川町生まれ。
1974年 木工の機械加工技術にて知事表彰。
1990年 大手家具メーカー退職、工房を設立。
45年間木工作業にたずさわって、現在は曲木椅子製作に没頭。

いすコレを見た人たちは、実際どう感じたのだろう? (会場アンケートより抜粋)

- どの椅子もクオリティが高く、作った人の愛情が感じられ、見ていて楽しかった
 - (展示作品を見ることで)自分なりのシチュエーションが想像できる
 - 椅子は座って初めてその良さがわかる。(この展示会は実際に座れるので)会場にいる人はみな楽しそうだった
 - 日本の女性向けというわかりやすいテーマ、コンセプトが面白い
 - とても見やすく、雰囲気も良く、くつろぐことができた
 - 自由な角度から自分の目で確かめることができた
 - 実用的でお洒落なものが多い
 - 気に入った作品に投票できるので、参加意識がわく
 - 若い人がたくさん入っていて将来性があると思った
 - これだけ多くの椅子の座り心地を楽しむということは今までに経験がなく、新鮮だった。人と人の出会いのように、理屈よりも一瞬の相性の良さに出くわしたような快いものを感じた。童心にかえったようだった
 - 今の生活の中では小さい椅子が必要だと思った
 - 木の温もり、温かみを感じ、座っていて心が落ちついた
- また今後希望するテーマとして、安らぎの椅子、高齢者の椅子、パソコンデスク、組立家具などが見られたところが時代の現れか

「いすコレ」の仕掛人、鈴木恵三氏へのインタビュー

コピーライターであり、イベントオーガナイザーであり、家具づくりもするマルチ人間・鈴木恵三氏。「いすコレ」というネーミングも、若い女性をターゲットとしたこともすべて彼の発想による。「いすコレ」発想のきっかけ、若い人たちに対する想い、これからの日本の家具デザインについてなど、思いつくままに語って頂いた。その忌憚のない意見の背後に潜む、未来を予見する鋭い眼差しとは。

——今日の家具デザインについてどうお考えですか。

僕は、家具業界もファッション業界と同じようにデザイン・ジャーナリズムや一般の人たちも巻き込んだ、もう少し広がりのある発表会や展覧会をするべきではないかと常日頃考えています。業界内でメーカーとショップだけが発表する時代は終わったんじゃないか、もう少し多くの人に問いかけてそれに対して一般の人やデザイン・ジャーナリズムが意見を言い合う——今回はあのデザイナーのこれは良かった、これは良くなかったというような——家具業界がそうになってくれればと考えています。それで今回の「いすコレ」にも、三宅一生さんが東京コレクションやバリコレで発表したりするのと同じような場に育っていけばという願いを込めているんです。実は家具業界が最近変わってきていて、雑貨やファッションともオーバーラップしてきているし、いろんな意味で他の業種と重なってきています。だからこそ、そのオーバーラップしている部分をもっと多くの人に知って欲しいと思っているんです。内輪でちょこちょこやるのが日本人は好きだけど、それが僕はいけなかったんじゃないかなと。実際にお客さんと直接接してみたら、プロの人たちよりもずっとデザインや情報に対して貪欲で、家具デザインに対して興味をもっている層が増えているというのをすごく感じているので、そういう人たちに何かを発信したいと思っています。

——日本の若い女性を「いすコレ」のテーマにされていますが、その発想のきっかけを教えてください。

最近の若い人は「ナマ足」と称して素足に高いヒールをはいているでしょう。いつか街を歩いていたら、前の女性の足がドキッとするぐらいすごく細かったんですね。その人の横に立ってみたら腰の位置が全然違ったし、ひざの下がずいぶん長いと感じたんです。特に10代の人たちは我々と体型が全然違うでしょう。そこで、「よし、この人たちの意識した物づくりをしよう」と考えたわけです。そうすることによって椅子のプロポーションが変わると思ったんです。例えばイタリアの椅子は座面の高さが大体47〜8cmなんですよ。もちろん靴をはいて使うからということもありますが、どれも日本の椅子よりも座面が高いんですね。座面が高いということは椅子のプロポーションがきれいに見えるんです。日本人とイタリア人の体型が違うから、イタリアの椅子と日本の椅子は違うんだと思われがちですが、日本人の体型が変わってきているのだとすると、日本でもイタリア以上に美しいプロポーションの椅子がつかれるんじゃないかということに気がついて、それで若い女性を意識した小さな椅子というテーマを知り合いのデザイナー30人ぐらいに呼びかけたのがきっかけです。

——「いすコレ」を実際にやってみて、一般の人たちの反響はどうでしたか。

狭いスペースの中に26点も椅子が並んでいると、それなりに迫力がありました。驚いたのは、若い人たちが実際に一点一点座り心地を確かめているんですよ。横

から見たり、下から見たり、非常によく観察しているんです。ただ黙って見てい

るのではなくて、体で感じ取ろうとするような姿勢が多く見られたんですね。まるで自分にあった服を探すかのように椅子を試着していたような感じでね。本当に感動的でした。ギャラリーの入場者数も新記録で、狭い空間に溢れんばかりの若い人たちだったので、椅子がなくなっちゃうと心配していましたけれど(笑)。若い女性に、まず家具の中でも椅子というものに興味をもってもらうことはとても重要で、彼女たちが最初に何かに感じて、自分たちの生活に取り入れることによってムーブメントは生まれますから。実際に椅子を買う年齢層はもう少し高いかもしれませんが、彼女たちが何かに感じてくれなければ、今までどおり家具の業界というのはおじさん・おばさんの世界で終結してしまいますからね。これからの人たちを意識した椅子を発表することによって、若い人たちが椅子に興味をもって来て、家具のデザインというのに対して何か驚きを感じてもらえたらと思っています。今まで家具業界や家具デザインの世界を若い人はあまりにも見ていなかったんですね。婚礼家具ということぐらいでしか認識していなくて、婚礼三点セットというあのズレズレの、今の時代とはもう住空間がまったくずれた儀式としてのものではなかったから。自分たちが家具なんて買えないし、買ったところでたかが知れているということ、一切関心がなかったのでしょうね。だから僕は、特に椅子のデザインに関して言えば、若い人たちがどう感じてくれるかが家具業界にとっては大きな意味をもつと思っていたから、そういう意味で若い女性をあえて意識した物づくりや商品開発をすることによって、彼女たちがどう感じてくれるかという実験をしたわけです。そうしたら予想以上に皆さんいろいろ喜んでくれたんです。

——そうした若い人たちの動きが、次世代のデザインを生み出していくメイン・ストリームになっていくんでしょうね。

そうだと思います。今回の展覧会でも新しい流れを若い人たちに感じたので、もっと椅子に興味をもってもらえるような企画をして、今までの業界の動きとは違う日本発の新しいウェーブをみんなで生み出していきたいと思います。例えばミラノに「サローネ」という家具の展示会の時に行くと、街中が家具のショールームになっているんですね。夜はいろんなところでパーティーがあって、そこに世界中からバイヤーやジャーナリストが集まってくるわけです。東京もあと少しでミラノのようになれるような気が僕はしています。決してミラノのデザインが素晴らしいということではなく、街全体がデザイン発信力を持っていて、一般の人やジャーナリズムを巻き込んだ形で世界にメッセージを発信していくところがすごいと思うんです。そうすることで一般の人にとって受け入れられるのかをデザイナーが知ることってとても大切ですよ。

(1998年11月25日 BC工房にて)



一番人気だった上田麻朝の作品

鈴木恵三(すずき・けいそう)

1947年生まれ。コピーライター、クリエイティブディレクターを経て、1978年BC工房を設立。1994年日本インテリアデザイナー協会奨励賞受賞。

展覧会概要

展覧会名: いすコレ——リビングデザインチェアコレクション'99

新しい、美しい、小さい。椅子A to Z 26点新作発表会

会期: 1998年10月29日(木)〜11月3日(火)

会場: リビングデザインセンターOZONE6階 リビングデザインギャラリー

主催: リビングデザインセンターOZONE

企画プロデュース: 鈴木恵三/BC工房

協力: にっぽんフォルム

写真: 古田陽子/エーランテ

制作者に課された条件は「幅40cm以下、座面までの高さ45cm以上の若い女性向けの椅子」

ちなみに会場アンケートによる人気上位5作品は以下のとおり。

1位: 上田麻朝、2位: 中村守夫、3位: 紫富田啓一、4位: 長大作、5位: 村澤一晃

●フォト・クレジット Photo Credit

Klaus Frahm : 表紙、p.52-56

河西立雄 : p.5、p.22-27

坂口裕康 : p.6-11

坂田峰夫 : p.14-15、p.18-19

今清水隆宏 : p.20-21

藤塚光政 : p.28-33

平賀茂 : p.40

佐藤振一 : p.42

高山幸三 : p.43-47

Paul Ott : p.48-51

Alberto Piovano : p.57-60

久野紀光 : p.62 右上

有田朋代 : p.64 左

浅川敏 : p.64 右下、p.68 左

古田陽子 : p.77-83

上記以外の写真はSD編集部の撮影、もしくは各事務所の提供による。

●編集協力 Cooperation

Albrecht Bangert

日高啓子/CWC

川上典子

田鎖郁夫/エヌ・シー・エヌ

伊比由利江/サン・アド

相田貞夫、相田敬介/家具蔵

河合みなと/ウッドユウライクカンパニー

吉田正之、川名常海/良品計画

鈴木恵三/BC工房

星名利夫/エーランチ

●翻訳協力 Translation

長谷川由紀夫

建築やインテリアに木素材を使う事例を最近多く見かけるようになった。それは加速度的なデジタル化への反動による自然素材・オブジェクト指向か、経済停滞によるローコスト・セルフビルド指向か。いずれにしてもこの企画は、いわゆる一般的な「木造建築」の特集ではなく、時代のテイストとしての「木素材」の特集である。その態度の表明として、個々の建築家の作家性や言語にスポットライトを当てるのではなく、同じフィーリングを共有する作品群がまとまることで時代性を浮かび上がらせようとしている。こうした時代の背景として、デザインする側とそれを受けとめるエンドユーザー側の美的感覚の距離の近さ——ややもすると逆転現象——が最近起こっているのではないか。巨匠や評論家が 대중を啓蒙し牽引していく時代は確実に終焉しつつあり、そのかわりに自分のセンスを持った一般の人々が、局地的かつ同時多発的にライフスタイルをセルフプロデュースするというシンクロニシティが起きはじめている。本特集の中でも紹介した無印良品の木製家具が若者たちに爆発的にうけているのも、単なる偶然では無いはずだ。こうした時代の流れは止まらないであろうし、敏感なデザイナーたちはユーザー・フレンドリーなスタンダード・デザインを模索し「何気ないけど快適な空間」という今日的なフィーリングに具体的な解答を示してくれることだろう。そしてこうした動きが、閉ざされた世界での言葉遊びではない本当の意味での開かれたデザインを作り上げてゆくに違いない。(編集部)



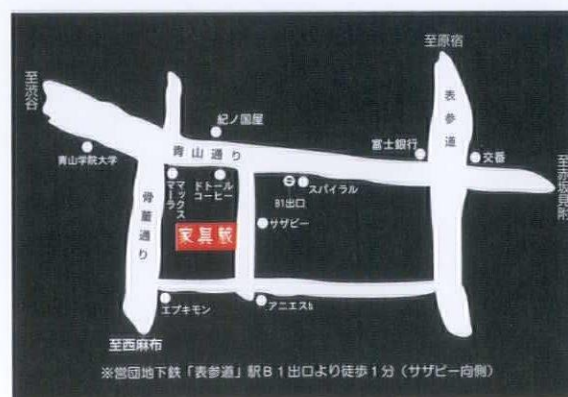
FURNITURE STATION

家具蔵

KA GU RA

- 〒107-0062 東京都港区南青山5-9-5
TEL.03-3797-1700 FAX.03-3797-3196
- 営業時間 AM10:30~PM7:30(年中無休)

※ カタログ無料進呈いたします。



展 覧 会 レ ポ ー ト

アートの力

川俣正の東京プロジェクト New Housing Plan

「一区画すらルーズな場所もなく、警官が街の角かどに駐在している街。これほどまでに住民、或いはお互いどうしが信じられないということ象徴している大都市特有の疎外感の現れが、現在の東京という街なのだろうか。(中略) 口当たりのよい、おとなしいものに対してはさまざまな特権を与え、粗野なもの、みだりに人が錯乱するように見えるものについては厳しく取り締まる。都市はブリーチアウトされ、ますます多文化的な包容力をそぎ落とされていく。このような中で、いわゆるアート、特にパブリックな場や大都市の中で展開されるアートというのは、この街で果たして可能なのか。これが自分にとって今回の東京プロジェクトのテーマである。」(会場揭示のコンセプト文より引用)

4月10日まで、東京目黒のギャラリー・ドゥーで開催されている川俣正の「東京プロジェクト——New Housing Plan」は、管理された都市の中でアートという口当たりのよい隠れ蓑を利用して、個人の自由な発想であるく自動販売機の家><ビルボードの家><工事用フェンスの家>という3つの住宅プランを都内に設置、体験居住しようというものである。

それぞれの住宅は、自動販売機、街道沿いにある大きな看板、工事用の鉄板でできたフェンスと、町中にあるごくありふれたものの裏側に計画されている。実際1998年の年末に東京都内に設営、1週間の間だけ人が住んだのち解体され、住人の記録と痕跡を残したまま、ギャラリー内に再構成されている。

この住宅プランを考えるきっかけとして川俣は、海外での活動の後、日本に帰国すると自動販売機が存在が非常に気になったことをあげている。それは、阪神大震災直後の町に一定の距離を空けてぼつんぼつんと自動販売機が並んでいた風景とも重なり、自動販売機は川俣にとって、安全で豊かな国の象徴のように感じられたようだ。その自動販売機を使って、最初に引用した「たくらみ」を展開させたということだ。

時代背景を的確に捉えながら、アートが持つ社会的役割を果たし、アノニマスなものを使いながらも非常に個性的なアイデアを展開していくところが川俣の作品の特徴だろう。

そして、川俣の作品は決しておしつけがましいところがなく、しかも使われる素材はごくありふれたものであるため、鑑賞者にとって非常に自分と結びつけやすい作品になって

川俣正「東京プロジェクト——New Housing Plan」

展覧会

会期：1999年1月22日（金）～4月10日（土）

11:00～18:00 日曜・月曜・祝日は休館

会場：ギャラリー・ドゥー [galerie deux]

東京都目黒区柿の木坂2-10-17 TEL: 03-3717-0020

シンポジウム

会期：1999年1月22日（金）

会場：ギャラリー・ドゥー 展覧会会場

隈研吾(建築家)、小林康夫(東京大学教授、表象文化論)、川俣正

いるのもうひとつの特徴だ。この作品の魅力と川俣本人の人間の魅力で、川俣は多くの人間を巻き込みつつ、作品をつくり続けているのではないかと思う(今回のプロジェクトで言うなら、体験居住者はその筆頭だろう)。

展覧会初日に隈研吾氏、小林康夫氏を招いて行われたシンポジウムでも、川俣の作品についてまさに三人三様の発言がなされ、それぞれが話したいことを話し、お互い刺激され、満足していたのが印象的だった。

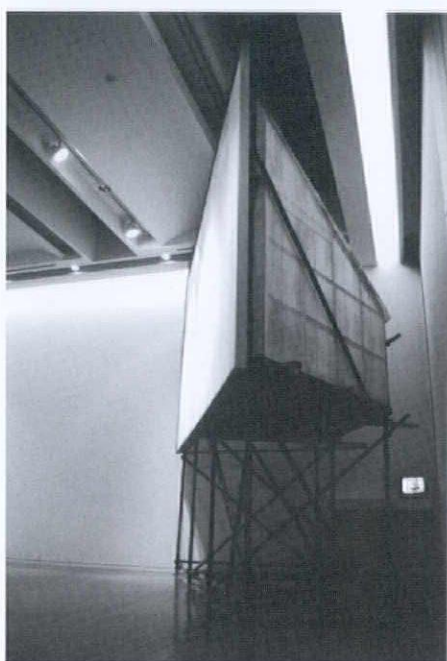
川俣は今後もこのプロジェクトを進め、女性用住宅や、夫婦用、家族用などのバリエーションをつくりつつ5～6回は継続していきたいと語っている。(Y.O.)



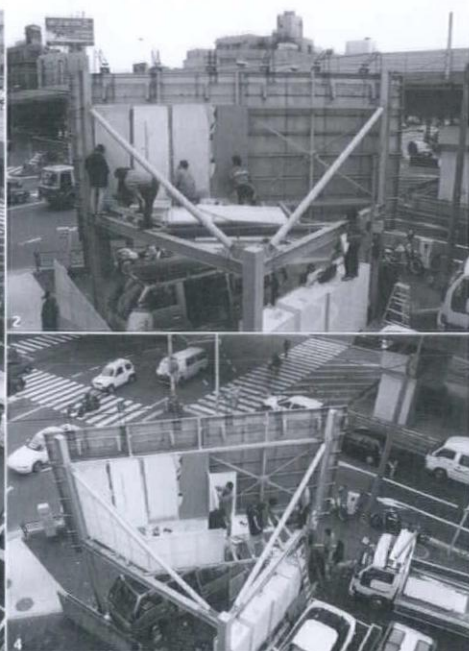
会場展示風景 工事用フェンスの家



会場展示風景 自動販売機の家



会場展示風景 ビルボードの家



ビルボードの家

設営場所：東京都大田区南千束1丁目（瀬田交差点）

設営日：1998年12月12日～13日

生活期間：1998年12月21日～27日

撤去日：12月28日

1：設置場所は環七と中原街道の交差点の一角。交通量、人通りも多い。敷地の両サイドはマンションと駐車場。午前中に自動販売機の家を組み立てた後、午後1時30分頃から作業にとりかかった。使わ

れる材料は外壁の波板を除きほとんどが再利用品。

2、3：足場を組み、壁面を立ち上げはじめる。人が住むことから安全への配慮のために、作業は設営のプロの東京スタジオにより進められた。

4：ドアが取り付けられ、昇り降りをする梯子の設置位置が検討される。床までの高さはほぼ2m。

5：屋根のつなぎ合わせ作業。意外に大きいので驚く。川俣は一日中立ち会っていたが、どこか手持ちぶさたで、つい手を出したくなっているようだ。

6：屋根の取付。看板の支持構造に沿ったシンプル

な形がほぼ出来上がる。

7：午後6時頃日没。同時に看板に当てられる強烈なライトが点灯。周囲はかなり明るくなる。

部屋の内部にはカーペットも敷かれ、梯子の設置位置や、収納方法なども決定した。

午後6時半頃、作業終了。

8：左から、ビルボードの家に住んだ田村岳男さん、川俣、自動販売機の家に住んだ野崎恭治さん。ふたりとも、嬉しさと心配が半分の表情で設営に立ち会っていた。



自動販売機の家

設営場所：東京都世田谷区用賀1丁目

設営日：1998年12月12日～13日

生活期間：1998年12月14日～21日

撤去日：12月28日

場所は国道246号線沿いのガソリンスタンド跡地。敷地の突端にへの字形に並ぶ5台の自動販売機の底辺を結んだ

ような形に作られた。

川俣は自動販売機から出る温風によって暖を取り、ジュースの売り上げによって暮らしていけるのではないかと考えているようだ。

居住者は自転車で近辺（多摩川グラウンドや世田谷公園など）を散策し、その軌跡を地図の上に記録してある。

写真提供＝ギャラリー・ドゥ



工事用フェンスの家

設営場所：東京都杉並区荻窪2丁目

設営日：1998年12月18日～19日

生活期間：1998年12月21日～27日

撤去日：12月28日

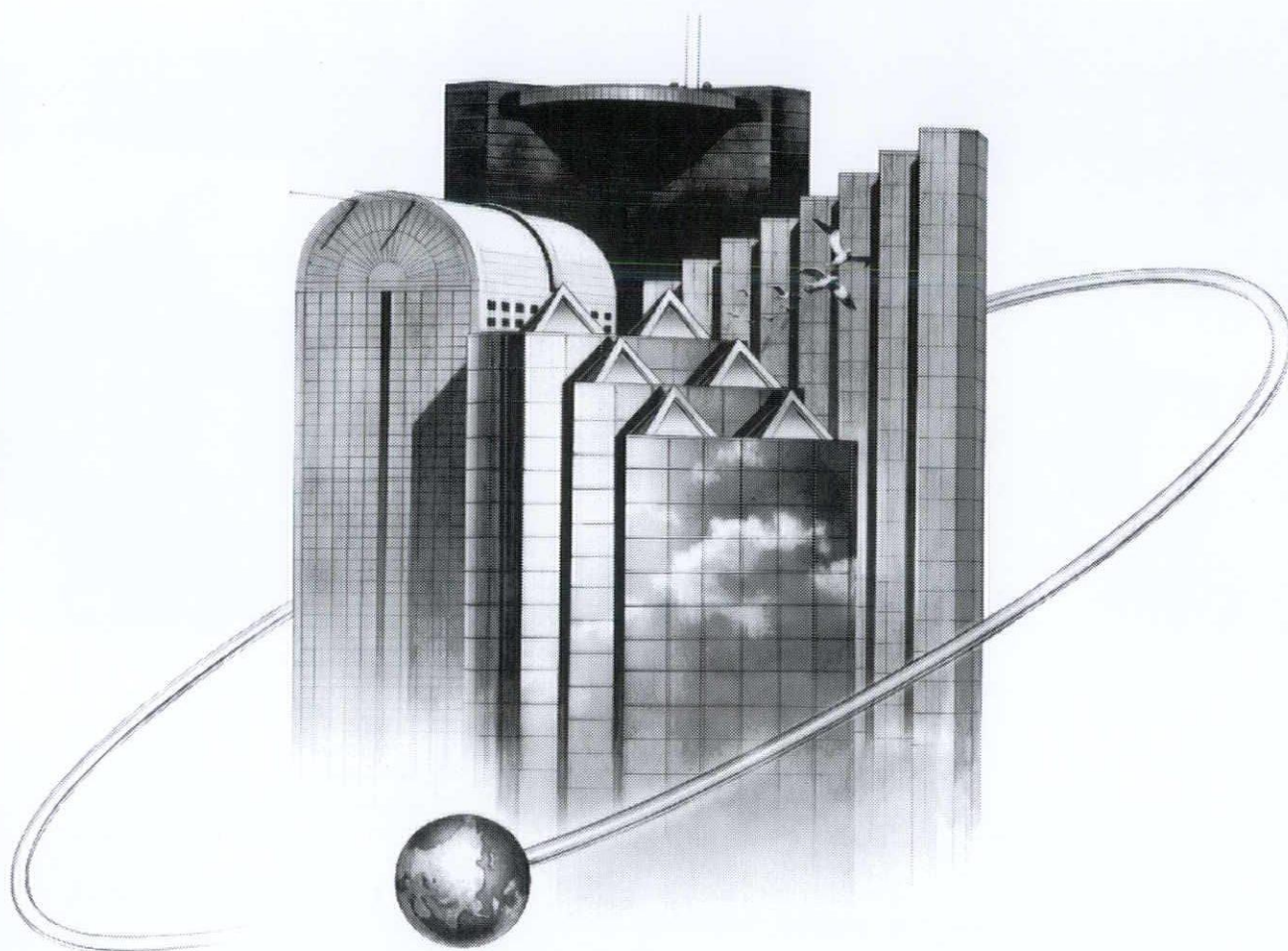
場所は世田谷線上新野駅のそば。現在空き地。フェンスの裏側にある部屋は細長い3角形になっている。使用素材

も他のふたつとほぼ同じもの。バス停も近く、人通りも多い。バスの運転手は、止まる度に怪訝な顔で見ていたようだが、誰も訪ねてこなかったとのこと。

部屋の面積では一番狭かったにも関わらず、家具を設置したり、ポスターを貼るなど、3つの中で一番生活感がある部屋になった。

写真提供＝ギャラリー・ドゥ

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111



The Entropic Forest

Urban Infrastructure

photographs Heiner Schilling text Hiroo Yamagata

連載—3

エントロピーの森：都市のインフラストラクチュア

写真 ハイナー・シリング / 文 山形浩生

photograph 1



photograph 2



考えてみれば、道から降りたのはもう8年ぶりのこと。もつともそのとき、彼はすでに考えたりできなくなっていたのだけれど。

13年前、職を無くして4年目に妻と離婚、家を持つていられけ。以来、ずっと路上だ。昔は一般道だった。昼間は路駐規制が厳しいのでひたすら走り続ける。夜は取締りの甘いところで寝る。でも首都高速に自動走行レーンが完成してからは、すべてが変わった。

いったん高速に乗ってしまえば、特に不自由はない。あちこちの路側帯には、彼のようなモバイラー相手の店も出ている。同類は多い。問題は金だ。支払いはカードで済むけれど、貯金もいつまで保つかわからない。だから高速の乗り降りはいっさい避ける。

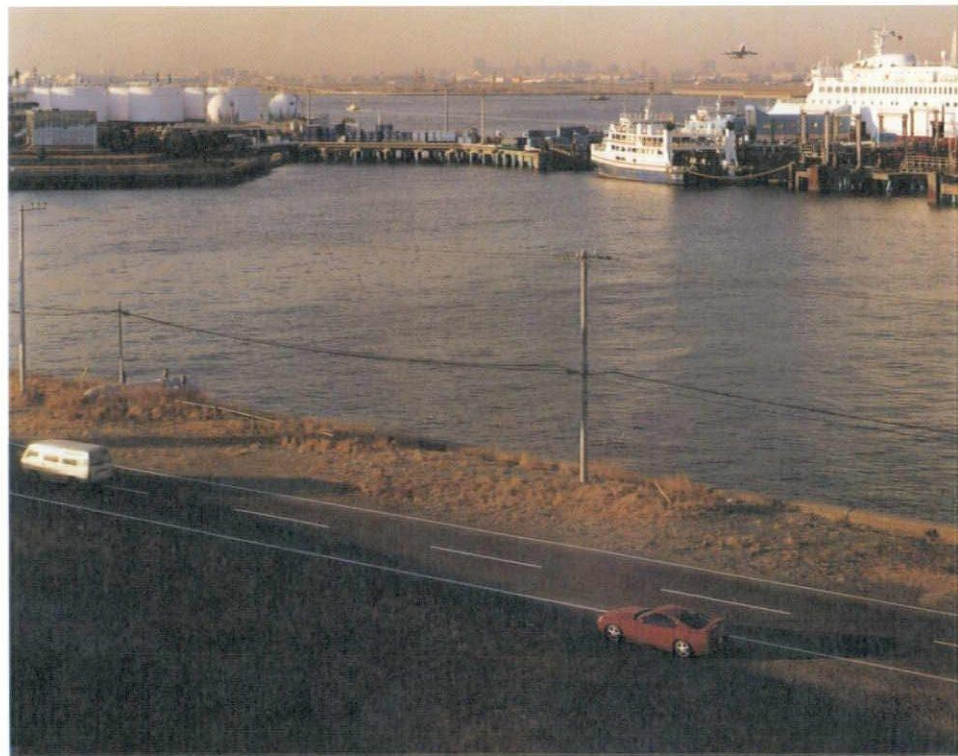
さらに多くのモバイラーは、駆動用電池節約のため、自走車線でコンボイ走行中の無人自走貨物車両にアームをつないで、自分のモーターを切る。昼間はもつぱらそうやってひたすら充電に費やす。貨物車がコンボイ離脱信号を出したところで、アームを外して次の車を探せば良い。

自動走行の車両群を見たことがあろうか。数十台の車両が、わずか30cmほどの車間距離で一団となって、時速100km以上で走り続ける。それと併走しつつ割り込み信号を出す、ゲートが開くように車間が空いて、自分の車がそこに吸い込まれる。頭ではわかるけれど、毎回胸と背中に冷や汗がにじむ。やがて気がつくと、前後左右すべてに無人の巨

大な自走貨物車が迫っている。その運転席にはだれもいない。ときどき、このまま押し潰されそうな閉所恐怖症じみた気分にとらわれて、胸に刺すような痛みが走った。

自走貨物車は一日でわかる。まったく同じ規格の白トラック。広大なヤードにそれらが果てなく並んでいるけれど、どこだか思い出せない。思い出す気もない。路上に居る限り、「どこ」を意識することはない。ただ動き続ける。動き続けさえすれば、それでいい。世界のすべてが道路だ。道だけが彼の世界。いや、道すら意識することはあまりない。この狭い車の中だけ、もはや彼の持つすべてだった。その中のテレビと電話とメール——もうそれ以外には興味も無かった。

『On the Road』



photograph 3

2043年7月10日:

10日未明、首都高速箱崎インター付近で、乗用車が自動走行車線からの離脱に失敗。一般車線の車両5台とコンボイ走行中の車両群23台を巻き込んで、死者3名、重軽傷者8名の惨事となった。警察では被害者の身元確認などを急いでいる。

調べによると、乗用車はアームでコンボイ走行中の車両に接続しており、離脱の際にアームの切り離しが間にあわなかった模様。そのままコンボイに引きずられる形で一般車線の車両に次々に追突。そのうち2台が自走車線に突入してコンボイ全体が一気に玉突衝突状態となった。事故の影響で首都高速の一部では道路封鎖が続いており、都民の足への影響が懸念されている。

たまたま、道から車が消えることがあった。たいていは事故処理で道が封鎖されるためだけれど、ときにはなんの理由もなく、ぽつかりと空白地帯が開ける。そのまれな機会に、一般車線で車を最大速度まで上げてみる。それがいかに、唯一の「解放」の瞬間だった。

死ぬ間際。そのときにもそんな瞬間があった。だれもなにもいない、暗い車線を、彼一人が走っている。ふと彼は、道に見られているような気がした。また胸が痛い。

2043年7月15日:

14日深夜、首都高速平和島付近で、路肩に停車中の乗用車の中から森沢一郎さん(84)の遺体が発見された。死因は心筋梗塞。遺体は死後2日を経過しており、森沢さんの死後も自動走行のまま車が走り続けたために発見が遅れた。電池が切れて自動走行から排除された時点でやっと発見につながった模様。

車両の記録によると、森沢さんが首都高速に入ったのは何と8年前。森沢さんにとっては8年ぶりの悲しい「地上への帰還」といえそうだ。

photograph 1: 首都高速道路 川崎浮島ジャンクション / photograph 2: 首都高速道路湾岸線 大黒埠頭 / photograph 3: 首都高速道路湾岸線 浮島付近(地下)

Neo-Cortex City

森ビル都市デザインコンペは、作品の提出、審査、公開といったコンペの過程をコンピューター・ネットワークを中心に展開し、デジタルデザインの可能性を探るという意図で開催されている。今年は「全脳型都市」という抽象的なテーマに、双方向性を重視したWEB形式での作品提出という難易度の高い課題設定にもかかわらず、応募登録は71点を数えた。

課題：人間の発想を、テクノロジーによって実現した世界が都市であるなら、それは人間の脳が外化してできた都市と言えるのではないのでしょうか。それを、ここでは大脳新皮質型都市（Neo-Cortex-City）と呼びます。脳は、爬虫類、哺乳類、人類という3層構造を持つと言われています。大脳新皮質／知性（人類の部分）が発達し、本能とよばれる生物学的な欲求が抑圧され、新皮質だけが外化した結果、経済的、社会的、文化的活動に適しても生物学的／身体的条件にはあまり適合していない都市となった、とも言えます。そのことが、さまざまな都市問題を生み出している、とも言えるかもしれません。未来の都市は、部分としての三層構造の脳が互いに連関を持ちながら、一個の全体としてのバランスの取れた複雑適応系の外化をめざすべきではないのでしょうか。

審査委員長：隈研吾／建築家、隈研吾建築都市設計事務所

審査委員：浜野保樹／メディア教育開発センター助教授

廣瀬通孝／東京大学助教授

渡辺仁史／早稲田大学教授

森稔／森ビル社長

課題形式：HTMLで記述されたHP形式のもの

主催：森ビル

共催：六本木六丁目計画、マルチメディア都市研究会

企画運営：森ビル文化事業部、レモン画翠

後援：鹿島出版会SD編集部

Whole Brain Station

早稻田大学／遠藤寛子

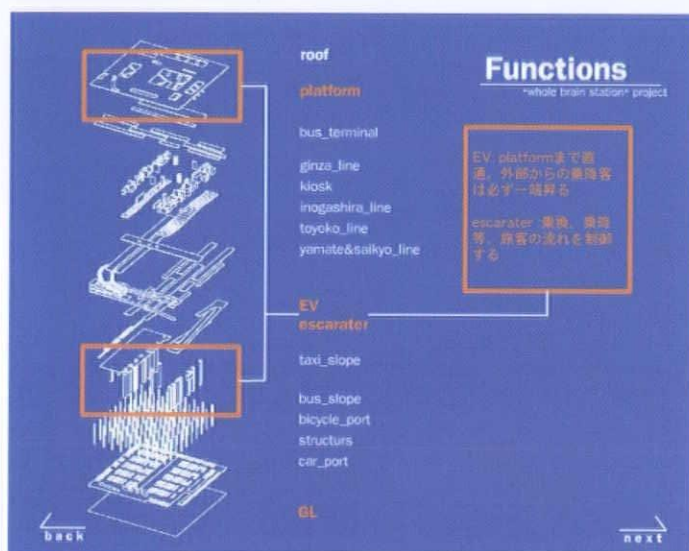
#051

Whole
Brain Station

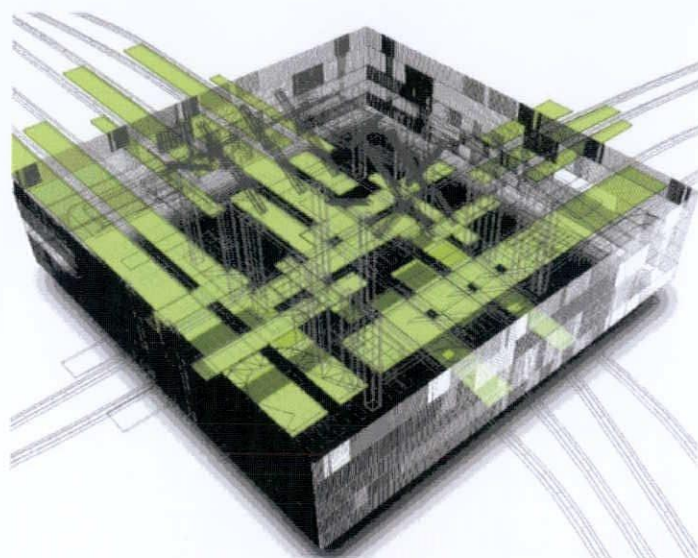
「最優秀作品」
Whole Brain Station

早稲田大学／遠藤寛子

#051



都市の機能を交通手段を軸にした交通情報環境計画。このページでは各層の機能とパスが表示されるようにリンクが張られている



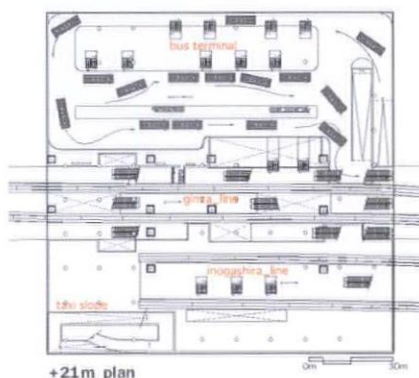
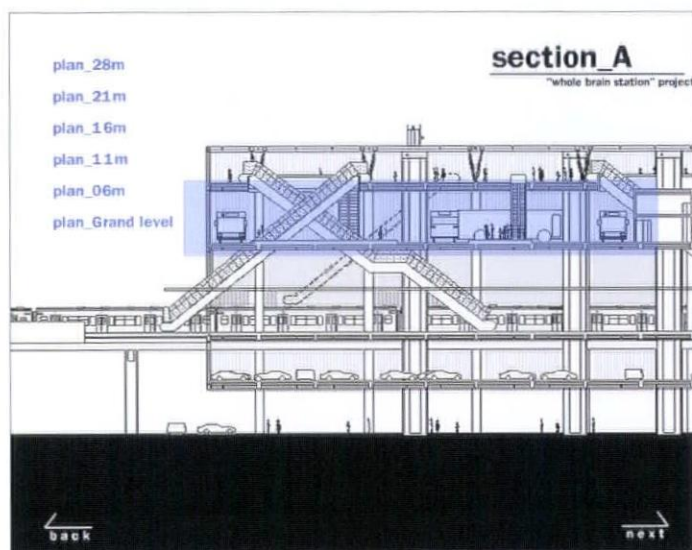
交通移動の流れを「コンピュータ的美学」によって表現している

・脳というのを交通と情報だというふうに置きかえて、都市を情報と交通というふうに関係してしまったところがとてもおもしろい発想。交通を情報と一緒にして解いてやろうというのが21世紀の課題だと思うので、観念的でありながら、なおかつリアルな都市の中への提案となっている。絵が、ちょっとかっちし過ぎているという感じもあるけれども、密度はかなり高いものがある。(隈)

・エントリー・ナンバー58の「Diagram on JAVA」がわりと分散型の都市の提案で、これがプラットフォームというか、ステーションを集約した作品。僕はどちらかと言えば分散的なのが好きだから、58に入れましたが、この作品も提案としてはすごくきれいで、インターフェースも非常に優れている。建築家の目で駅の色々な機能をこうやって集約的に1カ所に持ってくると、いいものができるのですね。(浜野)

・電車が動いたり、人間が動いたり…。だから、単純にプレゼンテーションを見てもいろいろ工夫がなされているし、交通の問題と情報の問題が一緒になってという意味でも好感を持ちました。雰囲気すごくかわいいし。それなりのツールの使い方をしているなという感じがしました。

入選作品の中では、「建築」らしいものが少ないので、そういう意味では建築に出会ったという感じがする。(廣瀬)



断面図と平面図はすべてリンクしている。また、バスターミナル、地下鉄といった平面図上の各エリアにもリンクが張られている

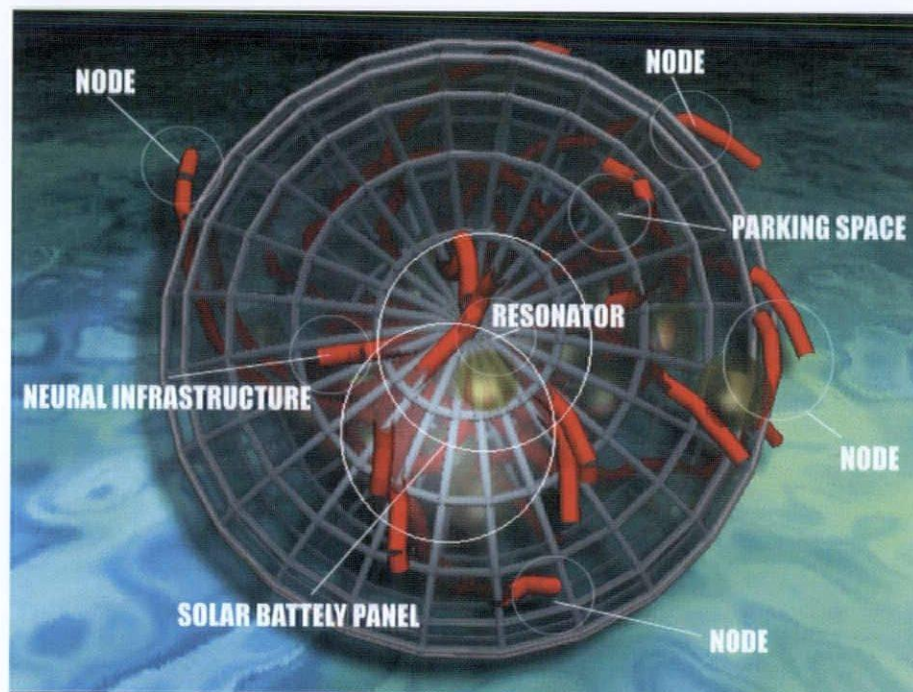


Transmigration City

[最優秀作品]

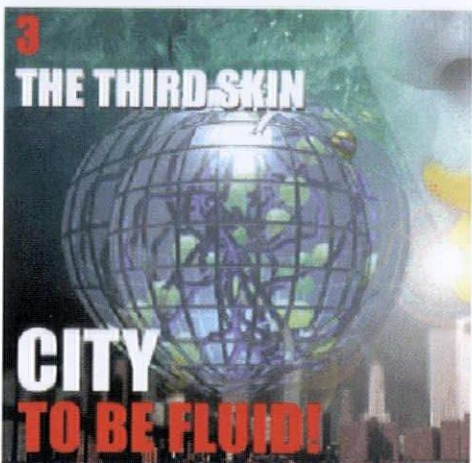
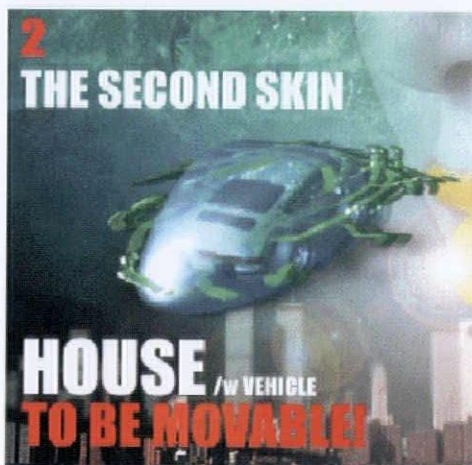
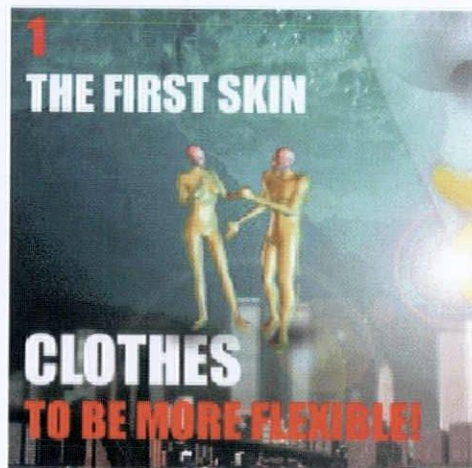
Transmigration City

京都大学 / 田中浩也

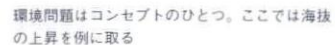


脳の自己組織的な神経のネットワークをモデルとした都市を提案。人間を人工的に覆う被覆を衣服、住居、都市の3層構造とみなし、その最外郭である都市を自己生成的、自己組織的な有機的構築として海中あるいは海上に構想している。

画像をゆらゆらと漂わせることによって海上の都市を表現している。



100



#012

二層分離型都市

二層分離型都市

北海道工業大学 / 小平真巳

・コルビュジエの都市もこうやって実際に動いてアニメーションでつくると、きっとすごく新鮮に見えるだろう。動きというものが都市にとって大事だということを示している点で、大変おもしろい案だと思う。確かに上の建物がうまく描かれていると二層がきちんと表現されたのだが。(隈)

・視点の移動など、ムービーのつくりかたはうまい。(浜野)

・建築の素人からすると、上層も、わりと気持ち良さそうな空間に見える。CGとしてのつくり込みもかなり一生懸命やっている。(廣瀬)

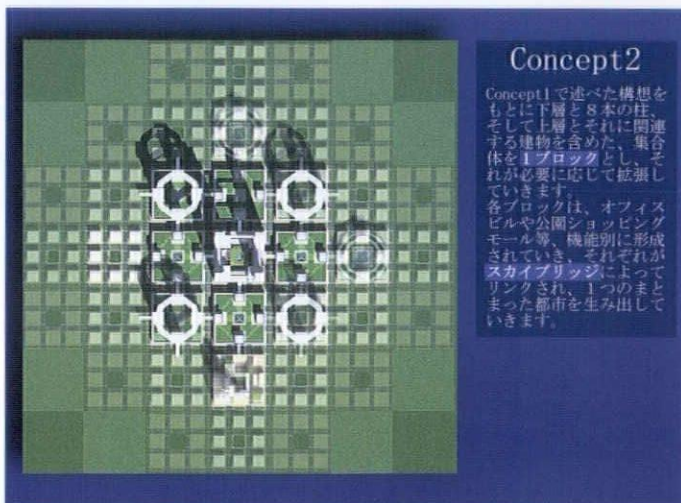
・人工地盤の下をうまく使って、あんな風だといいなと思うことを、ちゃんと表現している。橋の扱い也非常にうまい。車レベルと歩行者レベルを分けて、しかも車レベルでもちゃんと太陽が差し込んでいる。道路という場を限定しないで、建物の中をどんどん抜けていけばいいじゃないかという考え方もいい。上のタワーにももう少し存在感があればいいが、おもちゃのようなのが残念。(森)



Concept 1

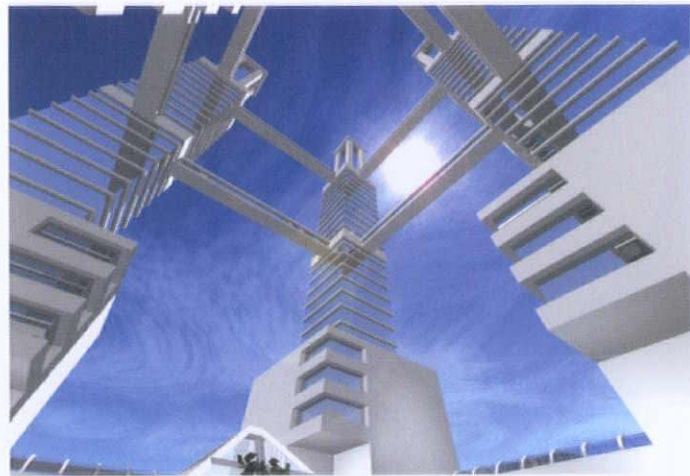
人間の生み出した自動車は、現代の生活において必要不可欠な存在となりました。そして、それが都市のシステムの一部となってきたとき、そこで活動する人との複層的な共存が始まったように思えます。実際に都市という空間を歩いてみると、そこに、沢山の人が車や車がひっきりなしに動き回り、互いにうつつうしいと思っているのにどうすることもできない、といったジレンマを感じます。そういったことが人間の生物学的欲求をからめた都市問題へと発展しているのではと考えました。

このようなことから、単純に人と車との活動場所を二層に分離し、下層を車が走り、上層を人が歩く『二層分離型都市』を構想しました。そして3次元のイメージをワークグラフィックによって表現し、そこから生まれる仮想現実都市の視覚的情報をもとにインターネットを通じてより多くの人と共に考えていければと思います。



Concept 2

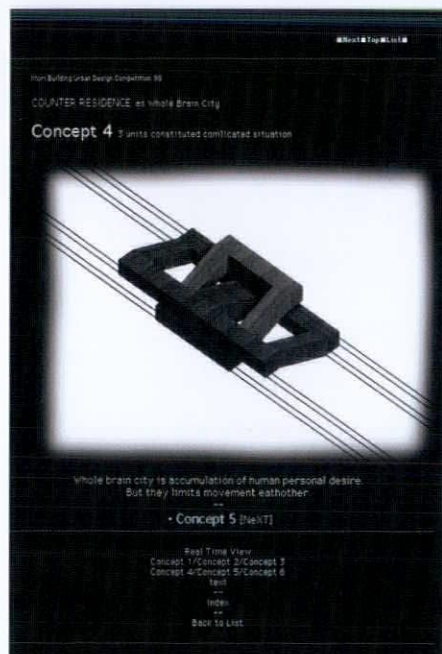
Concept1で述べた構想をもとに下層と8本の柱、連合集合として上層とそれらに囲まれる建物を含めた、1つのブロックを必要に応じて拡張していきます。各ブロックは、オフィスビルや公園、ショッピングモール等、機能別に形成されていき、それぞれがリンクされていく。スライディングによってリンクされ、一つのまとまった都市を生み出していきます。



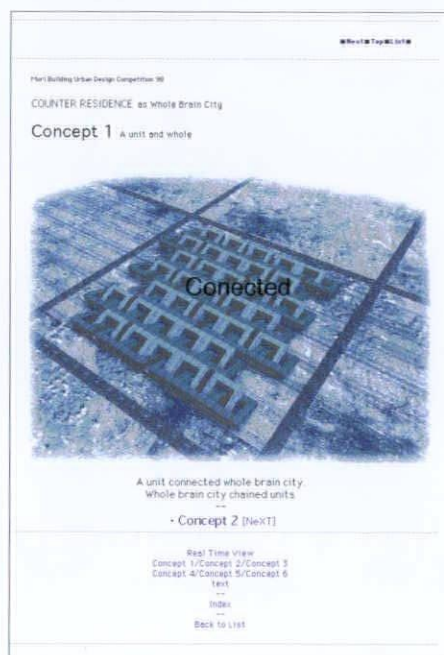
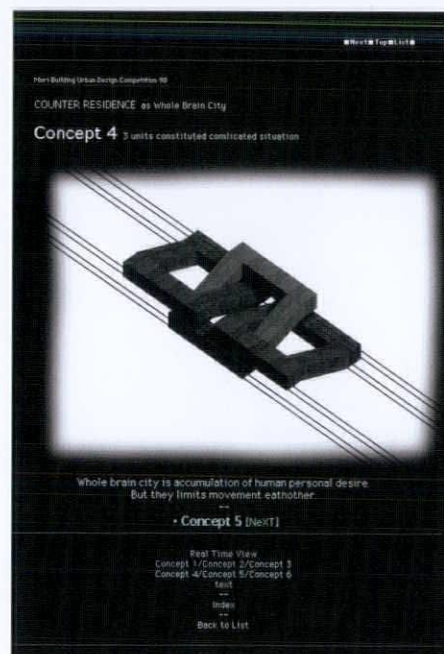
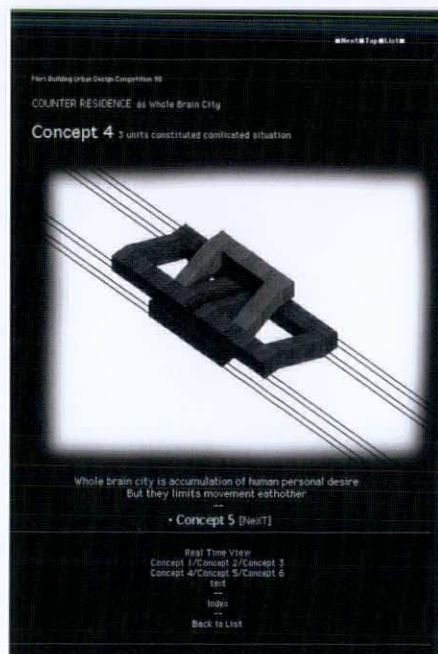
アニメーションで各所を見せる。視線の設定が非常に巧み



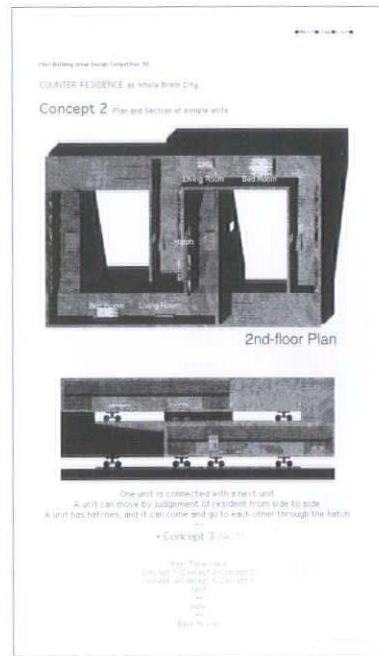
Counter Residence



ひとつのユニットが3つ、4つ……11と増えて場ができ、線が浮かび上がる。それが連なることによって、都市が形成されていく



・家が動くという発想がいい。実際にこれがリアルな家と考えると、とても精緻なユニットになっているので、可変性が図形の問題になってしまっているというところが弱点だろう。(廣瀬)



1st-floor Plan

1st-floor Plan

Section

One unit is connected with a hard link.
A unit can move by judgement of resident from side to side.
A unit has hatches, and it can come and go to each other through the hatch.

• Concept 3 (Unit)

Real Time View
 (Left) Unit 1 (Center) Unit 2 (Right) Unit 3
 Concept 4 (Center) Unit 4 (Right) Unit 5
 Unit 6
 Unit 7
 Unit 8
 Unit 9
 Unit 10
 Unit 11
 Unit 12
 Unit 13
 Unit 14
 Unit 15
 Unit 16
 Unit 17
 Unit 18
 Unit 19
 Unit 20
 Unit 21
 Unit 22
 Unit 23
 Unit 24
 Unit 25
 Unit 26
 Unit 27
 Unit 28
 Unit 29
 Unit 30
 Unit 31
 Unit 32
 Unit 33
 Unit 34
 Unit 35
 Unit 36
 Unit 37
 Unit 38
 Unit 39
 Unit 40
 Unit 41
 Unit 42
 Unit 43
 Unit 44
 Unit 45
 Unit 46
 Unit 47
 Unit 48
 Unit 49
 Unit 50
 Unit 51
 Unit 52
 Unit 53
 Unit 54
 Unit 55
 Unit 56
 Unit 57
 Unit 58
 Unit 59
 Unit 60
 Unit 61
 Unit 62
 Unit 63
 Unit 64
 Unit 65
 Unit 66
 Unit 67
 Unit 68
 Unit 69
 Unit 70
 Unit 71
 Unit 72
 Unit 73
 Unit 74
 Unit 75
 Unit 76
 Unit 77
 Unit 78
 Unit 79
 Unit 80
 Unit 81
 Unit 82
 Unit 83
 Unit 84
 Unit 85
 Unit 86
 Unit 87
 Unit 88
 Unit 89
 Unit 90
 Unit 91
 Unit 92
 Unit 93
 Unit 94
 Unit 95
 Unit 96
 Unit 97
 Unit 98
 Unit 99
 Unit 100
 Unit 101
 Unit 102
 Unit 103
 Unit 104
 Unit 105
 Unit 106
 Unit 107
 Unit 108
 Unit 109
 Unit 110
 Unit 111
 Unit 112
 Unit 113
 Unit 114
 Unit 115
 Unit 116
 Unit 117
 Unit 118
 Unit 119
 Unit 120
 Unit 121
 Unit 122
 Unit 123
 Unit 124
 Unit 125
 Unit 126
 Unit 127
 Unit 128
 Unit 129
 Unit 130
 Unit 131
 Unit 132
 Unit 133
 Unit 134
 Unit 135
 Unit 136
 Unit 137
 Unit 138
 Unit 139
 Unit 140
 Unit 141
 Unit 142
 Unit 143
 Unit 144
 Unit 145
 Unit 146
 Unit 147
 Unit 148
 Unit 149
 Unit 150
 Unit 151
 Unit 152
 Unit 153
 Unit 154
 Unit 155
 Unit 156
 Unit 157
 Unit 158
 Unit 159
 Unit 160
 Unit 161
 Unit 162
 Unit 163
 Unit 164
 Unit 165
 Unit 166
 Unit 167
 Unit 168
 Unit 169
 Unit 170
 Unit 171
 Unit 172
 Unit 173
 Unit 174
 Unit 175
 Unit 176
 Unit 177
 Unit 178
 Unit 179
 Unit 180
 Unit 181
 Unit 182
 Unit 183
 Unit 184
 Unit 185
 Unit 186
 Unit 187
 Unit 188
 Unit 189
 Unit 190
 Unit 191
 Unit 192
 Unit 193
 Unit 194
 Unit 195
 Unit 196
 Unit 197
 Unit 198
 Unit 199
 Unit 200
 Unit 201
 Unit 202
 Unit 203
 Unit 204
 Unit 205
 Unit 206
 Unit 207
 Unit 208
 Unit 209
 Unit 210
 Unit 211
 Unit 212
 Unit 213
 Unit 214
 Unit 215
 Unit 216
 Unit 217
 Unit 218
 Unit 219
 Unit 220
 Unit 221
 Unit 222
 Unit 223
 Unit 224
 Unit 225
 Unit 226
 Unit 227
 Unit 228
 Unit 229
 Unit 230
 Unit 231
 Unit 232
 Unit 233
 Unit 234
 Unit 235
 Unit 236
 Unit 237
 Unit 238
 Unit 239
 Unit 240
 Unit 241
 Unit 242
 Unit 243
 Unit 244
 Unit 245
 Unit 246
 Unit 247
 Unit 248
 Unit 249
 Unit 250
 Unit 251
 Unit 252
 Unit 253
 Unit 254
 Unit 255
 Unit 256
 Unit 257
 Unit 258
 Unit 259
 Unit 260
 Unit 261
 Unit 262
 Unit 263
 Unit 264
 Unit 265
 Unit 266
 Unit 267
 Unit 268
 Unit 269
 Unit 270
 Unit 271
 Unit 272
 Unit 273
 Unit 274
 Unit 275
 Unit 276
 Unit 277
 Unit 278
 Unit 279
 Unit 280
 Unit 281
 Unit 282
 Unit 283
 Unit 284
 Unit 285
 Unit 286
 Unit 287
 Unit 288
 Unit 289
 Unit 290
 Unit 291
 Unit 292
 Unit 293
 Unit 294
 Unit 295
 Unit 296
 Unit 297
 Unit 298
 Unit 299
 Unit 300
 Unit 301
 Unit 302
 Unit 303
 Unit 304
 Unit 305
 Unit 306
 Unit 307
 Unit 308
 Unit 309
 Unit 310
 Unit 311
 Unit 312
 Unit 313
 Unit 314
 Unit 315
 Unit 316
 Unit 317
 Unit 318
 Unit 319
 Unit 320
 Unit 321
 Unit 322
 Unit 323
 Unit 324
 Unit 325
 Unit 326
 Unit 327
 Unit 328
 Unit 329
 Unit 330
 Unit 331
 Unit 332
 Unit 333
 Unit 334
 Unit 335
 Unit 336
 Unit 337
 Unit 338
 Unit 339
 Unit 340
 Unit 341
 Unit 342
 Unit 343
 Unit 344
 Unit 345
 Unit 346
 Unit 347
 Unit 348
 Unit 349
 Unit 350
 Unit 351
 Unit 352
 Unit 353
 Unit 354
 Unit 355
 Unit 356
 Unit 357
 Unit 358
 Unit 359
 Unit 360
 Unit 361
 Unit 362
 Unit 363
 Unit 364
 Unit 365
 Unit 366
 Unit 367
 Unit 368
 Unit 369
 Unit 370
 Unit 371
 Unit 372
 Unit 373
 Unit 374
 Unit 375
 Unit 376
 Unit 377
 Unit 378
 Unit 379
 Unit 380
 Unit 381
 Unit 382
 Unit 383
 Unit 384
 Unit 385
 Unit 386
 Unit 387
 Unit 388
 Unit 389
 Unit 390
 Unit 391
 Unit 392
 Unit 393
 Unit 394
 Unit 395
 Unit 396
 Unit 397
 Unit 398
 Unit 399
 Unit 400
 Unit 401
 Unit 402
 Unit 403
 Unit 404
 Unit 405
 Unit 406
 Unit 407
 Unit 408
 Unit 409
 Unit 410
 Unit 411
 Unit 412
 Unit 413
 Unit 414
 Unit 415
 Unit 416
 Unit 417
 Unit 418
 Unit 419
 Unit 420
 Unit 421
 Unit 422
 Unit 423
 Unit 424
 Unit 425
 Unit 426
 Unit 427
 Unit 428
 Unit 429
 Unit 430
 Unit 431
 Unit 432
 Unit 433
 Unit 434
 Unit 435
 Unit 436
 Unit 437
 Unit 438
 Unit 439
 Unit 440
 Unit

Diagram on JAVA

[隈賞] #058

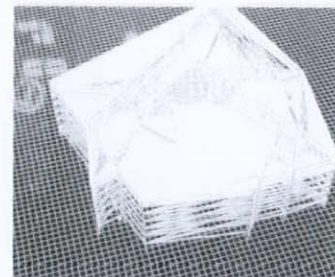
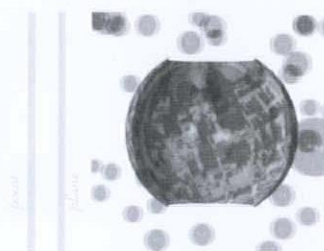
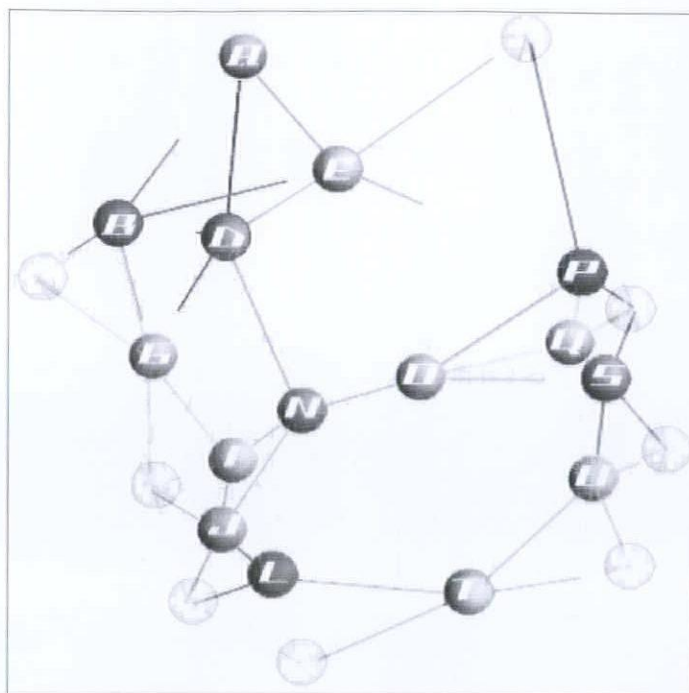
Diagram on JAVA

早稲田大学／植村武彦

・面からなる所有形態を点の所有形態に変えていくという点が面白い。点のネットワーク型というか、そういう情報型の所有形態に世の中は変わっていくというコンセプトが面白い。ところが一番最後に出てくる絵がグリッドの建物で、わりと普通の建物が出てきてしまっていて、最初のコンセプトがこういう建物になってしまったのは残念。(隈)

・ネットワークのコンセプトをそのままよく図式化している。多くの線で結ばれているイメージが出てくるが、それをそのまま町にしているという単純さが、それも有り得る選択肢かもしれないという気で見た。(浜野)

・ネットワーク型のものを建築というハードのものに置きかえるというのは誰も答えが出ていないことだが、これは悩まずに植物的に描いている。(廣瀬)



「面」の所有形態を「点」の所有形態に変換して、量を持たない、「他」との相関性によって位置が決定する点により構成される空間を都市スケールにも拡張する」がコンセプト。

OTTO

[浜野賞]

OTTO

早稲田大学／鈴木靖一

#001

・自分の建物から自分が影になって見えないエリアを表現していくというスタート地点はおもしろいが、ここの作品も断絶があって、突然、屋上のガラスの箱になってしまう。ウィーンでこういう屋上のガラスの増築で有名な作品があって、それと酷似しているのは、残念だ。(隈)

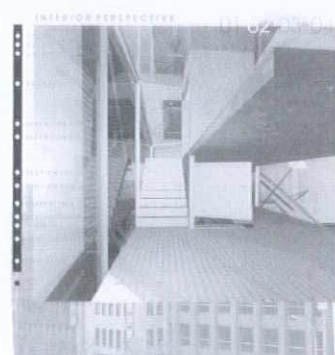
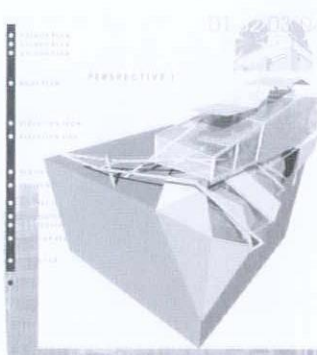
・色使いとかは落ちていて、ホームページの完成度は高いけれど、この建物の写真はあまり評価できない。(浜野)



どこからでも眺められそうな屋上は、実は自由な出入りが禁止されていたり、その面を見るにはより高い建物に上らなければならない。そこで、ひとつの建物の最上階から見た、周囲に見え



る屋上の範囲を平面にプロットしたところ、どこからも見えない部分が出現した。このプログラムは、その空白部分に既存部分の機能と運動した仮設的リハビリテーションを提案している。



自然淘汰型都市

[廣瀬賞]

#029

自然淘汰型都市

大阪工業大学／樋口博彦

・反重力というのは、インターネットの世界ではひとつのキーワードで、コンセプトとしてはわかるが、現実的なのだろうか。情報は重力のないものだから、「反重力」という言葉を好んで使うが、それを物理的にやろうという。ただイメージがあまりに「ラピュタ」に近過ぎる。(浜野)

・12番は安心して見たけれども、テーマを意識してみれば、3次元構造になっていて、この作品はまさに「脳」のイメージ。こんな都市があってもいい。それに絵がとても綺麗。僕はここで本当に宇宙ステーションをイメージした。無重力の中につくられる宇宙ステーションは物理的に、多分このようなストラクチャになるのだろう。それでもやはり、これが建築なのかという議論は最後まで残った。(廣瀬)



反重力物質を生成するseedを中心にblock—area—cityの順で都市構成がなされる、というコンセプト

#003

日常SWITCH

[渡辺賞]

日常SWITCH

日本大学／吉川栄治

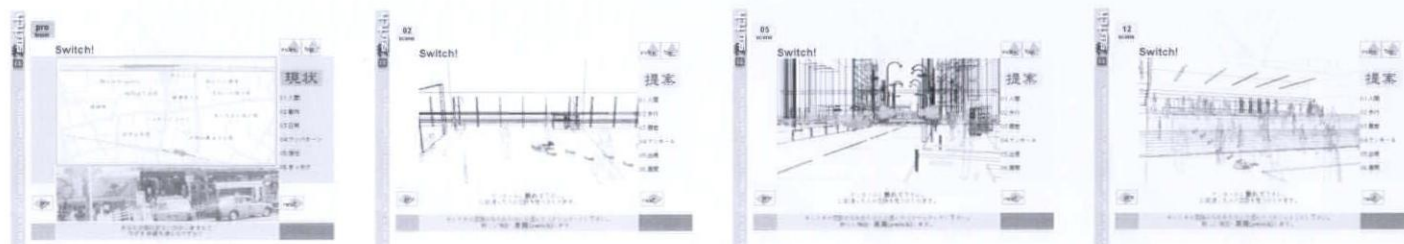
・都市を1つの経路として捉えるという考え方を、すごくはっきりと、しかもかわいらしく表現している点で評価できるが、その捉え方自体が既にそれほど新しい考え方ではないなという感じがしている。表現の問題だけでいえば、単純過ぎる嫌いがある。ちなみにこの作者は、去年、コンビニエンスビークルという作品を出してきた同じチームだが、去年の方が提案性もあって、面白かった。(廣瀬)

・ゲーム的で、見ていて楽しい。ただ、それ以上のものがない。(廣瀬)



J・Gehiの著書「Life Between Building」では、公共で行われる屋外活動を必要活動、任意活動、社会活動の3つに分類している。特に任意活動については、物的な計画の面で特に重要であるとし、屋外空間の質が乏しいときには必要活動しか起こらないという。

このプログラムでは、朝夕は通勤・通学の人々が行き交い、日中は生活者の活動の場となる近隣住区の屋外空間に非日常性を持ち込み、活性化を試みる。

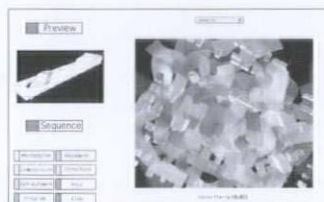
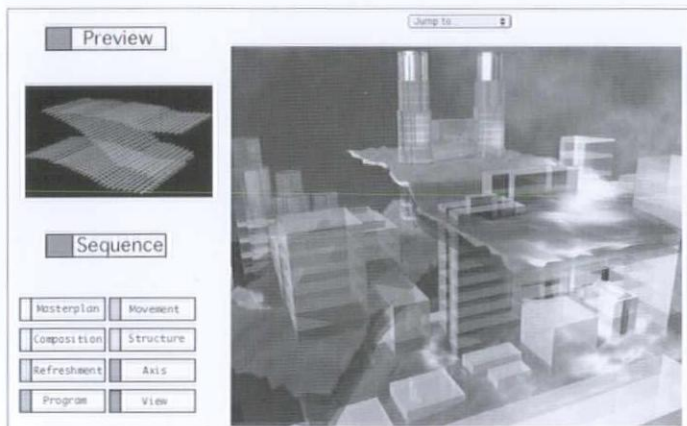


Translayer City

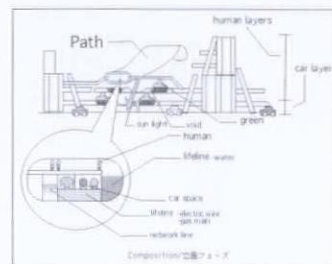
慶応義塾大学 / 山崎晃嗣

[森賞]

#037



超高層の摩天楼群（垂直軸の構造物）に、外部環境の条件によって可変的にプログラムされる新たなランド（水平軸のレイヤー）を設定することを提案。生成されたトランスレイヤーは、縦横の空間に限定されたプロトタイプの都市の活動領域に無限の広がりをつ加せ、結果としてかつての新宿は、全体が巨大な洞窟のような空間になるという。



建築の教育現場での マルチメディアの導入

渡辺仁史

CAD教育はパソコンの普及によって大学のカリキュラムの中で急展開し、さらにインターネットの普及に伴って、まったく新しい学習の場を提供しようとしています。その原動力がマルチメディアであり、学生は製図を中心とした従来のカリキュラムでは考えられなかった新しいデザインの道具と環境を享受できるわけです。鉛筆でエスキースをするだけではなく、デジタルにもその表現すること、つまりモデリングすることが、建築の空間を抽象的にとらえ、客観的に評価するのに役立っています。図面を描くことが、建築設計教育のすべてのように言われていた時代から、意思伝達あるいは表現に関して可能な限りあらゆる方法でプレゼンテーションすることに移行する時代が到来したというわけです。

そこで、これからのデジタル・デザインに求められるのはマルチメディアを使いこなす能力であり、従来言われていたCADマインドとは違った、もっと幅広い柔軟な思考が要求されるわけです。このためにはコンピュータの勉強をするというのではなく、今まで

以上に「柔らかな思考」と「幅広い感受性」、そして「科学的な分析力」を備える必要があり、教育現場でもそれに合わせたカリキュラムあるいは人材の養成が求められることになります（もっとも、これは従来の建築学科の教育の中ですでに伝統的に行われていたことかも知れません）。

しかし、いまやマルチメディアという新しい道具や新しい表現環境を手に入れたわけですから、それに合わせた建築作品の作り方があっていいと思います。今回の都市デザインコンペで最優秀作品となった学生は、学部、大学院を通して、いわゆるCAD教育を受けてきたわけではありません。学部の設計課題でいつも心がけていたのは、人間の行動特性を生かした設計をしたいということで、動線のダイナミックな変化をプレゼンテーションするのに、これまでの図面表現ではどうしても意図が伝わらなかったものが、ホームページにショックウエーブという環境を得て、見事に説明がついたということだと思います。都市の動脈の結節点である「駅」をテーマに、そこでの人と

乗り物と情報の動きを見事にプレゼンテーションしている点で、マルチメディア教育の参考作品ということができると思います。

自由な発想に 期待

森 稔

森ビル都市デザインコンペは、建築や都市デザインに関する課題について作品をデジタルデータのみで受け付けるという、これまでのデザインコンペにはなかった一風変わったコンセプトで企画されました。これには、情報技術の著しい進歩が将来の建築・都市空間の在り様を大きく変えていくであろうという前提に、特に建築や都市計画を学ばれている優秀な学生さん方のフレッシュな感性を通じて、次世代の都市の姿を垣間見ることができるのではないかと期待が込められています。

この度受賞されたいずれの作品も、そういう私の期待に充分応えて頂いたものと大変うれしく思うとともに、我々が計画しているいくつかの都市開発プロジェクトにも取り入れたい刺激的な提案もありました。

今の東京の街づくりに欠けていることは、既成概念にとらわれない自由なイマジネーションとそれらを実現するための不屈の意志ではないでしょうか。寄せられたどの作品も端々しい感性と創造力が横溢し、街づくりの一端を担う者として大いに感化されました。

ツールが創造力を活性化する

コンピュータが変える都市の機能、建築の機能

SD まずは、3年目を迎えたコンペを振り返っていかがでしょうか。

廣瀬 今年は「動き」があります。動きに対するセンスがこの一年間で随分磨かれてきたということでしょうか。

浜野 一番最初のときは、自分が描いたものをスキャンして、ギャラリー的に出していたと思うんです。去年、若干そこに動きが入ってきて、今年はまだそれが当然のようになっている。3次元的な表現もあって。

隈 今回、テーマが割と難しかったと思うんです。「全脳型都市」なんていう、出したほうがよくわかってないのに（笑）。それで前回、前々回は出品者もテーマにかなりまじめに取り組んだと思うけれど、今回は「全脳型」だから、これはもうイメージでやろうと早く

の時代になってそれが単なる夢の段階ではなくて、非常に現実的な問題になってきたんじゃないかなという感じが伝わってくる。可変性やモバイルみたいなものがライフスタイルの全部の領域に入ってきて、ライフスタイルもすべて交換可能になるという時代の空間を表現しようという意欲が感じられます。

廣瀬 51番は、建築は動かないのだけれど、



浜野保樹

その建築の中の人間がどうやって動いていくのかということ、多少稚拙ではあるけれど、上手に表現している点で評価しました。ベッセル（器）としての建築があって、その中に何らかのファンクションがあって、その機能と構造とがどういう関わりになっているのかというのは確かに紙ではわからないわけですね。それを電子メディアという形で初めて表現したという点では、この計画が良いかどうかは別として、なるほどなと思いましたね。

それからこの作品はきちんと「脳」を表現しているんですね。脳というのは、ある種のストラクチュアでありながら、その中で何か情報処理が行われる、つまり機能なんですね。機能とストラクチュアの合体が脳だとするとという意味から言うと、多分この作品はテーマに一番答えていたなと思ったんです。

我々は情報というと、形も何もないものだという思い込みがあるけれど、生き物における情報というのは、臓器としての脳があって、その中で高度の情報処理が行われているという意味においては、実体もあるんですね。ソフトウェアはソフトウェアの専門家が考えていけばいい、ハードウェアは、例えば建築は建築家が考えていけばいいということではないんです。むしろそこには分けがたいものがあるのだというのを、脳ミソが教えてくれているわけですよ。

隈 この51番は少し優等生的過ぎる気もして

ね……。今の駅というものの自体、情報も交通も商業も取り込んだすごいものだけれど、この駅は現状の駅を大幅に出ているものがあるかという、それをきれいにモデリングしただけで、大幅に出ているものというのではないので、そこが不満なんです。

廣瀬 それは素人から見てもよくわかるんですけれどね。ただ、逆にこういうツールを建築家が手にしたときに、そこから新しく展開するというのは必ずあるはずで、これをこういう方法論で次に建築の形が変わってくる、あるいはファンクションが変わってくるというところまで行くと、本当は一番いいんじゃないかな。時間がかかるとは思いますけれど。

浜野 僕も隈さん同様48番がいいと思ったのは、「全脳型」というのは、インテリジェントな街や建物——人間に反応して変化する建物——という感じで捉えていたから、これしかなかったんですね。非常にシンプルでただ動いているだけなんだけれど、何か可能性があったね。最近コンピュータもそこらじゅうに偏在して、人間に反応するわけですね。目に見えない形とか、ウェアブルとかって、着て人間とともに一緒に移動したりするわけだから、建物とか街も人間に反応して動いたり変わっていくという、そういう提案がいっぱいあるのかなと思ったんですよ。そしたら、割に少なくて。文字ではそういうことを書いていても、本当に絵で表現するのは難しいら



廣瀬通孝

しくて。その中で48番は一応動いていて、これは可能性があるんじゃないかなと。

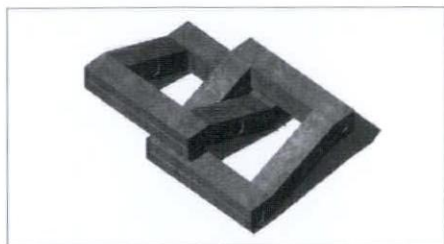
廣瀬 僕は、48番を見ては「建築屋さんはやっぱり重厚長大だ」という感じがしました。大きいものがこうやって動くだけですよ。もうちょっと小さい部品がチマチマと動くというのが本当で、だから、インタラクティブとはちょっと何か違うよなという気持ちがあ



隈 研吾

から割り切ったみたいですね。イメージの作り方や3次元の作り方に技を持っていて、その技だけで勝負したという人がかなりいたと思うんです。今までの建築コンペではまずそういうアプローチはなかったし、デジタルコンペでも、映像的技術で見せようというのとはなかった。難しいテーマを挙げたから、逆に学生が開き直ったところもあるかもしれない。かえって面白い現象が出てきたなと思うんです。

動きという点で言うと、実際に建築物が動くということを表現しようという試みがかなり多くありましたよね。そこが特徴じゃないかな。特に僕が最初に目を引いたのは48番ですね。ユニットがいろいろな動き方をして、それに従って中の平面計画も変わってくるというものを提案している。これは去年までになかった傾向だと思うんです。建築を動かすというのはアーキグラムあたりからの動きで、60年代はそれが建築家のひとつの夢だったけれど、この48番を見ると、コンピュータ



りますね。

隈 それは今までの建築の教育を引っ張ってしまっている部分でしょうね。建築教育というのは、平面図を書いて、壁を書いて、屋根をつくれればおしまい、中の家具なんてスケールがわかる程度に入れておくというようなもので、ましてや家具の上にあるコップなんかは建築の領域じゃないというのだけれど、実はそれでは空間を論じたことにならないでしょう。この机の上のものがどう動いていくとか、僕らにどのように反応してくれるかというのが空間だというくらい、空間概念自身がドラスティックに変わってきている中で、建築の世界はまだついていけない部分があって、こういうふう映像にしてみると、その遅れが重厚長大という形で現れてしまうんですよ。

廣瀬 機械に情報が入ったというのは実は20年ぐらい前からなんです。自動車に例えればカーナビとかいろいろなディスプレイが付き始めたというのが、80年代のはじめでしたね。そのときも最初は機械系の人はその部分が重要だと思っていなかったわけですね。だからモーターショーなんかでコンセプトカーのモルフォロジーは気合いを入れてデザインしても、ディスプレイを見ると、本当に子どものおもちゃみたいなのがバンとはめ込まれていたりというのが割と続きました。ようやく最近になって同じだけの努力が情報系のほうにも投入されるようになってきたんです。こういう分野をメカトロニクスと言いますが、ようやくこなれてきた感じです。最近では「このエンジンは誰が書いた」というくらいです。エンジンはコンピュータ制御されていますから。そこまで来るのにやっぱり10年ぐらいかかっているんですよ。

建築は「誰が書いた」というと、極端な話、建築にある種のプログラム概念を与える、それから動きなんていうときにはまさにプログラムを入れないといけないでしょうが、さあそこまで果たしてどの位かかるだろうかという感じになるんじゃないでしょうか。

隈 建築の場合はコンピュータがCADという形で入ってきたという問題もあって、重厚長大なものをきれいに描く道具として入ってきた。それでスタートが遅れてしまったような気がするんです。ところが、ここに来てやは

りCADの限界がはっきりしてきた。コンペでも、コンピュータで描くとタッチが全部同じようになってしまうから、むしろハンドライティングのほうが目立つというようなことが言われ始めていて、これからがスタートじゃないかなという感じがするんです。

廣瀬 非常に不思議だと思っているのは、建築の分野だとコンピュータとの関わりが必ずCADというメタファーで出てくる。確かに建築の中ではCADが非常に大きく成長して、コンピュータ・グラフィックスの学会でいい作品を出したなんてこともある。

機械の場合にもCADの分野はあったんですが、もうひとつ、ロボットって分野があるんですね。これは全然違った接点で情報と機械



が一緒になっているんです。こちら側がメカトロとか、工作機械を電子化するとかという機械CADとは別の流れを作り出したんです。だから、確かに隈さんがおっしゃるように、動いた建築がという話の部分が建築の世界に全く欠けていたかもしれないですね。

つまり、コンピュータと建築とがオンライン・リアルタイムの接点を持っていないんですよ。MITのメディアルームが、もしかしたら部屋スケールで人間とコンピュータが接点を持つという試みだったわけですが、あれをさらに進展させようという動きは、最近までなかったんですね。

浜野 建物とか空間を動かして見せるツールが手に入ったわけですね。設計図にしてもミニチュアにしても——ミニチュアにするには、職人芸でそれ自体がボコッと動くというのを作り出すって大変ですよ。それがこういうツールを持って学生でも簡単に動かせるようになったわけですね。ツールができたから、今度は逆に建物も動かせる設計とか、

クライアントにそれを見せられるようになったから可能になるんじゃないかという気はします。ツールがなかったから、そういう発想はなかったんじゃないか。クライアントが納得してくれないとできないわけですからね。

廣瀬 ツールがあれば創造力も活性化して、それから議論が盛んになっていくということはあるかもしれないですね。

それから3次元というのを建築家がどれだけまじめに考えているかというのも僕には興味深いところですね。建築家はまずフロアプランってやるでしょう。あれは2次元+1次元なんですね。これからどうやって脱却するのかなというのが、面白い点だと思うんです。これを作っている人たちが、どういう図面を引いてこれを作ったのかというのが、もしかすると面白いところかもしれないですね。

隈 建築をやっている若い人間にはそういう部分に分裂がありますね。ゲームなどの世界で3次元のものが自由に動く表現に慣れているわけで、それをそのままストレートに描くと、7番とか29番みたいなものになってくるわけだけれど、逆に自分たちが建築としてつくれると教わってきたものは、例えば、12番のようなつくり方だから、そこにもすごい分裂があって、フラストレーションも溜まっていると思うんです。本当はコンピュータが

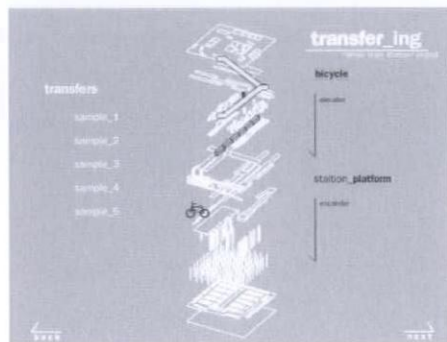


その間を解くツールになってしかるべきなのだけれど、まだその解き方がわかっていないという感じがするんです。

浜野 頭の中で3次元的な空間を作って、動線を考えてというのと、やっぱりこんがらがってわからないと思うんです。51番は一応ああやって置いてみれば、できてしまうわけですね。それなりに納得いく動線を描いてみたとか。それは廣瀬さんがおっしゃったように、変わらなうと思うんです。例えばカメラだって、レンズがドイツの科学計算を使っていたから市場をドイツが独占していた。ところが、コンピュータでレンズ設計が一遍にできたから、もうどこででも作れるようになって、ライカとかツァイスなんてつぶれちゃったわけだから。ある日突然コンピュータが入ったら、もう日本のレンズのほうで圧倒的にいいわけですよ。素人が計算したレンズのほうですね。

だから、細部から大きいシステムまで全部、経験のない学生でも構築できて、素人がわかるようなプレゼンもできるという、変革の芽があると思うんです。何となく納得させられてしまうよね。そういったものが出ているんじゃないかという気はしますけれどね。

廣瀬 美学としては、「えっ、こんなのでいいの」という変わり方がありますね。ゴロンと変わっちゃうというのが、こういう新しい



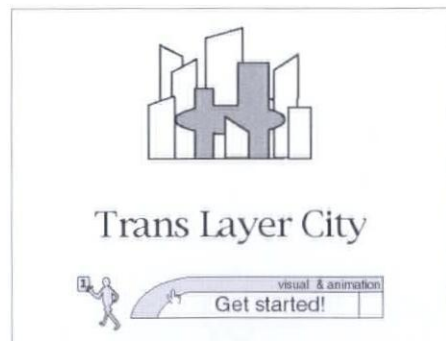
ツールの特徴だと思います。

隈 美学の話で言うと、29番とか7番とかは、まだ60年代の美学を出ていないような感じがするんです。美学的に新しいというのは実はなかったなという感じがするんですね（笑）。

でも、新しい美学を出してこれるかどうかというところに今ようやく差し掛かっているのでしょうか。一種ゲーム的なかわいらしさというのがコンピュータの美学としてはすてにある。

もうひとつは、37番みたいなコンピュータ流の引用の美学みたいなもの。それからもうひとつは、60年代的なオルガニックな機械主義美学。

美学的には大きくこんな風に分類できて、それをどうやったら超えていけるかという



きに、ひとつは頭で超えていく道があるんじゃないでしょうか。58番は、面の所有形態を点の所有形態に変えていくなんていう、すごく面白い言葉があって、空間というものの構造をガラッと変えてしまう新しい美学みたいなものを出してくるのかなと期待してしまっただけ。でも、いざモデリングしてみると、普通のラーメン構造の柱梁構造みたいな、つまらないモデリングになってしまった。頭と美学

のギャップを超える人がまだ出てきていないという感じがしたんです。

頭が美学になる段階で、どうしても今までの美学を超えられないという限界が出てきているような気がするんです。それを越える、異形なものを出せる人間が出てきたら、これはすごく面白い。

廣瀬 多分、美学という文脈から言うと、コンピュータはまだ本格的に答えていないんだと思います。あるツールが与えられたときに、それなりの表現様式を身につけるのには、かなりの時間がかかるんだと僕は思います。

これは浜野さんのほうがご専門かもしれないけれど、例えば、新しいメディアが登場したときに、それは昔のメディアをもう一回なめるんですよ。テレビが登場した頃、舞台中継とかそんなのばかりやっていた。それはテレビが自身の誕生以前のメディアをなめていたわけで。テレビ固有の表現、例えばワイドショーみたいなのは段々出てくるんですよ。それは多分頭じゃよくわからないんじゃないか。だから、下手すると次に変な建築が出てきて、こんなのじゃだめだって話になって、それを何度か繰り返していくうちに、それなりに美学的に見ても美しいし、というものが出てくるんじゃないでしょうか。

隈 建築は建築自身をなめているんだと思うんですね。建築というのは、柱と壁というもので作られている空間だけを写そうとしているんですよ。でも、空間というのは、実際にはそこに音も空気も臭いも流れているわけだし、コップみたいな小物があって、それが本来の都市なわけだけれど、僕らが今まで描き、計画することができた都市というのは、いわゆる建築の集合体なんですね。

廣瀬 構築的なものがあって、動こうが動くまいが、あまり変わらないような風景。

隈 そう。それを都市だというふうに僕らはずっと教え込まれてきたわけだけれど、実際はそれは都市の一部分でしかないのに、その一部分を表現するのが都市コンペだというふうにみんな思っているわけですよ。そこでちょっと自分の頭を切り替えるという作業が要るかなと思うのだけれど。

浜野 そのとおりだと思う。河口洋一郎が、CGでありながら、アーティストとして世界中が認めたというのは、彼がそれなりのビジョンを作ったからなんですね。自己増殖して自分で成長していくアート、そんなことはコンピュータを使わないとありえなかったんですよ。だから、新しいツールを持った建築が一段階上に行くには、ビジョンか、何か大きなブレークスルーみたいな考え方が出てこないかね。ビジョンを伴わないで独立した新し

い建築というのは、ちょっとないんじゃないかと思うんです。

廣瀬 でもいいビジョンはまだ出ていないと（笑）。

浜野 ただ、アートになってしまうと、これはマクルーハンが言っていたんだけど、役割が終わるとアートになるんですよ（笑）。

絵画は、昔は家族の記録や新聞のために描いていたわけですよ。浮世絵は速報だったし。それがカメラが出てきて、役割が終わったらアートになった。歌舞伎だって最初はストリップショーもどきで、みんなを楽しませるエンターテインメントだったし、近松門左衛門は速報だったわけでしょう。それが報道メディアが出てきて、歌舞伎がアートになってしまいうわけですよ。だから、アートになると実はまずいというのがある（笑）。

廣瀬 隈さんが言っていた、例えばハードウェアだけではだめで、ファンクションまで含めた形でデザインするという、それはある意味で旧来の建築の再定義みたいな感じになるのかもしれないけれども、建築が生き延びる、生き延びないどころの話ではないと思うし、依然として我々は空間の生物なのだから、空間を楽しみたいという希望はあるわけです。

ただ、建築家がツールとして、いつまでも模型に頼っていたのではやっぱりだめだと思いますね。あるところで面白い話を聞いたんです。建築模型というのは動かない、死んでますよね。建築の下を歩いている人がいるでしょう。街並みを歩く人たち。あれと一緒にあったときの建築というものをなぜ議論しないのかという話があるところで出て、僕はなるほどなと思ったんだけど。

隈 それは今までの都市という概念で言うと、歩いている人間なんていうのはネグレクトなものであったけれど、実はそっちのほうがメインであって、都市にとってはその背景の建築のほうがよっぽどネグレクトなんだよね。

廣瀬 建築写真にしても、ほとんど人がいない。極めて重要なものをうっちゃってるんだと思うんです。

SD アメリカなどでは建築系の人材がリアルワールドを捨てて、ヴァーチャルの世界に流出していますが、今後もそういう傾向が加速されるのでしょうか。

隈 建築系からヴァーチャルに行くというのは、建築の技術とそんなに関係ないことをしているわけではなくて、モデリングの扱いに建築の人間のほうが慣れているから速いというぐらいであって、彼らがまったく新しい領域に踏み込んでいるとは言えないと思うんで

す。本当に新しい領域に踏み込むというのは、これから建築の人間が誰が踏み込むのかわからないけれども、ここにあるような絵ではない領域であることだけは確かですね。

だからアメリカの大学を出た人間がヴァーチャルの領域に行くということを、日本ではすごいことのように言うけれども、実は全然大したことじゃない。浜野さんは映画産業のことをよく知っているから。

浜野 逆の流れがあると思うんです。前は映像にしかなかったものが、ラスベガスとか、キャナルシティとか、ユニバーサルスタジオのシティウォークとか、映像でしか表現できなかった突拍子もない、「これが建物？」みたいなものが現実に出てくる。前はディズニーランドの中だけで視覚的錯覚を利用した映画セットみたいなものをやっていたのが、街の中に出てきたでしょう。それは何だろう。

廣瀬 僕もこれからはリアルワールドの中にヴァーチャルワールドを組み込んでいくということがすごく重要になってくると思います。

つまり、実空間の中に、これだけ成長してしまった情報空間をどういう形で折り合いをつけてデザインをしていくかというのは、これはまさに空間の能力がある人じゃないとできない話なんです。情報系の人間は情報空間を作ってしまったわけです。折り合いをつけるといっても、情報が空間に出ていくのか、空間が情報を取り込むのかという闘いになるんじゃないかと思うのだけれど（笑）。

建築家はそのまま安穩としていたら、実空間を情報系の人間に乗っ取られるわけだし、逆に情報系の方としては、これから実空間に出ていかない限りにおいて、これ以上の情報的な世界の展開というのはもうない。

浜野 ラスベガスって街自体が面白いんじゃないで、成り立ちが完全にアーティフィシャルで、自然成長したものではなくて、意図的にボコン、ボコンとやってるでしょう。それも、そんなものが隣にあったらとんでもない変なものだろうと思うのが、ある種の空間にもものすごい密に集まっていますね。

今度の大阪の海沿いとか、福岡のキャナルシティとか、日本にもその芽が出てきているんですね。だから、ああいう在り方というか、映像の中やヴァーチャルな空間にしかないものが、リアルワールドに出てくるのが日本でもあるのかなというのを感じますね。

廣瀬 考えようによっては、情報というのは魔法なんです。魔法的空間が日常化するという感じになるのかな。

隈 ラスベガスのものというのは、ある意味で最終的には物質に翻訳されているわけだけれど、物質に翻訳されなくても、僕らの日

常生活に入り込んでいけるルーツというのはいくらでもあるわけですね。それはサイバーゴグルなのか何なのかわからないけれども、そういうふうに物質という媒介を経ないで日常生活を変革させるみたいなものが、これからどんどん出てくると思う。その部分が僕なんかは一番興味あるんですね。

廣瀬 今、ヴァーチャルな空間と実際の現実空間との間の境目というのが、ブラウン管やキーボードでしかないわけですよ。そういう狭い「窓」を通して「おーい」と言って覗いているだけ。その接点、つまりインターフェース自身が、ある場合にはディズニーランドみたいな、実世界を超えてワッと動くようなやり方になってみたり、あるいはもっと小さくなって、こんなゴグルみたいなものを使ったVRのような環境になったりとか、いろいろあると思うんです。

浜野 狭い空間だと、ミニチュアの車をワッと置いて、ヴァーチャルな空間ができていくわけですよ。若い女の子の部屋がそうじゃない。明らかに仮想の空間を自分で形成していて、最近はそれがそのまま街に出ちゃったみたいな感じになってきているね。前は街へ出ると断絶があったのに、街へ出てまた同じことをやってる。ぬいぐるみで飾っていたり（笑）。

廣瀬 ヴァーチャルリアリティのことを称して、「欲望のスポンジだ」と言った人がいますね。結局、情報というのは、浜野さんが今おっしゃったような、人間のある種の欲望があって、現実世界の制約を一応抜きにして、それを吸い取っていく能力があるんですね。それが際限なく行われていった結果が、今のサイバースペースの中でのいろいろな出来事であって、それはいい面もあるし、悪い面もあるって、それが現実の世界といろいろな局面において接点を持ち始めた。そこには多分それなりの見識を持ったデザインというものが必要になってくるんじゃないかと思いますけれど。

浜野 ラスベガスのようなものが普通の街まで侵食するんですね。

隈 ストレートにラスベガスかどうかはわからないけれども、同じような手法って既に街の中にあるわけですね。例えば、街の中に水とか光とか臭いとかをエレクトロニクスでコントロールしながら使うなんてことができた。昔の街づくりにはあんなふう大胆に演劇的な手法を使うなんていうのはなかったけれど、そういうテーマパーク的な手法が街づくりの中にソフトな形に変換されながら入り込んできていて、その流れというのはもう止めようがなく行くと思うんです。

廣瀬 ある種、ああいうテーマパークみたいなものというのは、人間が気持ちいいと思うものを具現化しているわけでしょう。ですから、それがだんだん将来の街の中に入ってくるというのは、不自然なことではないと思いますね。

SD コンピュータによって動きや音といった要素が入り込んできました。それによって建築はどう変化していくのでしょうか。

廣瀬 さっき隈さんがおっしゃったことと関連するけれど、今の作品はインタラクティブだと言いつつも、十分じゃないんですね。我々がどう反応して、それに対してどう身体的に伝えてくれるかみたいところまであって、初めて気持ちのいい空間の設計という話になるわけですね。ですから、それをこれからどう表現してくれるのかなというのが、多分この次でしょうね。

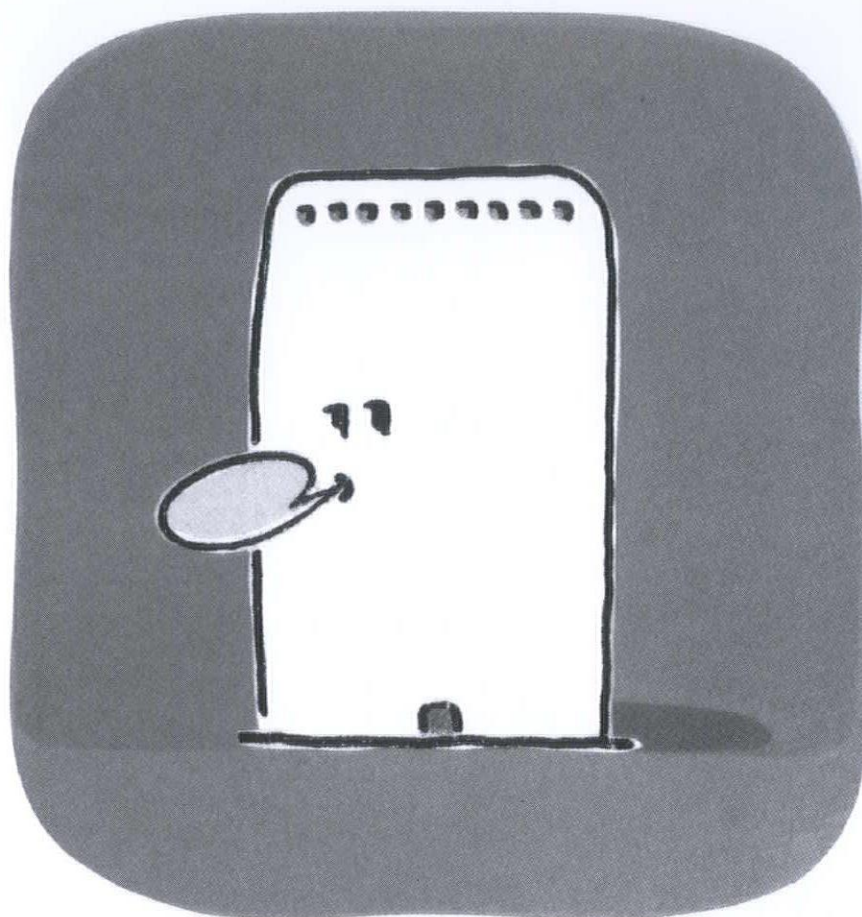
今度、入れたほうがいいのは、さっきからウェアラブルという話が出ていますけれど、これからは建築の中に入ってくる人も普通の人というわけじゃないんですね。そういう中において建築はどうあるべきかをどこかで議論しなければならないと思うんです。つまり、今は建築の中にどう情報装置を入れるか、どうLANを引いたらいいとか、そういうことをやっているわけですよ。その建築に入ってくると想定されている人間は、非常なナイーブな人間なんですね。ところが、今後はもしかすると、すごく変な人が入ってくる可能性があるわけですよ。何ギガバイトというデータを持って入ってくる人だっているし。

だから、本当は建築と身体は同時にデザインされなければいけない。二体問題で考えないといけない。その議論は、裸の人間の場合には建築はインテリジェント化するというひとつの方向しかないと思うけれど、ものすごい重装備の人間が入ってきたら、それこそテントでもいいという話になっちゃうかもしれない。その辺の最適解はまだ誰も解いていないんじゃないでしょうか。

未来の建築というのはどうあるべきかという議論、それはインテリジェントビルなのか、テントで済んでしまうのか、雨露をしのげばいいという本来の建築のミッションに戻るのか、そういう議論をどこかでやると面白いかもしれないですね。環境は人間の外に客体としてあるのではなく、人間も含めての環境だという発想って、まだ表現できていなくて——それは表現するのがきっと難しいんだと思うんですね。

（於：鹿島出版会 1999年1月6日）

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は

自然の呼吸に

支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人を取りまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド
東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)



都市の顔をつくる仕事。

都市の詩情をスクリーンのように映し出すカーテンウォール。
その多彩な表情のひとつひとつに私たちの技術が活かされています。
不二サッシは、都市景観を彩る、新しい建築文化
コミュニケーションスペースを創造してまいります。



本 社 〒211-0012 川崎市中原区中丸子135 TEL.044-422-1111
東京本部 〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町9-8 TEL.03-5458-7024

坂田峰夫 写真展—flowers

身近な住空間の周りで見過ごされがちな四季折々の草花や花屋の切り花を、光が直接被写体を投下するプレバート効果によって、そのひそやかな息吹としての形を生け補りにする。粗悪なアート写真もどきで溢れかえる現代にあつて、身近にある何気ない美を、ふと思ひ出させてくれる。

会期：1999年3月8日(月)～3月27日(土)

時間：10:30～18:30(土曜日は17:30まで、日曜、祝日は休廊)

会場：ツァイト・フォト・サロン

東京都中央区日本橋室町1-7-2 八木長ビル5F

Tel：03-3246-1370



© Mineo Sakata

菊竹清訓作品展 「日本の環境づくりへの提言」

過去40年から未来へと続く菊竹自身の建築に対するヴィジョンを、5つのプロトタイプに総括し次世代に問う。

会期：1999年3月6日(土)～3月28日(日)

時間：10:00～16:00(月曜休廊)

会場：鳥根県立美術館県民ギャラリー

鳥根県松江市袖師町1-5 Tel：0852-55-4700

GA HOUSES PROJECT 1999 「住宅プロジェクト」展

1997年より開催している「住宅プロジェクト」第3回展。今回より海外建築家の参加を得て、国内外の50以上の最新プロジェクトから「住宅」の現在および未来を展望する。国内からは模型と図面、海外からは図面と写真が展示される予定。

出展建築家：安藤忠雄、伊東豊雄、岸和郎、隈研吾、中尾寛、遠藤秀平、坂本昭、Richard Meier、Enric Miralles、Mark Mack、Ricardo Legorreta、AIJK、William P. Bruder、Cheng Design、他

会期：開催中～3月28日(日) 12:00～18:30

会場：GAギャラリー 入場料500円

東京都渋谷区千駄ヶ谷3-12-14 Tel：03-3403-1581

CWC, the gallery 企画展第3弾 「Amore & Michael: Together」展

世界のアーティストたちをプロデュースするクリエイティブエージェントCWCのギャラリー(本誌p.18-19に関連記事)開設記念企画展の第3弾。上野アモレ宏介とマイケル・バルタロスは、音楽やファッション、50-60年代からの影響を強く受けており、お互いの作品のファン同士である。パワフルな個性がぶつかりあうアート・セッションからは、新しいカルチャーの萌芽を感じることが出来る。

会期：開催中～1999年3月24日(水)

時間：13:00～18:00(日祝休廊)

会場：CWC, The gallery 東京都渋谷区代官山町1-6 広田代官山ビル3F Tel：03-3496-0745 / 0746



Michael Bartalos
by 上野アモレ宏介



上野アモレ宏介
by Michael Bartalos

モダンの再考：ニューヨーク近代美術館 のための3つの最終案」展

ニューヨーク近代美術館(MoMA)拡張計画に伴う最終設計協議案を公開。最終選考に残った3組の建築家(ヘルツォーク&ド・ムロン、谷口吉生、バーナード・チエミ)が21世紀のモダンを再考し、次なる時代における現代美術館のあり方への解答を、模型、図面等により提示する。

会期：1999年3月15日(月)～4月28日(水)

時間：11:00～19:30(入場無料、日曜・祝日休廊)

会場：TNブロープ 東京都港区六本木5-14-35

Tel：03-3505-8800

Open Studio NOPE開催

約20名の絵画、映像、彫刻、建築、陶芸、デザイン等のアーティストやクリエイターが、それぞれの製作現場にて作品などを展示公開する。またこの2年内に行われたNOPE関連のアートおよび建築、海外からのアーティストを招いたレジデンス、ワークショップ、セミナーなどのアートイベントも紹介する。

場所：東京都港区三田2-12-5 NOPE

スタジオ一般公開

3月5日(金)～7日(日) 13:00～20:00

子供向けワークショップ

3月7日(日) 14:00～17:00(要予約)

問い合わせ：NOPE / 遠藤良太郎

Tel：03-3769-0844

7人の建築家による木骨住宅 SELL HOUSE 徳島展

昨年東京・代官山ヒルサイドフォーラムで行われて好評を博した展覧会の四国展。SE工法による次世代商品化住宅の可能性を示唆する(本誌p.61-68に関連記事)。

会期：1999年3月6日(土)～3月14日(日)

時間：11:00～19:00

会場：チェリアショールーム(入場無料)

徳島市八万町中津山4-193 Tel：0886-53-5460

出展者：押野見邦英、城戸崎和佐、内藤廣、難波和彦、平倉直子、古谷誠章、横河健

コーディネータ：播磨

7人の建築家によるオープンレクチュア

3月6日(土) 15:00～18:00

オイコスフォーラム連続セミナー 建築の光環境を考える—自然光利用 をすすめる

参加費：一般6000円、学生3000円(6回分)

会場：地球環境パートナーシップオフィス研究会(東京・渋谷)

時間：毎回18:30～21:00

第1回 / 3月4日 光環境の考え方

講師：中村芳樹(東京工業大学)

第2回 / 3月25日 光環境設計とエクセルギー消費

講師：宿谷昌則(武蔵工業大学)

第3回 / 4月22日 自然光利用と日射の関係

講師：木村健(早稲田大学)

第4回 / 5月未定 窓の歴史とさまざまな役割

講師：宮田紀元(千葉大学)

第5回 / 6月未定 照明の環境心理学

講師：乾正雄(武蔵工業大学)

第6回 / 7月未定 夜は暗くはないか

講師：乾正雄(武蔵工業大学)

問い合わせ：アントラクト建築研究所 担当：西田 Tel：03-3706-3101

シンポジウム ドナルド・ジャッドと建築

埼玉県立近代美術館において開催される「ドナルド・ジャッド1960～1991」展に伴い、ジャッドの思考におけるミニマリズムと建築の関係を問い、その可能性を探る。

日程：1999年3月6日(土) 18:00～20:30

会場：TNブロープ 東京都港区六本木5-14-35

出席者：岡崎幹二郎、丸山洋志、松畑強、米田明

定員：200名(先着順、入場無料)

問い合わせ：アーキテクトン Tel：03-3374-0846

オープンレクチュア：3月6日(土) 15:00～18:00

お詫びと訂正

SD9902号p.49「Horizontality」は「Horizontal」の誤りでした。ここに訂正しお詫び申し上げます。

『大地に建つ』

池田武邦＝著
B6判 336頁
バイオシティ 2300円

著者は日本初の超高層〈霞ヶ関ビル〉に始まり、主要な超高層ビル建設に携わっている。また、それらの建設に際し、それまでの旧態然とした業界のシステムを改革し合理化すべく、早くから声を上げたのも著者である。

高層ビル建設における著者の功績は見逃せないが、一方著者は〈霞ヶ関ビル〉建設当初から自然の力を侮ってはいけないと考え、実際建設当初、絶対に安全という確信はなかったと告白している。さらに著者が自ら設計した〈新宿三井ビル〉にオフィスを構えることによって、「人工環境の根源的な問題」に直面したと言う。そうした素地が、例えば〈ハウステンボス〉のエコロジカル都市の実験につながり、現在は、自然と共生するまちづくりに取り組んでいる。

本書では、〈霞ヶ関ビル〉の建設当初に著した「台風に想う」(1965年)から始まり、1997年までの様々な場面で文章をまとめたもの。超高層という技術の最先端にありつつ自然や環境という視点を忘れていない著者の言葉には説得力がある。

「僕を含めて建築家みんなが反省しなければならないのは、建築をつくるということは、それだけで多かれ少なかれ環境破壊につながっているということです」。こうした言葉が建築家自身から発せられることは稀かもしれない。建築に関わる人の責任の重みを再認識させる一冊である。



『紙の建築 行動する』

坂 茂＝著
A5判 160頁
筑摩書房 2400円
震災の仮設住宅、ルワンダの難民キャンプなど紙の建築の拡がりを綴るとともに、紙で建築をつくるというユニークな発想がどう形を成していくのか、あるいは建築家の社会貢献はどう成されるのかなど、著者のボランティアなどを折混ぜながら語られる。



『建築巡礼40—パリ広場散策』

元岡展久＝著
菊判 112頁
丸善 2700円
都市全体が芸術作品とも言えるパリの成り立ちを、「広場」をキーに探ろうという本書。広場が権力、宗教、祝祭といった行為を包み、都市が形成されていく様子や、歴史的な意義や役割をわかりやすく解説している。



『英国貴族の城館—カントリーハウスのすべて』

田中亮三＝著
A5変型 112頁
河出書房 1800円
カントリーハウスは、1590年代から1800年代中程に、貴族がその力を誇示すべく建設された。現在も多くはその子孫の住居となっている。本書では、そのカントリーハウスの壮麗さや美しく計画された庭園などを伝える。写真、増田彰久。



『ハウジング・プロジェクト・トウキョウ』

都市環境構成研究会＝著
A4判 68頁
東海大学出版 2400円
ハウジングアンドコミュニティ財団の助成で行われた研究をまとめた本書。「住宅でできた都市」をプロジェクトの目標に掲げた試論を展開。最終章では上野公園・不忍池、神宮外苑・新宿御苑などの計画を提案する意欲的な一冊。



『空間体験—世界の建築・都市デザイン』

日本建築学会＝編
A5判 332頁
井上書院 3000円
本書は、水、街路、広場、塔、シークエンス、虚構といったキーワードを切り口に世界の建築や都市デザインを論じている。カラー写真を多く用いているが、そのほとんどが執筆者自身の撮影で、それらの「空間の魅力」がリアルに伝わる。



『民家のこころ』

道家元嘉＝著
B6判 130頁
鹿島出版会 1600円
茅葺き農家のような民家は、地方にあっても著しく減少しているが、日本的風景を美しく残している民家は郷愁を誘うものがある。本書ではその民家の各部位に込められた意味や役割、由来などが、それにまつわる風景とともに綴られている。



書評

『戦後モダニズム建築の極北、池辺陽試論』

評者＝松畑 強

ふたつの「戦後」のあいだに



『戦後モダニズム建築の極北 池辺陽試論』

難波和彦＝著
四六判 304頁
彰国社 2600円

「歴史は繰り返す。一度目は悲劇として、二度目は喜劇として」というのは、カール・マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』のなかの有名な一節だが、20世紀の日本は、マルクスのこの謂いを地でいったような感があろう。言うまでもなく、1945年の軍事的な敗戦が一度目の悲劇だったとするなら、1995年前後のいわゆる経済敗戦は、二度

目の喜劇だったということである。「日米経済摩擦（アメリカ側の呼称では、U.S.-Japan Trade War）」や、日本のバブル経済とその結末のメカニズムについて、ここで詳しく述べている余裕はない（まだご存知なく、興味がおありの方は、巷に出回っている経済書やビジネス書を一通りお読みになられるだけでも概要はつかめるはずである）。

いずれにせよわれわれは、すでに新しい「戦後」を生き始めている。そしてこの新しい戦後という時間から見れば、かつての戦後はすでに歴史となりつつあるのかもしれない。ということはそれを比較的冷静に見ることもまた可能になりつつあり、さらにはかつての戦後という時代において、建築家たちが何を考え、どう行動したかを、比較的穏やかに見返すこともまた可能になりつつあるのかもしれないだろう。

結論から先に申し上げるなら、本書は、あたかも良質な物語を読むかのような感をさえ与えるなかなかの力作であると、惜越ながらそう思われた。

第二次世界大戦中の美学主義への傾倒から一転して、第二次大戦後の「デザイン」や「システム」への傾倒、さらにはその根底にあるらしきものが、きっちりと歴史的文脈のなかで位置づけられ、今日の視点から池辺陽という建築家が巧みに描きだされていく。これは池辺陽という建築家の評伝であるとともに、ひとつのいわば戦後建築史でもあるだろう。さらに「評伝」といっても別にぎすぎすしたクリティシズムがあるわけではなく、むしろ師に対する尊敬と愛さえそこはかとなく感知されるような筆の運びでもある。あるいは広い文脈で捉えるなら、本書のような作業は、たとえばアメリカのK.マイケル・ヘイズらの、可能的なモダニズム再読の作業などとも、じつは並行しているのかもしれない。

ところで本書でも触れられていることだが、1945年の敗戦と1995年前後の敗戦の中間にあたる1970年前後は、ちょうど歴史の折り返し点のようなものだったかもしれない。この時

代は日本の建設業や建築が構造的に変わった時代でもあっただろう。つまりインフラの整備をはじめとした生産主義的なものから、「年度末道路工事」や「箱物行政」という言葉で揶揄されるような消費主義的なものへと、あるいは巨大な「雇用対策産業」へと変わっていった転換点である。こんなことを述べるとおそらく反感を買うのだろうが、しかしあえて私見を述べさせていただければ、「住宅は芸術である」といういささか素朴な芸術(?)主義も、おそらくはそれと対をなしている「その社会が建物を作る」といういささか自虐的な現実肯定も、あるいはこうした時代が産み落とした徒花だったのではないのだろうか。これもあくまでも私見だが、こうした時代に徹底して意識的につきあってきた建築家がいいたしたら、やはりというべきか、それは磯崎新氏のような存在がそうした建築家だったのではないのだろうか。これはあくまでも私見である。べつに誰かを個人攻撃しようとか、誰かに媚びを売ろうというつもりはない。

ともあれ池辺氏のような建築家にとって、そうした時代は一見したところでは耐え難いものだったろうことは想像に難くない。晩年の池辺氏はジャーナリズムからアカデミズムへと引きこもり、そしておそらくそこでも自分の居場所を見出せなくなっていったかもしれない。58才にて逝去。早世と言え早世である。とりわけ晩年のKSC計画などは、もしも長生きしていれば、さらなる展開があったかもしれないことを予感させるものであるだろう。

著者は本書の末尾において「システムの自己回帰」を引きながら、「意味の生成をデザインに取り込む段階に達していた以上、いずれ池辺はデザインの批評性に直面したはずである。それをさらに推し進めていったなら、池辺はいつか再び歴史を発見したに違いないと僕は確信している」と述べる。じゅうぶんあり得たし、今日においてもじゅうぶんあり得ると思えるのである。

●まつはた・つよし／建築家

個性が集まって大きなエネルギー

サッシ・カーテンウォールの総合メーカー



私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から
“テクノロジーとヒューマニズムの調和”をめざす新しい時代をつくろうとしています。

とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ（快適さ）や、
建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など
美的付加価値の重要性もますますそのウェートを高めています。

弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。



昭和サッシ

昭和鋼機株式会社

本社 ▶ 〒174-0063 東京都板橋区前野町6丁目1番10号

☎ 東京 (03) 3969-1101 (代表)

所沢工場 ▶ 〒354-0045 埼玉県入間郡三芳町大字上富1163

明石工場 ▶ 〒674-0093 明石市二見町南二見21番3号

昭和鋼機サービス株式会社 ▶ 〒174-0063 東京都板橋区前野町6丁目1番10号

大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所

海外レポート

Pier40を巡って

from New York

小野暁彦

去年の11月19日、ニューヨーク・タイムズ紙は、「グッゲンハイム美術館がフランク・ゲーリーの設計で、マンハッタン西岸のハドソン川に突き出す6haの州有地、Pier40(第40埠頭)に分館を計画している」という記事を掲載した。11年間グッゲン率いてきたトーマス・クレンズ館長による、世界的な拡張計画を含む強気の政策の一環で、赤字のSOHO分館の閉鎖を前提にビルバオ的なヒットを狙ったものだ、と言える。当然、このスクープ記事は波紋を呼んだ。翌日の同紙は「ウエストサイドの美術館計画への批判高まる」という見出しで、「各方面からの異議あり!」の声を紹介した。特に強調されたのは「たぶん非合法だ」という指摘であった。また、3週間後の12月10日、同紙は再度この問題を取り上げ、誰よりもそのニュースに驚いたのは、マンハッタンのCommunity Board2(コミュニティ委員会「CB」)は、各近隣と区や市を結ぶ窓口で、CB2はウエスト・ヴィレッジ周辺地区の窓口)のメンバーであったと報じた。CB2は、ヴァン・アレン・インスティテュート(VAI)——「公共領域のデザインの向上」を使命とする非営利組織——と協同主催したPier40のデザイン・コンペの審査を終えたばかりだったのだ。そのコンペは、近隣のための公園をなんとかして確保したいという声を代表するCB2が、現在2300台(90%が1マイル以内の住民の使用)の駐車場などに使用されているPier40を、どのような「公園」に再生するかというテーマのもと、VAIを通じて広く建築家にアイデアを募ったもので、最終的にはすべての入賞者の提案を取り入れた案をまとめて、ハドソン・リバー・パークを管理するハドソン・リバー・トラストに提出することを目標としていた。いわば、コミュニティと建築家が非営利団体を仲立として知恵を出しあって行政に働きか

ける、という構図であった。そこへのビッグ・ミュージアムの急襲。CB2委員長のアラン・ガーソンは「Pier40は、我々みんなの夢の一部なのです」という。「コミュニティを真に統一するリバーフロント・パークを望んでいます」。

バッテリーパーク・シティから59丁目まで4.5マイルにわたって続くハドソン・リバー・パーク(HRP)の計画——川沿いの遊歩道の敷設と、Pier40を含む寂れた埠頭群の再利用——は、それに並走する、現在整備中のRoute9Aの計画に伴って生まれたものだが、その背景には、80年代におけるマンハッタンで最も論議を呼んだ「Westway計画」という開発計画とその挫折とがあった。かつては表玄関だったマンハッタンの水際と街のファブリックを象徴的に分断したのは、1931年完成の西岸のミラー・ハイウェイと、1935年完成の東岸のイースト・リバー・ドライブ(後のFDR)であった。FDRは現在も健在で、南と北から流出入する高速車両をさばく動脈として機能しているが、構造的問題を抱えていたミラー・ハイウェイは1973年の一部崩壊以後大部分廃棄され、その除去跡に計画されていたのが「Westway」というハイウェイであった。現在からすると、ハドソン川沿い59丁目以南にハイウェイがあったという事実は俄かには信じ難いのであるが、むしろ逆に、再建されなかったことの方を驚くべきなのかもしれない。連邦資金による一大事業となるはずだった「Westway計画」を85年に正式に破棄に追い込んだのは、建設に伴う埋め立てが、ハドソン川を産卵域とするstriped bassに多大なダメージを与えると主張する「戦闘的な」環境保護運動と、それに共感した連邦判事の判決であった。基金は、大幅に縮小された地上道路——中央分離帯をもつ7車線のRoute9A——とそれに沿ったHRP

の整備に充てられることになり、1996年に着工した。HRPに含まれる埠頭には、ホテル、事務所ビル、住宅の建設は禁止されているが、公園を維持するためだけにその収入が使われるレクリエーション施設の建設は認められている。また昨年秋には、埠頭の50%はオープン・スペースとする条項が盛り込まれた。先の「非合法かも」という声は、美術館が上記の施設に該当しないだろうということと、50%を(例えば草野球場を含む近隣のための)公園用途とすることに適さないだろう、という観測からであった。

Pier40は、すでにスポーツ・コンプレックスとして整備されて活況を示しているChelsea Pierや、遊覧船乗り場などのある42丁目付近と並んで、HRPの行方を担う要と目されてきた。今年1月11日、コンペ結果発表と同時にパネル・ディスカッションが開かれたが、ガーソン委員長の呼びかけにもかかわらず、クレンズ氏の姿はなかった。ただ、VAIのレイモンド・ギヤスティル所長によると、グッゲンの代理人との接触はあり、ガーソン氏はあらためて断固反対(ただし、ヴィレッジ内の他の敷地なら話し合いの余地有り)の意を伝えたそうだ。さて、入賞案は総じて現実的で、堅実なものであったが、ひとつ気になったのは、どれもが駐車場を大幅に、あるいは完全に排除していることだ。近隣住民に駐車場の存続を求める声が高まっていることを鑑みるなら、これは逆行ではないか? 様々な利害をしなやかに調整しつつ、ダイナミックな交通、網状結合を産み出し続ける「公共空間」が求められるが、それはつまり、近隣の現実的な要求と潜在的な要求を同時に満たしながら、なおかつローカルに閉じない、という難題なのである。

●おの・あきひこ/建築家



Pier40北面。ハドソン川に突き出す



ハドソン・リバー・パーク(HRP)。川沿いの遊歩道がつづく



整備中のRoute9AとPier40東面



整備完了した区間のRoute9A 写真=筆者

海外レポート

山の建築

from Zurich

山口由美子

一極集中型の日本では、東京に一度出てきたら最後、故郷は日常から遠い存在となり易い。しかしスイス人は大学、職場のために他都市で生活していたとしても、週末はいそいそと自分の故郷に帰っていく。スイスの国土の小ささや各地方がそれぞれの特徴をもって散在していることなどがその要因であろうが、たとえ山間の小さな村であっても、誰も「私はここの出身だ。」と胸を張っている。日本の地方出身者が心のどこかで感じる引け目はまったく感じられない。このことは建築家にも言い得ることで、^{やまあい}山間出身の建築家が環境と建物の相互的な関係の中に建築を見出そうとする粘り強い探求を如実に表した興味深い建築をつくりだしているのは、その土地の自然を慈しみ心から感じとってきたという誇りがあるからこそであるように思われる。内部の機能をもつ慣習的なタイポロジーに縛られずに、地方特有の様々な構造をマクロな視点からも客観的に観察し、その場に建つという事実と真摯に向かい合う。その結果外観はスイス・ドイツ語圏特有といわれるシンプルな「四角い建築」となっているが、それら山の「四角い建築」は、コンクリートの重量感のある様相、スケールを喪失させたディテールなどによって、まるで美しい彫刻のようにも見える。といっても雄大な自然に置かれたというよりは、大地に根を生やし、自然の超越的なエネルギーを吸収した新たな別の次元での

自然物とでもいような趣さえ漂わせている。これらは単にトポグラフィと結びついた建築といってしまうには十分ではなく、もっと根深くその地域に根差した、感情的にさえ思える場所性を引き受けたものとなっている。

ヴァレリオ・オルジャッティの〈パスペルスの学校〉は、スイスの東部に位置するグラウビュンデン地方の小さな山間の村に建っている。高く聳え立つ山々の間隔は狭く、雄大というよりは畏怖の念さえも感じさせる自然が広がっている。家屋が点的に存在するといった村の構造を受け、因習的な細長い学校建築ではなく、コンクリート打ち放しのシンプルな箱型をしたこの建築は、内部構造的にも十字形に動線を配した内壁が3層の床を支え、ヴォリュームを包む2重の殻とも互いに独立することで、点的な室配置をよりストレートに表現している。一見普通の家のようにも見えるが、ファサードから大きく水平に切り取られた開口部や分厚いサッシュ表現などにより、スケール感のない不思議な様相をたたえている。開口部の大胆な配置は、内部空間を周辺環境と並置させ、閉じられた箱の中にランドスケープを取り込んだ開かれた空間を実現している。ランドスケープがこの建築を生かし、この建築がここの自然の美しさを引き立てているというインタラクティブな関係をここに見出すことができる。グランビュンデン地方には、壁から屋根まですべてその土地

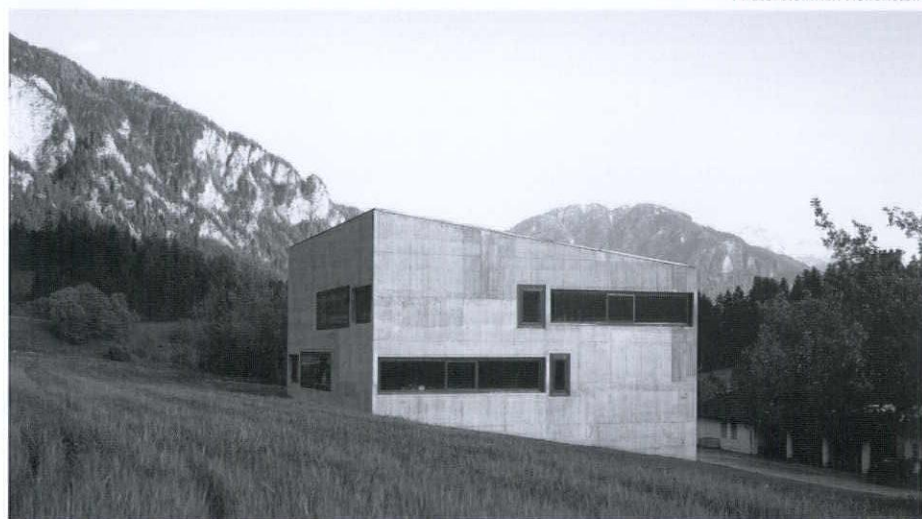
特有の同一の石材でできた伝統的な家屋を数多くみることができる。クリスチャン・ケレツとルドルフ・フォンタナは〈オペレアルタの教会〉で、その伝統的な手法同様、まったくひとつのマテリアルで単純な家形を形作っている。それは周囲の美しいランドスケープの中にひっそりと佇む完全な家形の鋳型が彫刻のようにも見え、徹底して抽象化されたシンボル性が、ある種の宗教性をも引き出し、精神性の高い教会となっている。

またこの地方では、人里離れた山岳地帯に突如として周囲の自然から異化された土木構築物が目を引く。コンラディン・クラヴォーのセーヴィスにある変電所は、内部は変電システムをそのまま転化したような機能的な配置により決定されており、それらを包んだマッシブなコンクリート打ち放しのヴォリュームは、深く切り込まれた水平に伸びた換気口や表面に薄くはりついたドアなどの、スケールを喪失させた徹底したディテールによって、モノリスの様相を醸し出している。

「その場の潜在的ともいえる精神 (Geist des Ortes) を感じ取った上でその場所でしかない建築とはどうあるべきか」、バレリオ・オルジャッティがスイス連邦工科大学 (ETH) のスタジオで我々につねに問い掛けてきたこの言葉こそ、これら山間の建築の核を言い表すには最も相応しいのではないだろうか。

●やまぐち・ゆみこ／ETH在学中

Photo: Heinrich Helfenstein

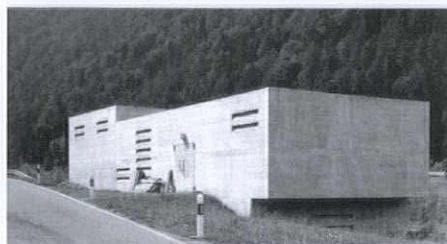


〈パスペルスの学校〉／ヴァレリオ・オルジャッティ設計

Photo: Christian Kerez



〈オペレアルタの教会〉／クリスチャン・ケレツとルドルフ・フォンタナ設計



〈セーヴィスの変電所〉／コンラディン・クラヴォー設計
出典：『Neues Bauen in Den Alpen』



トーレ・デ・ラ・クレウ／ジュセップ・マリア・ジュジョール

写真＝鈴木久雄

9904

特集

ガウディの愛弟子ジュジョールの夢

アントニオ・ガウディの住宅カサ・パトリヨの外壁モザイクタイルの配色デザインを手伝ったのを皮切りに、カサ・ミラ、グエル公園、サグラダ・ファミリアといったガウディの主要作品における良き共同者として活躍したジュセップ・マリア・ジュジョール。ガウディ作品の色彩やディテールのデザインに力を発揮したジュジョールは、ガウディ亡き後カタルニア・モデルニスモとは一線を画した、独特のシュールなデザインを指向した。本特集は没後50年を機にジュジョールの遺した作品と近年修復された作品を、豊富な写真とオリジナル・ドローイングをもとに辿りながら、ジュジョールの描いていた夢——時代を超えたデザインを探ろうとするものである。

作品＝

カサ・パトリヨ、カサ・ミラ、グエル公園、ビスターベージャの教会、トーレ・デ・ラ・クレウ、カサ・ネグラ、カサ・ブラネイス、他。

文＝

ベップ・ジナス(建築家)、カルロス・フローレス(バルセロナ大学教授)、丹下敏明(建築家)、他。

撮影＝鈴木久雄

ドナルド・ジャッド：空間と認識のコンシステンシー

20世紀を代表する芸術家のひとりであるドナルド・ジャッド(1928-94)。ミニマル・アートの旗手としても知られるジャッドの遺した家具、建築改修計画に焦点を当て紹介する。

文＝大島哲蔵(建築評論家)、長田直之(建築家)、尾崎佐智子(滋賀県立近代美術館)、丸山洋志(建築家)、他。

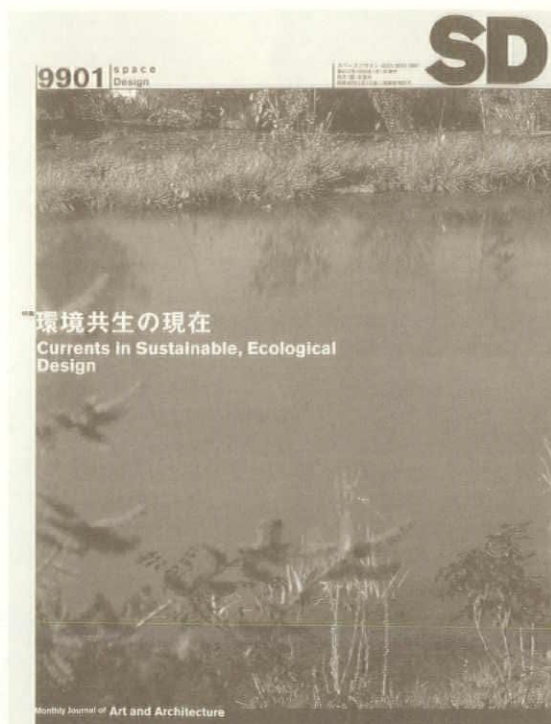
連載：

海外レポート：ロンドン、シドニー、トロント

エントロピーの森——都市のインフラストラクチャ 4 写真＝ハイナー・シリング 文＝山形浩生

SD

バックナンバー



9901

特集

環境共生の現在

20世紀の終わりへ向けて、限られた地球環境の中で社会を永續させるには、環境に与え、与えられるインパクトをトータルに評価することが必要であることが認識されてきた。もはや建築・都市機能の中で、環境共生のプライオリティは高まる一方である。ここでは、環境共生あるいはサステナブルという問題に対してひとつの解答を出した幾つかのプロジェクトを紹介しながら、その近年の動向を俯瞰し、次世代のヴィジョンを示唆する。

●事例

1章：自然循環系の回復・創造

ウォーターワークス・ガーデン／Jones & Jones、他

2章：資源の合理的利用

東京ガス（アースポート）／日建設計、東葛テクノプラザ／日建設計、Commerzbank Headquarters／Norman Foster、他

3章：ライフスタイルの提案

世田谷区環境共生住宅／岩村和夫、鹿島京都山科寮／鹿島建設、他

4章：歴史と風土の保存・回復

デュイスブルク北ランドスケープ公園／ペーター・ラツ、他

●次世代へのビジョン

2005年国際博覧会構想案／隈研吾・宮城俊作、東京サイクルグリーンリング構想／宇野求、

●環境共生へ向けた5つのアクション

建材一体型太陽光発電システム／YKK-ap、余暇住宅「山海寮」／エポネット、他

●論文：小玉裕一郎、梅干野 晃、伊香賀俊治、他

連載：

海外レポート：バルセロナ、ヘルシンキ、ベルリン
エントロピーの森—都市のインフラストラクチャー1
写真＝ハイナー・シリグ 文＝山形浩生

特別定価＝2,700円／本体2,571円



9902

特集

ダッチ・モデル 都市・建築・ランドスケープ

近年、オランダの建築・都市はダイナミックな動きをみせつつ、次世紀に向けての可能性を模索している。そこには水と国土の関係をいかに調整してゆくかという長い歴史を背負いながら、建築・ランドスケープ・都市を統合的なものとして、トータルに捉えていこうという姿勢がある。本特集では、オランダの建築・都市計画の最新作、プロジェクトを紹介すると同時に、それらを包括するオランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって捉え直し、さらに都市と建築を結びつけるキーパーソンへのインタビューを交えつつ、次世紀の新たな都市のモデルのひとつになるであろうオランダを、「ダッチ・モデル」と称して探ろうとするものである。

●監修＝吉良森子

●紹介建築家、ランドスケープ・アーキテクト：OMA、MVRDV、West8、クーン・ファン・フェルゼン、メカノ、クーン・ファン・フェルゼン、キース・クリスチャンセン、ベンタム&クロウエル、ヴィール・アレツ、ベン・ファン・ベルケル、W.J.ノイトリング

●インタビュー：レム・コールハース、アードリアン・グース、リック・バッカー、クリスティン・ファイライス、ヴィッツ・バルティン、ヴィニー・マース

●インタビューア：吉良森子、上原雄史

●文：吉良森子、長坂寿久、バート・ローツマ、ジョン・サッカラ、石田壽一、笠真希

連載：

海外レポート：アムステルダム、パリ、プエノスアイレス
エントロピーの森—都市のインフラストラクチャー2
写真＝ハイナー・シリグ 文＝山形浩生

定価＝2,000円／本体1,905円



SD別冊32号

スポーツのための空間——スポーツ施設の新しい風

日本設計+SD編集部

総頁数：180頁

価格：3800円(本体3619円)

スポーツを行い、楽しみ、観戦するための空間は、多くの課題を抱えている。

巨大化する競技イベントへの対応、利用頻度の向上を求めている多目的化、新たな魅力付加を求めている複合化、高度な観戦空間を求めている専用化、あるいは既存施設の再利用や機能の向上など。

また、高齢者、身体障害者、女性など、スポーツ参加層の急激な拡大や変化に対応することも早急に求められている。

本書では、そうした課題の解決に挑戦し、大きな成果をあげている最新事例を豊富に取り挙げ、詳しい解説を付し、今後のスポーツ施設の設計に明瞭な指針を与える内容としている。

第1部：スポーツの空間の新しい風

- 1：専用または共用
- 2：屋外または屋内
- 3：都心または郊外
- 4：複合化と多目的化
- 5：再生と改修
- 6：仮設と転用

第2部：最新事例紹介

海外：ベルリン・オリンピック自転車競技場及び水泳場、フランス競技場、ウィンブルドン新コート、2000年シドニーオリンピック公園、香港スタジアム、アムステルダム・アリーナ、アトランタブレーブス新球場、オリオールパーク球場、バンク・ワン球場、シアトル・マリナーズ新球場、マディソン・スクエア・ガーデン改修、ミレニウム・ドーム、ナッシュビルアリーナ、ユナイテッドセンター、ユービック地下スポーツホール

国内：横浜国際総合競技場、武蔵野の森競技場、東京ドームシティ、大阪ドーム、西武ドーム球場、Jヴィレッジ、ツインリンクもてぎ、他全40例

第3部：空間の拡張と参加層の拡大

スポーツの空間の拡張：代用、自然、ヴァーチャルリアリティ、放送メディア

スポーツ参加層の拡大：簡易スポーツ、高齢者、身体障害者、女性

SD別冊

SD選書出版案内

(各巻四六判・函入)

日本建築史

江戸と江戸城

内藤 昌著 本体1,800円

新桂離宮論

内藤 昌著 本体2,000円

日本建築の空間

井上充夫著 本体1,800円

茶匠と建築

中村昌生著 本体1,800円

日本の近代建築(上) -その成立過程

稲垣栄三著 本体1,800円

日本の近代建築(下) -その成立過程

稲垣栄三著 本体1,500円

日本の空間構造

吉村貞司著 本体1,800円

世界建築史

都市形成の歴史

A, コーン著 星野芳久訳 本体1,800円

天上の館

J, サマーソン著 鈴木博之訳 本体2,000円

北欧の建築

S.E, ラスムッセン著 吉田鉄郎訳 本体980円

ペルシア建築

A.U, ポーブ著 石井 昭訳 本体1,500円

広場の造形

C, ジッテ著 大石敏雄訳 本体1,800円

西洋建築様式史(上)

F, バウムガルト著 杉本俊多訳 本体1,800円

西洋建築様式史(下)

F, バウムガルト著 杉本俊多訳 本体1,800円

劇場の構図

清水裕之著 本体1,800円

ヴェネツィア -都市のコンテクストを読む

陣内秀信著 本体1,800円

アメリカ建築の巨匠たち

P, ブレイク他著 小林克弘他訳 本体1,800円

環境・アメニティ・都市

明日の田園都市

E, ハワード著 長 素連訳 本体1,800円

プライド・オブ・プレイス

C, トラスト著 井出久登・正子訳 本体980円

アメリカ大都市の死と生

J, ジェコプス著 黒川紀章訳 本体1,800円

遊び場の計画

R, ダットナー著 神谷五男・松代真理訳 本体1,800円

都市は「ふるさと」か

F, レンツロー・マイス著 武 基雄・伊藤哲夫訳 本体980円

人間のための都市

P, ベータース著 河合正一著 本体980円

都市憲章

磯村英一著 本体980円

イタリア都市再生の論理

陣内秀信著 本体1,800円

住環境の都市形態

P, バヌレ他著 佐藤方俊訳 本体1,800円

ふれあい空間のデザイン

清水忠男著 本体1,800円

心理学

建築形態のダイナミクス(上)

R, アルンハイム著 乾 正雄訳 本体1,200円

建築形態のダイナミクス(下)

R, アルンハイム著 乾 正雄訳 本体1,200円

空間と情緒

箱崎総一著 本体1,500円

デザインの認識

R, ソマー著 加藤常雄訳 本体980円

庭・ランドスケープ

日本の庭園

田中正大著 本体1,800円

ヨーロッパの造園

岡崎文彬著 本体1,800円

日本の公園

田中正大著 本体1,800円

都市の景観

G, カレン著 北原理雄訳 本体1,800円

街の景観

G, ノバーク著 長 素連・もも子訳 本体1,200円

「作庭記」からみた造園

飛田範夫著 本体1,800円

サウンドスケープ -その思想と実践

鳥越けい子著 本体1,800円

風景のコスモロジー

吉村元男著 本体1,800円

庭園から都市へ -シーケンズの日本

材野博司著 本体1,800円

フィールドワーク

住居空間の人類学

石毛直道著 本体1,500円

京の町家

島村 昇他編 本体1,800円

住まいの原型I

泉 靖一編 本体1,500円

住まいの原型II

吉阪隆正他著 本体2,000円

キモノ・マインド

B, ルドフスキー著 新庄哲夫訳 本体2,000円

かいわい (日本の都市空間)

村野博司著 本体1,800円

建築家なしの建築

B, ルドフスキー著 渡辺武信訳 本体1,800円

情報

現代建築事典

W, ベートン編 浜口隆一他訳 本体1,900円

イギリス建築の新傾向

R, ランタウ著 鈴木博之著 本体980円

SD海外建築情報 I ~ VI

岡田新一編 本体980円

SD選書出版案内

(各巻四六判・函入)

■ デザイン

現代デザイン入門

勝見 勝著 本体1,800円

日本デザイン論

伊藤ていじ著 本体1,800円

道具考

栄久庵憲司著 本体1,500円

環境とデザイン

G. エクホ著 久保 貞訳 本体2,000円

日本美の意匠

水尾比呂志著 本体1,500円

建築鑑賞入門

W.W. コーディル他著 六鹿正治訳 本体1,800円

バウハウス ―その建築造形理念

杉本俊多著 本体1,800円

水空間の演出

鈴木信宏著 本体1,800円

木のころ ―木匠回想記

G. ナカシマ著 神代雄一郎他訳 本体1,800円

水のデザイン

D. ペーミングハウス著 鈴木信宏訳 本体1,800円

環境照明のデザイン

石井幹子著 本体1,800円

屋外彫刻

M.A. ロビネット著 千葉成夫訳 本体1,800円

トーネット曲木家具

K. マンク著 宿輪吉之典訳 本体1,500円

インテリアデザインとは何か

三輪正弘著 本体1,800円

椅子のデザイン小史 ―様式からポストモダンへ

大廣保行著 本体1,800円

都市の道具

栄久庵祥二著 本体1,500円

日本の伝統工具

土田一郎著 本体1,800円

行動・文化とデザイン

清水忠男著 本体1,800円

環境デザインの思想

三輪正弘著 本体1,800円

ディスプレイデザイン

魚成祥一郎監修 本体1,800円

フラクタル造形

三井秀樹著 本体1,800円

■ 建築家論

フランク・ロイド・ライト

谷川正己著 本体1,800円

アルヴァ・アアルト

武藤 章著 本体1,800円

ライトと日本

谷川正己著 本体1,800円

タリアセンへの道

谷川正己著 本体980円

アドルフ・ロース

伊藤哲夫著 本体1,200円

ブルネッレスキ ―ルネサンス建築の開花

G.C. アルガン著 浅井朋子訳 本体1,500円

ジュゼッペ・テッラーニ

B. ゼーヴィ編 鶴沢 隆訳 本体1,500円

オットー・ワグナー ―ウィーン世紀末から近代へ

H. ゲレツェッカー他 伊藤哲夫他訳 本体1,800円

ルイス・マンフォード

木原武一著 本体1,500円

オーギュスト・ペレ

吉田綱市著 本体1,500円

アントニオ・ガウディ

鳥居徳敏著 本体1,800円

ボッロミーニ

G.C. アルガン著 長谷川正允訳 本体1,800円

ヴィオレ・ル・デュク

羽生修二著 本体1,800円

トニー・ガルニエ

吉田綱市著 本体1,800円

パラディオへの招待

長尾重武著 本体1,800円

ウィリアム・モリス ―近代デザインの原点

藤田治彦著 本体1,800円

エーロ・サーリネン

穂積信夫著 本体1,800円

■ 美術・文化論

きもの文化史

河鱈実英著 本体1,800円

現代絵画の解剖

木村重信著 本体2,000円

芸術空間の系譜

高階秀爾著 本体1,800円

日本美の特質

吉村貞司著 本体1,800円

イタリアの美術

A. プラント著 中森義宗訳 本体2,000円

幻想の建築

坂崎乙郎著 本体1,500円

キュビズムへの道

D.H. カーンワイラー著 千足伸行訳 本体1,800円

空間の生命 ―人間と建築

坂崎乙郎著 本体1,500円

部族社会の芸術家

M.W. スミス編 木村重信他訳 本体780円

光の死

H. ゼーデルマイヤ著 森 洋子訳 本体980円

西欧の芸術1ロマネスク 上

H. フォンヨン著 神沢栄三他訳 本体1,500円

西欧の芸術1ロマネスク 下

H. フォンヨン著 神沢栄三他訳 本体1,800円

西欧の芸術2ゴシック 上

H. フォンヨン著 神沢栄三他訳 本体1,500円

西欧の芸術2ゴシック 下

H. フォンヨン著 神沢栄三他訳 本体1,800円

鏡〔虚構の空間〕

由水常雄著 本体980円

さあ横になって食べよう ―忘れられた生活様式

B. ルドフスキー著 多田道太郎監修・奥野卓司訳 本体1,800円

建築図書案内



白い机①:若い時—アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想
G, シルツ 田中雅美, 田中智子共訳 A4変・本体9,500円+税

白い机②:モダン・タイムス—アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い
G, シルツ 田中雅美, 田中智子共訳 A4変・本体14,300円+税

白い机③:円熟期—アルヴァ・アアルトの栄光と憂うつ
G, シルツ 田中雅美, 田中智子共訳 A4変・本体19,000円+税

エコテック|21世紀の建築
C, スレッサー 難波和彦監訳 B4変・本体7,300円+税

同潤会のアパートメントとその時代
佐藤 滋, 高見澤邦郎他著 B5・本体3,300円+税

集合住宅原論の試み
黒沢 隆著 B5・本体3,800円+税

住宅建築のリノベーション
檜野紀元, 三木 哲他著 A5・本体3,300円+税

ピーター・ライス自伝—あるエンジニアの夢みたこと
P, ライス 岡部憲明監訳 A5・本体3,800円+税

評伝ミース・ファン・デル・ローエ
F, シュルツ 澤村 明訳 B5・本体8,900円+税

ガウディ—芸術的・宗教的ヴィジョン
R, デシャルヌ 池原義郎他共訳 B4変・本体14,800円+税

ル・コルビュジエと日本
高階秀爾, 鈴木博之他編 A5・本体2,800円+税

ル・コルビュジエの建築—その形態分析
G, ベイカー 中田節子訳 B5・本体6,500円+税

知られざるフランク・ロイド・ライト
E, ターフェル 谷川正己, 谷川睦子共訳 B5・本体5,700円+税

フランク・ロイド・ライトと日本文化
K, ニュート 大木順子訳 A5・本体3,800円+税

ルイス・カーン研究—建築へのオデュッセイア
前田忠直著 A5・本体3,400円+税

ルイス・カーン 光と空間
U, ビュッティカー 富岡義人, 熊谷逸子共訳 B5・本体4,200円+税

アントニン・レーモンドの建築
三沢 浩著 A5・本体3,500円+税

自然共生建築を求めて
宿谷昌則著 A5・本体2,300円+税

次世代街区への提案—安全で環境にやさしい街づくり
三宅理一, 林 明夫著 A5・本体3,000円+税

民家のこころ
道塚元嘉著 四六・本体1,600円+税

揺れを制する
小堀鐸二著 四六・本体2,500円+税

これからの家—健康で快適な住まい
快適住居研究会編著 四六・本体1,800円+税

不気味な建築
A, ヴイドラー 大島哲蔵, 道家 洋訳 四六・本体3,400円+税

建築とリアル
松畑 強著 四六・本体2,700円+税

富永 譲(建築家の住宅論)
富永 譲著 菊判・本体2,500円+税

吉田研介(建築家の住宅論)
吉田研介著 菊判・本体2,500円+税

建築の七燈
J, ラスキン 杉山真紀子訳 四六・本体2,800円+税

都市空間の芸術—パブリックアートの現在
C, グルー 藤原えりみ訳 A5・本体3,000円+税

美術から都市へ—インディペンデント・キュレーター15年の軌跡
南條史生著 四六・本体2,700円+税

20世紀の建築思想—キューブからカオスへ
杉本俊多著 四六・本体2,800円+税

庭の楽しみ—西洋の庭園二千年
A.S. ジェイムス他 横山 正訳 四六・本体2,700円+税

庭園の詩学
C.W. ムーア他 有岡 孝訳 A5・本体4,700円+税

庭の意味論
M, フランシス他 佐々木葉二, 吉田鐵也他共訳 A5・本体4,600円+税

記憶に残る場所
D, リンドン他 有岡 孝訳 A5・本体4,400円+税



9711 Kengo Kuma: Digital Gardening: Introduces recent leading works of Kengo Kuma, advocate of post-modern architecture and winner in 1997 of the Architectural Institute of Japan Prize and the Benedicta Prize. Memorial Park and other designs. Articles by Youichi Iijima, Greg Lynn, etc. Discussion: Fumihiko Maki and Kengo Kuma. ¥2,800



9807 Coelacanth Architects: Traces their activities over twelve years, mainly through introduction of their works. Kibikougen Elementary School, Suijo Fire Station of Osaka City, Sotogaoka Exchange Forum, etc. Text: Hiroshi Hara, Yoshitake Doi. Interview: Riken Yamamoto ¥2,600



9712 SD Review 1997: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Shigekatsu Takayasu Architects+Tatsuya Sakuma+Hirofumi Hashizume+Hiroyuki Shigetomi, Hiroshi Kawahito, Sosuke Hujimoto, etc. **Spaces of Light and Color: Glass Artsits of Czecho** ¥2,000



9808 Design Vocabularies of Light: LPA Works 1990-1998: Introducing a selected list of 40 concepts from LPA's design vocabulary, this book is a bible of illumination lore for the overall study of space created by light. Text: Arata Isozaki, Kaoru Mende ¥2,500



9801 SD Review 1982-96
16th anniversary retrospective of SD Review looks at entries later built, examines relation to and significance in the world of architecture, and considers future directions. Text: Fumihiko Maki, Hiroshi Hara, Youichi Iijima, Osamu Nakasuji, etc. Round-table discussion: Makoto Motokura, Ryoji Suzuki, Akira Kuryu, and Kazuhiro Kojima ¥2,800



9809 The Landscape of Detail: Its Art and Techniques

Introduces the details of architectural works with photos and drawings. Hiroshi Miyazaki, Akira Watanabe, Takenaka Corporation, Yoshio Taniguchi, Kajima Design, Shinichi Ogawa, Waro kishi, Fumihiko Maki, Yoshihiko Iida. ¥2,300



9802 Transparency in Architecture and the City: Swiss German Architecture Explores the appeal of the Swiss German sphere through an understanding of the background of Swiss architectural works and the context in which they came into being. Architects introduced are Herzog & de Meuron, Giron & Guyer, etc. Texts by Momoyo Kaijima, etc. ¥2,200



9810 Office Environments for the Near Future

Introduces recent developments in office environment design through specific examples. Works: Dentsu Interactive Solution Center, etc. Text: Ryusuke Naka, etc. **Machiya Restored: The Future of Central Kyoto and The Development of Machiya Restoration** ¥2,000



9803 Czech Cubist/Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution: Featuring extant Cubist and Rondocubist architecture in Prague; original photos. **Hiaso Kohyama: Drawings and space:** introduces Hisao Kohyama's architectural space and handling of detail through the architect's own drawings. ¥2,000



9811 135 Outstanding Works of Modern Design

Introduces 135 coffee and tea services, glassware, and other utensils made of white ceramic or clear glass. Kasimir Malevich, Gertrud Vasegaard, Trude Ptiri, Wilhelm Wagenfeld, Josef Hoffman, Peter Schlumbohm, etc. Text: Sori Yanagi, Angelo Mangiarotti, Shukuro Habara, etc. ¥3,000



9804 Versatile Architects of the New Generation: Introduces the works and creative activities of young architects in their thirties to portray a sense of the times: INTENTIONALLIES, MIKAN, etc. **Desktop Community** ¥2,000



9812 SD Review 1998

The 17th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. **Four Small Features: Charlotte Perriand, Designer's Catalogue of "Happening", Aalto's Space Composition, Shuhei Endo's Recent Works in Metal Sheet Structure** ¥2,000



9805 The Cutting Edge in Space Design: Introduces specific examples of collaboration between architects and designer artists: Kazuko Fujie, Kinpei Nakamura, Susumu Shingu, etc. **House for Frida Kahlo and Diego Rivera: Juan O'Gorman's Architecture and Mexican Modern** ¥2,000



9901 Sustainable and Ecological Design Today

Specific Projects that have achieved symbiosis with the environment provide a bird-eye view of recent trends and display the vision of the upcoming generation of architects. Emscher Park, Tokyo Gas "Earth Port", Setagaya-ku Fukazawa Symbiotic Housing, etc. ¥2,700



9806 Landscape Creation Today: The Challenges for Landscape Architects: Introduces landscaping set apart from the natural environment and purposefully designed to serve society. Architects introduced are Yoji Sasaki, PLACEMEDIA, Hiroki Hasegawa, Toru Mitani, Makoto Noborisaka, N. Finley+M. chiba, Ken Smith, Kyathryn Gustafson, Douglas Reed, etc. ¥3,000



9902 The Dutch Model:

Architecture, Urban Design and Landscape

Explorations of Dutch cities and social systems in terms of five key words. OMA, MVRDV, West8, Koen van Velsen, mecanoo, Kees Christaansse, Wiel Arets, Benno van der Grinten, etc. ¥2,000



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life: 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work: Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980: Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix: List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections: Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

可動日よけ

マルキルクス1100, 1500タイプ

三共商事株式会社



三共商事株式会社では、従来本場ヨーロッパのオーニング＝ドイツ・シュミット社のマルキルクス2000, 3000タイプを輸入し、主に商業施設を中心に製造・販売を行ってきた。日本では、施工事例の約90%が商業用であるが、ウッドデッキの普及・ガーデニングへの関心の高まりとともに、近年家庭用としても注目され始めている。同社では、昨年ドイツで紹介され大好評を博した、マルキルクス1100, 1500タイプをガーデン・オーニングの本命として販売を開始した。T-1500は、キャンバスをたたんだ際に、フロントバーがきれいにボディに収まるカセット式である。T-1100は、T-1500の特長を生かした簡易式オーニングである。

特長

- ①卵型のフロントバーなど、全体に丸みを帯びたフレームラインである。
- ②シリンダー式のアームは、キャンバスがたるまないように、常に一定の張力を与えることができる。
- ③フレームは、シルバーグレー色のパラダーコーティング仕上げである。

仕様

間口：2,000mm～6,000mm。

出幅：1.5, 2.0, 2.5, 3.0, 3.5mの5タイプ。

三共商事株式会社

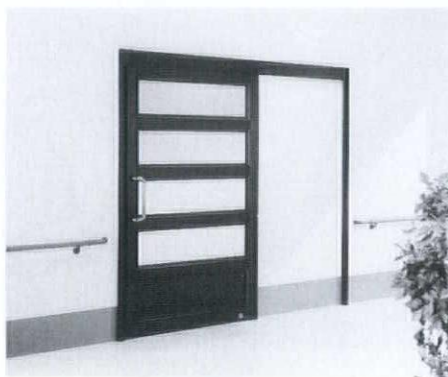
東京都千代田区外神田4丁目6番10号

〒101-0021 Tel 03-3255-0029

ドア

自閉装置組込みハンガー引戸

新日軽株式会社



新日軽株式会社では、床部ノンレールタイプとして使用範囲の広いハンガー引戸を従来よりも、安全性・調整機能・経済性を考慮した、自閉装置組込みハンガー引戸として新発売した。

特長

- ①障子の開閉が軽くてスムーズなノンレール式上吊りタイプである。
- ②常時自動閉鎖されるので荷物の移動が頻繁に行われる売場とバックヤードとの間仕切り用扉として最適である。
- ③車椅子での通行を考慮する必要がある、高齢者施設などでも使用できる。床部ノンレールなので、車椅子の通行が大変楽にできる。
- ④万一指を挟んだ場合を考慮し、戸当たり部分には戸先安全ゴムを装着して安全性を高めている。
- ⑤扉のデザインは採光性の高い框タイプである。
- ⑥調整式の引戸クローザーとエアークッションの採用により、最適な閉じ具合（スピード）が設定できる。
- ⑦壁直付けができる面付けタイプと壁の見込み内で取付けができる無目内蔵タイプがある。
- ⑧シングルタイヤの戸車採用により、従来のダブルタイヤ方式に比べ、障子が吊り込みやすくなった。

新日軽株式会社 広報課

東京都品川区大崎1丁目11番1号

〒141-0032 Tel 03-5759-2161

塗料

Vグラン下塗

大日本塗料株式会社



大日本塗料株式会社では、大気中の水分子との架橋反応により3次元網目構造の強固な塗膜を形成する湿気硬化型さび止め塗料、Vグラン下塗を新発売した。

特長

- ①大気中の水分子との反応を利用した強靱な3次元網目構造と特殊防錆顔料により、エポキシ樹脂と同等以上の塗膜性能を有する。
- ②付着性の傷害となる被塗面の水分を取り込み無害化し、さび層中の水分も取り込み錆の進行をおさえる。
- ③気温20℃の条件下で4時間で、塗り重ねができ、1 Day 2 Coatが可能。更に、低温時の塗装が可能で、気温5℃以下の場所でも翌日塗装ができ、大幅な塗装工程の短縮やコストダウンが図れる。
- ④ポリウレタン樹脂の特性により、平滑な塗面が得られるため中塗工程を省略することもできる。
- ⑤各種旧塗膜に対し幅広い適応性があり、一液性であることから刷毛、ローラー性など作業性に優れ、弱溶剤形で臭気が少ない。
- ⑥用途は、各種ブラント、鉄構造物、水管橋、鉄管、海洋構造物の外壁塗装。

価格

ライトグレー、グレー 45,000円/18kg

大日本塗料株式会社

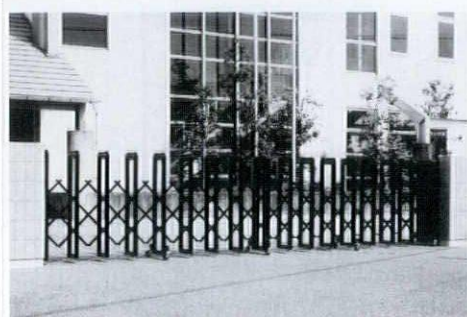
大阪市此花区西九条6丁目1番124号

〒554-0012 Tel 06-6466-6661

カーテンゲート

マルーゼ 3・4 型

三協アルミニウム工業株式会社



三協アルミニウム工業株式会社では、公共施設などの敷地と道路を結ぶパブリックエリアの提案として、主力商品である大型カーテンゲート、マルーゼシリーズに、新たにデザイン・機能を充実させた3・4型を新発売した。洗練されたデザインを採用し、ハイセンスな都市景観に対応する。3型は、2型のデザインを踏襲し、さらに意匠性と全体の造形美を高めた。格子のカバー材の断面を楕円にすることにより柔らかなフォルムを表現し、アール形状の笠木キャップと相まって、ハイセンスなデザイン性を創りあげている。カラーも、ダークブロンズとアーバングレーの2色を用意し、心地よい空間と調和のある景観を創造できる。4型は、アーバングレーとブラックのツートンカラーを用いて、連続するデザインパターンの中に静かな動きを感じさせ、周囲の景観に溶け込み、美しく調和する。引き寄せ機能付きのシリンダー錠を設定しているので、扉と門柱の隙間をなくし、確実に施錠する。また、レールタイプにも落とし棒を設定し、風などによる扉の自走を防ぐ、機能を充実させて、使い勝手を高めた。

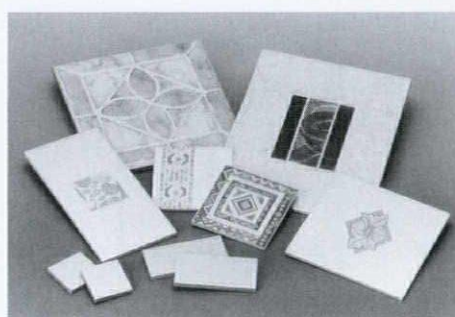
価格（写真タイプ）

645,000円（セット価格）

タイル

ハイドロテクトタイル

TOTO

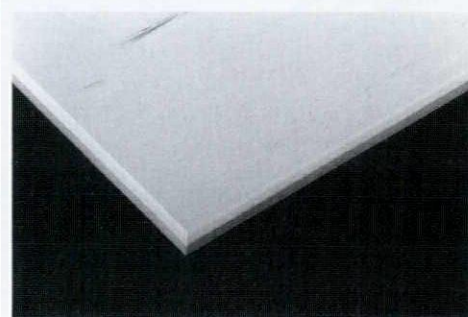


TOTOでは、独自の光触媒技術（ハイドロテクト技術）をさらに進化させ、親水性効果と分解効果の複合化とコストダウンに成功した。そこで、従来の光触媒タイル、スコルトを機能アップさせ、より低価格にした、ハイドロテクトタイルを新発売した。室内の微弱な光の下で使用される内装タイルにおいても、従来以上の有機物分解力（殺菌力）と合わせて、水洗いで汚れが落ちやすくなる親水性効果が加わった。同製品を使用することで、屋内では厨房の油污や浴室のアカや石けんカス汚れがつきにくく、また水で簡単に洗い落とせるようになった。トイレを代表するアンモニアガスや排気ガス中のNOxガスについても分解力がある。外壁面では、雨水によるセルフクリーニング効果で汚れを防ぐ。価格は、従来に比べ20～30%ダウンし、一般タイルに比べ約5%アップに押さえた。新たに内装83シリーズ・1169品番、外装1シリーズ・108品番を加えた。用途は、厨房・食品工場、浴室、トイレ、病院・福祉施設の床・壁に、また建物外壁に最適である。今後同社では、表面に釉薬を施したタイル（施釉タイル）の全シリーズをハイドロテクトタイル化していく。

張床

ルースレイタイル LLフリー800

東リ株式会社



オフィスのO A化に伴ない配線を床下に収納するための二重床が発売され、現在ではごく一般的になってきた。当初この二重床の床仕上げ材は主にタイルカーペットが採用されていたが、タイルカーペットの汚れやすさやメンテナンスの困難さなどにより、タイルカーペットに代わる床仕上材として、現在の塩ビホモジニアスのルースレイタイルが開発された。二重床市場の拡大とともにこのルースレイタイルも市場を拡大している。カーペットを使用すると、汚れが目立って使えない工場併設の事務所棟、研究施設、頻繁にメンテナンスを行わない電算室、学校などが想定され、リニューアルも含め市場規模は増大している。今回東リ株式会社では、従来の4mm厚に加え、新たに5mm厚品をラインナップとして加え、新発売した。同製品は、寸法安定性・帯電防止性能に優れた表面材分離型二重床用表面仕上げ材である。

規格

5mm厚×500mm×500mm

価格

9,200円/㎡（材料価格・税抜き価格）

色数

10色

三協アルミニウム工業株式会社 広報室広報課

富山県高岡市早川70番

〒933-8610 Tel 0766-20-2332

TOTO 広報室

東京都港区南青山1丁目24番3号

〒107-0062 Tel 03-3595-9422

東リ株式会社 販促宣伝部

兵庫県伊丹市東有岡5番125号

〒664-8610 Tel 06-6494-6604

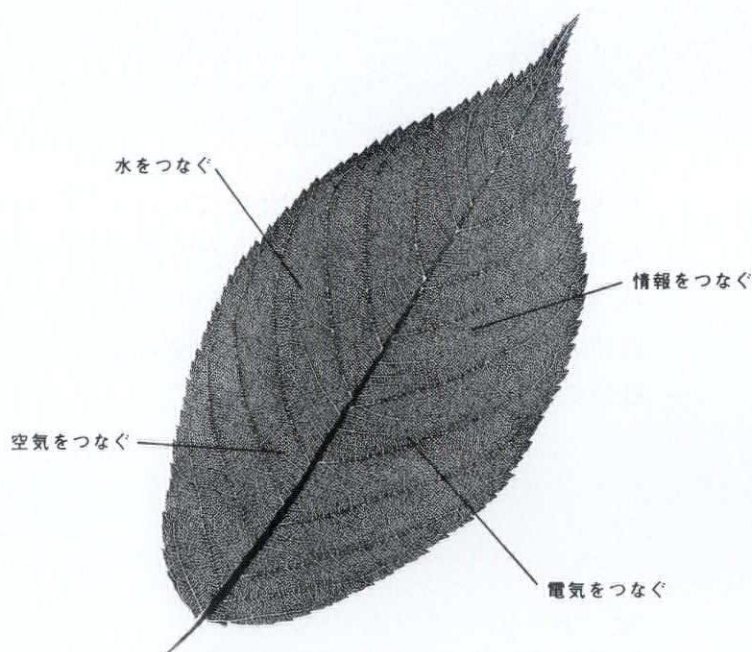
ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の

リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(6537)3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

より快適な
水環境を
めざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18 TEL.(03)3452-7441大代表 支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋 事業内容/給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

N 日章工業株式会社

代表取締役社長 福田 三 丈

●本 社 〒101-0047 東京都千代田区内神田 3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000
●大 阪 支 店 ●横 浜 支 店 ●仙 台 支 店 ●広 島 出 張 所 ●福 岡 出 張 所

日立製作所電機特約店
日立化成工業特約店
日立機材特約店
日立建機特約店

旭化成建材代理店
新明和工業特約店
大和ハウス工業特約店
大昭和製紙特約店

施 設 商 品

エレベータ・エスカレータ
ホームエレベータ
機械駐車設備
ゴミ処理設備
バスユニット・流し台
洗面化粧台
集中浄化槽・パネルタンク

空調衛生電気設備工事
受変電・自家発電設備
空調機・ポンプ・送風機
監視防犯システム
節水バルブ・節水トイレ

建 材 商 品

PHCパイル・シテイガイ
イーゼット・現場造成杭
地盤改良
ヘーベル・グランデ
押出成形版・金属パネル
屋根・硝子工事
フリーアクセスフロア・OAフロア

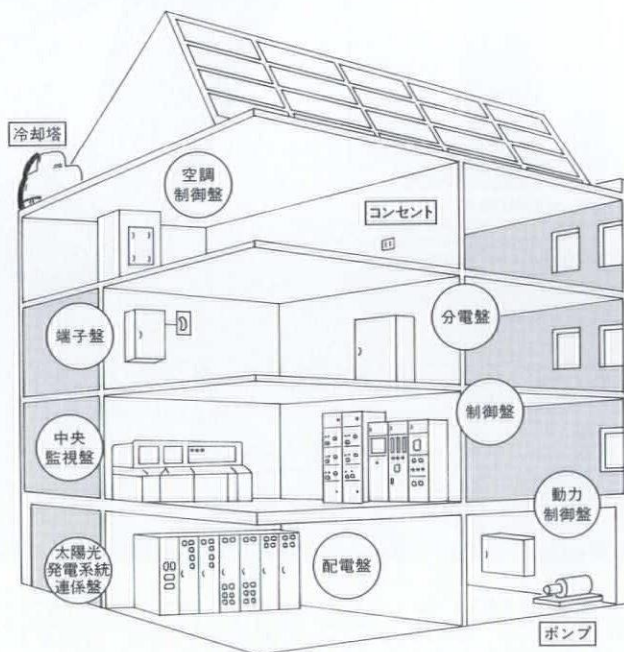
クリーンルーム床工事
ハイベース・ハイスプリット
ユーボード・軽量鉄骨
プレハブ規格建築
大昭和ユニボード
九木ライトフォーム・シールド
クローラクレーン・耐火被覆

見えない電気を交通整理 それはKAWADEN



川崎電気株式会社

●本 社／山形県南陽市小岩沢225
●東京本社／東京都港区芝浦3-7-4

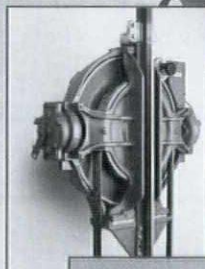


TOSHIBA

エレベーターから機械室が消えた！ 大好評、マシンルームレスのスペースセル。

「スペースセル」は、マンションなどの住宅用だけでなく、オフィスやテナントビルなどの乗用、病院など医療施設の寝台用と充実しています。さらに、最大昇降行程は60m、20階建ての建築物にも対応するなど、設計・デザインの可能性をいちだんと拡大。まさに時代が求めた新世紀のエレベーターです。

コンパクト化に徹した新しいタイプの巻上機。昇降路内の設置を可能にした薄型ギヤレス巻上機を採用。高効率ギヤレスシステムにより、省エネルギーを実現しました。



超薄形の新開発制御装置。

超薄形設計のインバート装置や最新の制御用プロセスを搭載した高密度・高性能の制御基板を採用。厚さわずか100mmの制御装置を最上階のりばに配置することができました。

スペースセルは ここが違う！

デザインフリー

スペースセルは、機械室の設置は不要。ですから、屋根のデザインの自由度が拡大。建物高さの面でも制約が少なくなり、建築構造としての美観を自由に追求することを可能にしました。

レイアウトフリー

スペースセルなら昇降路の位置を自由にレイアウト。高さ制限上も有利。既存の建築物のエレベーター増設にも柔軟に対応します。

スペースを有効利用

エレベーター設備の床面積を大幅に縮小。いままでエレベーター設備に要していた共有部分を有効スペースとして活用できます。

省エネ&建築・設備工事を削減

スペースセルは、モータ容量が従来のロープ式や油圧式よりも低く抑えられるので、電源設備容量や消費電力量を低減します。また機械室そのものが無くなるため、従来必要だった機械室の建築・設備工事はすべて不要になります。

新保守システム「スーパーTERM(東芝遠隔監視メンテナンス)」で 万全の保守点検サービスを提供

東芝エレベーターが開発した新しい遠隔監視メンテナンスシステム「スーパーTERM」がエレベーターを止めずに遠隔診断、機器の状態変化をリアルタイムに察知し故障の未然防止につとめます。また万一の故障の際にも、より迅速な対応が可能となります。

いまお使いのエレベーターをハイグレードにリニューアル

ビルのリニューアルをお考えになる時、東芝エレベーターでは、最新モデルのスペースセルへのグレードアップをおすすめします。事前の調査にもとづき効率のよいリニューアルをご提案します。

東芝マシンルームレスエレベーター スペースセル

SPACE



株式会社 東芝 昇降機事業部 本社 〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1 (東芝ビルディング) TEL (03) 3457-4621 FAX (03) 5444-9275 ホームページアドレス <http://www2.toshiba.co.jp/jp/syoyji/>
北海道支社 ☎ (011) 214-2451 東北支社 ☎ (022) 264-7641 北陸支社 (金沢支店) ☎ (076) 224-2815 新潟支社 ☎ (025) 246-8263 長野支社 ☎ (026) 228-3354 北関東支社 ☎ (048) 640-1130 東関東支社 ☎ (043) 299-1017
神奈川支社 ☎ (045) 664-8614 神奈川西支店 ☎ (0462) 30-2833 静岡支店 ☎ (054) 221-1804 中部支店 ☎ (052) 564-8511 関西支店 ☎ (06) 6440-2281 神戸支店 ☎ (078) 252-2975 中国支店 ☎ (082) 212-3606
岡山支店 ☎ (086) 224-6168 四国支店 ☎ (087) 825-2440 九州支店 ☎ (092) 735-3056 北九州支店 ☎ (093) 522-0544 大分支店 ☎ (097) 536-2040
東芝エレベーター株式会社 本社 〒141-0001 東京都品川区北品川6-5-27 営業本部 TEL (03) 5423-3648 FAX (03) 5423-3663 保守営業統括部 TEL (03) 5423-3378 FAX (03) 5423-3521 リニューアル部 TEL (03) 5423-3278 FAX (03) 5423-3513

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル（3572）3381
FAX（3572）3590
大阪——大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06（6362）6515
FAX06（6362）6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8
（3818）1961
FAX（3818）1968
大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル 06（6231）4548
FAX06（6227）0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル（3552）8247代
FAX（3552）8249

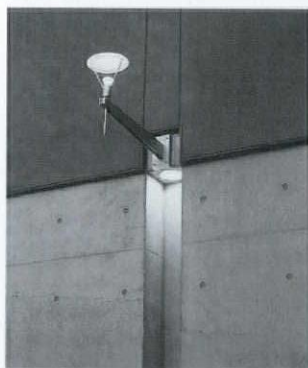
●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06（6379）1791
東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル（3255）8411
名古屋——名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052（221）7641代

カ	(株)関電工	表2
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
	家具蔵	85
	川崎電気(株)	A17
ク	栗原工業(株)	A11
サ	三建設備工業(株)	A10
	三機工業(株)	88
シ	昭和銅機(株)	114
ス	住友電設(株)	A15
タ	大興物産(株)	A8
	高砂熱学工業(株)	表3
	大栄電気(株)	A10
	ダイダン(株)	A11
ト	東光電気工事(株)	A1
	東洋熱工業(株)	109
	(株)東芝	A18
ニ	日新工業(株)	A12
	(株)西原衛生工業所	A16
	日章工業(株)	A17
ヒ	(株)日立製作所	表4
フ	不二サッシ(株)	110
ホ	ホテルイースト21東京	A7
マ	松下電器産業(株)	A2
ミ	三菱電機(株)	A9
ヤ	山田照明(株)	A20
ロ	ロンシール工業(株)	A3

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



(株)三和 本社物流センター
設計監理: (株)日本設計 (東京)



山田照明株式会社

本社/ショールーム 〒101-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11
横浜支社/ショールーム 〒220-0005 横浜市西区南幸 2-20-1

TEL03-3253-5161
TEL045-311-1731

仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34 TEL022-267-1630
札幌営業所 〒003-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL011-811-2215
広島営業所 〒730-0805 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL082-293-6119

大阪支社 〒577-0006 東大阪市楠根 2-2-6 TEL06-6745-6811
北関東営業所 〒370-0851 高崎市上中居町 51-1 TEL0273-26-4111
鹿児島営業所 〒990-0055 鹿児島市上荒田町 23-10 TEL099-258-0031

福岡支社 〒812-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61 TEL092-414-8531
名古屋事務所 〒461-0001 名古屋市東区泉 1-21-35 TEL052-963-8411
宇都宮事務所 〒321-0871 宇都宮市海道町 818-2 TEL0286-60-1381